

マイ「艦これ」「みほち
ん」(第1部)

しろっこ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

くあの艦娘は、今でも貴方を忘れないく

ある艦隊が猛吹雪荒れ狂う日本海で戦闘中。旗艦の艦娘は全身ボロボロ。随走する新人駆逐艦も。彼女たちは果たしてどうなる？

全18部に航(わた)る大河小説、ここに始まる。

※2017年12月よりサイト構築に伴う中規模改訂作業、開始です。

<http://www.l3.plala.or.jp/shosen/>

改訂履歴情報(直近3本)

★第37話(改1↓改1.5)〈将校上陸〉★

(初稿：旧39話)

1785文字↓1712文字 加筆改訂 1010—1011

★第38話(改1↓改1・3)〈長い一日(上)〉★

(初稿：旧第40話)

1751↓1254文字 加筆改訂 1024

★第39話(改1↓改1・4)〈長い一日(中)〉★

(初稿：旧第41話)

1725↓1748文字 加筆改訂 1113

最新情報はTwitter

<https://twitter.com/46cko/>

第一部ではイベントの話題はありません。作者未プレイの艦娘(海外系)も出ないからゲーム攻略の参考にはならず。

オリジナル艦娘：2名(秘書と駆逐艦)登場。

改訂に伴い第3部及び第5、第10部への伏線増強中(笑)。

他メディア状況：

1) 暁版、pixiv版、tinami版、

(以上はハーメルンと同一内容です)。

2) アメプロ版とハーメルン版とのズレあり。

(旧版、直す予定無し)

3) 独自サイト版

(少しずつつ直しています)

★お願い(注意)★

この作品は「艦これ」の二次創作です。物語内の艦娘を除くすべての内容||実在あるいは実在したすべての組織、艦隊や艦艇、歴史上の人物、メカニズムや機械類などは、現実のものとは無関係||フィクションです。それを理解のうえ、お楽しみください。架空のものにも拘らず、ご意見をされても、そもそもが実在しないモノです。一切の、お答えや対処は出来かねます。

おまけ

Reproduction is prohibited.

禁止私自轉載、加工 天安門事件

Prohibition of all reproduction and authorization.

da.

目次

	序章(改3. 4)〈白い海〉	—	1
	第1話(改3. 4)〈7月21日〉		
16	第2話(改2. 8)〈出会い、遭遇〉		
25	第3話(改2. 5)〈空襲と救出〉		
34	第4話(改2. 8)〈逃避行〉	—	44
	第5話(改2. 5)〈私たちが護る〉		
51	第6話(改2. 6)〈戦闘収束と憲兵〉		
63			
	第7話(改2. 4)〈白い波濤〉	—	77
	第8話(改2. 5)〈美保鎮守府〉		
83	第9話(改2. 5)〈秘書艦(仮)〉		
99	第10話(改2. 5)〈美保の艦娘たち〉		
108	第11話(改2. 3)〈心配〉	—	118
	第12話(改2. 7)〈傷んだ制服とつむじ風〉	—	124
	第13話(改2. 7)〈食堂で挨拶〉		
136	第14話(改2. 6)〈司令の思い出と艦		

	娘たち	145
	第15話(改2.6)〈艦娘の強さ〉	
162	第16話(改2.7)〈巡回(鎮守府内)〉	172
	第17話(改2.6)〈巡回(鎮守府の外)〉	189
202	第18話(改1.7)〈タフガール〉	216
	第19話(改1.8)〈白い闇〉	
227	第20話(改1.5)〈暗号と艦娘〉	240
	第21話(改2.0)〈白い傷〉	
256	第22話(改2.0)〈艦娘と変化〉	272
	第23話(改1.3)〈遭遇〉	268
	第24話(改1.3)〈日向〉	264
	第25話(改1.3)〈利根〉	
276	第26話(改1.3)〈電・イナヅマ〉	
	第27話(改1.4)〈美保関沖海戦〉	
280	第28話(改1.3)〈深海棲艦〉	
288	第29話(改1.3)〈敵ながら〉	
292		

第 3 0 話 (改 1. 5) 〈錯綜と弱小〉

297

第 3 1 話 (改 1. 3) 〈開戦と狂気〉

304

第 3 2 話 (改 1. 4) 〈神戸と呉と〉

310

第 3 3 話 (改 1. 4) 〈陸攻の突入〉

315

第 3 4 話 (改 1. 4) 〈山城の攻防〉

320

第 3 5 話 (改 1. 3) 〈比叡参上です!〉

327

第 3 6 話 (改 1. 6) 〈赤城加勢〉

332

第 3 7 話 (改 1. 5) 〈将校上陸〉

340

第 3 8 話 (改 1. 3) 〈長い一日 (上)〉

345

第 3 9 話 (改 1. 4) 〈長い一日 (中)〉

350

第 4 0 話 〈長い一日 (下)〉 (改)

356

第 4 1 話 〈将校の想い〉 (改) ——

第 4 2 話 〈居残り参謀〉 (改) ——

第 4 3 話 〈お母さんと天職〉 (改)

375

368 362

第44話〈鎮守府の沿革〉(改)	—	380	第54話〈各人各様〉(改)	—	439
第45話〈頭垂れる山城さん〉(改1. 2)	—	388	第55話〈隻眼と天使〉(改)	—	443
第46話〈夢の艦隊と赤城さん〉(改)	—	396	第56話〈轟沈と異動〉(改)	—	449
第47話〈暴走と奇襲と〉(改1. 2)	—	402	第57話〈北上の告白〉(改)	—	454
第48話〈こなきガール〉(改)	—	408	第58話〈心の拠り所〉(改)	—	459
第49話〈発令キラキラ〉(改)	—	414	第59話〈北上中破〉(改)	—	466
第50話〈男子禁制〉(改)	—	420	第60話〈深海棲艦〉(改)	—	472
第51話〈水も滴る〉(改)	—	425	第61話〈睨み合い〉(改)	—	478
第52話〈桃色吉凶〉(改)	—	429	第62話〈海上の語り部〉(改)	—	484
第53話〈パーティの光陰〉(改)	—	501	第63話〈最果ての追憶〉(改)	—	489
			第64話〈決意と鎮魂歌〉(改)	—	495
			第65話〈絶対命令〉(改)	—	501

第66話	〈アウトレンジ〉(改)		506
第67話	〈ガンダロ突進〉(改)		512
第68話	〈プライド〉(改)		520
第69話	〈美保の旭日〉(改)		528
第70話	〈後の祭り〉(改)		538

序章（改3・4）〈白い海〉

『ワタシモ、カエリタイ……』

マイ「艦これ」（みほちゃん）

序章（改3・4）：〈白い海〉

白い海。大荒れの日本海。

そして激しい吹雪。容赦なく吹き付ける風と高い波。

もはや海上の視界はゼロに等しいが空を見上げれば多少は見通しが利く。

それでも、そこにあるのは重苦しく覆い被さる雲ばかり。

時折、風が弱まる。

吹雪の間から思い出したように差し込む幾筋の日光。

海面に揺れ動く水面（みなも）は、どす黒いが白波はキラキラと煌（きら）めく。

揺れる波間に、いくつかの影。

艀装を付けた少女たち、艦娘だ。

人と同じ大きさでありながら実際の艦船と同じ能力を持つ。帝国海軍の切り札である。

しかし、この天候で艦娘も陣形を維持することが困難だ。強風と吹雪で互いに接近することが難しい。

そんな艦娘たちの中央に居る旗艦。軽巡洋艦の艦娘だ。

茶髪で、やや長身の少女。

「冬の海が距離を取らせまいと意地悪しているかしら」

思わず呟く彼女。

「もし電探があっても、これじゃダメね」

確かに、この荒天では方向や距離感が直ぐに失われるだろう。僅かな判断ミスが艦同士士の接触を招き最悪、遭難を誘発しかねない。

彼女は実戦経験も豊富だったが今日は経験の浅い艦娘を多く率いていた。

そのことに不満は抱かなかつた。

（これも任務だから。ただ、あの参謀だけは……）

少し離れて並走していた駆逐艦が叫んだ。

「感あり！」

「ちっ」

と、内心舌打ちするも少女は冷静に発令する。

「回避行動！」

雑音に混じって無線の声が全体に伝わる。すぐさま全員が行動する。数名の艦娘が回避した直後に水柱が立つ。

旗艦の少女は確認した。

「被害は？」

「ありません！」

「敵か」

少女は呟く。どうやら近い。

彼女は軽巡洋艦、特に重雷装艦に改装され本人も誇らしかった。

しかし、この天候では魚雷の照準はおろか発射すら困難だった。

今回は訓練も兼ねた6人の艦隊だ。だが途中から天候が急変した。

(もし小編制だったら回避しやすいのに)

ふと、そんなことも考えた。

「フツ、何を今さらね」

思わず呟く。何を悔いても始まらない。

彼女たちは何度か交戦を繰り返しつつ一人も脱落者を出さずに耐えてきた。それは彼女の経験の賜物と言えた。

誰も弱音を吐かず必死に航行を続けているが既に全員ボロボロだ。

暴風雪が弱まった一瞬、再び駆逐艦が叫んだ。

「右舷後方！」

旗艦が再び指示を出す。

「射てる子は攻撃！ 狙わなくて良いから」

『はいっ』

後方の艦娘たちが一斉に半身を翻（ひるがえ）して魚雷を発射する。無照準の直接攻撃だ。

やや距離を置いて前方の艦娘たちも続けて一斉に魚雷を放つ。

旗艦の彼女は、その方法で佐世保沖で敵を沈めた経験があった。いざという時の為に、それを教え込んでいた。

だが残念ながら敵への影響は無かったようだ。

「甘くはないか」

舞鶴の海。この海域の敵は手練れだ。彼女はそれを痛感した。

そして攻撃したことで、こちらの位置を相手に知らせてしまった。すぐ敵の反撃を受

始める。

「回避、回避！」

再び行動する艦娘たち。叫び声と同時に彼女たちの周りには、いくつもの水柱が立つ。

艦娘たちは諦めない。必死で反撃を試みる。

だが明らかに実戦経験が乏しい。さらに、この大荒れの海上では攻撃どころではない。自らの体勢維持だけでも精一杯だ。

(厳しい)

指揮する彼女は、つい心中で弱音を吐く。

(条件が悪過ぎる)

不慣れな者に、この荒天は衝突や同士討ちの危険すらあった。一部の駆逐艦娘は不安そうに耳を澄ませ次の指示を待っている。

そのとき彼女たちの北方に黒い船団……敵本体が見えた。

(深海棲艦)

誰かが呟く。

彼らは、この荒天でも臆することなく次々と攻撃を繰り出している。その安定した攻撃振りとは冬の海での実戦経験の多さを感じさせた。

（くっ）

旗艦の艦娘は焦った。

部下の艦娘たちには悪条件が重なっている。経験不足に加え装備も不十分だ。

その焦りが伝わったのか一人の駆逐艦が叫んだ。

「隊長！」

ハツとしたように旗艦の少女は笑顔を作った。

「まだ大丈夫！」

凍てつく吹雪の中で彼女は反省した。

（弱気になっちゃダメだ）

次の瞬間、敵の魚雷が二人の間近で爆発した。艦娘たちが叫ぶ。巨大な水柱で再び隊

列が乱れていく。

少女は叫んだ。

「皆、無事？」

「大丈夫ですっ！」

だが部下の反応は弱々しかった。

（歯がゆい）

こんなに悔しいのは初めてだった。

そもそも、あの作戦参謀の下だから余計に焦るのだろうか？

(いや、そんなことはない)

なぜか必死で否定する自分。だめだ今は戦闘中だ。集中せよ！

そのとき無線担当の駆逐艦が叫んだ。

「司令部より入電……撤退です！」

「遅い」

旗艦は複雑な表情を見せたが躊躇している暇はない。大きく頷いた彼女は離脱を指示。駆逐艦たちは慎重に反転を試みる。

しかし吹雪の間隙を縫って再び激しさを増した敵の砲撃と雷撃が部隊の撤退を阻む。そして数発の魚雷が彼女たちの周りで幾重もの巨大な水柱を作る。

歯を食いしばりながら必死で回避運動を続け直撃を避ける艦娘たち。

数発の魚雷に続いて誰かが叫んだ。

「注意！……ミサイル？」

「!？」

次の瞬間、上空から行く筋もの光軸が彼女たちをかすめ、大きな水柱が上がる。

「!」

そのとき誰かの声にならない叫びが響き、部隊全体に動揺が走った。

「隊長！」

旗艦の艦娘が徐々に白い海へ沈んでいくのが見えた。

（狙われた！）

周りの駆逐艦は異変に気付き慌てた。

「誰か！ 早くっ」

数名の駆逐艦が救援のため近づこうとするが敵の猛攻は激しさを増し近寄ることも出来ない。

状況を把握した敵も互いに合図をして残された艦娘たちに近づく。そして弄ぶかのごとく直撃弾を意図的に逸らして部隊を分断させ始めた。

弾幕の向こう側に分断された旗艦は留まることなく白い波間に沈み行く。

一瞬の晴れ間。風と吹雪が弱まる。

残された艦娘たちは波間に傷付いた隊長の姿を見た。その艤装からは火花が散り額から赤い筋が滴り落ちる。

誰かが叫ぶ。

『隊長！』

（深手を負ったな……これが轟沈か）

もはや自分も、どうすることも出来ない。体の各部が機能を停止し回路が分断されて

いく。

だが彼女の瞳には苦悶ではなく受容する安堵の表情が見えた。

(これで終わる)

それは痛みや悔しさよりも不思議な気持だ。

『隊長お！』

部下たちの声が遠ざかる。

だが突然、彼女は我に返ったように大きく腕を空へ伸ばした。完全に水没する直前だった。

「……………」

他の艦娘の名前か、誰かの名前を叫んだようだった。

そして急に哀しい表情を見せた。

見守るしかない艦娘たちには隊長の情念のような……何か抑えられていたものが外れたようにも感じた。

しかし直ぐに大きな波が覆い被さり彼女の姿は消え去った。あつけない最期。そして灰色の天海が吹雪の中で空しく広がる。

残された駆逐艦たちは吹雪の向こうに幾つもの黒い群れを見た。それは彼女たちが初めて間近に相對する敵の本体。

しかし旗艦を失った艦隊に反撃する気力は失せていた。敵の高速艦は遠巻きにしなから徐々に退路を塞いでいく。

手出し出来ない少女たちは、ただ青ざめ互いに手を取り合ってジツとしているだけだ。

もう救われる道はないのか？

なにも、

ワカラナイ……

冷たい白い海の中で旗艦の艦娘は手を伸ばしていた。

ナニモ、

ワカラナイ……

同じ単語を呟くように繰り返す。

海中なのに妙な響きと残響がある。

だが暗い水の中。白雪の如く揺れる水泡は何も答えてくれない。

海上では不気味な灯りを点滅させる群れが居た。

彼らは白い海に浮かぶ残された艦娘に徐々に近づく。

恐怖に震える少女たち。もう、正視出来ない。

そこで場面は暗転。

薄暗くなった日本海に少女たちの叫び声が響き渡る。

同時に金属が引きちぎられ擦り合うような音。

それは海中にも伝わってきた。

消え行く自我の中で旗艦だった彼女は眩いた。

アノコタチハ……ヨクヤツタ。

デモ、ワタシハ……

彼女は、よく作戦参謀と意見がぶつかったきを思い出した。

彼には遠慮すまいと思っていた。

それが彼女なりの責任感だった。

『やっぱり……反省すべきね』

薄れる意識の中、彼女は苦笑した。

フフフ……

(これは誰の声?)

彼女がそう思った瞬間だった。

むくむくと別の感情が沸き上がってきた。

押えがたい衝動だ。

ワタシモ、カエリタイ……

冷たい海の底へ沈みつつ手を伸ばす。

マタ……アイタイ。

その後、今回の舞鶴沖海戦の戦果が報告された。

〈舞鶴沖：日本海海戦 戦果報告〉

軽巡洋艦1：沈没

駆逐艦5：沈没

舞鶴鎮守府 艦隊6人を消失

以上

この戦いは、よくある敗北した戦闘の一つとして記され彼女たちの登録は抹消された。

また、この情報は後の艦娘の作戦資料として利用され終わったことだろう。

彼女の物語は、これで終わる。

誰もが、そう思う。

「大井つちの馬鹿……何で沈んじまったのさ」

彼女は遠くに見える山を見て呟いた。

すっかり日も落ち照明が灯る舞鶴鎮守府。

日中、強かった風も収まり舞鶴の海も凪いでいた。
その埠頭に立つ黒髪の艦娘。

「あんた最後まで参謀に黙って。それで良かったのかなあ」
そんな彼女を陰から見守る一人の影。

「……」

彼女は背後の気配に気付いていた。

しかし気に留めない振りをして、その場を立ち去った。

その後ろ姿を見送ったのは、もう一人の参謀だ。

彼は黙って腕を組んでいた。

（今回の指揮を執った作戦参謀は解任されるな）

ジツと夜の海を見つめ考えていた。

階級からいえば次に作戦担当指揮官になるのは恐らく自分だ。

だか彼は、それを喜ぶでもなく淡々と受け止めた。

別に、それは目的では無かったから。

眼鏡を軽く押えつつ眩く。

「軍人に人間的感情は不要だ」

自分の中に湧く真逆の感情を押さえ込もうとしている。

それも分かっていた。

そんな矛盾した感情に『人間は不完全な生物だな』と思った。
少し風が出てきた。

彼は再び自分に言い聞かせるように呟く。

「艦娘と過度に交わると人は不幸になる」

そしてコートの襟を立てた。

「良い。これで一つの時代が終わる」

彼もまた埠頭を後にした。

舞鶴の艦娘たちの轟沈。

彼女の物語は、これで終わる。

誰もが、そう思う。

だが、ここから「みほちゃん」の物語は始まる。

以下魔除け

Reproduction is prohibited.

禁止私自轉載、加工 天安門事件

Prohibition are reproduction no authorization

第1話（改3. 4）〈7月21日〉

〈降って湧いたような着任辞令だ〉

マイ「艦これ」（みほちゃん）

∴第1話（改3. 4）〈7月21日〉

ワタシモ、カエリタイ……

『彼女』の声が響く。

それは聞き覚えがあるのだが誰だったか？

思い出せない。

ただ懐かしく哀しい、何か胸が締め付けられるようだ。

……ギギギつという金属がこすれる音と小刻みな振動で体が震える。

続いて列車が停まった反動で体が座席から前に投げ出されそうになり目が覚めた。

「おっと」

思わず声が出た。

(……やれやれ、うっかり座席で居眠りしていたらしい)

さすがにヨダレを垂らす事は無かったようだが少々恥ずかしい。

ただ車内は閑散としていて誰にも見られて居ないようでホッとした。

半分開け放した窓からは夏の日差しに照らされた駅のホームが見えた。

「戻ってきたな」

私は呟いた。

列車は小さな無人駅に停まっていた。ここは鳥取県西部を走る境線。

寝ぼけ眼(まなこ)でボーっとしたまま窓の外を見る。長旅の疲れが出たかな？

……ちようどそのとき背後から長い包みを背負った男性が通路を通り過ぎた。彼は

両手に木製の道具箱を持っている。

(絵を描く人だな)

ピンときた。

そう思った瞬間、彼は私に会釈をした……歳は父と同じくらいだろうか。品(ひん)のある老人だった。私も会釈を返す。

外へ向かう彼の後ろ姿を見送りながら、この時世に絵を描くとは風流だと思った。

深海棲艦との戦いは終わる心配がない。だから市中で軍服を着ていると一般の人か

ら会釈をされる。今のやり取りのように。

国全体、いや世界が戦時体制である。

だが我が国では国民が絵を描くこと自体、禁止されていない。むしろ積極的な趣味活動は社会の閉塞感を打破するものとして推奨されている。

(……でも、この山陰で絵画とは、あまり聞かないな)

都会から来た人だろうか? と思った。

客車を降りた男性を目で追いつつ駅名を見る。

「河崎口(かわさきぐち)か」

私は鞆からメモを取り出して確認した。

「確か、中浜(なかはま)か上道(あがりみち)の駅で降りれば良いはずだな」

……ガラガラと自動車の発動機が響く。降りた男性に入れ替わるようにして親子連れが乗り込んだ。

山陰の夏は湿気が多い。その熱気の中でディーゼルの排気臭と無数の鉄粉がキラキラと宙を舞うのが見えた。

「さっきの夢は……舞鶴か」

手帳を閉じて呟く。

忘れもしない。冬の日本海だった。

「この暑さとは裏腹に……か」

艦娘艦隊が敗北した季節。

……艦娘が出現した当初、某50年代には通常の艦隊と艦娘が並走して出撃していた。

だが某60年代の半ばには艦娘だけが出撃する戦い方が主流になっていた。

艦娘の方が戦力があり敵の攻撃への耐久性もある。だから人間が最前線で危険を犯す必要はない。究極のアウトレンジというわけだ。

もちろん未だ賛否両論ある戦法だ。

特に艦娘とのケツコンが合法化された某80年代半ばからは軍部内でも強行派と穏健派が対立するようになっていた。

この戦法が主流になったのは、かつて横須賀沖の海戦で、ある提督が艦娘をかばって亡くなったから、という説がある。

ただ不思議なことに、その提督が亡くなったという海戦記録は、どの公文書をひっくり返しても出てこない。もちろん該当する指揮官の名前も不明だ。

(一説に某60年代の半ば『66攻勢』辺りらしいが……まあ軍隊に、よくある伝説の類かも知れない)

『66攻勢』とは海軍史の授業でも何度も出てくる敵の大反撃だ。歴史が苦手な私でも

この単語だけは忘れない。

無線技術の発達は艦娘戦闘の遠隔制御を可能にした。まさに究極のアウトレンジ。いつしか現海軍の艦娘による戦いにおいて指揮官が直接現地へ赴くことは皆無となった。

だが無線にも限界はある。気候条件などで途切れることも多い。特に近年は深海棲艦による電波妨害が著しい。

そして某92年、冬。私の指揮する艦娘の艦隊が深海棲艦に大敗する。

あの悪夢が果たして正確かどうか 正直、私にも分からない。

その後、軍には新しいパケット通信技術が導入され情報遅延による不具合は、かなり改善された。

(もっと早く導入されていれば……)

何度も悔やんだ。

さらにメモ帳をめくっていると別のページの『シヨウコウ』という記述が眼に留まった。

「伝説の艦娘だな」

私は頭を掻いて記憶を手繰る。この艦娘は姉妹で、やたら強かった。当時の兵学校でも良く話題になった。

だがその後、彼女たちの艦装開発に絡む不正疑惑が発覚。政権交代と共にその艦娘たちの話題も自然消滅した。

当時、海軍内でも穏健派と強行派が分かれていた。それに巻き込まれたという噂だった。

強い艦娘が登場して敵をバタバタなぎ倒せば皆、幸せになる……という単純な話でもないらしい。軍部や政治の世界は難しいものだ。

「海軍もイロイロだよな」

呟いた私は先の男性が駅のホームで私の方を向いて敬礼をしているのに気付いた。

「おっ」

少し慌てた私も敬礼を返した。

街で私のような佐官を見かけても敬礼は義務ではないのだが。

(退役軍人だろうか)

そう思った。彼の敬礼が妙に型に決まっていたから。

「列車、発車いたしまあす」

車掌の笛の音と同時に汽笛が鳴った。私の乗った客車は一瞬ガチャンという連結器の音を響かせた後に、ゆっくりと発進した。

敬礼を続ける男性を見ていた私は、あれ？　と思った。

(どこかで出会ったかな)

彼の顔に何となく見覚えがあった。だが顔見知りではなさそうだ。

「気のせいか」

彼が視界から消えた後、私は改めて座席に座り直した。

今回、着任するのは鳥取県境港市にある美保鎮守府。

艦娘だけで構成された鎮守府。海軍でも、まだ珍しい存在だ。

今では艦娘だけで戦うことが主流になったが、それでも長らく艦娘だけの鎮守府は存在しなかった。

今でも軍での娘の存在を快く思わない強行派が敢えて敵に艦隊戦を挑むことがある。

しかし結果は明白、ほとんど無意味だった。

なかなか艦娘だけの部隊が作られなかった理由が強行派連中の面子かどうかは知らない。

しかし一昨年、ようやく実験部隊の名目で山陰地方に初めて鎮守府が設置された。私は改めて自分で調べたメモを取り出して確認する。

〈美保鎮守府〉

・某92年7月21日開設：ちょうど2年前の今日だ。

・初代提督は女性：私の兵学校時代の恩師だ。だが半年くらい経った頃、突然彼女は

その任を降りてしまった。理由は不明。

・ 以後の美保鎮守府では男性の提督が何人も着任：だが、いずれも長続きしなかった。理由は分からない。噂では艦娘との折り合いが難しいとか。最初の女性提督でも難しかったのに男性では、なおさらか。

・ 結局、半年前からは提督不在となっていた：強行派の多い海軍内部からも美保は潰せという意見が出ていた。そこに降って湧いたような男性への着任辞令……それが私だ。

しかし現実には、さきの如くの体たらく。

「私は名提督でも何でもない」

思わず肩をすくめた。

「そもそも初陣で全滅させているくらいだからな」

正直、艦娘の指揮は苦手だ。彼女たちが嫌いなのではない、むしろ逆で、つい艦娘だと手心を加えてしまうのだ。

だからあの海戦も悩んだ挙げ句の出撃だったから、つい判断が鈍った。

私は後悔と悔しさに唇を噛んだ。

……それ以来、慎重な指揮を心掛けたから艦娘の犠牲は出ないが戦果も芳しくない悪循環を繰り返し、周囲からも陰口を叩かれている。

今回の特例人事が誰の発案か分からないが軍の命令は絶対だ。

「海軍の上層部もきつと自棄(やけ)を起こしているに違いない」

私は苦笑して窓枠に肘をついた。

(ひよつとしたら私を当て付けて失敗した口実で、この鎮守府を終わりにするつもりか?)

そこまで考えて首を振った。

「止めよう、下手な考え休むに似たりだ」

私は分析を止めた。

……車窓には、のどかな田園風景が広がっていた。吹き込む風が嫌な気持を癒すように心地良い。

以下魔除け

Reproduction is prohibited.

禁止私自轉載、加工 天安門事件

Prohibitional authorization
da.

第2話（改2・8）〈出会い、遭遇〉

「逃げて」

「はあ？」

マイ「艦これ」（みほちゃん）

：第2話（改2・8）〈出会い、遭遇〉

「そういえば」

私は鞆を開いて今回、着任前に送付されてきた案内書を出した。

改めて見ると発信は今の美保鎮守府の提督代理こと重巡『祥高』となっていた。

「重巡……あれ？」

思わず目を疑ったが間違いない。

「まさか、あの艦娘か？」

呟くと同時に冷や汗が出た。

半ば伝説化しているが彼女は轟沈していない。今も海軍のどこかで艦娘任務をこなしても不思議じゃない。

それに今回は曰くつきの美保鎮守府だ。

「やれやれ……早く確認ときゃ良かった」

でも……と考え直す。

(もし出発前に彼女の名前を見てたら果たして来てたか?)

「否」

絶対、尻込みしただろう。

それに振り返れば此度(こたび)の人事発令が突然だった。一昨日、辞令が出て書類を貰ったのが昨日。あれこれ考える暇もない。

「それが良かったのかも」

私は流れる景色を見ながら苦笑する。

「ま、今更ジタバタしても始まらない。任務だし何とかなるサ」

腹をくくった。

取り敢えず、もう一度その艦娘を確認。そもそも艦娘が指揮官を勤めるなんて初聞だ。

「珍しい事例だよな」

何か事情があるのか？

……来る途上で受けた電話連絡では今日、到着した米子駅まで駆逐艦娘が迎えに来ると聞いていた。

「でも実際には誰も来なかったんだよな」

不思議そうな駅員の視線を思い出して、つい肩をすくめた。

「だから痺れを切らして境線に乗ったんだ」

……その結果として列車内で、あの忌まわしい悪夢を見る羽目になった。

それは仕方ないが、その出迎えの駆逐艦はどうした？

「すっぽかしたのか」

言いながら頭を振った。

「いや、あり得ん」

海軍じゃ、艦娘は人間以上に命令に忠実だ。

「じゃ、何かの事故か？」

私は米子駅で憲兵さんに声を掛けられたのを思い出した。

『閣下』

『オウ？』

声が裏返った。

『お困りでしょうか?』

憲兵お得意の職務質問かと思った。

だが見ると意外に親切そうな憲兵さんだった。

『あ、いや美保鎮守府へ行きたいのだが』

『なるほど』

頷いた彼は丁寧に美保鎮守府への行き方を教えてくれたんだ。

説明の途中で列車が来た。

『閣下、あの列車ですわ』

『ほえ?』

また声が裏返った。それでも促されるままに改札を通り、そのまま飛び乗った。十分、礼もせず別れて、ちよつと失礼したかも。

「狭い田舎だ。もし今度出逢ったら謝罪しよう」

私は座席で広げた資料を片付け始める。

……その時、何となく視線を感じた。ふと見ると斜め前に紺色セーラー服の女学生が座ってる。

(夏なのに暑苦しい)

そう思っていると向こうも、こちらを見ていた。

(軍の白い制服が珍しいンか?)

軍人と目が合った民間人は直ぐ目を逸らすか会釈する。

(女学生なら会釈かな?)

そう思ったが、その娘はジツとこちらを見ているだけ。

イヤ、その焦点も微妙に合っていない。

(要はボーっとしてるンかい?)

愛想笑いすら出来ないクソ真面目な性格の私だ。仕方なく目を逸らして流れる車窓

の風景へ目を移した。

「ああ、腹減ったなあ」

……本当なら、もう鎮守府に着いてる頃か?

そもそも山陰本線では列車内で駅弁も売っていない。駅でも買いそびれた。

ガタゴト走る列車は時おり激しく揺れる。お尻がジャンプする。

「路盤が悪リイな」

言いつつ視線を車内に戻した私はギョツとした。対面に、さっきの女学生が居る。

(いつの間につ!)

「……」

だが少女は相変わらず焦点の合っていない視線をこちらに向ける。

そして、おもむろにボソツと言った。

「逃げて」

「は？」

いきなりの発言。

その時、外から『ウー』つという音が響く。

「空襲警報？」

……列車は警笛を鳴らしながら急停車した。

《緊急停車、緊急停車》

車内放送が流れた。

隣の車両から走ってきた車掌が叫ぶ。

「皆さん、列車から降りて防空壕へ！」

車内にいた僅かな乗客は慌てて荷物を抱え出口へ。

境線の景色は、どこも同じようにしか見えない。

ただ車窓から格納庫がボンヤリ見えた。列車が止まった場所は空軍基地の直ぐそばだ。

私は鞆を抱えたまま車掌と共に乗客を車外へ誘導する。

「皆さん落ち着いて……外へ出たら直ぐに近くの防空壕へ！」

海軍とはいえ軍人が居ると心強いのだろう。みんな比較的、落ち着いて行動していた。これが都会なら大混乱するところだ。

……最後の乗客に続いて列車を降りて振り返る。列車の出口縁（へり）から地面まで意外と高さがある。

私は車掌と共に高齢者や小さい子供が怪我をしないように降車するのを手伝っていた。

既に遠くから妙な金属音が響いてくる。恐らく敵機だ。ただ地面の上だと距離感がつかみ辛い。

線路から少し離れた木立の向こうに小高く防空壕が見えた。そこへ向かって次々と避難を始める乗客。

飛行音は徐々に大きくなる。振り向くと海の方角……東の空に、いくつかの黒い点が見え始めた。

「来たか」

私は立ち止まって状況を確認する。

戦場で何度も聞いた特徴ある音。深海棲艦の機体で間違いないだろう。単発的に発射音が響く。敵機方向に白い弾幕が張られていく。

「境港と由良の陸軍……高射砲か」

奴らは通常兵器が使える相手ではない。果たして効果があるのか？

（何もしないよりやマシか）

陸海空三つの基地が集中する美保地域だが敵の航空機に直接攻撃されるのは極めて珍しい。

表情の见えない敵とはいえムヤミに攻撃しては来ない。連中も意外に要領は良い。

「目的は何だ？」

整理するように私は口に出して呟いた。

もともと深海棲艦も主戦場は海の上。連中が船舶や艦船を攻撃するのは分かる。

しかし美保湾周辺で大規模な作戦行動があるとは聞いてない。

「なぜ今？」

解セン。

連続して高射砲の音が続く。

（美保鎮守府と、この攻撃には何か関係があるのか？）

妙な胸騒ぎを覚えながら私は防空壕を目指した。

「考え過ぎなら良いがナ」

以下魔除け

Reproduction is prohibited.
禁止私自轉載、加工 天安門事件
d a . P r o h i b i d a l a r e p r o d u c c i o n n o a u t o r i z a

第3話（改2．5）〈空襲と救出〉

「えっと、女の子は何処だ？」

マイ「艦これ」（みほちゃん）

：第3話（改2．5）〈空襲と救出〉

ドンドンという音と共に空には高射砲の弾幕が張られる。しかし敵に通常の対空砲火は、あまり効果がない。

「ムダだぞ陸軍」

私は空を見て呟く。

車掌に聞いた。

「列車の状況は？」

彼は軽く敬礼した。

「はっ、ほとんど自力で（防空）壕へ逃げましたが……まだ年配者が」

戦闘機が弾幕をくぐり抜けこちらへ近づく。

「直ぐ誘導する」

「はい！」

私たちは列車の傍で右往左往する年配者に駆け寄る。

「大丈夫ですか？ 避難しましょう」

「……」

彼らの手を引く。多くが赤子のような純粋な笑顔でニコニコしてついてくる。

(ちよつと認知っぼい人たちだな)

私は思った。

防空壕は線路脇の畑にあった。この戦時下、各自治体や部落では壕の設置が義務付けられている。

乗客は、ほとんど退避した。年配者もギリギリ間に合った。

「やれやれ」

壕の中で制帽を取った私はホツとした。

私は豪内の雰囲気が変わるのを感じた。それまで軍服の私を敬遠していたらしい。年配者の手を引く私の印象が大きかったのか。

子連れの婦人が話しかけてきた。

「海軍さん」

「ん？」

振り向く彼女は小さな女の子を連れていた。

（河崎口の駅で『絵描き』と入れ替わって乗り込んできた人だな）

そんな事を一瞬考えた。

婦人は少女の手を握りながら言った。

「あの、女学生が居たはずですが」

その言葉で私は例の少女を思い出した。

「居ないのか？」

「はい」

婦人は頷く。確かに壕の中には居ないようだ。

すると別の男性が言った。

「さつきチラツと見たけど壕と反対の方向へ駆けて行ったで」

「え？ まずいな」

「……」

年配者は暗がりでも相変わらずニコニコしていた。その笑顔が逆に緊張感を増した。

「車掌、この場を頼む」

「はっ」

その場を車掌に託し私は再び壕の外へ出た。

「えっと、女の子は何処だ？」

そう言いつつ辺りを見渡す。すると小高い丘の向こうを紺色のセーラー服の少女が走っていた。

「なに考えていんだ？ 逆に目立つとる」

彼女は防空壕とは反対方向へ、どんどん逃げている。

呆れた。

「あの子、状況が分かって無いんか？」

今、学校で避難訓練は必修科目のはずだ。だがあの子は訓練を受けてないのか？

「登校拒否？ まさか」

今の時代に、それは有り得ない。

敵が近づく。時間がない。

私は『危ない』少女を救出する決意をした。

「まだ行けるか？」

目算で距離を読みつつ線路から草地へ向かう。

だが海上と陸上じゃ感覚が狂う。

「ヤバい、間に合わん」

制帽を脱いだ。

「えい、ダツシユ！」

起伏のない平地に列車が停車していれば敵からは格好の目標だ。案の定、奴らは列車に狙いを定めた。

「来る！」

機体の一部が何か光ったと思つた次の瞬間、激しい轟音が響く。

私も咄嗟（とつさ）に身をかがめる。

地響きと同時に火花を散らして先頭車両は粉々に碎け散つた。

派手に白煙が上がつて煙幕のように周囲を蔽（おお）う。パラパラと細かい破片が落下してくる。

その煙のお陰で逃げている少女は、しばらく安全だろう。私は直ぐに駆け出して少女に追いつこうとした。

「あれ？」

異変が起きた。足が竦（すく）んだのだ。

「まさか……」

それは軍人としてあり得ないことだ。別に最近、戦場で危険な目に遭つたわけでもな

いのに……焦った。鼓動がどんどん早くなる。そして気分が悪くなってきた。
「これは毒ガスの類ではない」

呼吸を整えた私は努めて冷静に状況を分析した。その間にも地響きが続く。敵は、まだ列車を攻撃することに夢中だ。

「1に敵。2は、私や少女に敵は気付いてない」

敢えて自分に言い聞かせるよう数えながら呟く。すると不意に足が軽くなった。

「今だー」

弾かれたように少女目掛けて走り出す。

「おーい君、大丈夫か?」

少女は振り返る。少しビックリしたようだが私の問い掛けに小さく頷いた。

彼女が立ち止まったので何とか追いつく。

(やれやれホツとした)

相手は女学生だからな。軍人に声をかけられて警戒されるかと思った。

近頃は内勤が多くて体が鈍ってる。この炎天下で数百メートルも全力疾走して息が切れた。

だが私と同じ条件下で疲れているハズの彼女が意外に息も切れてない。

「……」

(タフな子だな。何か運動でもしてるのか?)

平然としている彼女を見て私は、そう思った。

……改めてみると不思議な子だ。大きな瞳が印象的で、まるで人形のように可愛らしいのだが気配が無い。

(この子、もしかや……)

その時、地響きと共に爆発音が連続した。見ると列車や線路が次々と敵によつて破壊されている。

「考えてる暇ア無いな」

時おり黒煙で太陽が陰る。ここは戦場なのだ。私は素早く状況を確認。既に列車と私たちは、かなり離れていた。

相変わらず無数の破片がバラバラ降り注ぐ。幸い私は軍服、少女も長袖のセーラー服だから、さほど痛みは感じない。

敵は数機で列車周辺の地面にまで次々と攻撃を加えて破壊を続けている。乗客は既に避難しているから連中は拍子抜けだろう。逃げ惑う人間が一人もいないのだから。

彼らは列車の上空で何か探すような仕草をする。直感的にまざいと感じた。

女の子は紺色のセーラー服。よく見るとリボンだけが赤い。オマケに私は海軍の制服で白……こりや目立つ。

直ぐ私たちが発見された。

敵機は先頭機体が少し向きを変えただけで即、編隊ごと向かって来る。

光の閃光が私たちをかすめる。瞬く間に近くの地面が地響きと共に抉（えぐ）られる。

「おりゃアア」

雄叫びを上げつつ少女抱き抱いて反対側へ身を反らす。無我夢中だ。

小柄な少女は私の腕の中で子犬のように大人しくなった。

（抵抗しないのか）

そう思った直後、右に左と一面の土砂や草木が舞い上がる。土埃（ぼこり）以外は何も見えない。

「あつ痛！」

一瞬、肩のあたりを銃弾がかすめた。

（機銃か？ 当たったかも）

……まだ体は動く。

「ンがあ」

奇声を発しつつ逃げまくる。

「……」

少女は自然体というか、ほのかに緊張感を維持して……まるで発射直前の兵器が待機

するような感覚だ。

（不思議な子だ）

一瞬、艦娘かと思った。

この非常時に、ほんのり感じる体温。そして香水じやない女子っぽい香り。

（この身体の柔らかさは女の子だなあ……嗚呼、不謹慎）

自戒しつつ周りを見た。

反転する敵機。

舞い上がった土煙（つちけむり）が収まると同時に再び光筋が私たちを狙う。

「このままじゃアブねえ」

私は思いっ切り近くの窪地へとジャンプした。

「あり？」

……予想外にも、そこは用水路だった。

以下魔除け

Reproduction is prohibited.

禁止私自轉載、加工 天安門事件

d
a. P
r
o
h
i
b
i
d
a
l
a
r
e
p
r
o
d
u
c
c
i
o
n
n
o
a
u
t
o
r
i
z
a

第4話（改2．8）〈逃避行〉

「空軍は……陸軍もやられたよ」

「え？」

マイ「艦これ」（みほちゃん）

∴第4話（改2．8）〈逃避行〉

「ぷへえっ」

思わず吐いた。泥水の味……くぼ地には水が流れていた。

そういや弓ヶ浜にや、こんな小川が多かった。

兵学校での訓練を思い出す……まさか自分がこの年で少女を抱えて水路に飛び込むとは。

川の外では激しい閃光と地響きが続く。時折、砕けた土や小石が頭上からバラバラと降り注ぐ。

私は少女を護りつつ低姿勢で振動に耐え続けた。その間も女の子は、ずっと大人しい……が何かブツブツ呟いてる。

(少し変わった子なのだろうか?)

俗にいう『中2病』……この年頃は、そんなモノか?

ふと振動が収まり敵機が遠ざかる気配がした。

「やれやれ」

少し顔を上げた私は改めて少女を見た。

「大丈夫か?」

私は周りの様子を見つつ彼女から離れた。

「……」

少女は呟くのを止めた。そして大きい瞳で、こちらをじっと見上げている。

お互い何も言わない。場は一瞬の静寂に包まれた。

遠くからは断続的に爆発音が続いている。

共に小川に飛び込んだから彼女も制服の上から下まで、ずぶ濡れだ。

制服もボロボロ。どこかで擦ったか。

改めて確認したが、お互いに無事らしい。

だが、この少女は敵の攻撃を恐れていない。つまり感情が動いていない。

私も海軍だから各地で住民を避難させた経験がある。普通の市民は大概、敵の攻撃を受ける動揺して逃げ惑う。結果、犠牲になった人も無数に見た。

（肝が据わっているのは元軍人くらいだ。まして女学生が落ち着いているなんて初めてだ）

妙に感心した。

「ブツブツ」

再び少女は呟き始めた。

やばい、目の焦点が合っていない。

（電波系の危ない子か？）

さっきの年輩の男性を思い出した。もし、この子もその類（たぐい）なら恐怖という概念は無いだろう。

私は息を殺して辺りの様子を伺う。少女の呟きと地響きは続いている。

今は夏。ジツとしてると徐々に汗ばんでくる。

「ここから早く移動したいな」

何気なく呟いた。

それでも暑い日で良かった……これが冬場ならキツイ。そもそも冬に水を被ったら動けないだろう。

「冬、水？」

不意に舞鶴の海戦を思い出す……。

辺りは焦げたような臭いが充満している。これは陸戦の臭い……海の戦いとは違う。敵の兵器は通常火薬ではない。硝煙というより何かが純粹に焦げたような鼻にツンと来る臭いだ。

それでハツとして我に反った。危ない、ここは前線だ。

敵機は上空を旋回し続けている。発動機の音が聞こえず黒光りする機体には何ともいえない不気味さと威圧感がある。

おまけに我々の使う航空機と違って自由自在に動き回る。

「深海棲艦め」

私は睨み付けた。

連中には何度も辛酸を舐めた。あのチヨコマ動く戦闘機は侮蔑の意味を込めて前線では『ゴキブリ』と呼んだりもする。

歴史的には敵の出現と時を同じくして『艦娘』が出現した。彼女たちが私たち人類の味方になってから人類は優勢に傾き始めている。それほど艦娘の存在は大きかった。

だが地上戦となれば、やはり連中が強い。地上兵器に対しては圧倒的に優位に立つ。現に陸軍も空軍も歯が立たない。

だが意外にも連中は地上を逃げる人間は十分に索敵し切れない。

「何しろ普段相手をしているのは艦娘だからな」

連中の機体は対艦攻撃用の機体だ。そもそもゲリラのような普通の人間……特に地上において、それに特化した電探は持っていないようだ。

(だから地上で視界が悪くなると単純に相手を見つるのが困難らしい)

— そういった諸々の理由からだろうか？ 彼らが戦いを挑んでくるのは専ら海上の艦娘や鎮守府に限定されることが多い。

裏を返せば一般住民が生活する地上を彼らが空襲したり銃撃することは、ほぼ無い。それが反(かえ)って陸軍の連中が齒がゆく感じる理由だ。何しろ敵が陸に攻めて来ないから陸軍は開店休業状態なのだ。

挙句、一部で陸軍縮小案も出る始末。これは世界的傾向だ。噂では海外にも艦娘は居るらしいが通信網が寸断されており情報が乏しい。詳細は不明だ。

私は改めて少女を振り返った。

「今のうちに、逃げよう」

「……」

何か呟いていた彼女は口を閉じると小さく頷いた。

手を差し出すと躊躇(ちゅうちよ)無く私の手を取った。

(ほのかに暖かい)

この状況で妙にホツとした。

私たちは小川を出た。身を屈めて茂みに沿って数百メートル先に見える防空壕を目指す。陸軍の対空砲火は、いつの間にか聞こえなくなっていた。恐らくは敵に攻撃されたのだろう。

そういえば美保空軍は迎撃機の一つくらい出さないのか？

(まさか全滅？)

そう思っていたら後ろから少女の声。

「空軍と……陸軍もやられたよ」

「え？」

なぜ、その情報を知ってるのか？

……いや今は問うまい。逃げるが先だ。

軍事施設が叩かれるのは仕方ないが民間人への攻撃は避けたい。軍人の使命だ。私は不意に彼女に謝るように言った。

「済まないな」

「……」

相変わらず大きな瞳で私の背中を見つめてる気配。

今回、美保鎮守府の提督（指揮官）という辞令を受けた私だが軍人は単独では結局、何もできないのだ。司令といえども、ここでは単なる看板だ。

それに敵の前で一瞬、足が竦（すく）んだことは恥ずべきことだ。軍人の名が廃（すた）れる。

「実に歯がゆい」

私は敵機に注意しつつ唇を噛み締めた。

以下魔除け

Reproduction is prohibited.

禁止私自轉載、加工 天安門事件

Prohibida la reproducción no autorizada.

第5話（改2・5）〈私たちが護る〉

「私たちが護るから」

マイ「艦これ」（みほちゃん）

：第5話（改2・5）〈私たちが護る〉

何とか敵の攻撃を掻い潜（くぐ）った私たちは土埃（つちぼこり）でドロドロになりながらも、ようやく防空壕に、たどり着いた。

「はあ」

壕の前で改めて息つきをした。

（ここ）まで来れば安心か）

まだ爆音と地響きは響いている。だが敵機は丘の防空壕には構わずに列車への攻撃を執拗に続けていた。

「なんだか鬼気迫るな」

遠くの火柱を見つつ額の汗を拭った。もはや汗だくだ。

「参った、私も運動不足だなあ」

自分で反省し眩いた。

壕の扉を叩くと覗き窓から、さっきの車掌が私を確認する。

「おお、^ッ無事でしたか？」

そう言いながら彼は門（かんぬき）を外す。

「……」

振り向くと少女は無言だった。私は制帽を取って防空壕に入ろうとするが彼女はポーンと突っ立っていた。

「おい、入るぞ」

私が促すと、ようやく歩き出した。

（不思議な子だな。本当に女学生なのか？）

そう思いつつ入口でチラツと防空壕全体を見上げた。ここは小高い丘をくり貫いて造られていて比較的大きい型だ。

壕の中は薄暗く暑苦しい。しかし私と少女が入って行くと直ぐに拍手が起きた。

「大丈夫かね」

年配者の声だ。私は軽く手を上げて応えた。

「有り難う、お蔭様で」

その時、私が列車から助けた年配の男性がニコニコして、こちらを見ていることに気付いた。私は反射的に会釈をしたが不思議と癒された。

(なぜだろう?)

彼を助けたからだろうか。それとも、ああいう人は純粹な人が多いから?

そう思いつつ私は床に敷いてある莫座(ござ)の空いた場所に腰を下ろした。

「ヨイツシヨ!」

壕の、それまで張りつめていた雰囲気は急に和んだようだ。

だが例の少女は、この状況に慣れないのかキョロキョロしていた。

「大丈夫だ、座ろう」

私は隣の床を指差した。

「……」

軽く頷いた少女は無言で近くの莫座(ござ)の上に靴を脱いで座った。やはり普通の素朴な子だな。私は彼女を見ながら制帽を取った。

「これで、ひと安心だな」

「……」

少女は無言で相変わらず無表情だが少しだけ表情が明るくなった気がした。

防空壕の中は薄暗く非常用の懐中電灯が灯っていた。それが時おり地響きで揺れる。海軍ながら私は避難訓練には積極的に参加してきた。だから、こういった状況には慣れていて。軍人仲間から『暇だね』と揶揄されることも多いが……実はその通り。

江田島兵学校出ながら私は実戦での戦果はボロボロ。特に艦娘が混じるとダメだった。

呼び出され軍の適性検査を受けても異常なし。机上演習でも平均以上の成績で結局、軍司令部も『原因不明』として匙(さじ)を投げた。

以後は地上勤務Ⅱ地域の住民対応が増えたが私は腐らず黙々と任務をこなした。

学生時代に悩んで軍人を辞めようと思ったこともあるが、その後はブレずに軍人を続けていたワケだ。

空襲は止む気配が無い。時折、ズシンという地響きが伝わってくる。避難している人たちも不安そうだ。

普段から酒も煙草も女も買わない私は『マジメ君』の通り名もあった。それが僻地へ飛ばされなかった一因かも知れない。

(そんな私もついに年貢の納め時。山陰に飛ばされたか)

だが、ここは私の地元だから、そんな表現は使いたくない。

また地響き。頭を押さえる人もいる。

雰囲気を変えようとしたのか車掌が聞く。

「外は……どんな様子ですか」

「ああ、列車や空軍基地以外にも幅広く攻撃しているようだ」

防空壕の中の人たちに「ほうっ」といった感じで落ち着きが広がる。こういう状況では情報が一番だ。

だが私は黙って分析する。深海棲艦の連中が地上の軍事だけでなく、それ以外の施設以外を攻撃するのは珍しいことだ。なぜか？

その時、親子連れの女の子が母親に聞いた。

「ねえママ、ずっとココに居るの？」

「悪い人たちが居なくなるまで我慢してね」

そのやり取りに気になった私は薄暗い中で聞いてみた。

「婦人、この辺りでも空襲は多いのか？」

女性が言葉に詰まったので近くの男性が答えた。

「えっと、鎮守府が出来てからは少し増えたような……」

決して棘（とげ）のある言葉では無かったが私は自分が原因に思えて申し訳なかった。

今度は別の老人が言う。

「今までは兵隊しか襲わんかったけんなあ」

気を使ったか、それ以上は何も言わなかった。もともと山陰人はハッキリ、モノを言わない。その優しさが逆に心苦しい。

「失礼」

制帽を被り直した私は改めて外へ。情報収集は軍人の使命だ。この調子なら防空壕は恐らく直撃されないだろう

「酷いな」

外に出て反射的に眩く。

線路周辺は手当たり次第に攻撃され空軍基地の重火器類までが、ねじ伏せられていた。

陸軍同様。敵に対空砲や迎撃機で応戦しても歯が立たない。

「もうダメだな」

空軍基地の各所から火の手と黒煙が立ち上がっている。

敵は感情的……深海棲艦は沈着冷静な印象だったが今回は違う。

「何かに取り憑かれたか？」

急に目眩（めまい）がした。

「うっ」

足がふらついて動悸が早まる。

「またか……なぜ？」

さつきもそうだ。今まで経験したことがない状況……そもそも目の前に敵が来ているのに何という体たらくか？

ふと人の気配を感じて振り返ると、あの少女がいた。チョット慌てた。

「おい、外に出ると危ないぞ」

「……」

何を言っても少女は無言だ。

私はポケットから簡易双眼鏡を取り出して言った。

「空軍も、弾切れか？」

「……」

不思議と、その少女に反応を感じた。

普通、軍の知識が無い民間人に何を言っても暖簾（のれん）に腕押しだが。何となく私の意図を理解している。

（変わった子だな）

そういうえば息切れしないし戦場を恐れない。それはまるで戦闘慣れしたゲリラみたいだ。

私は滑走路周辺の様子を見て眩く。

「空もダメか?」

空軍が、このまま攻撃力を失えば、この地域の守りが手薄になる。放置すれば遠からず弓ヶ浜への敵の上陸を許すことになる。

「くそー!」

双眼鏡から目を離れた私は悪態をついた。だが現在の私には何も出来ない。ただ手をこまねいて見ているしかない。

そのとき私の隣にいた少女がまた呟いていることに気がついた。

「距離12500……小型機3」

彼女の顔を見ると澄んだ瞳で微笑んだ。日が差して彼女の栗毛交じりの長い髪の毛が風になびいてキラキラしていた。

「大丈夫」

「え?」

「私たちが護るから」

その言葉の直後、何かが滑空してくる気配がした。少し遅れて、かなり遠方からドドンという鈍い音が響き渡る。

（この威圧感は……）

直ぐに悟った。

「艦砲射撃か!」

それも通常の艦艇ではない。紛れも無く艦娘だ。反射的に空を見上げた直後、私たちの目の前に閃光がきらいて何か敵機に命中した。

最初の一発目が寸分も違(たが)わず敵に直撃した。間髪を入れず残りの敵機にも次々と砲弾が打ち込まれる。

「弾着観測射撃……」

遙か遠くからは連続で発射音が響く。この砲撃音は恐らく大口徑の砲塔から発射されているはずだ。

「美保鎮守府の艦娘か?」

すると目の前の少女が私に軽く頷く。

そのまま彼女は指示を続ける。

「修正、北東マイナス250から350。現地、風速5程度」

(ひよつとして、この子も艦娘なのか?)

その後、数発続いた砲撃によって敵機は完全に制圧された。私は直ぐに防空壕の扉を開けて中の乗客たちに声をかけた。

数名が様子を伺いながら外へ出てくる。数人に続いて出てきた親子が言う。

「ねえママ、もう大丈夫?」

「そうね……」

そして先に出た人たちの間から感嘆の声が上がった。

「おお」

「すごい」

私たちの眼前には攻撃を受けた惨状と合わせて敵機が撃墜された情景が広がっていた。それは軍人でなくとも溜飲が下がるだろう。

ところが、なおも遠くから砲声が響く。

「あれ？」

まさかと思う間もなく敵の居ない草原や空き地目がけて弾着が続く。

既に敵は完全に沈黙しているが今度は艦砲射撃が止まらない。

「お、おいー」

次第に関係ない場所……基地以外の畑とか雑木林にまで次々と着弾し始めた。

私は慌てて顔を出した乗客たちを壕へと戻した。

「皆さん、一度戻って下さいー」

振り返ると地響きと同時に飛び散る無数の破片。

「正気か？」

しかも最初は精度が高かった砲撃が気のせいか次第に投げやりのようになって来た。ま

さか……と思ったが明らかに着弾がズレている。

(こつちも感情的だな……)

そんな印象を受けた。この感情的かつムラのある攻撃パターンは艦娘に違いないと確信した。

私は艦娘を指揮した経験があるから、それが分かる。

なにしろ艦砲射撃だ。身の丈は小さくても、れつきとした海軍の艦船なのだ。その辺の野戦砲とは破壊力が違う。

「このままじゃ基地周辺に被害が拡大するぞ」

下手すれば住民感情が悪化しかねない事態だ。

(おや?)

私の斜め後ろに例の少女が居た。

「……」

吹き付ける爆風や細かい破片を受けながらも平然としている。

一計を案じた私は、とっさに言った。

「君! ……止めさせてくれ」

「……」

女の子は大きな瞳で私を見上げると直ぐに敬礼して何かを呟いた。ほどなく砲撃が

やんだ。周りには立ち上る白や黒の煙に包まれている。

弓ヶ浜は、ようやく静寂を取り戻した。

「やれやれ……」

防空壕の乗客たちもホツとした表情で再び顔を出した。そして安堵のため息が上がる。

敵だけでなく着任早々に艦娘から手荒な挨拶を受けたような気持ちになった。恐らくは美保鎮守府だと思うが……どんな艦娘が居るのか？

私は肩をすくめた。よく分からないが先が思いやられる。

以下魔除け

Reproduction is prohibited.

禁止私自轉載、加工 天安門事件

Prohibitional reproduction not authorized

da.

第6話（改2. 6）〈戦闘収束と憲兵〉

「陸軍と海軍の仲が悪いから」

マイ「艦これ」（みほちゃん）

：第6話（改2. 6）〈戦闘収束と憲兵〉

まだ辺りには土ぼこりや焦げた匂いが漂っていた。

「今度こそ大丈夫だな」

私は改めて空を仰ぎ、周りの景色を見渡した。

ここは空軍の滑走路以外は草場が広がっている。何事も無ければ、のどかな場所だ。

でも今じゃ無数の弾孔が点在。小さな丘は無残にえぐられ木々は片っ端から、なぎ倒されていた。まるで嵐が通り過ぎた後のようだ。

何度見ても、この状況には、ため息が出る。

艦娘であっても地上への艦砲射撃となれば破壊力がある。まして今回は敵だけでな

く艦娘も『攻撃』した。

「下手したら敵の攻撃よりも被害が大きいぞ」

私は頭を掻いた。

「はあ」

空軍周辺に人家がほとんど無いのは幸이었다。

避難していた人々が防空壕から外をうかがっている。

「あ……」

私は壕へ引き返して、まだ残っていた乗客に声をかけた。

「もう大丈夫ですよ」

誰もが安堵した。車掌に手を引かれて年配の人もヨロヨロと歩み出てきた。

私は、あの『精神の傾いた』年配の男性を探した。彼は隅の方でジッと座っていたが

私の顔を見ると、また微笑んでくれた。私も笑顔を返した。

外に出ると、あの少女も、こちらを見ていた。

（不思議な娘だな）

そのとき歓声が上がった。

「おお」

「これは凄い」

乗客たちだった。

彼らは海軍による反撃と覚（さと）ったようで直ぐ自然に拍手が沸きあがった。同時に乗客たちからは尊敬するような視線を感じた。

私は面映ゆい反面ホツとしていた。

（どうやら普通の人の目には艦娘による攻撃とは区別がつかないらしい）

少女は相変わらず無表情だったが私と年配の男性を交互に見ていた。

「どうかしたか？」

問いかけると彼女は視線を上げた。

「迎え……来た」

「えっ？」

その指差した先を見ると病院の名前が入った車が近くの道路に停車していた。そして職員が数人こちらに向かって来るところだった。

「よく、ここが分かったな」

「私……教えた」

「あ、そう」

反射的に『余計なことをしたな』と思った。

職員たちは私の前まで来ると敬礼をする。

「ご迷惑をお掛けしました、閣下」

「いや……」

そして彼らは年配の男性に声をかけて手を差し出した。

「ほら、戻りますよ」

その時、その男性が不機嫌な表情を見せた。そして抵抗する素振りを見せた。

私も少々面食らったが職員たちは、もつと驚いた。

「ちよつと……何?」

「どうしたの?」

そして男性は何故か私に助けを求めるような哀願の目をした。その気持ちが痛いほど伝わってきたが、どうすることもできない。

咄嗟（とつき）に私は少女の顔を見た。だが彼女も静かに首を振った。

「……」

「だめ……だよな」

このやり取りで場の空気が変わった。

年配の男性は急に大人しくなり病院の職員に自ら手を出して従う様子を見せた。皆、ほつとした。

「では、失礼します」

他の職員は私に敬礼をして立ち去った。

「……」

何とも言えない気持ちになったが気を取り直し帽子を被り直すと少女に声を掛けた。

「行くかうか？」

「……」

彼女は頷いた。私たちは逃げるようにその場から離れた。

線路脇の小道を境港方面へと歩き始める。

「ここは美保鎮守府から遠いのだろうか」

「……」

歩きながら尋ねた。

「君の名は？」

「カヨ……」

急に立ち止まった彼女は直立の姿勢を取って敬礼をした。

（えっ）

思わず私も敬礼をした。習慣だ。

彼女は言った。

「駆逐艦『寛代（カヨ）』と申します！」

意外に低めの声。

「提督を美保鎮守府の司令官として、お迎えに参りました！」

（何だ？　ちゃんと敬語も使えるじゃないか）

無口な感じで普段から、ほとんど喋らないのだろう。

「ご苦労」

私は返した。意外なことだらけだ。

……にしても出迎えの子が、なぜ私と一緒に列車に乗っていたのか。

（列車を間違えたのか？）

いろいろ聞きたいが我慢して敬礼したまま固まっている彼女に命令した。

「もう良いよ、歩こう」

この言葉で腕を下ろした寛代。

「暫く歩くか」

「……」

私は煤（スス）で汚れたカバンを軽く払って持ち直すと線路と平行に歩き始める。少女も従った。

「さて、どのくらい歩くのかなあ」

「……」

「街道筋に出ればバスが捕まるかも」

「……」

敵の攻撃で忘れてた。今は真夏だ。日本海側の夏は晴天が多い。

ジリジリ照り付ける陽射しが眩しい。私は制帽を軽く持ち上げて汗を拭った。

少し行くと前方に敵機の残骸が見えた。まだ黒煙を吐き、焼け焦げた悪臭と時折バチツと火花が散っている。

用心しながら、さらに近づく。

「ほう」

改めて敵機の頑丈さと、それすら貫いた艦娘の砲撃の威力を実感した。

深海棲艦を至近距離で見るのは初めてだ。撃墜すれば直ぐに海へ沈む。おまけに海軍の私が陸上で戦うことは有り得ない。

「惜し〜」

貴重な敵の情報源だが、今は鎮守府へ向かわなければ。

すると寛淑が私の後ろに視線を移していた。

「んっ？」

背後から複数台の発動機の音が近づいてきた。
振り返ると先頭車両に憲兵が数名乗っていた。

「おや」

見ると私が米子駅で案内をして貰った親切な憲兵さんだった。

「閣下あ、ご無事でしたかア！」

彼はニコニコと手を振っていた。相変わらず妙に明るい。

彼は普段から、そういう性格なのだろう。周りの陸軍からも特に注意されることがなかつたくらいだ。

私は苦笑した。

「屈託が無いな」

彼の挙動には冷静な寛代が驚いたくらいだ。

敵の残骸や列車の周辺に次々と車両が止まる。

憲兵と一緒に来た一団は明らかに陸軍の連中だ。車両には『米子』と書いてある。

（三柳にある駐屯地だな）

彼らは車を止めて順々に降りると手短かに点呼。直ぐにパラパラと敵機の周りに散らばった。そして手際よく列車の消火や後片付けを始めた。

「フム」

よく見ると陸軍だけでなく鉄道省の連中も混じっている。

散乱している敵の機体。彼らは付近を立ち入り禁止にして何かを撮影したり計測を始めた。それを不思議そうに見詰める寛代。

それを見た私は何気なく彼女に語りかけた。

「陸軍には敵の情報がある、あまり無いからな」

（そうなんだ）

……といった面持ちで私を見上げた寛代。興味を持ったらしい。

改めて説明を続ける。

「中央じゃ陸軍と海軍の仲が悪いからな。敵さんの情報にしても協力体制がないんだよ。だから地上に敵の機体が落ちたとなれば飛んでくる」

「……」

寛代は小さく頷いた。この話が理解できるなら単なる艦娘ではない。

そこで、さらに問いかけた。

「美保では陸軍と海軍は仲が良いのかな？」

「……」

別に回答は期待していなかったが当然、寛代は無言。

でも呆けてはいない。何か考えているようだ。

ちやうど打ち合わせをしていた憲兵が、ばらばらと解散した。その中の一人……あの米子駅で出会った憲兵が私の前までやって来てサツと敬礼した。

「閣下、美保鎮守府まで、お送りするよう指示を受けました!」

「アつ、そう?」

渡りに船だが、ちよつと驚いた。

軽く咳払いをして改めて聞いた。

「美保鎮守府までは、ここから遠いのか?」

「いえ、近いです」

言いながら彼は済まなそうな顔をした。

「実は先ほど米子駅で閣下に詳しく説明する時間が足りませんで申し訳ありません」

私も恐縮した。

「いや、君の話を最後まで聞かずに列車に飛び乗った私の方こそ済まなかつた」

彼は言った。

「いえ、境線が空襲されたと聞き閣下が、お乗りになつていることを上官に報告。直ぐに対処する部隊と共に中浜へ向かうよう指示を受けましたので」

「ほう」

(陸軍にしては機転が利くな)

私は感心した。寛代は無言のまま。

憲兵は続ける。

「遠くから見えましたすが、すごい戦闘でしたね。驚きました」

「ああ」

さっきの艦砲射撃か。あまり触れたくない話題だ。

「ですが、直ぐに決着がついてホツとしました」

「そうだな」

それは私も同じ。

「では閣下、こちらへどうぞ」

彼は陸軍の車両を指さした。

「ご案内します。お乗り下さい」

「ウム」

……しかし腰の低い憲兵で感心した。地方には、こういうタイプが多いのだろうか？

私が今まで出会った憲兵は皆、高飛車だった。

「そうだ」

歩きかけた彼を呼び止めて私は言った。

「この子も一緒に頼む……おい、来い」

私は隠れるように離れていた寛代を手招きした。

憲兵は一瞬、不思議そうな顔をした。

「あの、閣下のお知り合いですか？」

「いや、この子も海軍の軍人だ」

「は？」

その反応は無理もない。まだ海軍以外では『艦娘』自体が軍事機密に近い。

一般市民だけでなく憲兵も含め陸軍でも、ほとんど知られていないはずだ。仮に知っているても彼女は見ただけでは普通の少女にしか見えなйдらう。

「早くしろ」

私はブーツとした彼女の手を取ると半ば強引に車の傍に寄せた。

「取り敢えず鎮守府まで頼む」

「はっ」

そこで私と憲兵さんは改めて軽く敬礼した。

私の動作を見てボンヤリしていた寛代も反射的に敬礼をする。私は内心苦笑した。

(これもまた軍隊の習慣性か)

その所作はキビキビしていて気持ちが良い。少女の敬礼を見た憲兵も彼女が兵士であると理解したようだった。少し微笑んでいる。

私たちが後部座席に乗り込むと憲兵さんは発動機を起動させる。黒煙を上げて車体が震える。辺りは独特の排気臭に包まれた。

「では出発します」

私たちを乗せた車は、そのまま線路を離れた。そして作業を続ける陸軍や調査員たちの間をすり抜けた。

（せっかくの機会だ、しっかりと調べてくれ）

（ここぞとばかりに出てきた憲兵や陸軍だ。）

（海軍には国防の、お鉢を奪われ放しだからな）

今の戦争は、ほぼ海上に限定され陸軍や空軍は何も手出しができない状況だ。同じ軍隊だから形だけ全軍で戦時体制を取っているだけだ。彼らも歯がゆいだろう。だから陸軍も空軍も常に敵の最新情報を欲しがっている。

特に陸軍は海軍と見ると憲兵を通して直ぐに探りを入れて来る。私もここまでの道中、何度も憲兵に話しかけられた。だから白い海軍の制服で街をウロウロするのは苦手だ。

今回も深海棲艦の機体が地上で撃墜されたと聞いたから陸軍は直ぐに飛んで来たのだろう。私を鎮守府に送るというのも邪魔物を排除したいという思惑か。

さつき空軍の車も見えたのだが陸軍が活動しているのを見て、そそくさと撤退してし

まった。

実は海軍だって敵の情報を、ほとんど持っていない。海上で仕留めても結局『海の藻屑』となるばかりだから。

ただ唯一、敵と交戦した経験値だけある、といったところか。

それに最近、ほとんど艦娘が戦闘を代行しているから、なおさら解り辛い。

遠くの空軍基地では、焼け跡への放水が始まっていた。

以下魔除け

R e p r o d u c t i o n i s p r o h i b i t e d .

禁止私自轉載、加工 天安門事件

d a .
P r o h i b i d a l a r e p r o d u c c i o n n o a u t o r i z a

第7話（改2・4）〈白い波濤〉

「やはり海は良いな」

マイ「艦これ」（みほちゃん）

：第7話（改2・4）〈白い波濤〉

私たちを乗せた陸軍の車は現場を離れた。

屋根は有るが半分吹きさらしの陸軍の車はガタゴトと線路脇の細い道を走る。

この辺りは郊外だから人家もまばらだ。舗装もされていない。そこを憲兵さん、かなり高速でブツ飛ばす。

境線の揺れも激しかったが……この運転の荒さでは舌をかみそうだ。

（陸軍だから仕方ないか）

私は苦笑した。

ただ隣の寛代は意外に平然としている。

（艦娘だから多少の『揺れ』には強いのだろうか？）

興味が湧いた。

「お前は車の運転は出来るのか？」

「や……」

寛代は黙って首を振った。

「そうか」

確かに駆逐艦級（クラス）の彼女が車のハンドルを握る絵は、すんなりとは思ひ浮かばなかった。

実際、各地の鎮守府でも運転の上手な艦娘は、だいたい巡洋艦以上だ。

軍用車は直ぐに舗装された道路に出た。

（やれやれ）

揺れが収まって私は腕を組んだ。

車窓から見えるのは弓ヶ浜の平原に広がる松林や畑。それに大小の砂丘だ。

私は呟く。

「小さい頃、よくここで遊んだな」

少し意外そうに寛代は、こちらを見た。

私は説明した。

「ここが出身地なんだよ」

「……」

彼女は軽く頷いた。

（不思議な子だな）

毎回、そう思う。

前で運転している憲兵さんが言う。

「中浜駅から鎮守府まで歩きで30分です」

ミラー越しに私を見た。

「それを米子駅で、お伝えしようとしたら行かれてしまつて」

「うむ、申し訳ない」

確かに軽はずみだった。

海軍とはいえ地上での自分のバカさ加減が恥ずかしい。私の両親は落ち着いた性格なのに自分はなぜ、そそっかしい？

すると憲兵さんも多少、気をつかつたのか急に話題を変えた。

「えつとお閣下は、あの敵を何度も戦場で、ご覧になつとられるんですか？」

「そうだ」

彼は続ける。

「我々自慢の、お台場高射砲でも鹵が立たんかったって……敵は相当強いんですねえ」
「まあ、そうだな」

「んな連中相手に閣下が戦われているとは我々も誠に心強い限りですわ」

彼の発言に私は「おや?」と思った。

(陸軍も自覚してるのか)

しかし、よく喋る憲兵さんだ。

私は隣の少女を見た。

「……」

この艦娘は陸軍とは対照的に黙って座っている。『寛代』といったな。きつと幾多の実戦をくぐり抜けて来たから空襲も恐れなかったのか。

もちろん海上では修羅場も見ただろう。だから、この子には何となく影を感じる。

艦娘は皆、過酷な状況を通過して生き残っている。危険な最前線に駆り出されているのだ。一方の人間は安全な後方だ。

(あの忌まわしい冬の日本海の如く)

そう思った私は胸が痛んだ。

軍用車が松林を抜けると急に目の前に視界が開けた。真つ青な海。久しぶりに見る日本海だった。

今日は風があるので時おり白い波濤が碎けている。とても力強い。軍用車だから潮の香りを直接、肌を感じる。

「やはり海は良いな」

思わず呟いた。最近陸上勤務が多かったから、なおさらだ。

隣の寛代も長い黒髪を押さえている。そして気のせいだろうか？ 少し微笑んでいよう。この子も海を見て何かを感じたのだろう。

松林を抜けて片側2車線の幹線道路を行く。

「閣下、あそこですー」

彼が指差した松林の向こう側にうつすらと赤い建物が見えていた。

「なるほど」

憲兵さんの言う通り駅から歩いたら、かなり時間が掛かりそうな距離だ。

(やれやれ……人の話は最後まで聞くものだ)

と素直に反省をした。今回は親切な憲兵さんのお陰で助かった。人との出会いは大切だ。

「あ……」

私は寛代を見て思わず声を掛けた。

「お前との出会いもな」

「……」

彼女は髪の毛を押さえながら、こちらを見た。

無表情だったが最初に出会ったときよりも人間らしい感情の動きを感じた。このとき私は改めて艦娘にも感情があることを覚った。

艦娘との出会いも人類にとって重要なことなのだろうか？ そんなことを考えた。

以下魔除け

Reproduction is prohibited.

禁止私自轉載、加工 天安門事件

Prohibida la reproducción no autorizada.

第8話（改2・5）〈美保鎮守府〉

「この人、新しい提督う……？」

マイ「艦これ」（みほちゃん）

：第8話（改2・5）〈美保鎮守府〉

憲兵さんの運転する軍用車は日本海に沿いの幹線道路を進む。やがて前方に見える山並みが車の行く手を阻むように少しずつ視界の中で大きくなる。

「島根半島だな」

私は呟いた。

あの山が見えると弓ヶ浜出身の人間は懐かしさを覚える。特に境港出身の私にとって島根半島は故郷の象徴といえた。

「あの山、ご存知ですか？」

憲兵さんが反応する。

「ああ、こつちが地元だからね」

私の発言に彼は頷く。

「もともと境（さかい）に港があるのも、あれ（半島）が天然の防波堤になっ
ていてるから
です」

「そうだね」

「海軍さんが美保湾に基地を作るのは、むしろ遅すぎたくらいですよ」

憲兵さんはペラペラ喋り続ける。

「フム」

生半可な返事をした私だったが直ぐにそれを実感する状況になる。

軍用車は減速すると交差点を右折した。

「もう直ぐ到着です」

松林を抜けて小さな水路を渡った時だった。

「おや？」

私は驚いた。松林の向こうは海かと思っていたが予想に反し、そこは広い平地だったから。

「埋立地か？」

記憶に無い。まるで別世界。

憲兵さんが聞く。

「どうか、されました？」

「いや……ここに、こんな場所があったのか？」

彼は頷いた。

「そうです。ここは割と最近、造成されたんですよ」

「確か、かなり以前に計画が、あったように思うが」

憲兵さんは振り返る。

「閣下も、ご存知でしたか」

「ああ」

私は記憶を手繰った。

「まだ小さい頃、この道路沿いに埋め立て計画の看板が立っていたのを覚えてるよ」

「ははあ、そうですね。ありましたね」

私たちは、そこで互い同郷者だと悟るのだった。

赤信号で軍用車は停まった。憲兵さんは言う。

「やはり閣下には他の海軍の、お偉いさんとは違う雰囲気を感じたんですよ」

「そうか？」

「はい。ですから米子駅でもし別の海軍さんだったら自分も、ここまで気に掛けなかつ

たと思います」

「なるほど」

人の縁は有り難いものだ。

彼は水路を見ながら続ける。

「確か、ここは地元の代議士親子が三代で成し遂げたつて話です」

……それも何となく聞いた覚えがある。

艦娘や深海棲艦が出現する以前……それこそ大東亜戦争直後の混乱期に地元の代議士が『この山陰を日本海側の経済共栄圏の中心とすべし』と構想した。それを政府に働きかけた結果が、この埋め立て地だと。

私の考えに呼応するように憲兵さんが続けた。

「地元出の大臣さんが企業誘致を目論んで埋め立てたんですよね」

「そうだな。でも結局は深海棲艦の出現で、その夢も頓挫したが」

ただ、お役所仕事の面白いところは一度決まったことは粛々と実現していくことだ。気付いたら私が故郷を離れている間に、こんな広大なものが出来ていたわけだ。

「これは無用の長物なのだろうか」

その言葉に憲兵さんは肩をすくめた。

そして私たちは苦笑した……埋立地の話題を出せば地元の大半の人たちが同じ反応

を見せるだろう。

信号が変わり再び軍用車は走り出す。広大な埋立地の潮風を受けながら私は考えた。(もし、この戦争がなければ、この場所には、お店や工場が建ったかも知れない。ただ普通の鎮守府は無理だな)

「ああ、あれです」

憲兵さんの言葉で直ぐに赤い建物が見えてきた。

「美保鎮守府か。レンガの雰囲気は海軍だが規模は小さいな」

この埋め立て地では仕方がない。隣の寛代は無言のまま車窓の外を眺めている。

私は事前に聞いたことを思い出す。

(ここは艦娘だけの鎮守府……)

なぜ、そうなったか？

誰かが働きかけたのか……確かに艦娘だけなら広くない埋立地でも設置は可能だが。

この地域には既に空軍と陸軍の基地がある。敢えて正規の鎮守府を誘致する必要もない。私は自問するように呟く。

「とりあえず、この小さな鎮守府が答えというわけか」

だが軍用車が美保鎮守府の敷地内に入って驚いた。門が無く道路から直接、玄関前まで入れたのだ。

「守衛も居ないのか？」

私と同様、少し驚いた憲兵さん。

「ここですか……実は自分も初めてであります」

思わず苦笑した。

（同じ弓ヶ浜半島にある陸軍の憲兵ですら初めて来るのか）

鎮守府ながら敷地にはクレーンすら見えない。それに入口からして無防備だ。改めて説明されないと鎮守府ということすら見逃しそうだ。

（まさか意図的に、こんな状態にしているのだろうか？）

……まるで人目を避けるように。

軍用車は正面玄関に横付けした。私は一つしかない鞆を抱えた。実はもう一つの鞆もあったが空襲で焼けてしまった。

「降りよう」

「……」

私と寛代は軍用車を降りた。

「助かったよ」

私は憲兵さんに軽く敬礼をした。

彼は一瞬驚いた後、慌てて車を降りた。そして敬礼をしながら言った。

「閣下、何かあったら、いつでもお声かけて下さい！」

「ありがとう」

私と寛代は玄関前で彼に別れを告げた。最後まで忙（せわ）しい憲兵さんに乗せた陸軍の車は門のないゲートから外へ出た。

それを見送りながら私は何気なく寛代に言った。

「生真面目で親切な憲兵さんだったな」

ふと見ると彼女も少し笑顔になっていた。私はホツとした。

「さて」

改めて鎮守府の建物を見上げた。ここは二階建ての小さな庁舎だ。

「本当に、こじんまりとしているなあ」

舞鶴など他の鎮守府に比べると美保は、ふた周りほど小さい印象だ。大型重機も見えない。さすがに倉庫や工廠はありそうだが。

普通の鎮守府なら敷地が広く門も嚴重で大抵は守衛が居る。もちろん舞鶴は入り組んだ地形だから鎮守府そのものは思ったほど平坦でもないが。

ところが、ここは艦娘だけとは聞いているが少し拍子抜けする。

私は寛代に言った。

「出迎えもないな」

「……」

「別に嫌味じゃないぞ」

「……」

(この子も相変わらずだな)

普通の少女なら私も怪訝(げげん)に思っただろうが、この子の態度は妙に自然に感じた。

私は問いかけた。

「まあ良い、お前が案内してくれ」

「……うん」

ようやく私の言葉に反応してくれた。そこで早速、正面玄関から本館に入った。

「ホウ」

思わずため息が出た。ロビーは明るい吹き抜け。規模は小さくとも建物自体には海軍の品格を感じる。

この設計も海軍本省がきちんと管理したに違いない。そう思った瞬間、私は自分に言い聞かせるように呟いた。

「……も海軍だな」

寛淑から特に反応はない。

視線を移すと奥の通路に数人の少女たちが見えた。

「艦娘か」

もちろん珍しくはない。だが、この状況では少々緊張する。彼女たちはヒソヒソ話をしている。

さらに向こう側には偉そうに腕組みをして見ている艦娘も居る。

（これが艦娘部隊だよな）

この光景だけ見れば、どこの女学校かと錯覚する。他の鎮守府と違い独特な雰囲気満ちていた。

ここは帝国海軍の鎮守府だが改めて、この場に立つと受ける違和感が大きい。

（雰囲気は飲まれてはダメだ）

私は無視して廊下を進んだ。寛代も無言で私の斜め後ろから付いて来る。

「執務室は上かな？」

振り返ると彼女は頷く。

（確か初代の提督は女性だったな）

資料にあった内容。恐らく先任の提督たちは途中で参ったのだろう。

（果たして私は？）

敢えて強気で歩くのだが、どうしても不安が湧く。

そう思っていたら寛代が私の腕を引つ張る。

「あ?」

「……」

彼女は無言で2階へ上がる階段を示していた。

「ついうっかり階段を通り過ぎるところだった」

私は頭に手を当てる照れ隠しした。なるほど建物が小さいから階段も狭い。荷物を持ち直すと彼女に促されるまま2階へと上がった。

そこで私は思わず立ち止まった。急に視界が開けた。

「おお」

1階では分からなかった、2階の窓からは鎮守府を囲むように蒼い海と緑色の島根半島がよく見える。それらが夏の陽射しを受け鮮やかな対比を見せていた。

その開放的な景色を見て、それまでの想いが払拭された心地だった。

「海は良いな」

思わず呟いた。海は、すべてを受け入れてくれる。

「……」

少し先で立ち止まっていた寛代も小さく頷く。

その先に提督執務室があった。私たちは大きな扉の前に立った。

「今日から、ここが私の前線だな」

「……」

寛代は黙っていた。

まず目の前の扉をノック。

「はあい」

女性の声。

（噂の代理提督か？）

私はドアノブに手をかけ部屋の中に入った。

執務室の中は正面にデスク。そして壁には時計。椅子に腰かけているシヨートヘアでスリムな艦娘が一人。

その服装は白を基調に青いアクセントが入っていて、ごく一般的な艦娘の秘書艦が着るタイプだ。

彼女の横に背の高い艦娘が立つ。やや長身の彼女もまたシヨートヘアだ。服は標準的な戦闘服で巫女か浴衣のような和風の出で立ち。

私が入る直前まで艦娘が報告をしていたようだ。入室した私を見て二人とも驚いているた。

敬礼しながら私は言った。

「本日付けで美保鎮守府に着任する美保だ」

……私の苗字は『美保』だ。ここに着任するときも上官から『お前の鎮守府だな』と冗談っぽく言われた。

正面の艦娘は直ぐに立ち上がるとサツと敬礼した。

「お待ち申し上げておりました提督。臨時提督代理を務めております私、重巡『祥高(しょうこう)』と申します」

私は軽く頷いた。

「よろしく頼む」

敬礼を解きながら私は、ふと考えた。

(艦娘は美人が多いが彼女も例外ではないな)

きりつとした口元に精悍な顔立ち。多少「押し」が強そうだが。

(不思議なカリスマ性を感じるな)

何処の鎮守府でも秘書艦を担当する艦娘はキツチリして押し(芯)が強そうな子が多い。

もつとも、そのくらいで無いと指揮官の補佐役は務まらないだろう。特に代理提督を務めるくらいだから、ある程度のカリスマ性は必要か。

私の想いを他所に彼女は言った。

「寛代ちゃん、提督の荷物をお持ちして」

「……」

重巡の指示で私の荷物を受け取った駆逐艦娘は袖机の上に私の鞆を置いた。

そのとき機の横に立っていた艦娘が私をチラ見しつつ蚊の鳴くような声で言った。

「この人、新しい提督う?」

彼女は戦闘直後なのだろう。服はボロボロで短めの髪の毛が、あちこち飛び跳ねている。表現は悪いが、まるで『落ち武者』的な鬼気迫るムードだ。

いや、そもそも彼女の存在自体が、どことなく凄みがある。まさに『サムライの妻』の如くだ。

そこまで考えて私は悟った。

(そうか、先に空港めがけて艦砲射撃した艦娘って、この娘じゃ?)

……もしそうなら着弾点に居た私と寛代は二人で逃げ惑って危うく死に掛けたわけだ。いくら相手が艦娘でも文句の一つでも言いたくなかった。

私はザワつく気持ちを抑えながら聞いてみた。

「先刻、艦砲射撃をしたのは君か?」

名指しされた彼女は目を丸くした。たじろぎつつ何か言い掛けたが直ぐに祥高さんが横から説明をした。

「はい彼女は戦艦『山城』です。美保湾及び弓ヶ浜に敵機来襲と聞き、距離はギリギリだったのですが私の判断で砲撃を命じました」

そこまで聞いた山城さんは改めて不安そうな表情を見せた。

「あのう……何か？」

私は彼女の不安かつ澄んだ瞳を見て急に怒りが収まった。

(一)の眼……)

ふつと舞鶴沖で沈んだ例の『彼女』を思い出したのだ。そういえば、あの艦娘も私の命令に反発しながらも澄んだ瞳を向けてきたものだった。

急に慌てた私は打ち消すように言った。

「あ、いや……美保にも戦艦が居るんだなあつてね」

我ながら、この反応は不自然だと思つたが後の祭り、場の空気が固まる。自分に嫌気が差す。

「えつと……」

ばつが悪くなつた私は取り繕うように制帽を脱いだ。

すると祥高さんが続けた。

「美保の主軸となる戦艦は彼女だけです。あとは駆逐艦がほとんどです」

私は頷いた。

「なるほど唯一の戦艦が『山城』さんか」

それならば敵が来れば彼女が一番に反撃するのは当然だ。いくら山城さんだつて自分勝手に砲撃はしないでだろう。要するに命令をしたのは祥高さんだつた、ということか。

提督代理の命令ならば山城さんの責任ではない。それに彼女も最前線にて全力で戦っていたのだ……私は自分の態度に恥ずかしさを覚えた。穴があつたら入りたい。

「そうか、君もご苦労さんだつたね」

私は山城さんを労（ねぎら）った。

そう言われた彼女は一瞬、驚いた後、ポツと頬を赤らめた。そして恥ずかしそうにロボロの服を隠す仕草を見せた。

（ああ、この子も普通の女の子だな）

そう思った。だが私も寛代も、山城さんと同じように服は汚れ穴も開いていた。敵の機銃掃射や艦娘からの艦砲射撃の着弾点を逃げ回っていたから仕方ない。

（これじゃ、この艦娘たちにもジロジロ見られたのも無理はないか）

私はつい苦笑した。

気になったのは秘書艦の名前。艦娘も戦艦クラスになると所属の鎮守府以外でも知名度が高くなる。大和、武蔵、長門……そもそも彼女たちは戦果も華々しい。

しかし彼女は重巡だ。そんなに有名な艦娘なら知っているはずだが……。

（まあいい。また思い出すだろう）

私は改めて執務室内を見回した。

以下魔除け

R e p r o d u c t i o n i s p r o h i b i t e d .

禁止私自轉載、加工 天安門事件

P r o h i b i d a l a r e p r o d u c c i o n n o a u t o r i z a

d a .

第9話（改2・5）〈秘書艦（仮）〉

「提督が鎮守府に着任しました」

マイ「艦これ」（みほちゃん）

：第9話（改2・5）〈秘書艦（仮）〉

改めて執務室内を見回した私は神棚を見つけた。

自分自身ボロボロの姿で神前に立つのは申し訳ないと思いつつも、その下で私は大きく拍手（かしわで）を打った。

祥高さんは恐らく司令部の人間たちが行う所作には慣れているのだろう。私の行動には表情を変えなかった。

だが山城さんは目を丸くしていた。

（彼女は、ここのいう経験がないのか？）

……帝国海軍の軍人としては、これが基本だと思いが。

それに、ここの神棚の神（さかき）は元氣なく枯れてホコリだらけ……頂けない。私は振り返った。

「祥高さん、当面は君が秘書艦を担当してくれ。最初は執務室の整理だ。特に神棚の掃除は直ぐに頼む」

彼女は直立して敬礼をした。

「はい。至りませんでした！」

その反応の速さに私は苦笑した。さすが代理を務めるだけある。

状況が理解できない山城さんに私は言った。

「正式な任艦は上の指示を仰がないとダメだけどね。だが彼女が秘書艦で異論はないだろう？」

彼女は頷いた。

そして新たな秘書艦（仮）となった祥高さんは敬礼をして宣言するように言った。

「提督が鎮守府に着任しました。これより艦隊の指揮を執ります」

まるで何かのスイッチが入るようだ。

艦娘は巫女っぽい服装の子も多い。だから神棚と艦娘というのは相性が良いかも知れない。

（それも何か意味があるのかな）

祥高さんは脇の二人の艦娘に指示を出した。

「山城さんと寛代ちゃんの記事は後から聞きます。二人は、いったん下がって下さい」
「わかりましたあ」

山城さんは気だるそうに敬礼するとヨロヨロと歩き始めた。

（彼女はたった一人の戦艦として、この鎮守府の守りを固めている。その重圧は大変だ
ろう）

山城さんが退室する際に会釈をしたので私も軽く返した。その時フツと彼女さんの
表情が緩んだ。

一瞬、鳥肌が立つと同時にホツとした。

（彼女にも人間らしい感情があるのだ）

山城さんが退出した執務室は、ちよつと気が抜けた。

「さて」

ふと見ると……。

「あれ？」

「……」

まだ無言で立ち尽くす駆逐艦『寛代』が残っていた。

なぜか動かない。

「寛代ちゃんも、聞こえた？」

祥高さんが重ねて聞いて、やっと駆逐艦娘は顔を上げた。

「……」

少しボーっとしていたが、のそのそ退室して行く。

二人の艦娘が退室して、ようやく落ち着いた。私は腕を軽く回しながら言った。

「美保は独特なのかな？ やっぱり」

祥高さんは頷いた。

「そうですね。他の鎮守府に比べて歴史も浅いですし」

そのとき廊下の方が急に騒がしくなり「キヤツキヤツ」という女子の笑い声が響く。

祥高さんは微笑む。

「艦娘たちが外で待ち構えていたようですね」

「そうだな」

艦娘は普通の人間では無いがロボットでも無い。一種、独特な雰囲気を持っている。

あの山城さんや寛代だって、そうだ。

ところが、この秘書艦たる祥高さんは、それともまた違うようだ。

彼女は普通の艦娘には無い何か、人間に近いものがある。

「司令、お着替えは？」

その問いかけで私は現実に戻った。

「いや、まだいい」

上着を脱いだ私は司令の席に近寄りながら言った。

「それより先ほどの戦闘の状況と戦果の報告を頼む」

「承知しました」

軽く敬礼した祥高さんは自分の机に積み上げたメモや資料を整理する。

「済みません、少々お時間を頂けますか？」

「ああ構わないよ。私も準備しよう」

ヨイシヨツと私は司令の椅子に座った。

そこで思わず叫ぶ。

「あ痛っ！」

腰回りから足首に掛けて激痛が走った。

「打撲……か」

だが秘書艦は動じない。提督代理を務めたから肝が据わっているのだろう。資料を整理しながら言った。

「先ほどの戦闘ですか？」

まさに秘書艦の鑑（かがみ）だ。

その雰囲気は海軍省の中央司令部の役人どもに感じが似ていた。

私は改めて自分の体のダメージに気付いた。

「草むらで逃げ回った時に、あちこち打ったようだな」

腰をさすりつつ私は聞く。

「あの寛代は何ともなかったのか……艦娘だから当然だが」

その問いに祥高さんは微笑んだ。

「そうですね。あの子は通信に特化しているので……さほど最前線には出ませんが身の

こなしは柔軟です」

「なるほど」

納得した私は腕を組んだ。

「通信に特化か……何となく、そんな雰囲気はあるな」

微笑んだ秘書艦は続ける。

「あの子は通信を中継する任務が多いから……出撃回数自体は他の艦娘より多いですし、いざとなったら高速で前線から離脱するので意外と鍛えられているのかも知れませんが」

「ああ、そうなるのか」

確かに、あの子はそういうタイプだろう。

早々に書類をまとめた祥高さんは言った。

「では、よろしいでしょうか？」

「ああ」

私はノートとペンを取り出してメモの準備をした。

聞くだけでは、なかなか頭に入らないから。

立ち上がった彼女は執務室に有る黒板を併用しながら説明を始める。

1) 今朝07:40頃、山陰海岸は由良沖の日本海に突然、深海棲艦の軽空母と航空機が出現した。

2) 敵は由良と境港にある2箇所の陸軍の砲台を電撃的にピンポイント攻撃した。

3) 遅れて上がってきた美保空軍基地の迎撃機もまた一瞬で、すべてが撃墜された。

4) 当、美保鎮守府も多少、敵の攻撃を受けた。

しかし山城さんを始め演習航海中であつたため艦娘への被害は、ほとんどなし。また残つていた艦娘たちも全員が避難していた。

そこまで聞いて私は改めて悟つた。

「なるほど避難さえスムーズに行えば有事の際に艦娘つていうのは便利なものだな」

何処の鎮守府でも艦娘の退避は早い。

ところが彼女は、あまり浮かない顔をしていた。

「そうですね」

少し気になったが私は敢えて何も言わず続きを促した。

5) ちょうど海上では演習から帰還中の山城さんが島根半島の先端にある美保関（みほのせき）に差し掛かったところだった。

だが美保空港付近までの距離は遠く、そこからの射程はギリギリだ。

6) 山城さん自身の疲労もあつたが緊急を要するため祥高さんが指令。美保関沖から美保空軍基地付近の敵機に対して遠距離砲撃を開始した。

「山城さんが海上に居たのが幸い……と言えるのか微妙ですが」

祥高さんは言い訳のように言葉を付け加えて続ける。

7) 空港近くにいた駆逐艦『寛代』からの観測通信を受けて弾着観測射撃を実施。数発、着弾がそれたが速やかに弓ヶ浜地区を襲つていた敵機を制圧した。

「なるほど。まさか海上から攻撃を受けるとは敵も想定外だったか」

「はい」

私の言葉に彼女は頷く。

8) 同時に美保関港に待機していた電や島風など駆逐艦と併せ、海上の軽空母も合流

して短時間で敵を挟み撃ちする形で制圧した。

「以上です」

「ふむ、なかなかの戦果だ。鎮守府としても最大限の威力を発揮して制圧出来たわけだ」
「有難う御座います」

そこで彼女は資料を閉じる。

私は言った。

「その電撃作戦のお陰で、こちらは命拾い……」

そこまで言って私は苦笑した。

(まあ場合によつては死にかけたのかも知れないが)

それでも敵の攻撃を押しさえ込んだのは確かだ。

多少、現地で私が攻撃に巻き込まれたとしても、それは仕方がないと思った。

以下魔除け

Reproduction is prohibited.

禁止私自轉載、加工 天安門事件

Prohibition no authorization.

第10話（改2. 5）〈美保の艦娘たち〉

「まずは艦娘の名前から覚えないとね」

マイ「艦これ」（みほちゃん）

：第10話（改2. 5）〈美保の艦娘たち〉

私は冗談半分と言った。

「見事な采配だな。いつそ、このまま君が指揮官を続けた方が良くないか？」

だが彼女は「いえ」と緩やかに否定した。

「私は秘書艦ですのぞ」

（この反応が人間臭いんだよな）

私は、そう思った。

艦娘は感情を持った武器だ。本人が情緒不安定になれば能力が下がる。

機嫌を損ねたら言うことを聞かない……あの舞鶴の彼女のような艦娘も少なくない。

「あの子……名前は何だっけ」

思わず私は呟きながらメモ帳を取り出した。半分、照れ隠しだ。

そんな私を見た祥高さんは軽く会釈をして自席に戻ると静かに書類の整理を始めた。

私はパラパラとメモ帳をめくったが舞鶴の頃の記録は残っていないかった。

「ふう」

諦めた私は手を休めて窓の外を見た。

キラキラと輝く美保湾。その向うに青白く浮かぶ大山。時折、訓練をする艦娘たちと

戦闘機が海上を横切る。

「艦娘……か」

感情があることで本来の性能以上の能力を發揮することも、まれにある。だから艦娘の扱いには通常の兵器以上の慎重さと感情的な配慮が不可欠だ。

そんな私も指揮官とは名ばかりだ。決して彼女たちの扱いに長けてはいない。特に舞鶴の一件があつてからは艦娘の機嫌を取りながら恐る恐る指揮を執つてきた。

その是非は分からない。だが今のところ艦娘たちには概ね好評なのだろうか。

(その結果としての美保への着任だと信じたいな)

もちろん私の手法が保守的な軍人仲間から陰口を叩かれていることも知っている。

そのとき私は頭を掻きむしった。つい舞鶴で艦娘を轟沈させた嫌な感情が甦つたの

だ。

驚いた祥高さんが視線を向けた。

「……止めよう」

私は眩きながら立ち上がった。

「思い出すのも嫌になる」

彼女は黙っていた。

（あの艦娘を沈めた感覚は当事者でないとは分かるまい）

艦娘と人間（指揮官）が一对一で個室に居ると沈黙に耐え切れず取り留めの無いことを喋りだす子も居る。

笑い話か漫才のようだが、いろいろ思い出す子も居るのだ。

かと思えば祥高さんのように黙々と作業をする艦娘もいる。

（艦娘も、いろいろだ）

私は窓枠に手を置いて窓を開いた。美保湾の潮風が緩やかに流れ込む。

訓練をする艦娘や戦闘機が良く見えた。

この美保鎮守府は決して満足とはいえない艦娘の規模だ。しかし代理の指揮官（祥高さん）でも十分な抑止力を持つようだ。

私はチラッと彼女を見た。つかず離れずといった絶妙な距離感。

そのとき、ひらめいた。

ひよつとしたら、この重巡『祥高』は、その能力の高さゆえに、こんな辺境の地に追いやられているのだろうか？

(軍隊という閉鎖した組織ではよくある話だが)

……同期の出世を妬んだり、イジメの仕返しで背後から撃つと言うウソみたいな話は、表にならないだけで意外に多くある。

(特に陸軍は酷いらしい)

まして相手が艦娘となれば、よけい煙たがる人間は少なくない。

(秘書艦のように自然に「間」が取れる艦娘は、かなり高スキルだと思うが)

時折、その秘書艦の視線を感じながら私は妙に長い「間」を持ったことを誤魔化すように彼女に言った。

「あの駆逐艦『寛代』は私を迎えに来ていたようだが」

「……はい」

私はイスに深く腰をかけると頭の後ろに手を廻した。

「米子駅では結局30分くらい待っても出会わなかったぞ」

それを聞いた祥高さんは困ったような顔をした。

「申し訳ありません提督。実はあの子、よく乗り過ごすのです。今日も安来(やすぎ)の

方まで行つてしまつて慌てて引き返してました」

「それで、たまたま同じ列車に乗り合わせたのか?」

私は笑つた。

「やれやれ……無線が付いていなかったら果たしてどこまで行つてたことやら」

呟きながら再びメモ帳を開くと早速、書き付けた。

『寛代』：通信特化。性格は、そそっかしい……と。

そんな私を見た祥高さんは言う。

「提督、何度も伺うのですが……お怪我の方は?」

私は軽く手を振つた。

「大丈夫だ。いきなり地上戦に巻き込まれたんだから仕方がないよ」

そして提案する。

「個人的に私のことは提督より『司令』が良いんだが。まあ強制はしないが」

「畏まりました。主な子たちには呼称の共有します」

ホツとした私はメモ帳を閉じた。どうも提督つてのは落ち着かない。まして、この美保鎮守府の規模では、なおさらだ。

そこで思い出して、付け加えた。

「しかし急だったから……手持ちのカバンくらいしか持ち出せなかつたよ」

壁際にある黒ずんだ鞆を見詰めて言った。

「着替えや他の書類は、さっきの空襲で、ほとんど焼けてしまった」

「え！」

いきなり彼女は叫んだ。今度は、こつちがびつくりした。

「それでは、すぐにお着替えと関連書類を手配します！」

「あ……そう」

いきなり素早い反応だな。

祥高さんが内線で連絡を取ってから直ぐに『鳳翔』（ほうしよう）さんという軽空母の艦娘が挨拶に来た。彼女は、とても落ち着いた雰囲気せうきの艦娘だった。

「まるで……お母さんだな」

思わず呟くと彼女は静かに微笑む。

「いえ、そんな……祥高さんより若いんですよ」

「え？」

そりや、またビツクリ。

……後から知ったのだが実は彼女、他の艦娘たちと、さほど年齢は変わらないらしい。

秘書艦は言う。

「急で申し訳ないのですが司令の着替を準備して下さい」

「承知しました」

(2人とも所作に滞(とどこお)りが無い。彼女も秘書艦に匹敵する感情の安定感がある)

今後は鳳翔さんが司令部の庶務全般を担当してくれるようだ。

着替えが来る間、私は上着を脱いだ軽装のまま祥高さんに案内され執務室の向かいの部屋に入った。

「ここが美保鎮守府の作戦司令室です」

「なるほど。移動も便利だな」

思わず本音。舞鶴も呉も広いから、こういうのは逆に新鮮だ。

「今朝の作戦も、ここから指示しました」

「フム」

見ればメモを張り付けた黒板や無線機が所狭しと置かれている。だが窓もあって日本海や大山が見え、眺めが良い。

黒板のメモを見ながら彼女は言った。

「簡単に所属艦娘の説明を、よろしいでしょうか」

「ああ」

秘書艦は書棚から写真付きのファイルを取り出して『戦艦』という頁を開いた。それを見た私は思わず反応する。

「あ、この艦娘は、さつき出会った山城だな」

今朝の戦闘で空港へ艦砲射撃をした娘だ。

祥高さんも言う。

「はい。彼女は火力が充実しているんですが性格にムラがあります。ちよつと被害妄想的で……」

私は苦笑した。祥高さんや鳳翔さんとは真逆の性格か。

また頁をめくっていくと『駆逐艦（特型）』という見出しの頁に見覚えのある艦娘。

「この子は寛代だな」

「は、い」

最初に出会った駆逐艦、寛代。

「小さいながら通信や索敵に特化しています。基本的に大人しい子ですが少々、慌てん坊です」

「そうか。これからも失敗が多そうだな」

その言葉に彼女も苦笑した。

さらに頁をめくる。

『重巡・その他』という見出しの頁に秘書艦担当として重巡『祥高』さんが載っていた。「君は見た目よりタフだな」

率直な感想を言うと彼女は苦笑いを浮かべる。

「恐縮です」

（彼女の性格か……）

私は考えた。

多少のことでは動じない。それは司令部付きとしては最適だろう。

ただ祥高という名前は何処かで聞いた覚えがある。鞆に入っていた虎の巻ともいえる海軍資料が焼けていなければ直ぐに分かったんだが。

さっきの舞鶴の艦娘に秘書艦と、どうも最近、艦娘の名前を良く忘れる。まるで浦島太郎だ。

とりあえず着任して分かったのは、この程度。美保鎮守府は駆逐艦が多数で、まだ主要な戦艦や空母がほとんどいない。

「なるほど『小さな鎮守府』というところか」

私は呟いた。

しかし朝の戦闘での迎撃力や破壊力を見ても、やはり艦娘の威力は尋常ではない。艦

娘の戦いぶりから陸軍や空軍が悔しがるのも無理もない。

また海軍内でも艦娘について敬遠している提督も少なくない。だが軍人は与えられた場所で任務を遂行するのみだ。

敵も待つてはくれない。早く、個々の状況を覚えて対応しなければ……。

「どうか、されましたか？」

祥高さんが聞く。

「いや、何でもない」

私は少し笑って応えた。

「まずは艦娘の名前から覚えないと」

「そうですね」

私の言葉に彼女も微笑んだ。

以下魔除け

Reproduction is prohibited.

禁止私自轉載、加工 天安門事件

Prohibition is not authorized.
da.

第11話（改2. 3）〈心配〉

（何事も当たって砕けろだ）

マイ「艦これ」（みほちゃん）

∴第11話（改2. 3）〈心配〉

「この指令室は24時間は動いていないんだな」

私の問い掛けに祥高さんは答えた。

「はい。美保は駆逐艦が主体ですから、まだ索敵や哨戒が主任務です。大規模な戦闘になれば、どうしても舞鶴や佐世保から支援出撃することが多いです」

彼女の言葉に私は腕を組んだ。

「なるほど。まだ鎮守府と言うよりは守備隊みたいなものか」

「はい」

そして彼女は苦笑した。

「それにもし電探に感あれば鎮守府の何処にいても走つて対応出来ますから」
「あ、そうか狭いから」

私も笑った。

二人で執務室に戻ると鳳翔さんが来た。

「司令、朝の戦闘で、お召し物が汚れて……お着替えも焼けたとか」

「ああ」

「作業着なら新品の替えが御座いますので、お持ちしましたが」

そう言いながらも申し訳無さそうな表情だ。

「司令官に、このような服を着て頂くのはちよつと……どうでしょう？」

彼女から作業着を受け取った私は早速立ち上がったそれを広げてみた。

「良いな」

サツパリしている。

「ありがとう。新しければ何でも有難いよ」

「かしこまりました」

鳳翔さんもホツとしたようだ。

「山陰地方の夏は高温多湿だからなあ」

私は眩くように言った。

「ただ、ここは浜だから海風が吹く。実は私も詰襟服は苦手だね。むしろ作業着のほうが気持ち良いな」

その言葉を受けるように鳳翔さんが確認した。

「あの……司令、お食事は、どちらでなさいますか？」

時計を見ると、もうお昼になっていた。

「もう、そんな時間か」

（朝から、いろんなことがあり過ぎだ）

私は聞いた。

「ここにも食堂、あるよね？ 隊員が食べる場所」

「御座いますけど……あの」

鳳翔さんは心配そうな顔をした。

「一般兵の施設ですが、よろしいですか？」

私は軽く応える。

「構わないよ。司令と言えども引きこもっている指揮もし辛い。それに皆（艦娘）の顔も見たいからな」

これは私の経験からも、そうしたいのだ。

「お言葉ですが……」

鳳翔さんは言い難そうだった。

すると祥高さんが説明するように続けた。

「艦娘だけの鎮守府ですから司令と艦娘が、お互い直ぐに馴染めるか心配なのだと思います」

「ふーん」

私は深く椅子に、もたれ掛かって後頭部に手を廻した。

艦娘の人格部分は普通の少女だ。男性の帝国軍人とは、あまり接点が無い。

（それに艦娘に直ぐ馴染むのは私の性格からも難しいだろう）

「でもなあ」

呟いた私は彼女たちを見た。

「今後、戦闘していく上で彼女たちと一蓮托生（いちれんたくしょう）になるんだ。綺麗ごとだけでは済まされないだろう？」

「……」

二人とも無言。

改めて気付いたが、この二人は口数が少なく大人しいところも似ていた。

私は表情を緩めて彼女たちに言った。

「敵も、今朝みたいに急に攻撃してくることもあるだろう？」

「はこ」

返事をしたのは祥高さん。

私は窓の外を振り返った。そこには蒼い美保湾が広がっている。

「食堂で食べるよ」

『……』

「問題があるなら前もって皆に伝えておいてくれ。最初から外したい子は、それでも構わない」

「はい。では仰る通りに致します」

鳳翔さんは、お辞儀をすると退室した。

(彼女の場合は敬礼でなくても、しつくりくるな)

そんな取り留めの無いことを思った。

しかしこの先、果たしてどうなるのか？ ちよつと不安だ。

だが、ここは私の地元。何事も当たって砕けるだ。

それに美保は新設の鎮守府だ。まだ小さいから、ほとんどの艦娘たちは他所(よそ)から赴任しているのだろう。

そんな彼女たちに対抗しうる唯一の利点が、私は地元出身だということ。

(ま……それだけ)

私は苦笑した。

「しかし、こんな形で故郷に戻るとは」

眩いた私に窓から入る海風が心地好い。

(やっぱり海は良い)

それは、この不安を一緒に拭い去ってくれるようだった。

以下魔除け

Reproduction is prohibited.

禁止私自轉載、加工 天安門事件

Prohibition of

第12話（改2. 7）〈傷んだ制服とつむじ風〉

「おーい、電報だよ！」

マイ「艦これ」（みほちゃん）

：第12話（改2. 7）〈傷んだ制服とつむじ風〉

「じゃ、ちよつと着替えるから失礼するよ」

「はい」

二人に伝えた私は作業服と自分の鞆を抱え、控え室へと続く扉を開けた。

室内には鍵の掛かる棚に作業机、衣紋（えもん）掛けもあった。

（まるで学校の準備室を思わせる風情だな）

何となく江田島にある兵学校を連想しながら私は窓を開けた。美保湾の潮風が入ってきた。

「ほう、ここからでも大山（だいせん）が良く見えるな」

思わず窓枠に手を当てて見つめる。

そういえば舞鶴や呉は山と海が入り組んでいる。鎮守府の立地として守備は容易（たやす）いが眺望は微妙なのだ。

だが美保は陸軍や空軍の滑走路があるくらいに日本海側には珍しく平坦地が広がり見晴らしも良い。

もちろん防衛と言う観点からは一考の余地は有るが。

（個人的な是非は問うまい。それに強いて言えば美保は島根半島がある）

私は北側の山並みを振り返る。あの半島のおかげで、この地は太古より外敵から守られたのだ。

たとえば、この鎮守府へ一斉に攻撃を仕掛ける為には美保湾へ回り込む必要がある。だが半島の頂、高尾山には空軍の電探基地もあって日本海へ睨みを利かせているのだ。私は改めて半島の反対側へ向き直る。美保湾は高い山の影を逆さまに映し込んでいた。

「あの大山（だいせん）を日本海から見れば艦娘たちにも良い目印だな」

この眺望の良さは鎮守府に有利かも。そんな想いも湧く。

「さて」

窓から離れた私は汚れた制服を脱いで衣紋掛けに吊した。

驚いたことに午前の戦闘で私の制服は思った以上にボロボロ。山城さんのように、あちこち穴が開いていた。

「良くかすり傷で済んだな……せっかく軍から下賜されたばかりなのに申し訳ない」

私は鳳翔さんが持つてきてくれた作業着に着替えた。やはり新しい服は気持ち良い。窓から入る海風の爽やかさが引き立つ。

こんな作業着を着るのも久しぶりだ。

(何十年振りかな?)

学生の頃は機関室の整備実習で作業することもあった。でも実際に配属されて艦船に乗る頃には艦橋周辺に居ることが多かった。

(作戦指揮をするより現場に居た方が気楽かもな)

着替えて執務室へ戻ると、まだ待機していた鳳翔さんが私を見て言った。

「司令、脱いだ制服は、まとめて出して頂ければ後で洗濯しておきます」

「気持ちには有り難いけどなあ」

そう言いながら私は制服の状態を思い出した。

「実は、もうボロボロでね……あれは処分して新しい制服を頼んだほうが良いんじゃないかな?」

「……」

私の言葉に鳳翔さんは、ちよつと苦笑して祥高さんを見た。

秘書艦は静かに口を開いた。

「そうですね。でも僅かとはいえ司令と戦場を共にした制服です。処分されるとも敬意を持って、お洗濯は、されたほうが宜しいかと存じます」

「あ、そうか」

思わず苦笑した。なぜか彼女の言葉は重い。

「では、宜しいですか？」

その言葉に私は頷いた。

祥高さんは鳳翔さんに目配せをする。彼女も「失礼します」と会釈をして控え室に入ると衣紋掛けから制服を外して丁寧に抱えて出てきた。

改めて見る制服は酷く汚れていた。彼女に抱えさせるのは申し訳ない気持ちになった。

「済まないね、汚くて」

だが鳳翔さんは微笑んだ。

「いえ、この制服も戦士です。艦娘たちと同じですから誇らしいですわ」

「……」

その言葉に顔が火照る思いだった。艦娘たちは意外に、しっかりしている。規模が小

さいからと甘く見てはいけない。

「では失礼します」

鳳翔さんは軽く礼をして退出した。

少し気恥ずかしくなった私は取り繕うように祥高さんに言った。

「新しい制服って軍からホイホイ支給されたかな？」

「ホイホイ？」

彼女は怪訝そうな顔をした。

「あ」

私は察した。

「すんなりと……って言う意味だよ」

「それなら、分かります」

変な言葉を使うものではない。

私はデスクの引き出しを確認しながら言った。

「あの制服だって今回辞令を受けて貰っただけだから、2着目があるのかどうかよく分からないけど」

「……」

聞いているのだろうけど彼女は自分のデスクで黙って書類の整理をしている。

私は頬杖をつきながら言った。

「軍の支給品って基本的には期間空けないと、くれないよな」

そのとき祥高さんは「そうですね」と言った。

「この戦時下ですから軍備品とはいえ配給になると思われます」

（ああ一応、私の話は聞いているんだな）

ホッとした。彼女には中央の役人の雰囲気がある。

「やれやれ、軍服ならともかく司令官の正装を着任早々、敵にグチャグチャにされたのも私くらいだろうなあ」

頭をかいた。

「でも」

彼女は、こちらを見て口を開く。

「やはり、それは誇らしいことです」

私はまた慌てた。この祥高は本当に単なる艦娘なのだろうか？

（発想が普通の艦娘とは違うんだよな）

やはり指揮官代理を務めると意識が違ってくるのだろうか？

そこで私は彼女に合わせるように言い直した。

「戦闘に巻き込まれたから仕方ないとはいえ詰め襟も面倒だ。しばらく作業服で執務す

るかな?」

すると彼女は微笑んで言った。

「まるで、どこかの独裁国家の指導者みたいですよ」

「それもそうだ」

私も笑った。少し場が和んだ。冗談も解するんだな、この艦娘は。

私は秘書艦『祥高』は普通の艦娘ではないと確信した。

だからこそ疑問が残る。

(こんな辺境になぜ、彼女のような優秀な艦娘が配置されているのか?)

違和感を覚える。やはり左遷? 艦娘なのに、まさか中央の権力闘争にでも巻き込ま

れたか?

そんな思いから、つい口から出た言葉。

「お偉いさんの考えることは分からん」

「はい?」

「いや、独り言だ」

私は苦笑する。どうも独り言が多い。

不思議そうな表情の彼女に私は言った。

「偉いと言え、こんな辺境には中央からの役人連中は滅多に来ないだろう?」

「そうですね」

普通に答える祥高さん。

ここは艦娘だけの実験部隊のような規模だが鎮守府を名乗っている。

「こんな小さな鎮守府は初めてだよ」

すると、その言葉に呼応して彼女も口を開いた。

「それについては以前から海軍内部でも異論があると聞いています」

「ああ、君も知っていたか」

提督代理を勤めれば、そういう噂も耳に入るのだろう。

軍部でも未だに艦娘を理解しない連中を中心に『美保無用論』を唱える者が多い。だから、こんなところに着任命令が出たら普通の人間なら左遷か懲罰人事だと勘違いするだろう。

（私には舞鶴の一件もある）

だから、やはり艦娘に特化した意図を含んだ命令だと思う。

そんなやり取りの合間に時おり祥高さんは内線電話を受ける。その際、頻繁に『大淀』とか『夕張』という艦娘の名前が出た。

会話の断片から察すると、着任した私の為に美保鎮守府に関する資料を集めてくれているようだ。

電話が落ち着くと彼女は言った。

「司令、申し訳ありません。美保について資料を集めているのですが担当艦が非番で少々手間取っています」

私は穏やかに返した。

「いや、別に良いよ。そんなに慌てなくても最初は口頭でも」

「はい」

改めて祥高さん、仕事が速く生真面目だ。艦娘も、いろいろだが彼女は司令部に最適だろう。

ただ今は正直、報告書よりもフロに入りたい。戦闘で全身ホコリまみれだ。

とはいえ、まだ真つ昼間だ。艦娘たちの手前、入浴は気が引ける。それにこの鎮守府、艦娘だらけで男性用の浴室があるのか？

(もし無いのなら早々に市内の何処か銭湯にでも行きたいな)

いろいろ考え、とりあえず顔だけでも洗うことにする。

(控え室には小さな洗面台があったはず)

「ちよつと失礼」

相変わらずデスクにかじり付くようにして内線をかけている祥高さんに軽く声をかけた私は席を立った。

執務室隣の控え室は、最近あまり使われてないようだ。何となく掃除したくなる。それでも洗面台のタオルを見た私はホツとした。小さな石鹸と、かみそりまで準備してあった。

(これは助かる。やっぱり、あの鳳翔さんが準備したのだろうか)

私は早速、手や腕を洗って洗顔をした。タオルで顔を拭くと真つ黒になった。

「ほあ」

そう言いながら鏡を見る。サツパリした自分の顔があつた。

執務室に戻ると書類に目を通していた祥高さんが顔を上げた。

開いた窓からは、海風が通り抜けた。

「食堂へ行かれますか?」

「そうだね」

書類を机に置いた彼女が立ち上がろうとしたとき、いきなり執務室の扉が大きく開いた。

「おーい、電報だよー!」

ウサギのような髪飾りをつけた艦娘が勢いよく飛び込んできた。私は啞然とした。

(これも艦娘なのか?)

やたら露出している服だ。これまで、いろんな艦娘を見てきたが、こんな子は初めてだ。目のやり場に困った。

祥高さんが何か言いかけるとウサギ少女は私に気づいて「あつ」と言った。

「あなたが新しい提督ね、よろしくう」

ウサギ少女は少しオーバーではあるが平然とした表情のまま、こちらに向かって敬礼をした。

改めて気付いたが彼女の足元には子犬のようなような連装砲がチヨロチヨロと3基ほど走り回っていた。

「そうそう、これこれ」

そして私や祥高さんに向かって「ホイ」と言つて電報を投げ渡した。

「じゃあね。もう、おっ昼だよお」

彼女は90度ターンをすると執務室の扉から、つむじ風のように廊下へと走り去つて行つた。

「……」

私たちは呆気(あつけ)に取られていた。美保湾の海風どころの比ではない。まるで竜巻だ。

祥高さんは電報を確認しながら詫びた。

「失礼しました司令官。悪気は無いんですが、あの子が海軍で一番足の速い駆逐艦『島風』です」

それは聞いたことがある。

「まるで競争の選手だな」

私は笑った。こんな小さな鎮守府でも、いろんな艦娘が居るようだ。

「美保鎮守府か」

不安もあつたけど艦娘たちを見ているうちに少し楽しみに思う気持ちも出てきた。

「住めば都かな」

以下魔除け

Reproduction is prohibited.

禁止私自轉載、加工 天安門事件

Prohibition is not authorized

da.

第13話（改2. 7）〈食堂で挨拶〉

「……あれは悪い子じゃないよな」

マイ「艦これ」「みほちゃん」

∴第13話（改2. 7）〈食堂で挨拶〉

「島風か」

私は繰り返し確認する。

海軍の艦娘関係者で、その名を知らない者は居ない。とにかく脚が速いことが、いつも強調される。

だが「気が強い」とか「自信過剰」など芳しくない噂も少なくない。

そんな彼女は同じ艦娘の中でも敢えて他と交わろうとしない。いわゆる独立独歩だ。だから他の艦娘からの評判もふるわない。実際、艦娘に理解を示す海軍士官の中でも彼女だけは苦手だと敬遠する者も多い。

祥高さんは言った。

「驚かれましたか？」

「そうだね。本物は初めてだよ」

正直、私自身『有名』な艦娘の出現に戸惑っていた。

だが直感的に、彼女とは上手くやっていけるのではないか？ という感触もあった。

私は秘書艦に言った。

「島風の激しさは、それだけ素直な性格、つまり裏表がないのだろうか？」

「……」

祥高さんは無言だった。

私は続けた。

「もし本当に彼女に嫌われたのなら電報だけ置いて行っただろう」

島風の台詞が頭の中に響いた。

『あなたが新しい提督ね、よろしくう』

そして呟くように反芻した。

「……悪い子じゃないよな」

そのとき祥高さんも微笑んだ。

「はい」

秘書艦も私の気持ちは察してくれたようだ。

そこで私は改めて聞く。

「電報の内容は？」

「はい」

届いた文面は2通あった。

一つは海軍省から。彼女は読み上げる。

「こたび貴殿が受けた敵の攻撃内容について詳しく聞きたい。従い今週半ば海軍省軍令部の情報将校を赴かせる。なお呉と神戸鎮守府の作戦参謀も同行予定」

「さすが本省、情報が早いな」

「はい」

彼女も頷く。

「私が第一報を入れました」

「なるほど」

「仕事が早い。」

「着任早々、本省に他の鎮守府の参謀まで来るとは面倒だな」

「……」

彼女の反応は無かった。

「もう一通は？」

「これは神戸から司令への親展です」

「ああ」

少し驚いた私は彼女から電報を受け取ると直ぐに開いた。

それは神戸鎮守府にいる海軍兵学校時代の同期からだった。彼は私より先に提督になり既に戦果をガンガン上げている。

電報の内容は簡単だった。

『今度うちの鎮守府から部下が行くから宜しく頼む』

……そうか。今週、視察に来る神戸の人間は彼の部下なのか。

「相変わらずアツサリ・スツキリな奴だな」

私は呟いた。まあ、そこが良いんだが。

「あれ？」

電報を閉じようとして追伸に気付いた。

『君も着任早々大変だろう。困ったことがあれば、いつでも言ってくれ』

同期の桜とは、よく言ったものだ。有り難い。

(早速、返事を書こう)

私は秘書艦に初仕事を頼む。

「祥高さん、神戸に電報を」

彼女は「はい」と応えながらメモの準備をした。

「どうぞで」

「……」

私は少し考えてから口頭で伝える。

「着任早々、敵に遭遇し制服が痛んだ。予備有らば頼む」

……と。

復唱した彼女に私は頷いた。

「後で出しておいてくれ」

「了解しました」

支給された制服を初日でボロボロにした。こちらに落ち度は無かったとしても体裁が悪い。まして、この戦時下では制服も貴重品。ダメもとだ。

（これで制服が調達できれば嬉しいが）

それでも私は少しホッとした。

ラッパの音とともに鎮守府内が、ざわつき始めた。

「もう昼か」

「はい」

窓から見ると、どこからともなく女学生の如き艦娘たちがゾロゾロ出てきた。そしてドアをノックして鳳翔さんが昼食の準備ができた旨、知らせてくれた。私は立ち上がった。その姿を見た祥高さんが言う。

「参りましょうか」

「ああ」

私たちは執務室を出た。

少し前を行く鳳翔さんを先頭に廊下を進む。

廊下や階段には、いままで何処に潜んでいたんだと思わせるくらい、たくさんの艦娘が居た。さほど長くない廊下や階段なのに軒並み艦娘たちと擦れ違う。その都度、会釈や敬礼を受け私は手を上げ返していく。

無数の視線を感じる。ムリも無い。新しい『司令官』が作業服を着たまま食堂に向かっているのだから。

ひよつとして司令官というより『何者か?』と疑われているかも。

(もし祥高さんたちが居なかつたら艦娘たちから袋叩きだな)

私は苦笑した。

歩きながら秘書艦が聞いてきた。

「司令、挨拶はされますか?」

「ああ食堂でね……堅苦しいのは好きじゃないが。簡単に一言くらい喋るか」

「了解です」

食堂に入ると、やはり最初ちよつと緊張が走った。艦娘たちは次々に起立する。

そのとき……

「あれ？」

思わず声が出た。

私たちが食堂に入ると同時に逃げるように出ていった黒髪の艦娘が居たのだ。

気になったが今は、それどころじゃない。艦娘たちと初顔合わせ。指揮官の「初陣」だ。

食堂を進んでいくと何人かの艦娘が食事を中断して敬礼をした。私は手を上げ軽く制する。

祥高さんが食堂の中央付近で立ち止まり、周りを見回してから言った。

「各自そのままで結構です。新しく着任された司令官より皆さんに一言、ご挨拶です」

鳳翔さんに促され私は食堂の窓際にある演台つばい雛壇に上がる。島風が私を指差して言った。

「あ、新しい提督だ」

私は軽く、その場にいる艦娘たちを見渡してから挨拶を始める。

「えーっと。ここ美保鎮守府に新しく指揮官として着任しました。みほ……名前は、この鎮守府と同じ『美保』です」

各所から「ホウ」という反応。少し緊張する。私は続けた。

「海から攻めてくる敵からこの国土、故郷を守るため皆さんと一緒に粉骨砕身、最善を尽くす所存です」

「硬あ」

……という声。島風だ。それと共にクスクス笑いがチラホラ。

私は無視して続けた。

「堅苦しいことは苦手だ。各自、自分の持ち場で最善を尽くして欲しい……以上」

パチパチと若干、気の抜けた拍手が、わき上がった。

今までで経験したから分かる。艦娘たちの反応は、この程度だ。

（相変わらずだな）

それに艦娘だけの鎮守府となると更に普通の鎮守府とは雰囲気が違う。

（まあ『郷に入っては郷に従え』だ）

私は腹を決めた。

それにしても飛び出していった黒髪の艦娘が気になる。

（誰だっけ？）

以下魔除け
Reproduction is prohibited.
禁止私自轉載、加工 天安門事件
Prohibition on unauthorized

第14話（改2・6）〈司令の思い出と艦娘たち〉

「ねえブラックって何い？」

マイ「艦これ」「みほちゃん」

：第14話（改2・6）〈司令の思い出と艦娘たち〉

私の挨拶は終わった。

ひな壇を降りると続けて祥高さんが指示を出す。

「司令の挨拶は以上です。各自、解散して下さい」

号令に合わせ食堂の艦娘たちは敬礼し食堂は再び賑わいを取り戻す。

（やれやれ）

大したこと話さないが肩の荷は下りた。

「司令、こちらへどうぞ」

祥高さんに声を掛けられた。

「あ」

私はハツとしたように振り返る。窓際に白い布に覆われたテーブルが準備されていた。

そんな些細な待遇を通して『鎮守府指揮官』の位置を改めて自覚する。

私たちが座ると直ぐに鳳翔さんが来て軽く頭を下げた。

「お疲れ様でした。今直ぐに、お食事を、お持ちしますね」

いそいそと厨房へ戻っていく彼女。

すると秘書艦も立ち上がる。

「私も手伝って参ります」

「そうか」

制帽を取りながら私は答えた。軽く敬礼をした祥高さんは厨房へ向かう。

「彼女もよく働くなあ」

思わず呟く。決して下っ端ではないのに、そこまでテキパキ働く艦娘も珍しい。

鳳翔さんも忙しそうに動き回っているが基本的な所作に無駄が無い。

(さすが軽空母)

もちろん艦娘も千差万別だが。

彼女を補佐するように駆逐艦娘たちも手伝っている。ちよこまかした動きが可愛ら

しい。そこに祥高さんも合流する。こういった作業は慣れているのだろう。鳳翔さんたちと違和感無く連携している。

改めて見渡すと、この食堂は長机が順序良く並んでいた。そこに女学生のような艦娘たちが並んで食事をしている。

誰が見ても学食（がくしょく）だ。つい、ここは軍隊だという事実を忘れてしまいうになる。

（だが今は戦時下だ）

私は自分を現実に引き戻した。

事実、軍服のような服装の子もいるし一部の艦装を装着したまま食事をしている子達もいる。

この子たちは艦娘という名の兵士だ。今日、隣に座っている友が明日には戻らないかも知れない。

そんな独特の緊張感が全体に薄つすらと漂っていた。

彼女たちを前にして指揮官である私が良心の呵責を感じないと言えばウソになる。

（だがこの体制下で私が足掻（あが）いて何か変えられるだろうか？）

腕を組んだ私は過去を思い出す。

そういえば軍隊生活の中で『私は軍人向きの性格ではないな』と何度も思ったものだ。

その時、

「ねえ、司令さん？」

いきなり声を掛けられた。

「あ？」

顔を上げるとウサギ……じゃない。

「えっと、島風か」

絞り出すように応えた。

何度見ても印象的な衣装だ。制服と言うには余りにも違和感がある。

辛うじてセーラー服っぽいデザインに肩や腰周りが過度に露出している。

そして大きなウサギ耳と青地に黄金色のラインとボタン。それは彼女自身の特殊性をいやが上にも印象付けていた。

(正直この出で立ちは正視できない)

私は顔が火照ったような感覚で、つい目を反らした。

そんな私の思いを見透かしたように彼女はワザと私の視界に自分の顔が入るように移動して悪戯っぽく笑った。

「うふっ、覚えていたんだ」

その黄色く半分、鼻にかかった長い前髪と、その間から透き通るような瞳がこちらを

見詰めている。

「まあね」

私の返事に頷いた島風は臆すること無く私の向かいに座った。

「ねえ、何？ ボーツとしているの」

「昔のことを思い出していたのさ」

「へえ、どんな？」

興味津々。彼女は腕に連装砲を抱っこしている。まるで愛玩動物だ。

「えつと兵学校に入って……」

さて正直に話して良いものか躊躇（ちゆうちよ）した。連装砲まで、こちらを見上げている。

その瞳を見ると急に、この子たちには何を語っても大丈夫な気がした。

（その理由は後に悟ることになる）

「私は軍隊に嫌気が差して途中で兵学校を退学しようと思った事があるんだ」

「へえ」

首を傾げる島風。まだ人形のような硬い表情だった。

彼女は連装砲を撫でながら言う。

「そこではサア。皆が、そう思うの？」

「いや、そんなこと考えてる奴は少ない」

なかなか鋭い。島風は肘をつけて口に手を当てていた。私は続ける。

「まあ、仮に居たとしても大っぴらに公言できるもんじゃない」

思わず砕けた口調になってしまった。

「ふうん」

彼女も少し興味が出たのか、さつきまでとは表情が変わった。それを見てホツとした。

私は自分を正当化するように言った。

「でも二年とか三年生とかナ、進級すりゃ幾らか落第したり、中には脱走して強制退学する者も出るんだ」

「それ興味ありますね!」

(うわっ、ビックリした)

ゆっくり振り返ると青い髪の艦娘が立っていた。

「あのお私、重巡の青葉と申しますう。お席、宜しいでしょうか?」

(やや長身で島風よりも骨太な印象だ)

私は応えた。

「ああ、構わんよ」

「はい、では」

そう言いながらメモ片手に島風の横に座った。

第一印象通り青葉は大柄だった。それもまた重巡たる所以（ゆえん）だろう。フワツとした髪の毛を後ろで結わえている。それは彼女の快活さを象徴しているようだ。

「どうぞ、続きを」

私の前に二人の艦娘たち。突然、形勢が逆転したような印象を受けた。

私は渋る。

「何だか話し難くなったな」

「あ、そうですよね」

と、彼女は意外にもメモ帳を閉じて微笑んだ。

「急に核心的なことは話し辛いでしょうから。もちろんオフレコにします」

そう言いながら青葉は島風を見た。

「うん、島風も聞きたいな！」

一緒に連装砲も領いていた。

私は頭に手をやった。

「やれやれ。えっと、学校の話か」

何だろうな、この状況は。

「まあ教官たちも、そんな停滞した学校の雰囲気は薄々感じていたようだ。だから高学年になると長い休暇が取り易くなった」

『へえ』

二人の艦娘は同時に反応する。

私は窓の外を見た。

「悶々としながら私は、ある夏休みに、ここ故郷の境港に帰ったんだ」

「故郷？」

新しい事実には手帳を開きかけた青葉さんはグッと堪えていた。

それを尻目に私は続けた。

「突然、帰省した私に驚いた両親だったけど。ま、何となく私の葛藤は悟ったようだ」

「葛藤？」

島風は確認するように相づちを入れた。

「い」両親

これは青葉さんの復唱。自分の頭に新しい事実を刻んでいるのだろう。

私は改めて二人を正面から見直した。どちらも真剣な表情だな。

（意外に話し易くなってきたか）

そう思いながら続けた。

「両親は何も言わなかった。結局、私は一週間ほど地元でブラブラしていたかな？」
「ここで、ですか？」

青葉さんが聞く。

「ああ。だが全てが停滞するこの時代だ。地元に戻っても何もなし。解決にならないから結局、時間を浪費して終わりだ」

『……』

二人とも互いに目を見合わせて肩をすくめた。何か期待していたのか？

私は再び美保湾を見る。

「両親に何も聞かれなかったことは正直、有難かったな」

ちよつと間が空く。人間の昔話なんて艦娘たちに理解できるのか？

「自分の悩みは自分で解決するしかない。そう考えた私は再び兵学校へ戻ったよ」

「なあんだ。じゃあ良かったじゃん？」

島風は相づちを入れた。

「まあな」

「それから？」

興味津々といった表情の青葉さん。

頷きながら私は続けた。

「気分一新、戻った学校では山口出身の友人が出来た。彼の名は『H』としておこうか。割りとハンサムで一見プレイボーイっぽかった」

「プレイ？」

不思議そうな島風。彼女の『辞書』には無い単語か？

「カツコイイ感じかな」

青葉さんが説明する。

ウンウンと頷く島風。

私は続ける。

「接してみると意外に真面目な奴だった。真逆の組合せだったと思うが彼とは、それか

らも何かと行動を共にしたナ」

「それって姉妹艦みたいなの？」

「まあ、そうだな」

妙に的確な表現をした島風。

メモを書きたくてウズウズしている青葉さんも言う。

「なるほど、軍隊もいろいろですよねえ」

「ああ。だが実はもう一人、同じようなことを考えていた奴がいたんだ。彼は『H2』と呼んでおこう」

『H2』?」

この記号めいた単語に再び手帳を取り出しかけた青葉さん。グツと堪える姿が微笑ましい。

「口数が少ない大人しいタイプだよ。彼とは喧嘩するほどでもなかったが微妙にウマが合わなかった。今、思えば私と似ていたのかもな」

「居る居る、そういうカタチ!」

島風は何度も頷いている。

「カタチ」とは聞き慣れないが彼女には思い当たる節でも、あるのか?

「で?」

二本指で唇を挟むような格好をしながら青葉さんが促して来る。

「それはあ、反りが合わなかったのでしょうか?」

「彼は」

私は記憶を手繰った。

「計算づくで動く感じってのかな。例えば艦娘は単なる兵器と割りきるような奴だ」

『……』

二人とも急に黙る。場が少し暗くなったようだ。私は少し焦った。

「もちろん、そうじゃない者もいる……私も違うから安心しろ」

この言葉に安堵した二人。

私は続ける。

「指揮官も千差万別だ。良心の欠片(かけら)もない奴だつて居る。そんな連中が、いわゆる『ブラック鎮守府』を生むんだ」

「しつともーん！」

長いウサギの耳を揺らしながら島風が手を上げる。

「ねえブラックつて何？」

「これも『辞書』には無い単語か？」

気のせいか、周りの艦娘たちも聞耳(ききみみ)を立ててるようだ。

すると知恵袋みたいに青葉さんが応えた。

「それは、この世の地獄みたいな所つてどこかな」

呟くように言いながら寂しそうな表情をする。私は『おやつ』と思った。

(彼女も過去に何かあったのだろうか?)

ちよつと返す言葉に詰まった。

「ま、軍隊の指揮官なんて精神破綻する者も居る。私だつて危ないかもな」

訳の分からない誤魔化しになった。

彼女たちと、そんなやり取りをしていたら祥高さんが戻ってきた。彼女は『失礼しま

した』と言いつつ青葉さんの向かい側に着席した。

「司令は、こちらの地方ご出身と伺いましたが」

祥高さんはテーブルに増えた二人の艦娘をチラ見しながらメモ帳を取り出して確認する。

「そうだね」

これは私。

「……」

青葉さんは黙ってモゴモゴと反復するような表情をしている。

祥高さんはチラチラと島風や青葉さんの顔を見ながら言った。

「では、この辺りの地理や気候風土、町の様子など、ある程度は、ご存知なのでしうか？」

「最近の様子は分からないが気候風土は経験的に分かっているつもりだ」

私は、ちよつと姿勢を崩して続けた。

「着任前に軍から受けた鎮守府の資料は着任までにザツと目は通したけどね。今朝の砲撃のゴタゴタで全部、灰になったよ」

すると祥高さんは軽く頷いた。

「もう少し、お待ち頂ければ鎮守府の概要をまとめた資料をお渡し出来ます。当地の主

要拠点は午後にも実際に、ご案内致しましょう」

手際が良い。だてに提督代行を経験したわけではないな。

「頼む」

私は頷きながら返した。

「お待たせ……しました」

ちょうど鳳翔さんが駆逐艦娘と一緒に昼食を持ってきた。

彼女は私たちの席に二人も艦娘が増えているのを見て驚いていた。

「あらあ？ 貴女たちの食事までは……」

すると島風と青葉さんが反応する。

「別にいい」

「お構い無く」

鳳翔さんは微笑んだ。

「うふふ、別に良いわよ。お茶くらいなら持ってきて上げてあげるわ」

「サンキュ！」

明るい島風。軽く会釈をして鳳翔さんは厨房へ戻る。

私は祥高さんを見ながら手を合わせた。

「では、頂くとしようか」

「はい」

彼女も私と同じように手を合わせていた。少し意外な印象だ。やっぱり秘書艦は艦娘より人間に近い感じがした。

「……」

すると駆逐艦の寛代が静かに近寄って二人の、お茶を置いてくれた。

「ありがとう」

「……」

（無愛想な娘だと思っていたけど意外に気が利くんだな）

でもこの子は、そのままちやっかりと私の隣に座ってしまった。結局、五人掛けになつた。

「寛代ちゃん……」

直ぐに祥高さんが注意しようとしていた。

「良いよ、一緒に食べよう」

私は笑って制した。

「はっ？」

祥高さんは私の反応に少し驚いた様子だ。

私は続けた。

「皆で食べるのが楽しいだろう？」

「……」

寛代も静かに笑っていた。

もちろん島風と青葉さんも微笑んだ。

「そうそう、それが一番！」

「……ですよ」

その反応に祥高さんもヤレヤレといった表情になった。

「仕方ありませんね」

実際、駆逐艦クラスならば、あまり気に障ることもない。

どさくさに紛れてメモ帳を取り出した青葉さんは重巡だけど。

私は改めて食堂の大きな窓から見える昼の美保湾を眺めた。

「この穏やかな海が、ずっと続いて欲しいものだな」

水面（みなも）は陽の光を反射してキラキラと輝いていた。

以下魔除け

Reproduction is prohibited.

禁止私自轉載、加工 天安門事件

d
a. P
r
o
h
i
b
i
d
a
l
a
r
e
p
r
o
d
u
c
c
i
o
n
n
o
a
u
t
o
r
i
z
a

第15話（改2．6）〈艦娘の強さ〉

「私たち艦娘の最大の武器になると思います」

マイ「艦これ」「みほちゃん」

：第15話（改2．6）〈艦娘の強さ〉

「しししし、司令官！」

あたふたと小柄な艦娘が来た。駆逐艦かな。

黒髪の少女が敬礼しながら声をかけてきた。

「ふ、吹雪であります！ よろしく、お願いします！」

私は彼女の姿を見てオヤツと思った。

「あれ？ 君は、どこかで……」

私は記憶を手繰った。

「あ、海軍の公報によく出ていたよな？」

「は、はい！ 恥ずかしながら」

彼女は敬礼したまま硬くなった。少し頬が紅潮している。

私は軽く右手を差し出した。

「そんなに緊張しなくて良いよ、ヨロシク」

硬直した吹雪は直ぐにニツコリ笑った。

「あ、シエイクハンドですね？」

驚いた。いきなり横文字か。

「そう。握手だ」

（真面目で大人しそうな娘だけど。洒落たことを言うな）

透き通るような声で彼女も右手を差し出した。

何気なく握手しようとした私は、ひよっとしたら何万馬力で挟まれるのだろうか？

と一瞬、冷や汗が出た。実は艦娘と握手するのは初めてだった。

だが次の瞬間、私たちは普通に握手をしていた。何の変哲もない握手。そして吹雪の

手は暖かい。彼女も少し、はにかんだように頬を赤らめた。

「済みません。指揮官の方と握手するのは初めてなんです」

「ああ、私もだ」

そこで彼女は真っ赤になってしまった。

「ヒュー、ヒュー」

（誰だ？）

私は振り返って苦笑した。

「島風、茶化すな」

一瞬、怒られるかと思ったのだろう。ウサギ耳の彼女は少し首を縮めていた。一瞬、周辺に緊張が走る。

だが私は別に気にせず黙っていた。それで安堵したのか連装砲を抱っこした彼女は舌を出して笑った。

「えへへ」

そんなやり取りで青葉さんと秘書艦もホツとしたようだ。場には再び穏やかな空気が戻った。

私は、ふと思った。

（艦娘にも喜怒哀楽がある）

当たり前のようで不思議な感覚だ。

実際、あるブラック鎮守府では詰められた艦娘たちが反乱を起こしたこともある。

当時は鎮圧や報道管制が大変だった。以後、艦娘に対する扱いには細かい規制が加え

られたとも聞く。

(とはいえ艦娘に緩い私には、あまり影響ない命令だったが)

「では、失礼します!」

吹雪は私に向かって軽く、お辞儀をした。私も軽く敬礼を返した。

「頑張れ」

「はい!」

次の瞬間、彼女は右手と右足を同時に出して歩き始めていた。

「器用だな」

思わず苦笑した。

祥高さんも同じ印象を抱いたようだ。テーブルに戻ると彼女は言った。

「あの娘は特型駆逐艦ということもあって一時期、外部の新聞からも取材されて一躍、時の人になったんですよ」

「なるほど」

その時、横の方から声がした。

「あのお、取材の続き、宜しいですか?」

「あ」

振り返ると青葉さんだ。そういえば彼女の声も独特な張りがある。記者には良いか

もな。

メモ帳を片手に青葉さんは、やや上目使いに質問する。

「えつとお、新しい鎮守府に着任された第一印象は、如何（いかが）ですか？」

「そうだね。悪く無いよ」

半分お世辞だ。

サラサラとメモを取りながら彼女は続けた。

「えつと、既に敵と遭遇されたそうで。何か感じられたことはありますか？」

「うーん」

情報が早いなと思いつつ私は、ちよつと考えた。

「いまだに正体がハッキリしない敵の強さ、かな」

「なるほどお」

彼女はメモを取り続ける。

一呼吸おいて私は付け加えた。

「しかし、そんな敵にも対抗する我が海軍の素晴らしさ。特に艦娘の火力には頼もしきを感じたね」

「ほうほう」

感心しながらメモする青葉さん。

「ふむふむ」

暫し、ペンを顎（あご）に当てながら海を見詰め、考える彼女。やがてメモを閉じた。「はい、貴重なご意見、どうも有り難うございました」

微笑んだ彼女の瞳は海の光を反射して澄んで見えた。

私はドキツとした。間近で見る彼女の笑顔は普通の少女そのものだった。

大抵の記者、人のことを聞き出す輩は目が曇っている。だが彼女は違う。

（不思議な感じだな）

そして青葉さんは立ち上がった。

「では失礼します。今後とも宜しくお願いします」

一礼した彼女は私たちの前から立ち去っていった。

それを見ながら秘書艦は言った。

「あの娘は情報通で、この鎮守府の広報担当もやっています」

「なるほど」

（美保は百人規模ながら個性派揃いだな）

思うに鎮守府とは一つの个性的な町だ。それが地方の、いち組織であれ存在意義は国防に留まらない。

軍隊には情報や物流、基本業務を自己完結出来る多芸さがある。美保も例外ではない

訳だ。

私の思いを察したように祥高さんは補足した。

「艦娘は器用な娘、そうでない子、様々です。でも誰でも皆、素敵な個性を持っていますから」

長い『耳』を揺らす島風を見ながら彼女は続けた。

「そういう個性こそ私たちが艦娘の最大の武器になると思います」

「そうだね」

私はコーヒーをすすった。

「画一ではない」

率直な印象を口にした。

目の前の駆逐艦。ウサギ耳の島風に、無口な寛代。対照的だ。そんな個性的集団を束ねるのは大変だろうか。

すると急に秘書艦は真面目な顔をして言った。

「不足ながら私も司令着任までは代理で指揮を執っております。この鎮守府のため私も精一杯、お支え致す所存です」

不意討ちのような固い挨拶。

「分かった」

少し焦った。そこで、ちよつと構えつつ聞いてみた。

「毎回、君は指揮官着任後に、それを言うのか？」

すると祥高さんは微笑んだ。

「済みません。私、よく『押しが強い』って言われるもので……これも鎮守府と艦娘のためだと、ご理解下さい」

その表情は青葉さんとは、また違った雰囲気だった。

私も姿勢を崩して苦笑する。

「それは分かる。司令部付きの艦娘たちは、大抵そんな感じだ」

「へえ？」

いきなり島風が反応する。

私は肩をすくめた。

「むしろ艦娘で、ここまで責任感を持って執務する方が珍しいだろう」

「恐縮です」

祥高さんは、またニッコリ笑う。その笑顔に私はホツとした。

「うんうん」

島風も大きな耳飾りを揺らしながら頷いている。

「秘書艦は固いから」

その一言で場が和んだ。

「やれやれ」

眩いた私はイスに座り直した。

「これじゃ普通の鎮守府の方が気楽だな」

ただ私は食堂に入る前に出て行った黒髪の艦娘が気になっている。

（あの艦娘も、どこかで見た記憶がボンヤリとある）

誰だっけ……ダメだ、思い出せない。

私は、ため息をついた。

前任地から持って来た資料も焼失した。もはや手がかりは無い。

だが、いざとなれば指令室にある艦娘の顔写真を調べたら分かるだろう。そう思い直した。

ただ今は、ちよつと気力がない。大勢の艦娘を前にして既に混乱気味だ。

「ナンだか難しい顔？」

島風が覗き込んできた。その屈託の無さは私の悩みなんか、お構いなしだ。

「新しく覚えることが一杯だよ」

「ふうん」

「まあ徐々にだな」

私は頭に手をやった。

「そうですね」

祥高さんも微笑んだ。

「……」

寛代は黙って私を無表情で見つめていた。

以下魔除け

Reproduction is prohibited.

禁止私自轉載、加工 天安門事件

Prohibida la reproducción no autorizada.

第16話（改2. 7）〈巡回（鎮守府内）〉

（君は本当に単なる艦娘なのか？）

マイ「艦これ」「みほちゃん」

：第16話（改2. 7）〈巡回（鎮守府内）〉

祥高さんは用箋（ようせん）ばさみを手に報告する。

「司令を昼食後に基地内ご案内、次いで鎮守府近郊を視察する予定です」

「忙しいねえ」

島風が口を挟む。

その口調に祥高さんも苦笑する。

寛代は相変わらず無表情だった。とはいえ彼女の場合、常に無線を傍受しているようにも見えるが。

私は秘書艦に応える。

「すぐに省の役人が来るから、ちようど良い機会だな」

「そうなの？」

また島風。

私は説明する。

「もうすぐ、上のお役人や他の鎮守府から人が来るんだ。案内する私が基地を知らなければ恥ずかしいだろう？」

「そうね」

連装砲を抱っこした彼女は言った。

「でも、ここ狭いから。きつと、あつと言う間だよ」

(あつという間か)

その口調に島風らしきが感じられた。

私たちは席を立った。

執務室へ戻った私は、隣の控え室で軽く身支度を整えた。

「……まあ、こうなるよな」

改めて壁の鏡で自分を見た私は思わずぼやく。

「司令が作業服で巡回とは、なんとも間抜けな印象だ」

だが制服が無い。

「この期に及んでセーラー服を着たら単なる変態だ」

司令が『女装好きオジサン』と勘違いされても困る。

ちよつと意気消沈した私は執務室に戻る。自席に居た祥高さんが顔を上げた。

「そろそろ参りませうか？」

「ああ」

彼女は私の作業服姿を見ても表情ひとつ変えなかった。幸か不幸か秘書艦は司令の服装や表面的なことは、あまり拘(こだわ)らないらしい。

しかし立ち上がった彼女は私を見て、こう言った。

「司令。作業帽は、ごさいませんでしたか？」

「えっと、確かあったが」

実は帽子があることは知っていた。基本的に私も服装には頓着しない性質(たち)だが、さすがに帽子は被る気がしなかったのだ。

それを察したのか彼女は、ちらりと外を見て言った。

「山陰の夏は日差しが強いです。お出掛けの際は帽子を被られた方が宜しいかと」

「ああ、そうか」

なるほど心配してくれたのか。秘書艦に念を押されたら仕方がない。私は控え室に戻ると作業帽を被った。

(これで完全に作業員だ)

私は腹を括(くく)った。

「待たせたね」

戻った私を見ても彼女は表情を変えない。秘書艦の鏡だ。

祥高さんはメモ帳を手に言う。

「ではまず構内に参りましょう」

「うむ」

私たちは本館を出た。

すれ違う艦娘たちは誰もが不思議そうな表情を見せつつ敬礼する。私は軽く手を上

げながら秘書艦の後に続いた。

本館の中庭で彼女は振り返る。ここから見上げる赤レンガの建物は堂々としていた。

祥高さんは言う。

「この本館に執務室や食堂があります。また艦娘の宿所は別棟になります」

「なるほど」

私は考える。

(ここに所属する艦娘たちと私は、この期間どれだけ交流出来るだろうか?)

指揮官として、やり難い点。

1) 絶対的火力を持つ兵器Ⅱ『艦娘』。

2) 外見は普通の人間にしか見えない。

3) その性格や挙動は普通の少女。

4) 艦装を付けて、やつと兵士と分かる。

軍の組織だから『上官の命令は絶対』として押さえ付けることも可能。

今も散見する『ブラック鎮守府』も知っている。

だが深海棲艦という敵が居る。

ムヤミに彼女たちの反感を買えば未来が無くなる。人類には艦娘以外、敵に対抗する術(すべ)がないのだ。

だから近年、海軍省や軍令部はブラック度が目に余る拠点に『監査』や『指導』を入れると聞く。

それに不思議なのは艦娘たちが現れるのは、わが国の帝国海軍に限定されていることだ。これには諸説あるが結論は、まだ出ていない。

(男性兵士を相手にしている方が気楽だよな)

私は、つくづくそう思った。

秘書艦が振り返った。

「どうかしましたか?」

まずい。

私は帽子を軽く持ち上げて誤魔化す。

「あ、いや。艦娘だけの部隊って、やっぱりまだ慣れないなあ」

すると彼女はメモ帳を傾けながら軽く頷（うなづ）く。

「はい分かります。着任する指揮官の皆さん、同じように仰いますから」

「やっぱり？」

そうなんだと思いつつ悩んでばかりも居られない。現実は目の前にある。

（私は軍人であり司令官という重責を拝命したのだから一生懸命応えるべきだ）

謙虚に反省した。

それからは意欲的に祥高さんと一緒に工廠や艦娘の宿所、入渠施設などを確認して

回った。

率直な印象は『噂通り小さい』。

一区切りつくと秘書艦は言った。

「この先は埠頭で仕切られた鎮守府専用の港湾部です」

少し行くと説明通りの青い日本海の見える埠頭に着いた。

海を眺めながら私は感想を述べた。

「（こ）は艦娘専用だから他所の鎮守府よりも小さいな」

「はい。ですから艦娘たちは、この埠頭だけではなく倉庫や専用の栈橋から出撃することも多いです」

それは他の艦娘が居る鎮守府でも同様だ。ここの埠頭は一般の船舶用だから最低限のモノがあれば十分なのだ。

「ここは起重機もないんだな」

振り返りつつ私は確認した。そういえば鎮守府必須の大規模な入渠ドックもない。

私は腕を組んだ。

「ここは埋立地で良かったのかも」

「はい?」

祥高さんが不思議そうな顔をする。

私は説明する。

「今朝、陸軍の憲兵さんに送って貰ったんだが彼、ここが鎮守府だと知らないんだ。それに、もし市街地に近かったら、いろいろ面倒だろう」

すると彼女は微笑んだ。

「はい。仰る通り地元でも、この辺りは釣り人以外、ほとんど来ません。軍機保持の観点からも理想的ですね」

「謎の施設に女学生。怪しい学校と勘違いされそうだな……魔法学校みたいな」

冗談交じりに言うのと秘書艦は少し真面目な表情に変わる。

「実は、その鎮守府つばくない現状を逆手に取って諜報部隊に特化する計画もあります
が」

「え？」

まさか嘘から真（まこと）か。

彼女は説明を続ける。

「そもそも、ここが設置された背景は日本海側の護りという目的と」

ここで秘書艦は周りを気にして声音を下げる。

「舞鶴や佐世保といった他の鎮守府への睨みを利かせる側面もあります」

「……」

これには言葉が出なかった。

ふと寛代の姿が思い浮かぶ。もしかして彼女も、その一翼を担っているのか？

（ここは想像以上に重要な拠点を目指しているのでは）

しかし祥高さんは微笑んで言った。

「今のことは頭の片隅に留めて置いて下さい。では次に参りましょう」

短い髪をサラサラなびかせ彼女は歩き始める。その後姿を見ながら私は改めて思っ
た。

(君は本当に単なる秘書艦なのか?)

結局、島風が予想した通り鎮守府内の巡回は短時間で終わりそうだ。

特徴的なことは男子禁制部分が普通の鎮守府より多いことか。

(艦娘専用部隊だけに……まあ、そこは直ぐ慣れるだろう)

私は樂觀視し始めていた。今さら悩んでも始まらない。

また徐々に私にも慣れたのだろう。すれ違う艦娘たちも敬礼ではなく会釈や手を振る者も現れ始めた。

(何だか調子が狂うな)

この反応には秘書艦も驚いたようだ。ただ私も敢えて彼女たちを咎(とが)めなかつた。

やがて祥高さんは言った。

「内部は、ほぼ宜しいでしょうか?」

「そうだね」

腕時計を見ると僅か1時間ちよつとで鎮守府内の巡回は終わった。

私は言った。

「基本的な設備の配置は、どこの鎮守府も同じものだな」

彼女も微笑む。

「はい。むしろ、その方が宜しいですね」

「……」

その姿に私は一瞬、考えた。

この秘書艦の達観した姿勢。普通の艦娘とは違った雰囲気。

私が帽子を取ると薄つすらと汗をかいていた。

「確かに山陰の陽射しは強いな」

帽子があつて正解だ。メモ帳を丸めながら彼女は言った。

「いったん執務室へ戻りましょうか」

「ああ」

私たちは本館の二階へと戻った。

私が席に座ると祥高さんは説明を始める。

「一休みした後で今度は軍用車に乗って鎮守府近郊の確認に出かけます」

「うむ」

それから鳳翔さんをお願いして、お茶を持って来て貰った。数分と経たず扉が叩かれた。

「失礼します」

落ち着いた表情の鳳翔さんにはホツとする。

この対応の速さは小さい鎮守府ならではだ。最初は戸惑うが慣れてくれば、むしろこの方が良い。

配膳しながら鳳翔さんは言った。

「今日は日差しが強いですね」

「そうだね」

つくづく彼女は癒し系だ。こんな艦娘ばかりだったら気も楽なんだが。

15分ほど休憩してから鎮守府本館の横にある車庫へ向かった。

緑色の髪の毛のメロンこと軽巡洋艦「夕張」と補佐の駆逐艦娘たちが敬礼してお出迎え。

これから行くのは私と祥高さん、それに青葉さんと……どういわけか駆逐艦の寛代だ。

朝のゴタゴタ疲れもあるだろうに彼女は自分から申し出たそうだ。もちろん寛代に來て貰う事は非常時の通信役として重宝するだろう。

(また寝過ぎさないか?)

無表情の彼女を見ながら不安を覚える。

運転は青葉さん。

「取材だけでなく軍用車の運転もこなすとは器用だな」

彼女は、やや恥ずかしそうに説明する。

「ええ、取材記者つてのは自力であちこち走り回りますから」
「なるほど」

車を運転する艦娘は珍しい。

車内は助手席に秘書艦、私は後部座席に座っている。隣は寛代。

(青葉さん以外、あまり喋らなさそうな艦娘だな)

「では行きますね」

青葉さんの一声で車は緩やかに建物を出る。

ちなみに彼女も巡回に立候補したようだ。

(さすが好奇心旺盛だな)

ネタ作りには積極的だ。

夕張たちに見送られた軍用車は鎮守府の敷地を出る。

広い埋立地から幹線道路目指して走り始めた。

(車内は静かだ)

いろんな意味で。

夏の穏やかな日本海を見ながら過去に思いを馳せる私。

(十数年前、この一帯は海だった)

ボンヤリと今朝、憲兵さんと交わしたやり取りを思い出す。

「司令官は、ここのご出身なんですよね？」

早速、青葉さんが突っ込んで来る。

「ああ」

そういうえば運転席の青葉さんは必然的に大声になる。

彼女は、もともと芯のある声だ。多少の風切り音も気にならない。

「司令の実家は、この近くですか？」

「いや、港のほうだが。学生の頃は夏になると友人に誘われて授業をサボって海水浴に来ていたな」

「海水浴ですか？　ここで」

不思議そうな表情の青葉さん。なるほど、ここが埋立地だという認識しか無いよな。私は説明した。

「ここは、もともと遠浅の海水浴場だったんだ。それを埋め立てて鎮守府にした……そりや大変な大工事だったらしい」

「はあ」

そこでようやく美保鎮守府が埋立地だ、という事実を思い出したらしい。恥ずかしさを隠すように彼女は言った。

「Y沢議員……えつとお、本人か父君だったか忘れましたが、かなり尽力したらしいです

ね」

「Y沢」

「ここで何故か秘書艦と寛代が反応した。」

「確か地元選出の代議士だな」

「私も思い出した。」

「再び青葉さんが切り返す。」

「司令、ご存知ですか？」

「ああ、余り芳しい噂は無いが地元の代議士だからな。意識はするさ」

「なるほどお」

「何か言いかけた彼女を遮（さえぎ）るように私は続けた。」

「最初ここに着てビックリしたよ。計画は知っていたが現地は初めてだったから」

「あ、埋立地のことですね？」

「彼女は明るく反応する。」

「海が陸になつてたら誰でも驚きますね」

「ああ、このご時世に良くこんな大工事が出来たものだよ」

「ホンとは工場とか企業誘致したかったらしいです」

「だろうな」

青葉さんの口調が記者っぽくなってきた。そこは基礎情報として知ってるのだろう。

「今でも釣りは出来ますし鎮守府が誘致されたのも必然でしょうね」

「あ？ そうかな」

私は彼女の言った『必然』という単語が妙に引つかかった。まさか鎮守府を誘致する為だけに埋め立てしたわけじゃないだろう。

青葉さんは言った。

「こんな広い土地……私たちが来なかつたら宝の持ち腐れでしたね」

「そうだね」

確かに美保鎮守府が埋立地、全てを使っているわけじゃない。ほんの一部だ。だから、まだ大半の土地が更地のまま海風に曝(さら)されている。それは艦娘でも勿体ないと感じるのか。

「実際ここは他所の鎮守府と違って平坦地で艦娘にも使い易いんですよ」

その言葉に隣の寛代も、しきりに頷(うなづ)いていた。

「そうか？」

(これは実際に使っている艦娘らしい意見だな)

しばらく走ると松の防砂林が見える。そこを抜けると大きな幹線道路に出る。

私は言ってみた。

「これが滑走路へ転用出来たら便利だが」

「いやあ蛇行しているからムリでしょう」

青葉さんは率直な意見を言う。

「松林もありますし」

さすが彼女は反応が早い。

「そうか。今朝みたいな攻撃があつたら、どうかと思つたが」

「市内へ向かうと陸軍の滑走路もありますが、今回はどうだったか聞いてません」

そして青葉さんの突っ込み。

「司令、何かご意見が？」

「いや、今朝の攻撃が気になつてね」

「そうですね。確かに敵が地上を狙うのは珍しいです」

それを聞いて私は考えた。

(これだけ基地が密集していれば、地方の町でも敵は重要拠点と勘違いするのだろうか?)

いろいろ気になることは多い。私は頭の後ろに手を組んで座席に、もたれ掛かった。

ふと視線を感じて隣を見ると寛代が不思議そうに、こちらを見ていた。

思わず反応した。

「下手な考えかな？」

だが相変わらず無表情の駆逐艦だった。

以下魔除け

Reproduction is prohibited.

禁止私自轉載、加工 天安門事件

Prohibition is not authorized

d a .

第17話（改2. 6）〈巡回（鎮守府の外）〉

「くれぐれも自重して下さいね」

マイ「艦これ」「みほちゃん」

：第17話（改2. 6）〈巡回（鎮守府の外）〉

「あまり時間がありません。市内の主要部分、ざっと回しましょう」
助手席の祥高さんが言った。

「イエス・マム」

運転席の青葉さんは前を見詰めたまま片手で敬礼をする。

祥高さんは私を見て確認する。

「どこか、見ておきたい場所は御座いますか？」

「いや、特には無いが」

「分かりました。青葉さん、一時間程度で周れる主要地点を、お願いします。場所は、お

任せします」

「イエス・マム」

その言葉に妙に明るい声で答える運転手。

（なるほど記者なら選ぶのも得意そうだな）

適任だと思った。実際、青葉さん自身も嬉しそうだが。

「曲がりまあす」

運転手は軽やかにハンドルを回し軍用車は幹線道路を右折した。

バスガイドが居るのかと思った。

松林の間から青い海が見えている。青葉さんが話し掛けてきた。

「司令、ご存知でしょうけど右手が美保湾で、正面が高尾山です」

「ああ」

一瞬、同名の重巡洋艦を連想した。

「あの山は懐かしいな」

地元出身なのでつい、そんな言葉が出た。

やがて前方に境水道大橋の骨組みがチラツと見えてきた。その手前の交差点で車が

減速する。

「左折します」

青葉さんはハンドルを左へ切る。路（みち）は狭くなり境港の市街地へ入った。

「まず最初に『お台場へ』参りましょうか」

彼女が言うと同時に目の前に広場が見えてきた。

「えつと確か、ここに陸軍の砲台があつたはずですが」

私たちが近づくと直ぐ瓦礫（がれき）の山が見えた。それは完膚なまでに叩きのめさ

れた陸軍の対空砲だった。

「うわあ、結構やられちゃってマスねえ」

ハンドルを握りながら青葉さんが言った。

「凄まじいな」

私も驚く。

「……」

「……」

祥高さんと寛代は無言。

改めて深海棲艦の破壊力と執念に圧倒された。私と寛代は、よくこんな敵の攻撃を潜り抜けたものだと思つた。

周りには『立入禁止』と表示され憲兵や陸軍兵が復旧作業をしていた。彼らは時々チラッと、こちらを見るが軍用車に乗つた私たちが海軍関係者だと分かるのだろう。特に

追い払われることはなかった。

「写真撮っちゃ……ダメですよね」

さつきからソワソワしている青葉さん。秘書艦に上目遣いで聞く。

「……」

当然、祥高さんは『ダメ』という意味で頷く。

(結論の分かる質問だな)

破壊された陸軍の高射砲を、うかつに撮影したら即、憲兵さんに捕まる。

「残念だなあ」

実感のこもった呟きだ。

記者の青葉さんが興味本位でないことは分かるが、これは陸軍には機密事項。かつ負け戦の証拠だ。彼らも気分を害するだろう。

苦笑した青葉さんが答える。

「では脳内シャッターに刻んでおきます」

「うまいこと言うな」

「えへへ」

彼女は車を、ゆっくり前進させながらジックリ見ていた。

(逆に、こういった攻撃を受けながら耐え抜く艦娘たちも凄い)

改めて、そう思った。

「私たちも、よく逃げ延びたものだな」

私は寛代を見ながら呟いた。

彼女も無言で高射砲を見詰めていた。

(この子なりに何か感じるものがあるのだろうか)

すると秘書艦が口を開いた。

「青葉さん、そろそろ」

「あ、ハイハイ。では、次に参りますう」

やや名残惜しそうにして青葉さんはアクセルを踏み込んだ。ドルンという太い音を響かせた軍用車は加速する。

作業している憲兵たちが再びこちらを見たが、やはり私たちへの関心は少ないようだ。

ただ逆に私は陸軍の反応に違和感を覚えた。これが都市部だと海軍に対し、あからさまに嫌がらせを受けたものだ。実際、中央でも陸軍と海軍は仲が悪かったりする。

だがここ山陰では、お互いにノンビリしている印象だ。

(これも地方だから?)

私は助手席の祥高さんに聞いた。

「ここでは陸軍と海軍が仲が悪いってことはないのか?」

「そうですね」

彼女は一瞬、不思議そうな顔をしたが直ぐ質問の意図を理解した。

「ここでは、さほど対立する雰囲気はありませんね」

「なるほど」

私は今日、陸軍に送って貰ったことを思い出した。

「そういえば今朝の憲兵さんも親切だったな」

私は頭の後ろに手をやって座席に深く腰をかけた。すると隣に座っている寛代が頷いている。彼女も彼のことは印象に残ったのだろう。

公園を離れた軍用車は路地を抜けて岸壁へ出た。そこには境水道に沿って一本の道路があった。

「へえ、ここは変わったなあ」

思わず声を出した。

すると青葉さんが直ぐに反応する。

「司令、この辺りも、よくご存知なのですね?」

「ああ、地元だからな。ただ、この岸壁に魚市場が有った気がするが」
すると彼女が説明する。

「ええ。以前より漁獲量が減ってしまったとかで」

「へえ？」

「それで市場が無くなって新しく道路が出来ました」

「なるほど、よく知っているな」

私は感心した。

「えへへ。一応お、記者ですから。地元のこととは時々調べてます」

彼女は恥ずかしそうな顔をする。

「では、この道に沿って西へ向かいます」

車は岸壁に沿って走り出す。

祥高さんが境水道（海峡）の対岸に見える山を指差しながら説明する。

「右の山……島根半島の頂上に電探設備が見えますか？」

「ああ、あれか」

私が横から見上げると、ちょうど島根半島の頂部分にドーム型の建物が見えた。

「確か空軍の施設だったな？」

「はい。あれで広範囲の航空機や船舶を捕捉します」

「海軍の設備でないのが残念だなあ」

私は呟いた。

しばらく走ると大きな旅客船(隠岐連絡船)が停泊していた。

「ここは港町らしい活気が、ありますねえ」

青葉さんは興味津々だった。

(車を止めたら、そのままカメラを担いで取材に行きそうな勢いだな)

隣で黙っていた寛代も珍しく興味深げに漁船を目で追っている。それでも時おり首を傾けて何かの無線を傍受するのだろう。じつと耳を傾ける仕草をしていた。

(境港には高い建物はなからな。どこでも無線傍受し易いのだろう)

この駆逐艦娘は電探特化だなど改めて感じた。

「あの旅客船を時々美保鎮守府の艦娘たちで『護衛』することがあります」

祥高さんが説明する。

「へえ、ここでは、そういう需要もあるんだな」

「単価は低いですけど」

祥高さんが苦笑した。

「そりやまあ我々は軍人だし地元奉仕のボランティアだな」

私も返した。

「では、駅へ参ります」

青葉さんの言葉で車は岸壁を離れ境港の駅へと向かう。

数分経たないうちに境港駅が見えてきた。駅舎は米子駅より小さい。

私は言った。

「漁港は、それなりに活気があるが。街は少し沈んでいるかな」

青葉さんが応える。

「はい。情報統制や食料の配給制限もあつて市民生活も不便だと思います
(おまけに今朝の空襲だ。この港町には事件だな)

そう考えていると窓から彫像が見えた。

「あれは？」

聞くと秘書艦が答える。

「妖怪の像で『町おこし』です」

「噂には聞いた事がある。えつと？」

「水木しげるロードです。地の人は『鬼多郎ロード』とも呼びます」

「なるほど」

小さな駅前に妖怪の像がいくつも並んで妙な存在感があつた。

「これも一種のハイカラ文化なのか？」

私は眩いた。

(戦時下だからこそ、こんな『遊び心』も必要かな?)

そう思った。

だが、さつきから小刻みに震えていた青葉さん、ついに直訴する。

「スミマセン!」

うるうるとした瞳で秘書艦に懇願する。祥高さんは直ぐ事情を察し微笑んだ。

「仕方ありませんね。くれぐれも自重して下さい」

「はい!」

応えるや否や青葉さん、運転を休止しカメラを抱え車から飛び降りた。

(商売道具は常時携行か)

妙に感心した。

直ぐに青葉さんは彫像や町の風景の撮影を始めた。私は通りに地元の間人ではない

観光客が少々散策していることに気付いた。

「なるほど観光地だな」

私は呟く。寛代も面白そうに見ている。開いた車窓から町の喧騒(けんそう)と穏やかな風が吹き込んで来る。

私はボンヤリ考えていた。明後日は中央からの視察団を出迎える。

(指揮官は、前線でも後方でも忙しいものだな)

青葉さんは数分と経たずに戻ってきた。

「済みません、失礼しました！」

どうやら私用だという自責の念はあるらしい。

微笑んだ祥高さんが青葉さんに何かを囁（ささや）く。彼女は大きく頷いて敬礼した。

「了解です！ では出発します」

軍用車は郊外へ向けて再び走り出した。

10分くらい走ると閑散とした田園地帯になった。広い道路脇に車を止めると祥高さんが島根半島を指差した。

「先ほども確認しましたが、あの丸い建物が空軍の電探設備です」

「なるほど、ここからでも目立つな」

何となく『上から目線』というコトバが連想された。

すると青葉さんも続ける。

「空軍って、なかなか重要な索敵情報は、こっちに提供してくれないですよねえ」

「何だ？ やっぱり空軍と仲が良くないのか？」

私が聞くと祥高さんが返した。

「いえ、悪くはありません。ただ今朝の攻撃でもギリギリまで情報提供がありませんでした」

「そりゃ拙い」

私の言葉に頷く彼女。

「はい。ですから空軍の迎撃機が何機か撃墜されてから、やっと私たちに依頼が来ました」

寛代もポツポツと言う。

「既成事実確認後の緊急発進」

それを聞いた私は誰とも無く呟いた。

「敵が地上を空襲したのは今回が初めてではないだろうか？」

続けて祥高さんに問う。

「うちにも電探はあるだろうか？ 艦娘だって持っているはずだが」

しかし彼女は寛代を見ながら苦笑いする。

「はい。でも鎮守府いちばんの電探娘（寛代）は米子から荒島の方まで行き過ぎて索敵どころではありませんでした。他の艦娘の電探も地上からでは範囲も狭く精度も落ちます」

「おいおい、それって大丈夫か？」

呆れたような私の言葉に彼女が応じる。

「山城さんの電探も旧型ですし。他は駆逐艦や巡洋艦がほとんどで……せめて美保に正

規空母か別の戦艦が居ればと思いますが」

私は肩をすくめた。

「やれやれ。先が思いやられるな、ここは」

遠くから聞こえる航空機の音が寂しく響いた。

以下魔除け

Reproduction is prohibited.

禁止私自轉載、加工 天安門事件

Prohibition is not authorized

da.

第18話（改1. 7）〈タフガール〉

「これは青葉の極秘メモですう」

マイ「艦これ」「みほちゃん」

∴第18話（改1. 7）〈タフガール〉

ここで、ちよつとした事件が起きた。いつもは大人しい駆逐艦の寛代が珍しく怒り出したのだ。

「……………」

唇を尖らせ膨れっ面になって静かに怒っていた。

相変わらず何かを喋るわけでは無いのだが、その姿に秘書艦も慌てた。

「ゴメンなさい！ 寛代ちゃんも大変だったね」

そう言っつて、なだめている。

その隣ではハンドルに、もたれ掛かった姿勢で青葉さんがニタニタしていた。

(なるほど……これが日常的な艦娘たちのやり取りなのか)

寛代には悪いが私は妙に安心感を覚えた。

恐らく一般の女性部隊なら当たり前に見られそうな情景。それは艦娘であっても変わらないのだ。

やがて落ち着いた寛代。祥高さんは私を見て肩を竦(すく)めた。

「失礼しました、司令」

私は笑った。

「別に良いよ。まあ微笑ましいというか可愛らしいというか……男性だけの軍隊じゃ絶対にある得ない世界だな」

「スミマセン」

さすがの秘書艦も恐縮していた。

「いや、そんなに縮まることもない。これは壮大な実験だと思えば良い」

「実験？」

私は、そのまま車のドアを開けると外に降り立った。

田畑を渡る風が心地良い。遠くには大山も見える。何となく車内の艦娘たちが私を注目しているのを感じた。

帽子を取った私は振り返った。

「艦娘だけの鎮守府を、この美保に作った軍令部か海軍省。上の連中には何か考えがあるのだろうか」

「そうですね」

意外に祥高さんは頷いて同意する。私は自分の考えが大筋で間違っていないと確信した。

再び大山を見た私は腕を組んだ。

「新しいことは嫌いじゃない。特に旧態依然たる軍組織に風穴を開けるくらいのことには、やりたいと思っっている」

「……ですね！」

いきなり合いの手に驚いた。

その声の主は青葉さん、全開にした窓枠に肘を突いてニコニコしていた。

（やっぱり君か）

なるほど好奇心旺盛な子だ。

私はポケットからメモ帳を取り出した。

美保鎮守府に所属する艦娘の覚え書き。

（1）戦艦は山城だけ。

（2）あとは軽空母と駆逐艦、巡洋艦が少々。

(小さいな)

そう思っていたら、やっぱり青葉さんが口火(くちび)を切る。

「司令なりに何か?」

「そうだな。美保は日本一小さな鎮守府だ。その『大きさ』と『立地』にも何らしかの優位性を持たせたいね」

元は作戦参謀だから分析は得意だ。

「なるほどお」

相づちを打った彼女もまたメモ帳を取り出していた。

「おいおい、これも記録するか?」

私は慌てた。

「あ、オフレコですから」

ニタニタしつつ鉛筆を動かす彼女。

「これは青葉の極秘メモですう」

敬礼して、おどける。

「頼むよ」

私は脱力した。

すると祥高さんも車を降りて私の隣に立つ。

「……」

しばらく、その場に居る誰もが無言で大山を見詰めていた。徐々に日が傾き弓ヶ浜には涼しい風が吹き始める。

祥高さんは総括するように言った。

「司令が着任されて海軍はきつと、この美保から大きく変わっていくと思います」

「そうだな」

反射的に、そう応えた。

だが、その時分の私は、まだ何も分かっていなかった。秘書艦の言葉の重さを後から痛感することになる。

腕時計を見て祥高さんは微笑んだ。

「そろそろ戻りましょうか? 司令」

「ああ、そうだな」

彼女は青葉さんに目配せする。青い髪の少女は敬礼をした。

「アイ、では鎮守府へ戻ります」

私たちが車に乗り込むと発動機が軽快な振動とともに始動する。西からの真っ赤な夕日を浴びながら軍用車は鎮守府へと向かう。

埋立地に戻る頃には空に星が見え始めていた。

私は正面玄関前で車を降りた。見上げると美保鎮守府の建物は堂々とした佇まいを見せていた。

敷地内では訓練を終えた艦娘たちの点呼や片付け作業をする者の声が響く。また通路では食堂へ向かう者、哨戒任務に付く者たちと慌（あわただ）しい雰囲気だった。

私は秘書艦と共に二階の執務室に戻った。

祥高さんが報告する。

「美保鎮守府の資料が完成しました」

「ご苦労様」

受け取った私はパラパラと眺めた。さすがに今はちよつと疲れたから時間をおいて確認しよう。

空には夕日で真っ赤に染まった雲が浮かんでいる。私は手を休めて呟いた。

「綺麗だな」

八雲（やくも）という地名が象徴する出雲地方は夕方、綺麗な雲がよく出る。

この建物の周りでも夏の虫がリンリンと鳴き始めた。開いた窓から心地良い風が吹き抜ける。

「風鈴でも吊るしたくなるな」

「司令の宿舎は、この建物の裏手にある別棟の二階です」

私の想いとは無関係に祥高さんが説明する。

「構内電話や非常用の無線機、小火器類も備え付けられています。また非常口が二ヶ所あります。後ほど現地で、ご確認下さい」

「分かった」

「ここは鎮守府だと改めて実感した。

「基地内では落ち着かないと仰つて、お住まいは外に準備する歴代司令も居られました
が」

「はあ」

「ここ」で一旦、間を置く祥高さん。

「この辺りでは借家も無くて結局、外に住まわれると通勤時間が長くなって億劫になる
ようです」

「分かるなあ、ソレ」

私は苦笑した。

軍司令なら軍用車での送迎も有りだ。しかし、ここでの運転手は艦娘だ。体面を重ん
じる提督には恥ずかしくてダメだな。

秘書艦を見ながら私は頬杖を付いた。

艀装を外した艦娘は外観では艦種が分かり難い。しかも彼女は、やや長身だ。つい

『戦艦か?』という錯覚に捉われる。提督代理を務めていたことも納得できる安定感があつた。

もちろん重巡級になれば落ち着いた艦娘は少なくない。恐らく彼女の豊富な経験が的確な判断と安定感を生んでいるのだろう。

(ただ『祥高』って名前、どこかで聞いたよな)

私は改めて疑問を感じた。

とはいえ直接、本人に尋ねたところで彼女が私の個人的記憶を理解して答えてくれる訳ではない。

(やはり資料を探すか?)

そのときコンコンと扉を叩いて顔を出した鳳翔さん。

「失礼します。夕食の、お時間です」

「ありがとう」

そんな軽空母の彼女も『艦娘なのか?』というくらい給仕姿が板についていた。(彼女の制服が和装なので、なおさらだな)

書類を置いた私は祥高さんに言った。

「そろそろ、降りようか」

「はい」

今日の夕食も当然、隊員と同じ食堂で頂くことにする。

夕方という時間帯もあって、食堂はまだ少々ゴタゴタしていた。

私たちが降りて行くと艦娘たちが敬礼をする。いちいち制するのも面倒なので私も今では簡単に返礼をしている。それでも中には無視する者も居た。

私は苦笑した。

「まだ完全には受け入れられていないようだな」

「……」

祥高さんが心配そうに、こちらを見るので私は返す。

「だからといって執務室に食事を持って来て貰うのも寂しいだろう？」

「はい」

「人付き合いは苦手だけど引きこもるのも、どうかと思う」

食堂の奥にあるテーブル席は、ほぼ司令である私と秘書艦の指定席になっていた。

でもこうやって食堂に降りてきて食べる司令官は美保鎮守府では初めてらしい。艦

娘たちは、こちらをチラチラ見ながら興味津々といった感じだ。

直ぐに鳳翔さんが夕食を持ってきてくれた。

その時、何処からともなくスツと静かにやって来た寛代が案の定、自分の夕食も持参で私たちの隣に座った。

「やれやれ」

私は笑った。でも、この子は大人しいから別に良いか。

「頂きます」

「頂きます」

祥高さんと手を合わせる。重巡クラスになると細かい所作が自然と人間臭くなつて来る。

「……」

そして静かに寛代も手を合わせた。

(そういえば以前の鎮守府でもそういう艦娘が居たな)

私は記憶を呼び起こす。

だが祥高さんの場合は、より自然で人間っぽい。

(まあ、彼女のことは徐々に分かって来るかな)

夕食の時間は昼間よりも緩んでいた。ここの食事は水や空気が良いせいか、とても美味い。

(やっぱり海軍は、こうでなくちゃね)

海軍生活の楽しみは食事くらいだから。

……だが食堂の中には緊張した一団が居た。

「夜戦ン！」

約一人の艦娘が盛り上がっている。

「何か妙なムードだな」

私は思わず呟いた。

すると祥高さんは言う。

「彼女たちは、これから一晩中、夜間訓練をします」

「なるほど司令不在でも、きっちりと任務は継続中だな」

私の言葉に祥高さんは微笑んだ。海軍としては頼もしい限りだ。

食事をとりながら彼女は続けた。

「月に数回、軍令部の指示で作戦指令室が24時間体勢になります」

「それは定期的なものか?」

「はい。暦(こよみ)に従う場合と舞鶴や佐世保での戦闘状況を考慮して臨時に指示される場合があります」

「なるほど」

祥高さんは一瞬、食事の手を止めた。

「これは当番制ですが司令には随時ご入室が可能です。また状況によって緊急時には昼夜問わず司令から、ご発令頂けます」

「なるほどね」

(それは要するに鎮守府の司令は24時間体勢で待ち構えて居ろつて事だな)

私は軍部の無言の圧力を感じて苦笑した。

「おや?」

私はフツと箸を止めて祥高さんを見た。

夕日を受けた規律正しい彼女の姿は、もはや『燃える艦娘』にしか見えなかった。

「祥高さん貴女、凄くタフですね」

思わず口走ってしまった。

「は?」

「いや、何でもない」

焦った私は視線をそらした。恥ずかしい。

さつきから当然のような顔をして私の隣に座っている寛代は黙々と食べている。

それでも彼女は時おり首を傾げる仕草をする。無線傍受して司令部に転送するのだろうか。ブツブツ呟くこともある。

食事が終わる頃になると艦娘たちも私に慣れてきたらしく入れ替わり立ち替わりで私たちのテーブルに来て質問攻めだ。

「美保は如何なのですか」

「もう慣れたわね」

「海軍なら当然だ」

「食べるの遅っそーい！」

特に寛代と同じ駆逐艦……電、雷、暁、島風あたりは騒がしかった。

何度か祥高さんに注意されても、またゲリラのように舞い戻って来る。

(こうなると、もはや無法地帯だな)

ただ、こうやって艦娘たちとやり取りしていると次第に一人ひとりの性格が見えてくる。

電は雷や暁に引きずられて頼り無さげだが誠実な印象だ。

島風も誤解を受けそうな外見だが風格が有り案外キツチリしている。

艦娘といえども外見だけで判断してはいけない。指揮官として十分注意すべきだろう。

「お互いに命を預ける関係になるんだよな」

私が呟くと寛代は無言で、こちらを見ていた。

『「蓮托生」という言葉がふと思ひ浮かぶ。

食堂の大きな窓越しには昇った月に照らされた大山が美保湾に薄っすらと影を落としているのが見えた。

(海は凧いで居るな)

美保湾の潮風が心地良かった。

以下魔除け

R e p r o d u c t i o n i s p r o h i b i t e d .

禁止私自轉載、加工 天安門事件

P r o h i b i d a l a r e p r o d u c c i o n n o a u t o r i z a

d a .

第19話（改1. 8）〈白い闇〉

「ワカラナイ……」

マイ「艦これ」「みほちゃん」

∴第19話（改1. 8）〈白い闇〉

私は食堂の時計に目をやった。まだ時間的に少し早かった。

しかし今日は、さすがに疲れた。何かが肩に圧（の）し掛かってくるような感覚だ。

「もう休まれますか？」

気を利かせた秘書艦が言った。

「そうだな……そうするか」

一瞬、硬直していた私は、その言葉でハツとして、ゆっくり立ち上がった。

祥高さんは噛み砕くように言う。

「司令宿舎は食堂を出て左手、通路の突き当りを外に出た隣の建物になります」

「了解した」

「案内を付けましようか？」

その秘書艦の言葉に、ざわめく駆逐艦たち。目配せするなつて！

「いや、大丈夫だ」

私は残念そうな表情の駆逐艦たちと冷静な秘書艦に軽く敬礼をした。周りの艦娘たちも一斉に敬礼をする。

秘書艦の案内通り、食堂を出て左手に向かう。

本館から出て直ぐに司令宿舎だった。

「なるほど、ここか」

指を指して場所を確認した。

それから一旦、二階の執務室へ戻ると鞆と鎮守府の資料を抱えて再び階段を下りた。だが宿舎のドアを開けようとした瞬間だった。

「あれ？」

開かない。

「そういえば鍵を預かっていないな」

少し困っているとバタバタと言う足音がして秘書艦が走って来た。

「あつ、済みません。これを」

案の定、彼女の手には鍵が握られていた。

「そうだね」

私は場を取り成すように苦笑した。

(秘書艦も忙しいから意識がぶっ飛ぶこともあるのだろう)

そう思いながら鍵を受け取ると鍵穴に差し込んで回す。ガチャンと言う音と共に扉は難なく開いた。

「失礼しました」

祥高さんは少々顔を赤らめて恐縮している。

「いや大丈夫だ」

私は別に咎めなかった。むしろ艦娘なのに小さな忘却をする彼女を余計に人間臭く感じていた。

「ありがとう」

私は固まっている秘書艦に軽く手を上げると宿舎へ入った。

明かりを付けながら考えた。

(普通の艦娘は感情の動きが人間より少ない)

だが彼女は、その点が他の艦娘とは異なる印象を受けるのだ。

私は手を止めた。

(そう言えば、あの大人しい寛代も感情の動きこそ乏しいが、やはり人間臭く感じる) 不思議なものだ。

荷物を置いた私はざつと宿舎内を確認する。ここは二階建てだ。

一階には応接室と簡易厨房、それに専用の風呂。寝所は二階らしい。

(この鎮守府の規模なら十分過ぎるくらいだな)

しかし多くの提督は、このご時世でも贅沢な生活に慣れている。だから過去、美保に着任した指揮官も、この狭さに我慢ならなかったのだろう。

それから脱衣所と浴室を確認した。今日は疲れたから湯船は有難い。水の制限が無い陸上(おか)の宿所は艦(フネ)より快適だ。

念のために浴室内を確認をすると、やはりタオルや石鹸など必要なモノは全て準備されていた。

(祥高さんを支える鳳翔さんは、きつちりしているな)

取り急ぎ今夜は来客もないだろう。私は早々に入浴することにした。

蛇口を見ると、お湯と水と両方あった。さすが鎮守府らしい。

(これなら直ぐに入れそうだ)

ホツとした私は腕時計のベゼルを廻して残り時間を合わせる。お湯の蛇口を回すと一旦、応接室に戻ってソファに腰をかけた。

「はあ」

疲れがドツと出た。

そういえば艦娘たちにも修理や整備をする入渠(にゆうきよ)施設がある。外見は『お風呂』だが彼女たちには『修理』だ。

もちろん立派な『女湯』なので上官と言えども『男子禁制』である。これを設置しないと艦娘を艦隊に組み込むことは出来ない。それが煩わしいと艦娘を敬遠する提督も少なくない。

祥高さんの説明する顔が浮かぶ。

『作戦指令だけでなく入渠のタイミングや、そのための資材運用も司令の重要な任務です』

『それは面倒だな』

彼女は頷く。

『この鎮守府には今のところ運用資材を大量消費する艦娘は居ません。しかし今後、配備される艦娘によっては(大食い)の艦娘が来ることも予想されます』

『大食い?』

確か正規空母は、よく働くが大メシも喰らう。直ぐに一航戦の『赤城』や『加賀』が思い浮かんだ。艦載機を運用するから当然だろう。

(だが彼女たちは海軍の主力だ。こんな僻地に來ることは無いだろう)

艦娘のご機嫌取りも司令の重要任務なのだ。海軍始まって以来の艦娘だけの鎮守府の指揮官は意外に大変そうだ。

十分と経たないうちに私はサツと入浴した。まだ湯船は一杯ではないのだが、つい素早く済ませてしまうのは船乗りの習性だ。

寢室から夜空を見ると月は既に三日月だった。私は、そのままベッドに倒れ込む。

寝入りばなに、どういうわけか茶色い蜂に追いつけ回される夢を見た。

(弓ヶ浜で襲ってきた敵の戦闘機だろうか)

ウトウトしているうちに私は深い眠りに落ちていった。

気付くと私は荒れ狂う冬の日本海に居た。そこは忘れもしない、あの『白い海』だった。

(まさか?)

数十メートル先の海上に茶色い髪をやや振り乱した艦娘らしき少女が立っていた。微(かす)かに見覚えがあるがハッキリ思い出せない。

ただ彼女の鬼気迫る姿にも関わらず私には不思議と恐怖は感じなかった。

むしろ懐かしさと同時に心を掻きむしる哀しみが伝わって來た。

(大きな目をした彼女)

思い出せない。型式から軽巡だろうか。

彼女は私を向き手を差し伸べ何かを叫んでいた。

『……』

だが私には彼女の声がまったく聞こえなかった。

「君は……誰だ？」

荒れる海の上で私もその艦娘に問いかけた。だが私の言葉も相手には伝わらない。彼女の両手は空しく宙を切っていた。

（この荒波のためか？）

彼女もまた互いの言葉が伝わらないことに気づいてハツとしていた。

逆巻く波の状況が目に入るが私には何も聞こえない。まるで無声映画だ。

虚しく心苦しい時間が過ぎる。

私が無反応なことを悟った少女は哀しい表情をした。すると急に背後から黒い霧のようなのが見えた。

嫌な予感がする。このまま彼女を去らせては駄目だ。

「待て！……おい、君っ」

私の叫びも空しく彼女は徐々に黒くなっていく。

（もうダメか？）

その時ようやく、か細い声が聞こえた。

『ワカラナイ』

「なに？」

私は改めて声の先を見た。

その時、私は衝撃を受けた。こんな哀しい表情の艦娘を未だかつて見たことが無かった。

彼女は俯（うつむ）き加減にハッキリした声で言った。

『ワカラナイ』

だが何かが私の記憶を邪魔している。どうしても君の名前を思い出せない。

何か言わなければ！ そんな焦燥感に駆られた私は叫んだ。

「おーい、待てー！」

だが、その問い掛けも空しく陰影の薄くなった彼女は、そのまま漆黒の闇の中へと消えてしまった。

その艦娘の声が私の脳裏で反復していた。

『ワカラナイ……』

それは水中で聞くような反響音を伴っていた。

白い海、灰色の空、そして漆黒の闇。

「……」

何も出来ない私が呆然としてしていると突然目の前の視界が開けた。それは、あの全滅させられた舞鶴沖の海戦だった。

旗艦を失って右往左往しながら次々と敵の餌食になる若い駆逐艦たちの叫び声が響く。まさに地獄絵図だ。

(これがなぜ? 今(ここ)で……)

悪夢だった。

私は決して優秀な司令官ではないが、あの海戦は思い出したくない。むしろ、それを忘れようと必死に軍人の責務を全うすべく努力してきた。

そのとき私は、うなされていたと思う。だが悪夢は私を解放せず、いつ終わるとも知れない重苦しい波が幾重にも私を襲った。

翌日の早朝だろうか。

私は外から聞こえてくる艦娘の怒鳴り声で目を覚ます。

「助かった」

気付くと全身、汗びっしょりだ。体が重い。

(あの「白い海」は舞鶴沖だが、あの茶髪の子は?)

その瞬間、頭がズキズキした。

「だめだ、いつも肝心な部分が思い出せない」

取り敢えず悪夢を見続けなくて済んだが。

頭を押さえつつ、フラフラとベッドから立ち上る。少し明るくなった窓辺へ向かうと三日月が空に、かなり傾いていた。

窓から見下ろすと、あの夜間訓練をしていた部隊がいた。何か揉めてるらしい。

隻眼（せきがん）の艦娘が怒鳴っていた。

「何度も言ってるだろう！ 敵が居たんだよ。たつくさん！」

応対しているのは当直らしいメガネをかけた艦娘だ。

「いえ決して咎（とが）めているわけではありません。ただ戦闘は必要最低限に留めて頂きたいと何度も申し上げているはずですよ」

隻眼は負けない。

「でもよお、逃げたって敵は追撃してくるんだぜ。こっちは大破している娘もいるんだ。逃げ切れつかよ？ そのまま轟沈するくらいなら徹底的に叩くべきだろう？」

メガネは言葉に詰まったようだ。

「だからと言って、あなたまで大破を」

「俺は良いんだよ。ゼツタイ負けないから！」

大破している隻眼は強気だった。

どうも昨夜、食堂で叫んでいた〈夜戦娘〉たちだ。皆、ボロボロになっている。前髪を垂らした艦娘がフラフラで、もう一人の艦娘に抱えられていた。

状況的に夜戦部隊全員が中破以上のようなようだ。

(轟沈した艦娘は、いないのか?)

悪夢と、この事件で私は二度寝する気分が失せた。

沈みかけていた三日月は不気味な痘痕(あばた)を晒しながら赤色で浮かんでいた。嫌な雰囲気だ。

私は直ぐに着替えると作戦司令室へと向かった。

以下魔除け

Reproduction is prohibited.

禁止私自轉載、加工 天安門事件

Prohibition is not authorized

da.

第20話（改1. 5）〈暗号と艦娘〉

「本日当直担当の軽巡『大淀』と申します」

マイ「艦これ」「みほちゃん」

：第20話（改1. 5）〈暗号と艦娘〉

私はノックをせずに作戦指令室に入った。そこには通信装置を一心不乱に睨んでい
る、さつきのメガネの艦娘がいた。

私に気付いた彼女は慌てて立ち上がって敬礼した。

「失礼しました司令、本日当直担当の軽巡『大淀』と申します」

祥高さんとは少し違うがキチンとした印象だ。

「なるほど私が着任した引継ぎは、きちんと出来ているんだな」

「恐縮です」

彼女は直ぐに姿勢を正して報告を続けた。

「司令、昨夜ですが夜間訓練中の神通の部隊が隠岐の近海で敵に遭遇しました。直ぐに交戦状態となり敵艦隊を制圧。当方は大破2、中破1でしたが幸い沈没はありません」
「そうか、良かった」

正直ホツとした。

（さっきの艦娘たちか）

毎回、戦果報告は結論を聞くまで冷や汗モノだ。

「ただ」

大淀さんは少し姿勢を崩しペンを額に押し当てながら報告書を見つめた。

「今回は敵艦隊が6隻。他の鎮守府では良く見掛ける編成ですが山陰沖では珍しい型です」

「そうなのか？」

私は腕を組んだ。

「はい。過去3ヶ月では初めての規模です」

「なるほど」

彼女は続ける。

「神通の報告では敵は、かなり高速で隠岐の南方を東進。『山陰海岸の偵察任務』との印象を受けたそうです」

私は壁の海図を見た。

「つまり今後、敵が何らかの大きな作戦行動に出る可能性も考えられるのか」

「恐らく」

大淀さんは眼鏡越しに澄んだ瞳でこちらを見詰める。思わずドキツとした。もちろん、その表情に作為はなく自然なものだ。

（艦娘は時折こういう表情を見せるからな）

だが軍隊では浮ついた想いは不謹慎だ。私は自分の感情を押さえつつ、ため息をついた。

「しかし明日は視察団が来るのに敵に不穏な動きか。何か面倒だな」

（まさか相手も何かを察知しているのだろうか？）

大淀さんは淡々と続ける。

「あと昨日から軍令部より大量の暗号文が入電しています」

「暗号？」

「はい。マル秘扱いの暗号電文のため解読に少々お時間が掛かりますが朝食までには、

報告出来ませう」

彼女は順を追って説明する。

「終わり次第、祥高さんに、お渡ししておきます」

「分かった」

キツチリした性格が出てるな。

頷いた私は窓の外を見た。東の空が白み始め、日本海に大山がボンヤリと浮かんでい
る。

（今日も暑くなりそうだ）

しばらく私は指令室に留まって詳細に敵の状況を聞いた。大淀さんは淡々としてい
るが、こちらの質問に逐次、即答する。

（どことなく祥高さんにも似ているが、もうちよつと透明感がある）

そんなことを思いながら大淀さんの顔を、まじまじと見ていると彼女が気付いたよう
な表情を見せた。

「あの、何か変ですか？」

私は少し慌てた。

「あ、いや」

少し考えてから私は言った。

「艦娘って本当に、一人ひとりが個性的だね。君は判断力の速さが長所かな？」

「……」

ふつと硬直した彼女。直ぐにハツとする。

「す、済みません。そんなことを言われたのは初めてで」

その頬は真っ赤だ。

（あれ？）

今まではテキパキと、こちらの問い掛けにも応えていた……が急に声の調子が、しどろもどろになった。そして恥ずかしそうな顔をしている。

その豹変振りには、こちらも驚いた。

私は頭に手をやりながら言った。

「何か悪いこと言ったかな？」

「いえ、そうではなくて……その」

彼女は眼鏡を取ってハンケチで拭っている。何か罪悪感を覚えるな。

眼鏡を取ったまま大淀さんは机の上にあつた可愛い柄の水筒を取ると、お茶を一口含んでからホウツと深呼吸をした。

「ごめんなさい、私としたことが動揺致しました」

裸眼の素顔も素敵だと内心思った。

大淀さんは改めて眼鏡をかけると先ほどまでのキリツとした姿と表情に戻って言っ

た。

「司令、嬉しく思います。久しぶりに『艦娘』らしく扱って頂きました」
「らしく?」

私は、ちよつと不思議に思った。彼女は説明を続ける。

「ご存知かも知れませんが、この美保鎮守府も長らく司令が定着せず不安定でした。最近は祥高さんが代理でしたが」

「そうなのか?」

そう応えつつ彼女の表情を見ると明らかに何かが拭い去られキラキラした表情に変わっていた。

「やはり司令官の位置は殿方が務めるのが相応しいと実感致しました」

私は改めてドッキリした。大淀さんは微笑んで続ける。

「はい。司令なら美保鎮守府も大丈夫だと思います」

「ははは」

思わず苦笑したが彼女の表情は真剣だった。清楚な色気があるよな、この艦娘は。

やがて起床ラッパの音と共に鎮守府全体がバタバタし始める。点呼、体操や訓練開始の掛け声が構内に響く。

（鎮守府の朝らしい雰囲気だな）

軽く会釈をした大淀さんは直ぐに定位置に戻った。ほぼ同時に伝令管を通して各班から順番に点呼や各種報告が入る。

彼女は何事も無かったように手際よく受け答えをして日報に記入をしていく。
(なるほど手馴れたものだ)

その切り替えの速さは祥高さんを髣髴（ほうふつ）とさせた。

私は聞いた。

「その点呼を受ける業務は君と、あとは祥高さんかな？」

「そうですね」

彼女は少し間を置いてから答えた。

「ただ現状では非常時に困るので今後に備え新しい補佐担当の艦娘を検討しています」

「なるほど」

(まだ人手不足なんだな)

やがてドアを軽く叩く音がして鳳翔さんが顔を出した。

「あの、司令がこちらと伺いまして。朝食は食堂で宜しいでしょうか？」

私は振り返った。

「ああ。もし祥高さんが執務室に居たら私が食堂で食べることを伝えてくれ」

「かしこまりました」

彼女は軽く礼をして退室した。

私は資料を元に戻すと軽く伸びびをして大淀さんに言った。

「では済まない、私は朝食に降りるよ」

「了解しました」

大淀さんは軽く敬礼をした。

廊下に出ると祥高さんが執務室から出てくるところだった。彼女は敬礼をして言った。

「おはようございます司令。早々ですが報告する内容がございます。食堂で、宜しいでしょうか？」

「ああ」

私は軽く返礼した後、彼女と一緒に食堂へ降りた。

歩きながら祥高さんは聞いた。

「よく眠れましたか？」

「ああ」

(ウソだ)

よく考えたら艦娘に取り繕う必要は無いのかも知れない。だが、なぜか彼女には普通

の人間と同じような対応をとってしまふ。

一方の祥高さんも私のウソを見破っているような意味ありげな微笑を浮かべていたが、それ以上はなにも言わなかった。

食堂は各班が時間をずらしているの、さほど込んではいない。

しかし今朝も私と祥高さんの席には、いつの間にか合い席になつてゐる寛代と、そこに駆逐艦隊が絡む、にぎやかな状況に変わりはなかった。

配膳されるまでの間、祥高さんは私に資料を渡しながら言つた。

「明日の視察の件で確認したところ軍令部の暗号文と平行して送られた電報の指示が微妙に違つています」

「つまり？」

「電報では各鎮守府と本省から明日の朝、陸攻（りっこう）で空軍の美保滑走路に到着するとあります」

周りの駆逐艦がうるさい。気にせず彼女は続ける。

「しかし暗号電文では明日、視察団は各鎮守府から、それぞれ列車で来るとあります。また本省からは舞鶴経由で大艇（たいてい）が日本海に沿つて到着する計画になつています」

陸攻は一式陸攻、大艇は二式大艇、どちらも海軍の航空機だ。

「また舞鶴から『警備増強のため艦娘の戦艦と空母を差し向けるので受け入れ準備をしておくように』との指示もありました」

「戦艦と空母？」

私は苦笑した。

「ちなみに艦娘の場合、鎮守府での受け入れ準備は不要だよな？」

彼女も微笑んだ。

「仰るとおりですが」

私は美保湾を見ながら腕を組んだ。

（艦娘は戦艦、空母であれ艦種による排水量の差を考えなくても良い）

だからこそ、こんな小さな鎮守府でも大部隊を編成出来る。

（今は、まだ弱小だが）

私の考えに呼応するように祥高さんは続けた。

「ただ美保にとつては貴重な戦艦と正規空母の着任です。それなりの『心の準備』は必要かと思えます」

「なるほどね」

（心の準備か。それは必要かもしれない）

（ここ）では唯一の戦艦、山城さんですら、あの勢いだからな。

「それに」

彼女は何かを思い出したように付け加える。

「艦娘の食料消費量は設計艦種本来の排水量に比例する傾向があります」

「あ？」

予想外の内容に私はバカみたいな反応をした。

だが祥？さんは表情を変えずに続けた。

「つまり艦娘たちの背丈は皆、同じでも艦種……たとえば駆逐艦よりは巡洋艦、さらに戦艦や空母など本来の分類に従って『燃費』や『必要資材』が増えます」

「なるほど」

私は彼女を改めて見た。

「君は、この駆逐艦寛代よりは大食いなワケだ」

そう言った直後に私は『しまった』と思った。いくら相手が艦娘とはいえ、この発言は拙かった。もし相手が人間の女性なら絶対に嫌われるだろう。

ところが意外に彼女は普通に微笑んだ。

「そうですね。寛代ちゃんよりは食べますけど。大食いかどうか」

その落ち着いた反応にホッとするやら冷や汗が出るやら。

（相手は艦娘。単なる機械でも人間でもない）

そんな自分を顧(かえり)みる。

(私は何を焦っている?)

さきの大淀さんや寛代、それにあの山城さんだつて単なる機械ではない深い感情の動きを感じる。

(やり難いな)

それに祥高さんだ。

(艦娘が単なる機械の方が気楽だ)

改めて秘書艦には『人間臭さ』を感じる。

(艦娘は分らないことだらけだ)

「しかし戦艦に正規空母。本省は、ここで観艦式でもするつもりか?」

私はボヤいた。

祥高さんは気付いたように、つけ加えた。

「スミマセン、追加電文で艦名表記がありました。空母は『赤城』で戦艦は『比叡』です」

「なんだ? 一航戦に高速戦艦まで来るのか」

私は思わず呟いた。

「やっぱり観艦式決定だな」

寛代は不思議そうに、こちらを見上げていた。

以下魔除け

R e p r o d u c t i o n i s p r o h i b i t e d .

禁止私自轉載、加工 天安門事件

d
a . P r o h i b i d a l a r e p r o d u c c i o n n o a u t o r i z a

第21話（改2. 0）〈白い傷〉

「赤城を助けたって言うのは本当ですか？」

マイ「艦これ」「みほちゃん」

：第21話（改2. 0）〈白い傷〉

祥高さんは続ける。

「司令、もう一点ございます」

「ん？」

何気なく振り返る。

「二式大艇が本省から舞鶴に寄るのは視察団に現地の作戦参謀も加わる為とあります」

「舞鶴？」

眩いた私は血の気が引いた。

だが敏感な祥高さんは、すぐに気がついた。

「司令、どうかされましたか」

「いや何でもない」

慌てて否定した。だが側にいる寛代まで、こちらを見上げている。

近くにいた艦娘たちまでが私に注目していた。

(お前ら感度高過ぎっ！)

急に艦娘に責められる感覚に襲われた。

「済まん、執務室へ戻る」

私は席を立った。

「司令え、退却う」

島風の『ひと言』が胸に突き刺さった。逃げるように食堂を後にした私は階段を駆け上がった。

だが走ったせいか頭がクラクラし始めた。

(まずい)

やつのこのことで執務室に入った私は重い足取りで制帽を机に投げ出すと、ため息と共に自席に深く腰を掛けた。

「はあ」

座ったまま、ゆっくり椅子を回転させ窓を向くと緩やかな海風が流れ込む。陽の光を

浴びた日本海がキラキラと輝く。

（今日は大山がよく見えるな）

私はブーツとしたまま潮の香を浴び、美保湾に浮かぶ大山を眺めた。

（忘れもしない、あの日）

一昨年だろうか。

所属していた舞鶴鎮守府で私は急病の提督に代わり艦娘の指揮を執っていた。当時、敵が舞鶴近海への侵入と攻撃を繰り返し返り鎮守府の誰もが疲弊していた。

当時の舞鶴では通常の艦艇と艦娘を併用していた。そして私が指揮を執った当日は吹雪で最悪な天候だった。それにも拘らず敵の猛攻が続く。両者が持久戦だった。

次第に敵の攻撃に押され通常の艦艇が撃破され尽くす。そして待機していた艦娘たちが出撃せざるを得なくなった。

だが艦娘は連続出撃が出来ない。人間のように休息が必要だ。まして荒天では疲労は加速する。

艦娘も次々と脱落し、結局は練度の低い駆逐艦までが駆り出された。

（あの日は酷かった）

その時、誰かが執務室の戸を叩いた。

一瞬たじろいだが気持を落ち着かせて返事をした。

「はい、どうぞで」

「あのお」

そう言いながら顔を出したのは青葉さんだった。なぜだかホツとした。

「まことに僭越（せんえつ）ながら密命を帯びて参りまして」

「はあ？」

彼女の虚をつく発言に、それまでの重苦しい空気が和んだ。

青葉さんは頭に手をやり申し訳なさそうに言った。

「正直に白状しますと秘書艦様より『司令の話し相手になって下さい』と勅命を受けました」

「祥高さんが？」

苦笑する蒼い髪の記者以上に私自身が困惑した。

だが、ここは秘書艦の意思に沿ってみるか。

「分かった、入れ」

「はい。では、ちよつと失礼して」

いったん廊下に戻った彼女は魔法瓶と、お盆を手に戻ってきた。

「準備が良いな」

私は少し身を乗り出す。

すると彼女は照れたように言う。

「あは。これは青葉ではなくて鳳翔さんからの託（ことづ）けです」
「なるほど」

私はそれらを応接セットへ置くように言った。

「失礼しまあす」

青葉さんは準備を進めながら補足する。

「ここでの内容は機密準拠で内密に、との指示も受けました。以後、記録外ですので、ご安心下さい」

「え？ ああ」

抜かりがない。私は準備する青葉さんの反対側の席に腰を下ろした。

彼女が来たことで私の迷いも留まるかも知れない。

お茶を出しながら彼女は言った。

「えつとお、差し障りある部分は省いて結構ですから。青葉を『言葉の駆逐艦（ゲストロイヤール）』と思つて、ぶつちやけて下さい」

「あ？ そう」

私は準備されたお茶をすすりながら頭を整理してみた。

だが一度、消し飛んだ感情は簡単に戻ってこない。

青葉さんは自分のお茶を注ぎながら言う。

「あのお、これは青葉の想像ですが。司令は私たち艦娘に蟠（わだかま）りがあるので
？」

「んつと」

凶星だと思う。

私は決意して深呼吸をする。海を見ながら淡々と話し始めた。

「舞鶴に居たとき大失敗した」

「あ」

彼女は直ぐに目をそらし下を向く。

「す……済みません」

「いや、気にしなくて良い」

（やはり舞鶴のことは知っているか）

私はソファの背もたれに腕を回して窓の外を見た。

「確か、あの頃、全国の鎮守府が敵の連続攻撃を受けていたね」

その言葉に青葉さんも続けた。

「はい。えっと我が国最強とされる横須賀でさえ敗北の一步手前まで追い込まれました」

その説明で私は少し心が軽くなった。

「えっと」

彼女は何かを思い出すように天井を見上げた。

「その頃って全国で艦娘の扱いが真つ二つに割れていましたね」

「そうなのか？」

その事実は初耳だった。

青葉さんは軽く頷く。

「はい。某80年後半から艦娘を人間の兵士と同様に扱う『穏健派』と、単なる兵器として運用する『強行派』に分かれました」

「ああ、それは今でも聞くな」

彼女は続ける。

「『穏健派』は呉や横須賀に多くて舞鶴や佐世保では『強行派』が幅を利かせていました」

「フム」

「んで、この強行派を『ブラック鎮守府』と揶揄する人も居ました」

「へえ」

腕を組んだ私も思い出した。

「そういや当時、舞鶴の提督は穩健派で頑張ってたが横須賀は精神を病んで退任したと聞いた」

頷く青葉さん。

（だから舞鶴の提督も、そのまま指揮を執っていたら危なかったかも知れない）
「でも」

彼女は改めて私を見つめた。

「司令は明らかに『穩健派』ですね」

「ありがたい、と言って良いのかな？」

「えへへ」

その笑い声で私の心が、また軽くなった。不思議な子だ。

「その舞鶴で何か？」

穏かな口調で聞いてくる青葉さん。私の心の扉を開ける感覚だが悪くはなかった。

「当時、過労で倒れた提督に代わって私が初めて単独指揮を執った」

「はい」

静かな相づち。私は続ける。

「既に通常の艦艇は壊滅状態。高練度の艦娘も軒並み傷付いていた。私は仕方なく手練

れの軽巡と新人の駆逐艦で部隊を組み出撃させた」

「はい」

「その軽巡は、いつになく出撃を渋っていたが私は押し出した」

「冬の日本海ですよね」

窓の外で穏やかに輝く日本海を見つめながら彼女は念を押し。

「ああ。普通の出撃でも躊躇する。しかも通常艦の十分な援護もなく艦娘だけの抜錨だ」

「……」

無言の彼女。

私は続ける。

「だが敵も悪天候下で次々と攻撃してくる。既に前衛が破られ放置すれば鎮守府に攻めて来そうな勢いだ。軍令部からも陸に近づけるなど指示が出て、かなり焦った。もし敵が上陸したら最悪の本土決戦、陸軍が出てくる。上は、それも嫌だった」

「分かります」

「恐らく敵もギリギリで必死だった」

「そうですね。確か、その後しばらく敵の攻撃が緩くなる時期がありました」

「そうなのか？」

「はい」

私は当時の状況を整理した。

艦娘たちが出撃して敵の様子が報告された。相手は潜水艦を主力とした熟練部隊。しかも悪天候でも正確な敵の射撃。明らかに高性能な電探を積んでいた。

「最初から性能が違い過ぎた」

「はい」

悪天候で無線も通じ難い。状況把握も手間取る。経験不足の私には、すべて判断が後手に回った。混乱状態寸前だった。

断片的に入る艦娘の叫び声。しかし当時の士官は構わず行けという。良心が痛んだ。

結局、撤退の判断は手遅れになった。戦闘は敵の圧勝。私は軽巡と駆逐艦を数隻、冬の日本海に沈めてしまった。

「ハッキリ、全滅だよ」

私は自分自身に突き放すように言った。

「……」

青葉さんは黙っている。

その艦娘部隊が全滅すると同時に敵は撤退したらしい。安堵しつつも、天候を見て索敵機を飛ばした。破片の浮かぶ夕暮れの日本海。現実の夕日と想像する光景が被さっ

てゾツとする美しさが強く印象に残っている。

彼女は要所、要所でメモを取っている。私は、こんな記録は記事に成らないだろうと思つて特に止めなかった。

「やっぱり追及されましたか」

一瞬、筆を止めた青葉さんは言う。

「そうだな」

現場に復帰した舞鶴の提督や他の作戦参謀からは叱責された。もちろん通常の艦船が沈めば被害は大きい。

だが相手が艦娘となると後味が悪い。負け戦(いくさ)でも果敢に立ち向かう彼女たち。交戦し傷つき沈んでいく艦娘の叫び声は思い出したくない。

「いつそのこと解任処分された方が楽だったよ」

「……」

青葉さんは複雑な顔をして何か引掛かっただ顔をした。

「つまり司令の処分は無しで？」

「そういう事だ」

その苦い経験で私は決意した。

(もう二度と艦隊指揮はすまい)

一時は軍人を辞めようと思つた。

「ええ？」

さすがの彼女も、素つ頓狂な声を出した。

でも、いざ私が退官を切り出すと

「そこまで思いつめるな。誰もが通過する道だ」

「相手が強過ぎた。仕方がない」

と説得された。

「まあ、慢性的な人手不足ですから」

青葉さんは言う。

結局、辞めることは踏み留まった。

それでも以後の私は艦娘絡みの作戦からは意図的に距離を置いた。命令も固辞した。かつたが軍隊に居る以上、上官の意向は絶対だ。

また軍隊で自分が生き残っている以上、戦歴も刻まる。結果的に艦娘の指揮を執ることとは避けられなかった。

ただ艦娘の指揮については、どんな陰口を叩かれても無理な特攻はさせない。引き気味に指揮を執った。

「迂回や救援部隊」

呟いた彼女は、この辺りの事情は知っているようだ。

個人的に上から嫌われて評価が下がり左遷されても別に良いと思っていた。罪滅ぼし的に「舞鶴沖海戦」以後の私は一隻も艦娘を沈めてはいない。無理な進軍もさせない。それが果たして良いのか悪いのか？

「現場の指揮官としては、これはご法度だろ？」

「いえいえ」

だが、上も気づく。監査の際に担当官から何度も問われた。

「君はそれで良いと思うのか？」

「はい」

「……」

私が即答したときの監察官の顔は忘れられない。彼は書類をめくりながら呟いた。

「まあ君の戦果はともかく轟沈率が低いからなあ」

このとき悟った。指揮官は自分の信念で立案、遂行し兵士が忠実に動けば結果(評価)は出るのだと。

青葉さんも頷いている。

だが『強行派』から私への風当たりは強まった。ある会議でも強気の提督や参謀に言われた。

「燃料のムダ遣いだ」

「時間の浪費だ」

「さすがに直接言われると凹んだな」

「でしようね」

会議なんか途中で逃げ出してやろうかと思っただけだ。

だが捨てる神あらば……だ。私のその姿を見ていたらしい『穩健派』の参謀数名からも声を掛けられた。

「轟沈寸前の赤城を助けたって言うのは本当ですか？」

「はい」

「なるほど、やはり」

彼はしきりに頷く。

「うちの加賀から貴殿の噂を聞くんですよ」

別の参謀も感心する。

「艦娘に褒められるとは、スゴイですね」

「いや」

私は苦笑した。

すると別の参謀。

「うちの比叡も自沈を免れたって美保殿のことを、よく言ってますよ」
「恐縮です」

このとき悟った。艦娘の横の繋がりも意外に広い。

「ウンウン」

また頷いている彼女。

いつの間にか私に『艦娘指揮官』というあだ名が付いた。私自身、特に意識してなかったが。

「気が付けば美保鎮守府の司令官だよ」

「ですなぁ」

青葉さんも微笑んだ。

「しかし鎮守府の司令官とはいえ地方は不便だ。私は『降格人事（左遷）か?』と疑っている」

「はぁ」

彼女は苦笑した。

正直言うとうと艦娘の指揮からは逃げたいが軍人である以上は仕方が無い。

窓からは湾の海風が優しく吹き込んでいた。いつの間に日が高くなり美保湾はキラキラと輝きだしていた。

以下魔除け

R e p r o d u c t i o n i s p r o h i b i t e d .

禁止私自轉載、加工 天安門事件

d a . P r o h i b i d a l a r e p r o d u c c i o n n o a u t o r i z a

第22話（改2.0）〈艦娘と変化〉

「他人の評価は、すべてじゃありませんし」

マイ「艦これ」「みほちゃん」

：第22話（改2.0）〈艦娘と変化〉

「やれやれ」

私は両腕を上には伸ばした。

「せっかくの晴天だ。外に出ようか」

「そうですね」

青葉さんも頷（うなづ）いた。

秘書艦には内線で移動する旨を伝え、制帽を被って部屋を出る。

日陰になった廊下が万華鏡のようにキラキラしていた。

「海の光か」

「夏ですね」

さすが記者、反応が早い。

ここは小さな鎮守府なので執務室のある建物を出ると直ぐに海に面した埠頭である。やや離れた海上で訓練をしている艦娘たちの姿以外は閑散としていた。

私たちは植え込みと埠頭の境目にあるベンチに並んで腰掛けた。

「夏の日本海は静かだな」

「そうですね」

軽く制帽を被り直しながら聞いてみた。

「君の知る範囲で私のウワサって、何か聞いてるか？」

「えっと、司令官の噂ですか」

青葉さんは大きな瞳で私を見詰めながら言った。

「えっと、もちろん知ってますケド」

何か奥歯に物が挟まったような言い方だった。

「オフレコだろ？ 遠慮なく言い給え」

情報通の彼女なら、いろいろ知っているだろうと私は思ったのだ。

埠頭で穏やかに打ち寄せる波の音。

一瞬、間があつてから決意したように立ち上がった彼女。手を後ろに組み埠頭にゆつくり踏み出しながら答えた。

「えっと……『海軍一の弱腰』『舞鶴の負け犬』『回り道太郎』」

途中から指を折って数えていた青葉さん。私は脱力してベンチから、ずり落ちそうになった。

振り返った彼女を私は手で制した。

「さすが記者だな」

苦笑いした。

「よく出るものだ」

「あ、いやあ」

ばつが悪そうに後頭部に手をやって苦笑いする青葉さん。

「いいよ、ありがとう……」

私は大きな、ため息をついた。

「正直、頭が痛いね」

「同情します。でも」

再び海のほうに顔を向けて彼女は言った。

「これって海軍さんのぎっくりした、ご意見ですし」

水面（みなも）を見つめた青葉さんの上半身がキラキラと浮き上がる。

「他人の評価は、すべてじゃありませんし」

「そうだと良いが」

肩をすくめた私。微笑んだ彼女の青い髪の毛が風に揺れていた。

そのとき轟音を響かせた多数の戦闘機が空軍美保基地から飛び立つのが見えた。青い空と大山（だいせん）を背景に機体が太陽光を反射させている。

「あれはゼロ式か。今日は空軍も忙しいな」

手かざしで同じ方向を見ていた青葉さんは言った。

「そういえば先ほど対空機銃を積んだ陸軍の車が産業道路を何台も移動していました」

そして獲物を見つけたような顔になった。

「これはニュースになりますね！」

首を傾けながら悪戯（いたずら）つぼく笑う彼女。この好奇心の強さは鎮守府一番だろう。

「あ」

急に反応する青葉さん。何かを受信したらしい。

「司令、秘書艦より『作戦司令部までお越し下さい』との伝言をお預かりしました」

「分かった」

心地よい潮風を浴びながら敬礼した私は彼女と分かれて作戦司令部へと向かった。
「お待ちして居りました」

部屋に入ると秘書艦が待機していた。お互いに軽く敬礼をしてから私は椅子に腰掛けた。

彼女は手にした暗号解読文を見ながら報告する。

「艦隊司令部から今夜20:00より全軍、臨戦態勢をとるようにとの電文が着ています」

「なるほど」

続けて別の書類を見た祥高さんは言った。

「一方の電報では美保空軍基地へ、陸攻の着陸時間を伝える内容が、着たきりです」

「陸攻?」

壁際の通信機前には駆逐艦の寛代が居た。先ほどから盛んに何かを受信している。その隣には当直明けの大淀さん。何かを書き留めている。

(まだ粘っていたのか)

そんな彼女も振り返った。

「今朝は空軍からも高尾電探施設の情報が逐一、提供されています」

「空軍から?」

意外な展開に思わず声が出た。

「こりや、きつと明日は雪だぞ」

私の言葉に、場の艦娘たちも頷いた。

改めて祥高さんが確認する。

「司令、今夜20:00から全軍『臨戦待機』ということ各班に通達して宜しいでしょ

うか？」

「そうしてくれ」

『はい』

秘書艦と大淀さんが敬礼した。

(上の連中は何か敵の情報を掴んでいるのか?)

よく分からないが一連の動きは尋常じゃない。

この雰囲気を感じたのか待機中の各班から自主訓練の許可申請が次々と入る。ほどなく鎮守府上空では艦娘たちの訓練機が盛んに飛び始めた。

(訓練する艦娘は頼もしいな)

訓練の慌ただしさは嫌いじゃない。私も防人(さきもり)の血が騒ぐのだ。

父は空軍の操縦士だった。息子である私も志を同じくする軍人だから。

艦娘と私は一致団結して敵に立ち向かうのだ。

「同じ仲間か」

このとき私は急に、着任以来ずっと肩肘張っていたことを感じた。

(無理に構えることもない)

そう思うと気持ちも軽くなった。

青葉さんと話したのも良かったのだろう。

私の小さな変化を察知したのか寛代が大きな瞳で、こちらを見ていた。

ちよつと焦った。

(この艦娘も、ときどき私の心を見透かすように、こつちを見る)

その黒髪には窓からの光が反射していた。

(初めて出会った時より、いくらか表情が明るくなったな)

緩やかに腕を組んだ私は窓の外を見ながら呟いた。

「私と美保鎮守府も少しづつ変わっていくのかな?」

その言葉で作戦司令部の緊張が少し緩んだのだろう。寛代が少し微笑んでるような

気がした。

外からは訓練機のエンジン音が断続的に続いていた。

以下魔除け

Reproduction is prohibited.
禁止私自轉載、加工 天安門事件
d a . P r o h i b i d a l a r e p r o d u c c i o n n o a u t o r i z a

第23話（改1. 3）〈遭遇〉

「ここに日向がいるのか？」

マイ「艦これ」「みほちゃん」

：第23話（改1. 3）〈遭遇〉

「演習中の駆逐艦隊より入電」

大淀さんが叫ぶ。

「美保関（みほのせき）の東北東8000の海上にて所属不明の潜望鏡を確認。交戦には至らず、哨戒班が追跡するも相手は海中に逃亡。別海域で再び潜望鏡を確認。複数の潜水艦が潜航中と想定されます」

私は壁の海図を見た。

「大丈夫なのか」

「今のところ我々に攻撃してくる素振りは見られません」

続いて祥高さん。

「隠岐で昨夜、敵の偵察部隊が攻撃されたから潜水艦を使っているのでしょうか」
私は腕を組んだ。

「多分そうだな。複数の潜望鏡を確認したから山陰沖全体に展開しているだろう」
「失礼します」

そこに大淀さんが割って入った。

「軍令部中央情報室から現在把握している敵の動向を逐一知らせよと暗号電文が届いています」

「ええ？」

そりやまた面倒な命令だ。

彼女はメガネをかけ直した。

「暗号電文の機密度が高くなっていますので送受信に時間が必要です。私の判断で逐一報告を送信して宜しいでしょうか？」

彼女なら大丈夫だろう。

「基本、それで頼む。特に重要なものがあれば私に報告してくれ」

続いて祥高さん。

「司令、索敵機を飛ばしますか？ 空軍が協力的とはいえ寛代や地上の電探の索敵は限界があります」

私は壁の駆逐艦の一覧を見た。

「そうだな」

続けて大淀さんが補足する。

「相手が潜水艦なら、やはり空のほうが発見が早いです」

私は祥高さんを振り返って言った。

「昨夜の演習で軽巡が何人か大破しているが、まだ飛ばせるのか？」

「はい、重巡利根が居ます」

「そうか。では利根に練度の高い駆逐艦をつけて出してくれ」

「はい」

そのとき、寛代が呟（つぶや）いた。

「敵の……通信」

直ぐに大淀さんが振り向いた。

「寛代ちゃん、これ！」

接続ケーブルを受け取った寛代が別のアンプに接続する。

無線のスピーカーから雑音混じりの何か呟く声が聞こえた。

残念ながら途切れがちで重要な情報は得られない。私は言う。

「大淀さん、敵の交信も念のため情報部に報告を上げてくれ」

「はい」

緊迫する情報が増えた。朝日が昇ったせいとか作戦司令室は暑くなってきた。鳳翔さんが気を利かせて飲み物を持ってきてくれた。

水分を摂って少し落ち着いたので私は所属艦隊のリストを眺めていた。

「おや？」

ふとある艦に目が留まった。

「ここに日向がいるのか？」

以下魔除け

Reproduction is prohibited.

禁止私自轉載、加工 天安門事件

Prohibition is unauthorized.

第24話（改1. 3）〈日向〉

「いえ、まだ半年ほどです」

マイ「艦これ」「みほちゃん」

∴第24話（改1. 3）〈日向〉

祥高さんが聞く。

「司令、日向をご存知ですか？」

「ああ、以前同じ鎮守府で指揮をしたことがある」

私は続けた。

「祥高さん。日向は今日、動けますか？」

彼女は壁の待機一覧を確認する。

「入渠はしていませんし問題ありません。呼び出しましょうか？」

「そうだな。30分後に執務室まで頼む」

「はい」

私は指令室を出ると2階へ上がった。

日は高くなり窓から海風が入る。

執務室は静かだった。祥高さんも作戦指令室に詰めている。ここは北側に面しているので作戦指令室よりは室温が低く過ごしやすい。

窓からは空軍の電探施設がある高尾山がみえる。海上からは空軍や艦娘たちの訓練音が断続的に聞こえてくる。

そのとき扉をノックする音がした。

「どうぞ」

「失礼します」

日向が入ってきた。彼女は航空戦艦、臨機応変な運用が可能だ。

「司令お久しぶりです。ここ栄転おめでとうございます」

「そんなに偉くは無いですよ。……懐かしいな日向」

「はい」

彼女は微笑んだ。

私は聞いた。

「ここにきて長いのか？」

「いえ、まだ半年ほどです」

第一印象は物静かに見える日向。その雰囲気も変わっていない。

彼女と私は舞鶴その他、何度か共に実戦も経験している。

日向は、あまり自己主張もしないが着実に任務を遂行するタイプ。艦娘には珍しい……というと語弊はあるが実直で生真面目な艦娘だ。

私の指揮下に入るとウマが合うのか、こちらがあまり細かい指示を出さずとも意向を汲んでの確に作戦を遂行してくれる。

航空機運用といえば一航戦の赤城さんも、よく気をつく艦娘だが彼女とはまた違う印象だ。

何度か作戦を実行するうちに私は日向には『さん』付けでなく『日向』と気兼ねなく呼べる数少ない艦になっていた。

彼女も呼び捨てにされても、まったく意に介さず以前より戦果が上がるようになって。まさに「戦友」なのだろう。

軍ではこういう貴重な出会いが、またひとつの絆となり宝になる。軍人冥利に尽きる瞬間だ。

私は言った。

「君が居ると聞いて心強い。実は昨日から日本海で敵の潜水艦が多数出沒している。今

回君に頼みたいのは索敵ではない」

日向は何か悟った表情を見せた。

「駆逐艦を付けて頂ければ直ぐにでも、ご期待に応えます」

「頼もしいね」

「いえ」

ここで初めて日向は少し恥ずかしそうな緩やかな表情を見せた。短めの髪が窓からの風に揺れていた。

艦娘といえども、その感情は普通の人間と変わらない。改めて、そう思った瞬間だった。

以下魔除け

Reproduction is prohibited.

禁止私自轉載、加工 天安門事件

Prohibition is not authorized

da.

第25話（改1. 3）〈利根〉

「抜錨します」

マイ「艦これ」「みほちゃん」

：第25話（改1. 3）〈利根〉

そのとき突然ドンドンという強い音で執務室の扉がノックされた。

「どうぞ」

私が応えると同時に、

「入るぞっ！」

威勢の良い艦娘が入ってきた。

「利根さんか？」

私が言うのと彼女はニタツと笑った。

「御主が噂の提督じゃな。吾輩が利根じゃ。よろしく頼む」

彼女は私の正面で直立の姿勢を取って敬礼をした。

「やつと実戦のようじゃな。もう演習は飽き飽きじゃ。日向と組むのか？」
まくしたてる利根さんに私は答えた。

「日向と利根さんは別部隊だ。利根さんには旗艦として索敵を中心に動いてもらう」
そこまで言うのと彼女は仰け反った。

「こそ、それは、やめるのじゃ！」

「はあ？」

私が答えると同時に黙っていた日向も少し驚いた表情を見せた。

頭（かぶり）を振りながら利根さんは言う。

「違う。その作戦じゃなくて！ えーっとホレ、吾輩の呼び方じゃ！」

私は苦笑した。細々（こまごま）と慌ただしいな。

「吾輩も日向と同じく、呼び捨てで構わん」

鳥肌が立ってる。

私は書類を置くと言った。

「分かった。では利根には足の速い駆逐艦をつける。潜水艦を中心に索敵だ」

次に日向を見る。

「君は、その情報を元に敵艦船を発見次第、攻撃を実施」

私は壁にある隠岐と島根半島の間の海図を指差しながら続けた。

「利根の部隊には攻撃中も弾着観測を続行し敵を確実に仕留めてくれ」

「了解じゃ」

「わかりました」

二人は敬礼して退出する。

それから私は本館1階にある隊員食堂へ下りた。

日本海は穏やかに見える。だが夜からの臨戦態勢に備え鎮守府内は既に特別体制だ。既に各班ごとには昼食時間の割り当てが変わって今日の食堂は閑散としていた。

いつも同じテーブルに居る寛代も今日は作戦指令室に詰めている。あの子も意外にタフだな。祥高さんも行ったたり来たりしている。

外では空軍機が飛ぶ。各班の艦娘たちも埠頭で調整をしている。

早めに昼食を取った日向と利根は駆逐艦を伴い抜錨した。日本海へ出撃したが、まだ敵の情報はない。

午後。湿度が増し大山は霞んで見えなくなった。冷たい風が吹くと水平線から真っ黒い雲が近づき空を覆う。ゴロゴロと遠雷も聞こえる。

「天気は下り坂か」

鳳翔さんが何人かの駆逐艦と一緒に洗濯物を抱えて走っている。

「下手すると利根や日向は荒天雨の中で戦うことになりかねないな」

私は、ふと舞鶴沖での苦い海戦を思い出していた。

「あの時は吹雪。それに比べりゃ、まだ夏の雨のほうが、いくらか良いか」

日向は小型の電探も装備しているはずだ。

しかし悪天候下での戦闘は体力の消耗が激しい。もし今夜から戦闘になれば艦娘たちは苦しい戦いになる。私は腕を組んだ。

「司令、元気を出すのです」

珈琲を乗せたお盆を持つ背の低い駆逐艦が声をかけてきた。

以下魔除け

Reproduction is prohibited.

禁止私自轉載、加工 天安門事件

Prohibida la reproducción no autorizada.

第26話（改1. 3）〈電・イナヅマ〉

「早く終わって欲しいよね」

マイ「艦これ」「みほちゃん」

∴第26話（改1. 3）〈電・イナヅマ〉

私は顔を上げた。そこには、お盆を持った可愛らしい駆逐艦がいた。

「君は確か？」

彼女は言った。

「はい『電（いなづま）』なのです。『雷（いかづち）』ではないのです」

ニコニコしながら、その艦娘は食卓に珈琲茶碗を置いた。

「司令官は大変なのです。珈琲を飲んで一休みなのです」

「あ、ありがとう」

……思い出した。いなづまは、この鎮守府では最初から居る艦娘だった。

「そうなのです。いなづまは最初からここにいるのです。何でも聞いて欲しいのです」私の思いを見透かすように彼女は答えた。

しかし外見と経験が一致しないのが艦娘たちの難しいところだ。

特に駆逐艦と見るとつい子ども扱いしたくなってしまう。

でも往々にして彼女たちは実は年齢が想像以上に高い。下手すると若い指揮官よりも年上つてこともあるのだ。

電はお盆を持ったまま言った。

「みんな大変そうだったのです。見ていて可哀想なのです。だから司令も、支えたいのです」

言葉は少し、たどたどしい。でも想いの深さはグツと来る。無愛想な大人連中に見せてやりたい。

多くの艦娘は純粹だ。そんな彼女たちを指揮する立場になると、その一途さが、かえって苦しくなることもある。

私が艦娘を指揮したくないのは、そういうところにもあるのだ。

だが、これは戦争だ。話し合いの通じない相手がわが国に攻めてくる以上、誰かが盾になり防御するしかない。

私は珈琲を手を取った。

「戴きます」

「はっ」

電はニコニコして立っている。不思議な子だ。

こんな小さな艦娘でも最前線で戦い傷つき、無数の悲しみを乗り越えて生還してきている。

そんなとき私はいつも自分の原点でもある、あの「白い海」に還らざるを得ない。

多くの犠牲の上に立つわが国。平和は微妙な力加減の中で成り立っている。いつ、どこから均衡が崩れるか。果たして終わりを迎えるのか。分からない。だが使命を持つ我々が戦い続けなければならない。

「早く終わって欲しいよね」

つい言葉が出た。

電は不思議そうに少し首をかしげながら言った。

「そうなのですか?」

私は苦笑した。

「いや、何でもない」

そして珈琲カップに口をつけた。少し気持ちが落ち着いた。

彼女は、お盆を持ったままニコニコして見守っている。

気温は次第に下がる。雷光と雷鳴の間隔も短くなってきた。窓の外で否妻が走ると艦娘たちが悲鳴を上げる。嵐になるな。

「出撃した彼女たちは大丈夫かな」
少し心配になった。

以下魔除け

Reproduction is prohibited.

禁止私自轉載、加工 天安門事件

Prohibida la reproducción no autorizada.

第27話（改1. 4）〈美保関沖海戦〉

「とうとう雨か」

マイ「艦これ」「みほちゃん」

：第27話（改1. 4）〈美保関沖海戦〉

私は時計を見た。

12：35

午後を少し回った頃、相変わらず遠雷が続いている。

電に礼を言つて立ち上がった私は再び鎮守府本館2階にある作戦司令室へと戻つた。そこでは電探や無線をモニターする祥高さんや大淀さんたちがいた。私も状況を確認しながら大淀さんが記録を付けるのを見守っていた。

12：45

利根の艦隊索敵機口号が美保関沖：北東5500の海域にて潜水艦らしき艦影を発

見。

12 : 50

利根は索敵範囲を集中。該当海域へ日向艦隊を急行させる。

13 : 00

美保関沖：風力8、気温23度。天候：小雨。

「とうとう雨か」

私は呟いた。

13 : 10

日向の艦載機に、対潜攻撃用爆雷を装着させる。

13 : 25

美保関沖：北東3500の海域にて感あり。日向爆装機3機：急きよ発進。

13 : 45

美保関沖：北北東2200の海域にて利根の索敵機が潜水艦の潜望鏡を目視。有効射程に入り次第攻撃するよう指示。

14 : 00

美保関沖：風力13、気温21度。天候：やや強い雨。

「雨……」

寛代が呟く。

「申し訳ない」

思わず呟いた。鳳翔さんが珈琲を持ってきてくれる。

14：10

日向の航空機から対潜攻撃を開始。

14：20

敵の潜水艦1隻に爆雷の着弾を確認。

14：35

美保関沖：北北東1500の海域にて当該潜水艦1隻の沈没を確認。着任後、初の戦果となる。

軍令部中央情報室に戦果を打電。

〈作戦継続せよ〉

との返信あり。引き続き、索敵と哨戒を続行。

14：45

美保関沖：北方1800付近の海域にて日向が浮上し航行する潜水艦を視認。迷わず艦砲射撃による潜水艦への直接攻撃を開始。

14：50

利根の索敵機が現場で合流。弾着修正のうえ日向が追加砲撃。

15 : 10

敵潜水艦2隻に相次いで着弾を確認。

15 : 20

敵潜水艦1隻の沈没を確認。

15 : 35

敵潜水艦1隻が逃亡するが引き続き日向の砲撃により2発目が着弾、沈没を確認。

15 : 45

引き続き哨戒。

16 : 00

雨が激しくなり、うねりが出てくる。艦娘たちが心配だ。

現場のやり取りから隊列が何度も崩される模様。

『しっかりするのじゃ!』

雑音に混じり時折、利根の苛立つ無線が入る。

16 : 25

『ちよつと疲れたのじゃ』

疲労を訴える利根の声を受信する。

『……』

なんとなく利根を気遣う日向の息遣いも感じた。

16：45

美保関沖：北西3500の海域

風力20、気温16度。天候：かなり強い雨。

17：00

その後、敵は確認されず。悪天候の夕暮れでかなり視界が悪い模様。

17：30

軍令部中央情報室より、その後の戦果報告の催促がしつこい。こちらからは然り気

（さりげ）無く無視させる。

「実際、何も無いんだよ」

つい、ぼやく。

18：00

美保関沖：北西4000付近の海域

風力22、気温15度。天候：強い雨と、風。

18:15

日向からも艦載機の妖精の疲労が激しいと報告。部隊の撤収を軍令部中央情報室に打診する。

18:25

軍令部中央情報室は、作戦続行を求めてくる。だがこれ以上は艦娘に無理強いをしよう。

「構わん、撤収だ」

「はこ」

軍令部の命令は無視して利根と日向には、いったん帰還指示を出す。

18:30

利根、日向両部隊から現地出立の報告が入る。指令室に安堵の空気が流れる。

18:45

帰還航行中も警戒を怠らないが、敵との遭遇は無い。敢えて最小限の灯りを点けさせて互いに衝突に警戒させる。

19:00

美保関沖：北方1500付近の海域

風力18、気温13度。天候：小雨。

19:05

日向も疲労を報告してくる。

『済みません』

「いや、焦らなくても良い」

日向にしては珍しいと思った。艦隊速度が通常時より大幅に低下。

19:15

『ちよつと……まずいのう』

利根が再び疲労を訴え速度低下。日向が随走するため艦隊の速度が10ノットより低下。

19:30

美保関港に停泊中の駆逐艦隊より利根と日向の艦影を目視との報告あり。指令室全員、安堵する。

19:40

念のために飛ばしていた索敵機より緊急入電：魚雷航跡発見ス。

日向が叫ぶ。

『回避！』

敵の狙いは航空戦艦だったが彼女は回避行動を取って1発目はギリギリかわした。

次いで、2発目の航跡を発見。それは利根に接近した。

『なに?』

慌てる利根。しかし彼女は速力が出ず回避し切れない。

『あ』

疲労した利根の、もがくような。

しかし諦（あきら）めたような叫び声が無線機から流れた。

我々には何も出来ないのか!

以下魔除け

Reproduction is prohibited.

禁止私自轉載、加工 天安門事件

da.
Prohibition is unauthorized.

第28話（改1. 3）〈深海棲艦〉

「しんかいせいかん？」

マイ「艦これ」「みほちん」

∴28話（改1. 3）〈深海棲艦〉

「これが最後の戦闘か。じゃが悔いは無いぞ」

作戦指令室の無線機から利根が呟く。

私は叫んだ。

「利根え、最後まであきらめるなっ！」

間髪を居れず

「てえーっ！」

珍しく日向の叫び声が入った。次の瞬間スピーカーが爆音でガリガリと壊れそうな音を立てた。

ハツとした大淀さんが立ち上がって窓を開いた。

「司令、あれを！」

彼女が指差した方向、夜の美保湾に海戦の様子が見える。島根半島の右側の海にはボンヤリと幾つもの大きな水柱が立つのが見えた。

「日向？」

眩くと直ぐに彼女の声が入った。

「機銃掃射により敵魚雷、破壊！」

さすが、日向。

「恩に着るぞ日向」

利根の弱々しい、かすれ声が入った。

「はは利根も、そういう声出せるんだあ」

などと感心している場合ではない。

「双眼鏡はあるか？」

私は大淀さんから受け取った双眼鏡で水柱が上がった方向を覗いた。

辺りは既に暗い時間帯だ。ただ海上は水面（みなも）が鉛色の空を反射して陸地よりは多少明るく見える。遠くには日向と利根、その他の駆逐艦らしい艦影がポツポツと確認できた。

「山陰らしい水墨画のような絶妙な陰影だ」

いやいや、感心している場合ではないぞ。

魚雷攻撃の後、敵の潜水艦は沈黙している。

「いったん攻撃を止めたのか？」

大淀さんが振り返る。

「戦闘海域では敵との睨み合いが続いているようです」

無音ながら海域のピリピリした雰囲気、こちらにも伝わってくる。

いつの間にか美保湾の雨はやみ風も緩やかになっていた。海上のモヤも晴れている。

次の瞬間、私は日向の右側に何か白い突起物を確認した。

「あれは何だ？」

大淀さんも別の双眼鏡で確認を始めた。

「あれは、深海棲艦！」

私は息を飲んだ。

「しんかいせいかん？ あれが」

敵の本体を肉眼でハッキリ見るのはこれが初めてだ。遠目にも、その禍々しい気配が

伝わってくる。

奴は不気味に髪を空中に漂わせながら何もせず佇（たたず）んでいる。全身が白つ

ぼい彼女、暗い背景と相まって絶妙な対比だ……いやいや感心している場合ではない。「むっ」

気のせいだろうか？ 敵である彼女が遥か彼方から私を見て笑っているように感じた。

「まさか？」

鳥肌が立った。思わず双眼鏡を下ろした私は慌てて両腕を押さえた。

寛代が大きな瞳をこちらに向けていた。

「大丈夫だ、寛代。単なる武者震いだよ」

私は、そう言いながらも引きつった笑顔を返すのが精一杯だった。

以下魔除け

Reproduction is prohibited.

禁止私自轉載、加工 天安門事件

Prohibition is unauthorized

da.

第29話（改1. 3）〈敵ながら〉

「敵ながら天晴れよね！」

マイ「艦これ」「みほちゃん」

：29話（1. 3）〈敵ながら〉

「悔しいけど敵ながら天晴（あっぱ）れよね」

暁は急に立ち上がると胸を張って言った。

ここは鎮守府本館1階、夜の食堂だ。時計は既に日付をまたいで深夜1時だった。臨戦態勢になっているが警戒水準は先ほどよりも引き下げられていて今のところ平穩である。

そして夜だと言うのに昨晩、出撃していた暁と彼女を取り巻く第六駆逐隊の艦娘たちが、いつまでも盛り上がっていた。

昨晩の海戦は、どうなったか？ と言えば、あの後も日向と利根は現場海域で敵の深海棲艦と、しばらく対峙していたのだった。

しかし敵はその後、意外にも何もせず静かに日本海沖へと立ち去って行った。日向や利根たちに背中を見せながらも余裕タツプリで立ち去った深海棲艦たち。

そんな奴らを見ながらも日向や利根は追撃すら出来なかった。疲労し負傷していたとしても悔しい限りだ。

基地に戻った利根は、ぼやいた。

「戦闘するよりも睨み合っている方が疲れたのじゃ」

そうだろう。その敗北感にも似た精神的ダメージは大きい。

もつとも沈着冷静な日向と、あまり深く悩まない利根だから良かったともいえる。そういう意味では的確な人選だったか。

「実際もし、あれから敵が更に攻撃していたら？」

日向や利根で持ち堪える事は不可能だったに違いない。むしろ余裕を見せて立ち去った深海棲艦の不敵な笑みが今後の苦戦を予兆させるようだった。

「もし3発目を受けたら、この私が身を挺して利根を守るつもりだったのよ」

暁は、なおも胸を張って演説を続けている。そう、利根の部隊には暁も加わっていたのだ。

「すごいのです」

電が手を叩く。

「あなた寝なくて良いの？」

食器を片付けながら雷が横槍を入れる。

「もうすぐ寝るのです。でも戦況報告を聞くことも大切な勉強なのです」

そう言いながら電は私のほうを向いた。

「司令、そうですよね」

ニコニコしている。

「あ、ああ」

いきなり振られて私もちよつと驚いた。しかし鎮守府に長年居るせいも電は理屈をこねるのはうまいな。

「艦娘がそうなのか？ この美保鎮守府がそうさせるのか？」

私は口に出してみた。

普通の海軍なら、こういう緩さは許されないだろう。彼女たちを見ながら改めて思った。

しかし暁をはじめ艦娘たちの前向きな姿勢。これは何ものにも代えがたい武器だ。それに負け戦にもかかわらずアツケラカンとしていた利根。最後まで冷静に戦線を守り抜いた日向。貴重な艦娘たちだ。

残念ながら今日の戦果では鎮守府として、まだ十分とは言い切れない。

だが司令官の私として出来ることは彼女たちの純粹な想いを十分に發揮できるように全力で支援することだ。今さら、あれこれ悩んでも仕方がない。

明日は軍部や他所（よそ）の鎮守府からの来客で忙しくなる。この様子なら恐らく敵も黙つてはいないだろう。

「はあ」

思わずため息が出た。

祥高さんや寛代は、まだ作戦指令室に張り付いている。今夜は彼女たちに任せて私は明日に備えて少しは寝ておこうか。

私は、おもむろに立ち上がって軽く背伸びをした。

いつの間にか窓の外には明るい月が出ていた。その輝きは昨日より、ちよつと穏やかに見えた。

以下魔除け

Reproduction is prohibited.

禁止私自轉載、加工 天安門事件

Prohibition is not authorized

d
a.

第30話（改1. 5）〈錯綜と弱小〉

潜水艦が居ないとは！

マイ「艦これ」「みほちゃん」

：第30話（改1. 5）〈錯綜と弱小〉

翌朝。

早々に朝食を終えて執務室入りした私は秘書艦から報告を受けていた。

「今朝、05:00に軍令部よりより発令。臨戦態勢は解除され第三種警戒態勢に下げられています」

「5時?」

また軍令部にしては早朝から珍しいことだ。

昨夜の雨で今朝から湿気が多い。既に昇った太陽の日差しは早くもギラギラして夏を強く感じる。

「本日の視察団の列車到着時間は暗号でも伏せられています。各地から到着した参謀たちは各自判断して降りる駅を決め、迎車等で08:30には美保鎮守府に到着予定です。また本省の将校と舞鶴の参謀は大艇にて09:00には直接当鎮守府に接岸する予定となつています」

淀みない祥高さん。

腕を組んだ私は気になつた部分を聞いてみた。

「大艇で直接接岸とは仰々しいな。ほとんど臨戦態勢だ」

軽く頷いた彼女は続けた。

「平行する電報の情報では視察団は、そのまま昨日と変わらず陸攻にて07:30に空軍美保飛行場に到着予定となつています」

私は時計を見た。

「いま7時15分過ぎだから、空港到着は直ぐだな」

「左様です」

祥高さんは応えた。

「祥高さん、今朝から機動部隊は出ているよね」

彼女は少し微笑んで思い出す素振りを見せた。

「はい。かなり不服そうな川内と、補佐役の神通支援部隊が弓ヶ浜沿岸に出ています。」

また山城を中心とした攻撃部隊は少し沖合の美保湾に既に展開中です」
「うむ」

私はアゴに手を当てた。

（川内だっけ？ どうせあの夜戦娘は「夜戦ン〜！」とか言ったんだろうな）

昨日、入渠明けの川内の川内の出撃は遠慮させたが、やっぱ煩（うるさ）いから直ぐ投入すべきだったかな？

アレコレ思いつつ私は立ち上がって窓辺に近寄った。

（ひよつとして上の連中は）

そのまま大山を見ながら思索する。

（電報の情報通りなら陸攻を3機使って敵の標的にさせるつもりか？）

「いや」

つい独り言。

（美保湾は今朝から、うちの艦隊が押さえてる。もしそこに予定にある陸攻が降りてきたら？）

ふと、ある考えが過ぎる。

「敵は中海（なかうみ）で待ち伏せする気か？」

最短期は僅か数キロの弓ヶ浜だ。

眩きながらも心の中では否定してみる。

（いや、まさか。浅い中海では有り得ない）

そこで私は振り返った。

「祥高さん、ここに潜水艦娘は居るのか？」

彼女は首を振って申し訳なさそうに言った。

「いえ美保鎮守府には潜水艦が所属していません。陸軍の『まるゆ』が仮停泊しているくらいです」

「な、なんと！」

思わず馬鹿みたいな返事をした。

「山陰地方の要（かなめ） 足る美保鎮守府で、この有り様か」

ガツクリ来た。

いや、もちろんここは設置されたばかり。どうしても艦隊編成が歪（いびつ）なのは仕方がない。

（それでも潜水艦が居ないとは！）

もはや舞鶴よりも、かなり下。実質的には半分以下の艦隊勢力だ。

現存の潜水艦らしきものは、かろうじて陸軍の『お荷物』だけか。

「『まるゆ』は実験船だろ？」

「はっ」

祥高さんも苦笑している。

『まるゆ』は実戦に投入出来ない。悪く言えば陸軍から押し付けられた。

「こりゃ、だめだ」

思わず本音が出た。あまり貧弱な現実を突き付けられた私は、へなへたと全身の力が抜け椅子からずり落ちそうになった。

「司令、顔色が」

祥高さんが心配する。

「……」

いつもなら直ぐに「大丈夫だ」って返したいところだが、さすがにこの弱小ぶりは衝撃的だ。

（やっぱり美保は私への左遷人事だったか？）

海軍上層部からの嫌がらせだろうか？

（しかもそこへ陸攻の囷作戦だぞ）

私は天井を仰いだ。

「はあ」

深くため息をついた。

「やれやれ」

悩んでも始まらない。もしこれが上層部からの嫌がらせだったとしても指揮官として責務は果たさなきゃ。

そのとき、かなり遠くから聞き覚えのある陸攻の低い発動機の音が徐々に響いてきた。しかも一機ではない。やはり編隊だ。

「なんだか……まずいな」

悪い予感がした。

あの長い髪の深海棲艦。不気味で不敵な瞳の笑顔が私の脳裏に浮かんだ。また鳥肌が立った。

そんな中、陸攻の音は美保湾じゆうに低い重奏を奏で続けていた。

以下魔除け

Reproduction is prohibited.

禁止私自轉載、加工 天安門事件

Prohibition is unauthorized

第31話（改1. 3）〈開戦と狂気〉

「正気の沙汰ではないな」

マイ「艦これ」「みほちん」

∴31話（改1. 3）〈開戦と狂気〉

陸攻の飛行音に続けて突然、美保湾にドンと言う大きな砲撃音が響いた。この低い音は？

「山城さんか！」

私と祥高さんは執務室を出ると向かいの作戦指令室へ入った。

「駆逐艦『時雨』より入電、敵駆逐艦隊と遭遇、全艦応戦中！」

大淀さんが叫ぶ。

電探を確認した祥高さんが報告する。

「陸攻は、やや飛行ルートをずらしながら現在、美保空軍飛行場への着陸態勢を継続中」
「本気か？」

私は呆れた。

美保湾上空には無数の弾幕が張られている。いや艦娘だけじゃない。境港のお台場や移動式高射砲からも砲撃されていた。海上には水柱と砲声で、かなり白煙が立ち込めている。

「陸攻2機は美保湾上空で右に大きく旋回中、島根半島北側からの着陸を試みる模様。まだ一機が高度を下げながら直線で当初の飛行ルートを維持」

大淀さんが報告する。海上は白煙に覆われ双眼鏡では目視不可能だ。

「陸攻、まだ飛んでるよ」

寛代が呟く。電探の目で見えるのだ。

『痛アいつ！』

山城さんが無線の向こうで叫んだ。被弾したか。

彼女の部隊は、かなり旗色が悪そうだ。随走する軽巡や駆逐艦からも悲鳴や叫び声が聞こえる。ただ戦闘中は詳細な情報が入らず戦況がつかめない。

「陸攻が落ちた」

「は?」

寛代が眩くと同時にドドンと低い爆音が響く。慌てて窓から海上を見る。美保湾に大きな火柱が立っているのがボンヤリ確認された。窓ガラスがビリビリと震えた。

『陸攻が敵……旗艦に突っ込み爆破。双方……大破、海に沈没』

『パイロットは脱出!』

前線の艦娘たちからの無線連絡が相次ぐ。

だが指令室では誰も沈黙していた。

「私は以前、陸攻が墜落した瞬間を見たことがある」

何気なく呟いた。

「もともと空っぽに近い機体だ。爆装でもしていない限り、あそこまで火柱が立つはずが」

そこまで言っただけは、ハッと気付いた。

「まさか自分から突っ込んだのか?」

それに呼応するように艦娘たちから次々と入電する。

『陸攻って、あんなに爆発するものなの?』

『あれは攻撃用の爆薬を積んでたみたいだな』

『へえ』

やはり最初から、あの陸攻は自爆攻撃をするつもりだった。

「敵旗艦一隻に陸攻を丸ごと一機献上か？ 正気の沙汰じゃない」

私は吐き捨てるように言った。

「自爆特攻は大嫌いだ」

「脱出を想定して立案されていたようですが」

祥高さんが補足する。

「もちろん、そうだろう」

そう言いながらも私は憤りで全身がワナワナと震えた。

「前線兵士のことを全く考えていない参謀連中の発案だろう」

「……」

再び沈黙。時折無線で艦娘同士の交信が入る。

私は腕を組んだ。

特攻。

艦娘たちの前では本当に止めて欲しい作戦だ。誰だって特攻隊を見たら明日は我が身と思う。

ところが最前線の異常な雰囲気の中では否定する以前に『私も一緒に特攻しよう！』という気分に陥ることがある。これが一番危険なのだ。

「お前たちは間違つても特攻なんて考えるなよ！」

つい口走る。まさに、戦争（戦場）の狂気を目の当たりにする思いだ。

もう、あまり深く考えたくなかった。

もし立案した参謀が目の前にいたら今の私は躊躇（ちゆうちよ）なく殴りかかっている。

だが私は急に苦笑した。

「それもまた、狂気の種類か」

戦争とは関わる者全ての精神を歪めるものだ。そういう狂気の中で、いかに自分を律し続けるか？

少なくとも帝国海軍は崇高な精神の元で闘うべきだ。また兵士（艦娘）たちを単なる狂信者にしないためにも彼女たちは、きちんと指揮をしたい。それは司令官の戦いでもある。

私は唇をぐつとかみ締めた。

以下魔除け

Reproduction is prohibited.

禁止私自轉載、加工 天安門事件

d
a. P
r
o
h
i
b
i
d
a
l
a
r
e
p
r
o
d
u
c
c
i
o
n
n
o
a
u
t
o
r
i
z
a

第32話（改1. 4）〈神戸と呉と〉

「ようこそ美保へ、私が司令です」

マイ「艦これ」「みほちゃん」

∴32話（改1. 4）〈神戸と呉と〉

朝から美保湾で戦端が開かれ、もはや視察団の出迎えどころではなかった。

「司令、呉鎮守府と神戸鎮守府の両参謀が到着しました」

秘書艦の報告で我に返った。

「あ、そうだった」

目の前で起きている戦闘を最優先させてしまうのは指揮官の習性だな。

彼女は続ける。

「ご本人たちは直接、作戦司令室入りを希望されています。荷物を整理して頂いてから、そのままこちらへお通して宜しいでしょうか？」

「ああ、そうしてくれ」

応えながら改めて自分の作業服姿に気付いた。

「ウーン、この服どうするか」

私は照れ隠しに呟いた。

しかし現実問題、制服が無いから今更、仕方が無い。

内線を受けた大淀さん。

「呉と神戸からのお客様が上がって来られます」

「ああ出迎える」

私は、そのまま廊下に出て呉と神戸を出迎えた。

「ようこそ美保へ、私が司令です」

「え?」

「あ?」

お互い起立したまま作戦指令室の入口付近で軽く挨拶をした。

私の作業服については結果的に、さほど心配する必要はなかった。挨拶もそこそこに

神戸の参謀が言った。

「司令、神戸の提督からの指示で制服の替えをお持ちしました」

彼は風呂敷包みを差し出した。ああ、友人は約束を守ってくれたな、と思った。

美保湾からの砲声と地響きが轟く中、空軍や海軍の戦闘機も盛んに鎮守府の上空を飛び交う。

黒い敵機も弓ヶ浜半島の上空を旋回し松林に隠された陸軍の高射砲攻撃を受ける。だが残念ながら陸軍の火力の効果は薄い。

呉と神戸の作戦参謀たちは、しきりに双眼鏡で覗き無線を確認する。
若い神戸が言う。

「陸攻をぶつけると言うのは本省の作戦参謀の発案です。ただこの状況では期待した成果は上がらなかったようですね」

「やはりそうか」

私は返した。思った通り、あの陸攻は囿(おとり)だったか。

「多大な犠牲を払って敵の旗艦一隻とは残念な結果だな」

私より齢を重ねた呉の参謀が言う。それは同意見だ。

「ただ、そのお陰で山城さんの部隊が多少、敵の攻撃を防御する時間が稼げたようです」
大淀さんが状況説明をする。

「なるほど」

美保鎮守府としては感謝すべきか。

「しかし、この状況で本省と舞鶴組は無事に着水できるンかなあ」

呉は心配そうに言った。確かに、敵の攻撃は一向に収まる気配が無い。

「まだ陸攻が2機旋回していますから、いざとなつたらあれをまた、ぶつける気でしよう」

神戸が答えた。私はゾツとした。

艦娘が特攻するよりは良いが陸攻での特攻は、いい加減にして欲しいな。

そんな私の表情に気付いた彼は話題を変えた。

「そういえば私は艦娘が実戦で戦っている姿は初めて拝見します。なかなか強いですね」

呉も頷いた。

「うちの鎮守府にも戦艦大和と長門が居りますが、なかなか扱いにくくて」

そこまで言った呉は、この部屋に艦娘の祥高さんたちが居ることに改めて気づいた。

「おほん」

制帽に手をやって咳払いで誤魔化した。

彼のその所作は嫌味が無かったので、むしろ可愛らしかった。

事実、祥高さんたちはお互いに顔を見合わせて少し微笑んでいた。この呉の参謀は性格は良さそうだ。

「さて」

私は改めて戦況を確認した。

(やや押されているか)

このままでは、また陸攻に特攻させる羽目になりそうだ。だがそれは避けたい。

「うーむ」

私は腕を組んで思索した。着任したばかりでは右往左往しかないな。

そのとき寛代が呟くように言った。

「もうすぐ大艇が来るよ。いま由良沖」

「来たか本省」

無線封鎖され向こうからの直接連絡は入らない。

(これもまた、じれったいな)

「無事を信じるしかないか」

以下魔除け

Reproduction is prohibited.

禁止私自轉載、加工 天安門事件

Prohibition is unauthorized.

da.

第33話（改1・4）〈陸攻の突入〉

「やー！ また出た」

マイ「艦これ」「みほちゃん」

：33話（改1・4）〈陸攻の突入〉

既に太陽も、かなり昇った。

大淀さんが二人の参謀に戦況を説明している。

「本省と舞鶴の二式大艇が二機、由良沖まで来ています。別の二機の陸攻が中海（なかうみ）側から美保空軍基地への強行着陸を試みています」

敵の戦闘機が飛び交う中で、かなり思い切った選択だ。

私は腕を組んで付け加えた。

「これが最初から囿（おとり）任務なら、かなり無謀な飛行ルートを選択することもあり得ますね」

それを聞いた呉参謀は私に問いかけるように言った。

「あいつら由良沖の大艇から敵の注意を引きつけるために？」

すると神戸参謀が初めて悟ったように言う。

「では、あの飛び方は意図的に？ 攻撃をかわして着陸を強行するとか」

そこで私は彼を見て応えた。

「この状況で、あの突進振りは、ちよつと異常でしょう」

再び双眼鏡で覗いた呉も「あれは無謀やなあ」と改めて呟いたくらいだ。

既に一機の陸攻がかなり強引に旋回して着陸態勢を強行していた。そして滑走路まであと少しという瞬間。

「出たー！」

呉が大声で叫んだ。私も双眼鏡を手にして改めて中海方面を覗いた。

意識しないと分かり難いが弓ヶ浜半島の松林の間から見える中海の水面に黒い影が出現しているのが分かった。

「深海棲艦か」

私は呟いた。

呉も双眼鏡を動かしながら応える。

「複数、えつと二体、三体。いや恐らく、もつと居ますな」

私は双眼鏡を外して考えた。今回の敵は妙に迷いが無い。自分が着任したときの空襲の時機や狙いもそうだった。

それに此度（こたび）の敵作戦行動は、なかなか不適合だ。地勢を正確に把握し恐らく我が軍の情報まで挿入している。

孫子の兵法ではないが闘う前から我々に心理的な圧力をかけてくるようだ。彼女らは想像する以上に知的なのだ。そもそも昨日の利根や日向に見せたあの余裕ある態度からして不気味だ。

その間にも中海の陸攻は敵が出現したにも拘らず真つ直ぐ空軍の滑走路へ降りようとしている。

呉から敵の出現場所を聞いた神戸が改めて双眼鏡を覗きながら心配している。

「また特攻ですかねえ？」

その問いに応える間もなく

「や！　また出た」

呉が小さな叫び声を上げた。

私も慌てて双眼鏡を覗いた。中海から突然また別の深海棲艦が出現したのだ。

松林の木陰からは昨日、美保湾で見たのとは明らかに別の敵の姿が見えた。妙な触手が伸びて、まさに異形。

「グロテスクだな」

「ひっ」

神戸は双眼鏡から顔を背けた。その反応に私と呉は顔を見合わせた。まだ若い彼は肉眼で深海棲艦を見るのは初めてのようだ。

「し、失礼しました」

さすがの神戸も恥ずかしそうな顔をした。

その間にも陸攻は弓ヶ浜上空で周りから敵に囲まれていた。もはや着陸するのは無理と悟った機体が離脱を試みるのが見えた。

だが、あつという間に四方から敵の攻撃を受け満身創痍となった次の瞬間、機体は激しく炎上し爆発した。

「陸攻、美保空軍基地の滑走路に墜落」

大淀さんが報告する。

「あちゃー！」

呉が呟く。

自爆用の爆薬が満載だから威力は大きい。これでまた、しばらく美保空軍の滑走路は使えなくなる。

「操縦士は脱出した模様」

大淀さんが伝えた。

私は呆れたように言った。

「明らかに自爆前提だな」

「ただ作戦として脱出方法も予め想定しているようです。ですから単なる特攻ではないかと」

神戸が言い訳するように続けた。

でも、あまりにも無謀だ。

「あれは、どう見ても特攻だ」

私は吐き捨てるように言った。

以下魔除け

Reproduction is prohibited.

禁止私自轉載、加工 天安門事件

Prohibition is unauthorized.

第34話（改1. 4）〈山城の攻防〉

「司令……有り難う」

マイ「艦これ」「みほちゃん」

…34話（改1. 4）〈山城の攻防〉

気がつくと時計は09:00を回っている。

「本省と舞鶴連中は間に合いませんね」

私が状況確認と併せて二人の参謀に伝える。彼らも頷いた。

「仕方ないな」

「そうですね」

美保湾で始まった敵との戦闘は、さらに激しさを増す。湾では白煙が立ち込め砲声が響く。

「二式大艇が海側から、この鎮守府に近づくことは、もはや難しいな」

副司令の祥高さんは寛代の呟くような報告を聞き、しきりにメモを取っている。そのメモを確認した大淀さんが作戦配置盤上の駒を動かす。

祥高さんが再度、確認して私に報告する。

「山城さんの艦隊は再び敵に押されています」

次いで大淀さん。

「由良沖で川内さんや神通さんの艦隊も援護する予定でしたが今日は敵が多くて分断されています」

私も盤上の駒を見て腕を組んだ。

「おまけに敵は浅い中海にまで出現して陸攻を一機、落としたからな」

それを受けて呉も続ける。

「奴（やつこ）敵）さんも一気に勝負をかけてきた！　って感じやなあ」

（敵も総力戦か。面倒な状況だ）

「大挺は接近を断念し由良沖で着水した模様！」

大淀さんが報告する。やっぱり。

私は返した。

「川内と神通さんを大挺護衛のため由良沖方面へ少しづつ後退させてくれ」

「了解しました」

頷く大淀さん。

「くれぐれも敵に悟られないように」

「はい」

盤上を見つめる呉が心配する。

「かなり敵しそうやなあ」

「そうですね」

着任早々いきなりの戦闘。しかも敵は多勢で戦力もありそうだ。

祥高さんが盤上の敵駒を動かした。

それを見ると川内姉妹を下げた影響か山城さんの艦隊に敵の駒が集まって来ている。

ちようど、その時だ。

『やだ、魚雷?』

雑音に混じって山城さんからの無線が入った。美保湾は相変わらず弾幕と水柱で見通しが悪い。さらに黒煙の数が増えているのが心配だ。

『きやあつ』

という叫び声と共に山城さんの無線が途切れ途切れに入った。

『……各艦は私を顧みず前進して! 敵を撃滅してください!』

思わず私は無線機に向かって叫んだ。

「山城さん、引けっ！ 直ぐに後退だ」

知る人ぞ知る私流の『迷わず引く』戦術だ。

『司令、嬉しい。でも駄目、戻れませ……』

彼女の反応には呉と神戸も少し意外な表情を見せた。もちろん私も同様だった。

(嬉しい?)

あの山城さんからは想像できない反応だった。しかし激しい雑音が無線をかき消した。

(あまり情が移ると厄介なのだろうか?)

兵士とはいえ艦娘だつて感情はある。私は努めて冷静さを保つようにした。

爆音と共に衝撃波を伴った地響きが美保湾から断続的に響く。鎮守府の窓ガラスは幾度もビリビリと震え、指令室の受像機の画像が歪む。

弓ヶ浜全体に戦闘の黒煙が増え、かなりきな臭くなってきた。

地元自治体の警戒放送が何度も響く。墜落する敵機と上昇する味方機の音が交差する。

無線からは艦娘の叫びと怒号。警報と爆音が入り乱れ指令室も含め地域全体が戦場

と化していた。艦娘も必死に一進一退を繰り返している。

ただ艦隊主軸である山城さんが心配だ。

（思い切つて、強引に引くべきか？）

艦娘を指揮していて判断に迷う一番嫌な瞬間だ。それは二人の参謀も同じ気持ちだろう。

この間、私には長い時間を感じられた。

（何の因果で艦娘の指揮を執ることになったのやら）

……つて今更、嘆いても始まらない。

業を煮やした私は思わず無線機に近寄つて叫んだ。

「山城部隊の誰かつ、状況を報告しろ！」

『……』

無線機はガリガリという雑音を返すのみ。

「ゴホッ、ゴッほ」

やや年配の呉が咳き込む。とうとうこの鎮守府にまで黒煙が達したのだ。

「ココにまで硝煙が来ると言うことは、現地は激戦ですね」

若い神戸も身を屈（かが）める。

「状況把握どころではないか」

私も諦めかけた。

しかし次の瞬間。

「間に合いましたあ！」

……という軽い声が響いた。

『斉射あ！……ちよつとそこの駆逐艦、早くどけて！』

（えつと、この声は）

「伏せろつて言つてもなあ」

ハンケチで口元を押さえながら苦笑する呉。なるほど、艦娘の強引さを、よく分かっている。

『改めて、斉射あ！』

美保湾からは聞き覚えのある戦艦の砲声が響く。

「新車の艦娘ですか？」

神戸も聞く。

「この音は、あいつか？」

思い返すように私は美保湾を見渡した。

以下魔除け

d
a.
P
r
o
h
i
b
i
d
a
l
a
r
e
P
r
o
d
u
c
c
i
o
n
n
o
a
u
t
o
r
i
z
a
R
e
p
r
o
d
u
c
t
i
o
n
i
s
p
r
o
h
i
b
i
t
e
d.
禁
止
私
自
轉
載、
加
工
天
安
門
事
件

第35話（改1. 3）〈比叡参上です！〉

『ハイツ、比叡です！』

マイ「艦これ」「みほちゃん」

：35話（改1. 3）〈比叡参上です！〉

「提督、あれを」

大淀さんが美保湾を示す。

山城さんを取り巻く敵艦隊の周辺に幾つもの水柱が立ち上がっている。

「友軍ですか？」

神戸が安堵したように言う。敵の攻撃が少し緩んだようだ。

爆音が少し収まり視界も回復しつつあった。

その時、無線機から軽い声が響く。

『司令え！ 聞こえますかあ？ お久しぶりですっ！』

この声は

「比叡か？」

『ハイッ、そうです！』

オオっという感じで指令室に安堵感が広がる。

「やっぱり軽いな」

私は苦笑した。

『司令えのために、日本海を全速力で突っ走ってきましたあ！ もうこれ以上、奴等の好

き勝手にはさせませんからっ』

「ああ」

思わず生返事。正直、彼女には、こんな応対でも本人が全く気にしない。逆に修羅場の戦闘中には、それが助かるのだ。

「元氣そうで良かった」

『はいっ！』

間髪を入れず無線に反応。このノリも変わらない。

『比叡？』

そこでボソツと山城さんの呟きが入ると直ぐに反応が返る。

『山城お姉様、少しジツとして下さい！ さっきのは威嚇です。今度は本気で狙います

からっ』

「軽く言っているけどホントに大丈夫か？」

私はわざと大きめの声で言う。無線は聞こえているはずだが比叡は無視した。

『全門、斉射あ！』

断続的な砲声が美保湾に響く。新たな黒煙が立ち上った。

『敵駆逐艦、大破2、撃沈3！』

山城さんの随走艦から次々と戦果が入る。発言が軽いとはいえ金剛型だ。やはり攻撃力は大きい。

『よしー』

海の上で拳を振り上げている比叡の姿が思い浮かぶ。

しかし反対側の空を見ると陸攻が弓ヶ浜上空を旋回していた。

(このままだと、また中海の敵に狙われるぞ)

そこで私は思い付く。

「比叡、聞こえるか？」

『はいっ』

「中海……半島の反対側の海に居る深海棲艦を狙えるか？」

『やってみますっ！』

無線から計算する眩き声と同時に軽く二発の発射音。

直ぐに上空を砲弾の滑空音がした。

だがズズンと嫌な地響き。大淀さんが報告する。

「比叡の砲弾は美保空軍基地に着弾」

直ぐに神戸が双眼鏡で西方向を覗く。

「白煙が上がってますね」

「はあ」

私がつめ息をつくと同時に比叡の軽い声が叫んだ。

『とつ遠いです。届きませんっ司令っ！』

（ダメだったか）

「滑走路、2発命中」

寛代が呟く。

唸り声とともに悔しそうな比叡。

『だ、ダメですう！』

私は肩をすくめた。

「射程距離外……見たら分かるよ」

「しっかし今日の美保空軍基地は踏んだり蹴ったりやなあ」

腕を組んだ呉がニヤニヤしながら面白そうに言った。そういう問題ではないと思うが。

『むむむ』

無線越しに比叡が唸っている。海の上で悔しそうに唇を尖らせる彼女の顔が簡単に想像出来る。

「負けん気だけは強いんだ、この娘は」

腕を組んだ私は何故か彼女の釈明をしていた。

以下魔除け

Reproduction is prohibited.

禁止私自轉載、加工 天安門事件

Prohibition is unauthorized.

第36話（改1. 6）〈赤城加勢〉

『赤城、お姉さま？』

マイ「艦これ」「みほちん」

∴第36話（改1. 6）〈赤城加勢〉

『大丈夫よ比叡、任せなさい』

落ちていた声が無線に入った。比叡より遠方から発信しているようで少し雑音が混じる。

『赤城お姉さま？』

振り返った比叡。

私も無線に問い掛ける。

「赤城さんか？」

『お待たせしました司令。一航戦赤城、攻撃に加わります』

その声に無線傍受する全員が安心感に包まれた。さすがである。

『目標、中海（なかうみ）の深海棲艦2体。第一・第二攻撃隊、全機発進！』

赤城さんが海上で弓を番（つが）えて次々と発艦させる。聞き慣れた発動機の音が響く。

「良いですね、一航戦ですか」

神戸も目を細めるようにして空を見上げた。

「正規空母、赤城の展開を確認！」

大淀さんが電探で照合。祥高さんが新しい空母と艦載機の駒を配置する。

しばらく自らの艦載機（妖精さん）と交信していた赤城さん。

『第一攻撃隊、交戦開始！』

強い口調で自らの艦載機に指示を出す。既に交戦中の妖精さんたちも新たな力を得て敵に反撃を開始した。

「敵が動くよ」

寛代が呟く。それを承け祥高さんが盤上の敵の駒を後退させる。

大淀さんが報告。

「形勢が逆転しつつあります」

「おッ」

呉と神戸が西の窓を見る。中海から粹筋もの光跡が空へ伸び始める。敵が赤城さんの艦載機へ激しく応戦している。同時に赤城さんと妖精搭乗員の交信で無線が聞き辛くなった。

『対空火力のある子は加勢して！』

山城さんが部隊の駆逐艦娘に指示を出す。

「一部の敵機が日本海へ」

珍しく寛代の報告。

「山城艦隊からの敵機への攻撃を確認」

大淀さんが補足する。

「赤城さんの艦爆は？」

私は問う。

「前衛が付近の敵を攻撃。後衛が中海からの攻撃を避け高度を上げています」

祥高さんが応える。

続けて大淀さん。

「上空の艦爆撃が攻撃態勢をとります」

呉や神戸は双眼鏡で空を見ている。私も彼らに続いて双眼鏡を覗くと陽の光を反射しながら次々と反転する艦爆が見えた。

「あの機体の運動性能は、いつ見ても気持ちいがええな」
呉が言う。

『攻撃開始』

赤城さんの声に合わせ艦爆は急降下を始めた。独特の風切音が響く。敵も中海から必死に応戦している。だが高速で降下してくる機体には当たらない。艦爆は二手に分かれ次々と爆弾を投下。

『ぐあああ』

異様な叫び声をあげ深海棲艦は中海に没していく。

『逃がすな！』

無線機から艦娘の声。

『浜風は、ここに残って。他は追撃！』

寛代が状況を受電。

「後退する敵を境水道へ追撃」

それを聞いた呉が言う。

「駆逐艦ですか？」

「そうですね」

私は盤を見た。

祥高さんが味方の駒を進める。

それを見た神戸が言う。

「なるほど脚は速いですから」

日頃、指揮をしているだけに参謀たちは良く分かっている。

『境水道出口で待ち伏せします！』

これは比叡。

続けて赤城さん。

『一網打尽ね』

外海へ逃がれようとした敵を足の速い艦娘が待ち伏せするのだ。

『状況、確認』

赤城さんの指示で中海の海面スレスレまで急降下してきた艦爆が艦攻と合流して索敵する。境水道に展開中の艦娘とも逐次交信しているようだ。

「浜風から入電」

大淀さんの報告に私は頷いた。

続けて無線機から浜風の声。

『司令に報告。現場の状況により中海の敵は撃退したと判断します』

私は応える。

「了解、皆ご苦労だった」

『はい』

「ここで赤城さんを始め艦娘たちは安堵した口調になった。

『上々ね♪』

『もつと骨のある敵はいないの?』

『司令っ、美保湾も問題ありません!』

「これは比叡だ。

「ああ、ご苦労」

『はい!』

そして赤城さんが艦載機の妖精さんたちに指示を出す。

『第一攻撃隊は警戒し弓ヶ浜上空に待機、第二攻撃隊は帰還準備』

赤城さんの艦載機が中海や境水道上空で順次、機体を引き起こす。

やがて合流した艦載機が弓ヶ浜上空で編隊を組み直して鎮守府上空まで戻ってきた。

「おお」

神戸が感嘆の声を出す。

「一糸乱れぬ、見事な統率ですな」

「うん、さすがだ」

二人の参謀は感心している。

日頃の鍛錬が十分に発揮された攻撃。この二人が一航戦の赤城さんを見るのは初めてなのだろう。

彼女は今、舞鶴所属だから私は直接、関与していないが彼女とは以前、作戦を共にした仲だ。少々誇らしい気分になった。

青空と大山を背景に機影が陽の光に映える。いつの間にか鎮守府でも待機していた艦娘たちが一齐に埠頭に並んで手を振っていた。

私と参謀たちも自然に敬礼をしていた。

やがて祥高さんが伝える。

「二式大挺より入電。これより由良沖を離水し再び飛行を開始します。美保鎮守府南埠頭に予定通り接岸します」

「きつちり予定通りですか」

「本省の参謀らしいなあ」

神戸と呉は苦笑いした。そうか、いよいよ来るか。

「それまでに作業服は着替えておきましょう」

私と言うと二人の参謀も苦笑いをした。

弾幕が晴れると美保湾には大山がハッキリと浮かんでいた。

以下魔除け

Reproduction is prohibited.

禁止私自轉載、加工 天安門事件

Prohibitions are prohibited.
no authorization

第37話（改1. 5）〈将校上陸〉

「いや、ちよつと妙な光景ですな」

マイ「艦これ」「みほちん」

：37話（改1. 5）〈将校上陸〉

美保鎮守府の南埠頭。視界は回復してきたが未だに硝煙の香りが漂っている。

戦闘の余韻が残る中、多くの美保の艦娘たちが整列していた。呉と神戸の作戦参謀も彼女たちの前に立つ。そして最前列には私と秘書艦である祥高さん。

二式大挺は大山を横切るようにして、ゆつくりと美保湾に着水した。同時に美保湾の蒼い水面（みなも）は左右に白く大きな壁を開いて舞い上がる。初夏の太陽を受けた水しぶきがキラキラと反射している。

『着水完了』

大挺の操縦士だろうか。艦娘の誰かの受信機から音声が届いてくる。

「どんな人が来たかなあ」

これは島風。

情報局の作戦参謀（将校）と舞鶴の作戦参謀が乗っているはずだ。

「ちよつと気難しいって言う噂ですよ」

これは青葉だ。さすが情報通。

水蒸気が舞う中で二式大挺は片翼のエンジンを軽く逆回転させ先端を埠頭側に向けた。再び両翼のエンジンを響かせながら機体が海面を滑るようにして徐々に近づく。艦娘たちが見守る中で機体は鎮守府の埠頭へと接岸する。

「ほいさ、ほいさ」

妙な掛け声をかけながら利根たち重巡姉妹がタラップを持ってきて機体に接続。埠頭の艦娘たちは興味津々と言った表情だ。それは我々も同じだが。

きっと中の乗員たちも同じ気持ちで小窓から見ていることだろう。鎮守府に艦娘、つまり女子ばかり並んでいる光景は、この戦時下には異様だ。

その雰囲気を感じたのか呉が言う。

「いや、ちよつと妙な光景ですな」

「ははは」

神戸も乾燥した笑いを浮かべた。

二人とも艦娘がいる鎮守府から来ているとはいえ、どちらとも通常の艦隊と併用されている。美保のような艦娘だけで、しかも小さな鎮守府は初めてだろう。

もつとも艦娘と共に、しばらく深海棲艦と闘い続けると、その違和感も麻痺していく。それが果たして良いのか悪いのか？ 未だ私自身、結論は出ていないが。

接岸後の二式大挺は徐々に発動機の回転数を落とす。開いた扉から軍令部の作戦参謀が現れた。

『ホウ』

そんな声があちこちから上がった。

やや長身で細面。噂以上に若い、まさに青年将校だ。黒髪に銀縁メガネで頭髪を油で固めている。パツと見て神経質だ。直ぐに艦娘たちからヒソヒソ話。

『おいこら、止めろ』

私は心の中で慌てた。相手は軍令部の将校だぞ。冷や汗が出そうだ。

「オホン、ゴホン」

ワザとらしく咳払いしてみる。

そんな私を尻目に青年将校は埠頭に降り立った。彼は艦娘たちをチラツと見た後、直ぐに私の元へ近寄ってきた。

緊張して私は敬礼をした。

「美保鎮守府司令であります。お待ち申し上げておりました」
「お前が美保か」

軽く敬礼をした彼は、なぜか暫く私の顔をマジマジと見詰める。
(何か不味いことでもしたかな?)

私は眼光鋭い将校の眼差しに焦る。彼とは初対面のはずだが。

(だが不思議な懐かしさを感じるのは何故だろうか?)

それは一瞬の間だったが妙に長く感じた。

直ぐに将校は『全員、直れ』と指示する。

「今は戦闘直後だ。堅苦しい挨拶や歓迎は抜きだ。すぐに会議の出来る部屋へ通してくれ。今朝の戦闘の概要を聞きたい」

少し早口で命ぜられた。若いからだろう、声は高い。凜とした彼の雰囲気に参加者からは感心した空気が流れた。

将校の後ろから降りてきた舞鶴の参謀は、私も見たことのある顔だった。その疲れた表情と凜とした将校の対比が興味深い。人間の『差』が出る。

「では参謀閣下、ご案内致します」

鳳翔さんが丁寧に挨拶をする。いつもの緩い雰囲気ではなく意外にピシッと決まっていた。

「ああ」

彼女に鞆を預けた将校は、きびきびと歩き出した。制服も似合つて本当に絵に描いたような姿だつた。

二式大挺が発動機を止めると辺りは急に静かになる。埠頭は波の音とカモメの声だけになつた。

「では、皆さんも解散して下さい」

祥高さんの指示で各班ごとに敬礼し分かれて行く。一部埠頭では艦娘たちの井戸端会議が始まつていた(苦笑)

私は他の参謀たちと目配せをして会議室へ向かう。美保鎮守府の長い一日は始まつたばかりだ。

以下魔除け

Reproduction is prohibited.

禁止私自轉載、加工 天安門事件

Prohibition is not authorized.
d a .

第38話（改1. 3）〈長い一日（上）〉

「無口そうな方ですね」

マイ「艦これ」「みほちゃん」

：38話（改1. 2）〈長い一日（上）〉

長旅の疲れも見せず凜とした軍令部将校。一方、見るからに疲れきった舞鶴の参謀。彼らは接待役、朝潮の敬礼を受けて移動する。

一方の埠頭では副司令、祥高さんの指示のもとで艦娘たちが解散。後は班長の指示で個別に動く。先ほどから盛んに撮影している青葉。

「舞鶴の参謀、超お疲れモードですねえ」

彼女が私に近づいて小声で囁く。確かに二人の落差は滑稽だ。

だが、この参謀は知っている。私が舞鶴に所属していた頃、作戦立案の補佐役だった男だ。すると彼も、こちらを見た。

「おおー！」

参謀のカメラ目線が欲しかった青葉が狂喜する。

しかし一瞬、私と視線が合った彼は直ぐに目をそらして将校に続き本館へ向かう。

「あちや、ちよつと撮影が過ぎましたかねえ」

舌を出して取り繕う青葉。だが実は私も気まずさを感じていた。舞鶴ではいろいろあつたから。

すると呉が聞いてきた。

「僭越(せんえつ)ながら、あの舞鶴から来た参謀とは、お知り合いですか?」

「はい。以前、私も舞鶴に居たので顔は何度も見掛けました」

そう答えた私に神戸も近寄つてきた。

「無口そうな方ですね」

彼の言葉に思わず苦笑した。

「まあ彼も相変わらずで、同じ鎮守府に居ても必要以上に話すことは無かったですね」

「なるほど」

すると副司令の祥高さんが声を掛けてきた。

「司令」

「あ、ああ」

彼女の意図を察した私は二人に案内する。

「では皆さん、直ぐに本館へ参りましょう」

私たちは副司令を先頭に鎮守府の本館へ向かった。

歩きながら青葉が小声で聞いてくる。

「司令、舞鶴の参謀とは何か？」

さすが取材記者。ズケズケと突っ込んでくる。

「別に喧嘩はしていないよ。ただ彼自身、積極的に交流しない性格だったな」

すると彼女は直ぐに返す。

「それは彼が無口な人だと？」

私は苦笑した。

「まあそうだ。あの頃から感情を出さなかった」

ふと例の「悪夢の海戦」後、彼が憤っていたことを思い出す。

すると思いがけず青葉が言った。

「彼が司令の艦娘重視論に異を唱えていたからでしょうか？」

驚いた。

「知っていたか」

「はい」

彼女は記者だ。そのくらいの情報は押さえているのだろう。ただ、それ以上は何も言わなかった。

私たちは一番最後に本館へ入った。

会議室には将校以下、私と副司令の祥高さん、それに三人の参謀が揃って着席した。あとは接待長の千歳と朝潮、潮。時刻は一〇・三〇。

「挨拶は抜きだ、早速報告を頼む」

将校は言った。

指揮官でも、かなり緊張する場面だ。しかし副司令の祥高さんは冷静かつ的確に作戦概要を説明する。時おり挟まれる将校の問い掛けにも彼女は即答した。

(私だったら返答に詰まってたな)

責任者ながら冷や汗が出る心地だった。

結局この時間、二人のやり取りで終わった。同席した我々は戦闘の疲れも出たか少々、呆けていた。

(地方の参謀なんて、その程度だよな)

私は内心、苦笑していた。

以下魔除け

Reproduction is prohibited.
禁止私自轉載、加工 天安門事件
d a . P r o h i b i d a l a r e p r o d u c c i o n n o a u t o r i z a

第39話（改1．4）〈長い一日（中）〉

「もともと陸攻など」

マイ「艦これ」「みほちゃん」

∴39話（改1．4）〈長い一日（中）〉

小休憩になると大淀さんも会議に合流した。

「副司補佐官、大淀と申します。よろしくお願ひ致します」

全体の前で敬礼をする大淀さん。

私の隣に座った彼女に聞いた。

「君も?」

「はい。今後の作戦も有りますので」

会議には指令室に出入りする者は原則参加させるようだ。

「でも寛代ちゃんは対象外です」

私の反対側に居る祥高さんが苦笑する。

「仕方ないな」

あの駆逐艦の艦娘は、どことなく精神年齢も幼そうに感じるから外したのだろうか？
やがて青年将校は前に立つと少し高い声で語り始めた。その口調はキビキビとして
鋭い。

（いわゆる『カミソリ』って奴か）

そう思いつつ壁の時計を見ると 10:45を過ぎていた。

「知つての通り深海棲艦は未だに得体が知れない。我々が何年も戦い続けながら今なお
謎の多い存在だ」

私はボンヤリと昨夜の深海棲艦のことを連想していた。今まで何度か敵を見たこ
とはあったが、ああいった種類は初めてだった。

「我々が考える以上に敵は知的である」

「それは分かりますな」

呉が相槌（あいづち）を入れる。

「そうですね」

慌てたように同意する神戸。

「ウム」

将校も頷く。

彼らの会話を聞きながら私は、昨夜の深海棲艦の不気味な笑みを思い出していた。

（あいつは人間臭かった）

そう思った瞬間、鳥肌が立つ。眠気がふつ飛ぶ。

青年将校は腕を組んで続ける。

「連中は我々の動向……作戦計画に至るまで把握していた節がある」

皆は（まさか？）と言う表情をした。

だが舞鶴は無言だった。

「……」

無表情で存在感が無い。そこは昔と変わらないな。

将校は私の方を向いた。

「まず奴らは事前に、この美保鎮守府へ新しい提督が着任することを知っていたようだ
が」

そう言うなり、いきなり私を指差した。

「それは、お前が一番良く分かっているはずだが？」

「ハッ」

反射的に私はイスをガタツつと言わせて起立した。

「えっと確かに着任当日、自分が列車で移動中に敵に襲われました」
彼は私に座れという仕草をしながら続けた。

「従って私が今回この地に来ることも敵は把握すると予測して意図的に違う情報を流した」

「なるほど、あの電報は作戦だったのか」

私は思わず反応した。そういえば青葉さんも気になるとか言ってたな。

時計は 10:55を指していた。将校は続ける。

「実は今回の作戦については部内でも一部、反対があつた」

「作戦」

大淀さんが呟く。

「特攻ね」

これは祥高さん。二人の艦娘にとつても、あの『作戦』は印象的だったらしい。

私は祥高さんの言葉を受けて、やや反論気味に将校に言った。

「わざわざ陸攻を囿（おとり）に使つて落とすのは、やり過ぎではないかと思いますが」

気分を害するかと思つたが彼は意外にも私の言葉に頷いて言った。

「そうだな。もともと陸攻など通常兵器は役に立たないのは重々承知していた」

「なるほど」

「やはり」

相槌を入れる呉と神戸。調子が良いな。

会議室を見回した将校は少し肩をすくめて吐き出すように言った。

「あれはダメ押し的な作戦だ。未だに艦娘に懐疑的な連中が軍令部内にも居てな。操縦士には無理をさせたが一種の『見せしめ』だ」

「見せしめ？」

その言葉に私は意外な印象を受けた。彼は冷静かと思つたが時には思い切つた作戦も実行するようだ。

併せて将校の『懐疑的な連中』という台詞が気になつた。思想的に彼は艦娘寄りなのだろうか？

彼は腕を後ろに組んだまま皆の前で行つたり来たりし始めた。いかにも神経質な印象だ。

ふと立ち止まつた将校は続ける。

「海軍だけではない。我々に比べれば敵と対峙(たいじ)する機会の少ない陸軍や空軍でも力不足なことは、よく分かっているはずだ」

「ウン、そうですね」

呉は反応が良い。私もそれには異論はない。その場に居る参謀たちも頷いている。

「陸軍か」

私はボンヤリと、お台場の破壊された高射砲を思い出した。

窓際に立った将校は少し間を置いてから振り返った。逆光気味でメガネがギラギラと乱反射して眩しい。

そういえば昼も近くなって日差しも強まっている。見ると窓の外の日本海には白い入道雲が出てセミが鳴いていた。

以下魔除け

Reproduction is prohibited.

禁止私自轉載、加工 天安門事件

Prohibida la reproducción no autorizada.

第40話〈長い一日（下）〉（改）

「新しい軍隊なのだと考えて欲しい！」

マイ「艦これ」「みほちゃん」

：40話〈長い一日（下）〉（改）

時計は11:30を過ぎた。

将校のメガネを見るまでも無く気温は高くなっている。もう昼に近い。部屋の中も次第に暑くなってきた。

「私は艦娘には期待しているのだ」

青年将校は次第に白熱してきた。暑い……いや熱いぞ。

「例えば、この美保鎮守府にしてもだ……」

彼は大淀さんに聞いた。

「確か、司令が着任する際に敵の攻撃を受けたが艦娘で応戦したのだろうか？」
急に振られた彼女は一瞬、慌てたようだったが直ぐに冷静に応えた。

「はい、当鎮守府唯一の戦艦『山城』が応戦して敵を撃破しました」
すると祥高さんも口添えをした。

「その際、戦場となった場所にたまたま居合わせた寛代ちゃんが弾着確認射撃の情報を流して補佐をしました」

「……」

一瞬、表情が変わった将校だったが直ぐに元の調子に戻った。

「なるほど……分かった」

一瞬、会議室に妙な空気が流れた。寛代……私は知っているが他の参謀たちは知らないだろう。

「寛代？」

「さあ……」

案の定、呉や神戸が顔を見合わせている。

そういうえば、あの子の名前は、ほとんど聞いたことが無い。恐らく美保以外の鎮守府に転属になったことが無いのだろう。

もしかしたら建造されて間もないのか、よほどレアなのだ。

将校は寛代のことには無視するようにして話を続ける。

「これだけコンパクトな鎮守府であっても、敵に対して効果的な攻撃力を持つ。今まで

の鎮守府、いや海軍そのものの常識を覆すのだ！」

確かに、コンパクトだ……敵もそうだけど。

彼は続ける。

「従来の兵器では歯が立たない敵に対抗できる唯一の手段と言っても過言ではないだろう」

「悔しいけど、そうですね」

「もはや陸海空の通常兵器では歯が立たないですよ」

頷く呉と神戸。

将校は言う。

「ただ艦娘という存在自体がこれまでの軍隊の考え方が通用しない。また現場の混乱も知っている」

「うん、嫌う提督も少なからず居ますよ」

これは神戸……よく知っているな。

青年将校は歩きながら、窓と反対側の壁に到達していた。壁を向いている将校の後頭部しか見えない。意外に小さい頭だな。

彼は振り返った。

「艦娘は、まったく新しい軍隊なのだと考えて欲しい！」

将校は力説している。しかしその言動に、やたら「ダメ」が多い。性格か？

「その先鞭（べん）としての、ここ美保鎮守府なのだ」

「え？」

私は意外に感じた。ここは、そんなに重要だったのか？

「そうなんですか？」

意外な事実には神戸も驚いたようだ。

しかし呉は、あまり関心なさそうに、お茶をすすっている。おっさん！

さらに舞鶴に至ってはウトウトして眠そうだ。お前なあ。

しかし神戸や呉、そして舞鶴に比べると、一番後から出来た美保なんて、取るに足らないだろう。伝統ある呉や舞鶴鎮守府様とは格が違うよな……。私が半分僻（ひが）んだ気持ちになっていると青年将校が私のほうを見ている。

また、突っ込みか？　ちよつと構えた。

「だから司令」

「ハッ」

今度は何？

「ここに君を着任させたのは過去の戦歴だけでない。艦娘たちの意見も広く聞いた上で
の軍令部の判断だと理解して貰いたい」

「…………え？」

またビックリした。倦怠感が飛んで逃げた。

時計は11:45を指している。

将校の発言に周りの参謀たちも驚いていた。特に舞鶴は目を大きく開いている。彼の眠気も飛んで逃げたらしい。

将校はメモを取り出して続ける。

「君の戦歴を見たが……冬の舞鶴での艦娘との初陣は惨敗、負け戦だ。そして、その後の転属願い……」

「はあ」

力なく応える私……さすが良くご存知で。

だが彼は私を無視するように続ける。

「以後の艦娘が絡む作戦でのたび重なる命令無視もあるな」

これには神戸や呉、そして舞鶴までが目を丸くして私を見ている。それは軍人として、あるまじき行為だ。さすがに、ちよつと恥ずかしい。

思わず頭をかいて赤くなる私。

将校は言った。

「本来なら、お前は閑職に甘んじるか下手すれば軍法会議モノだな」

穴があつたら入りたい。

しかし構わず彼は続けた。

「結果として、お前が多く、艦娘を轟沈や自沈から救つたことも知っているがな」

ありやりや？ 祥高さんと大淀さんがこつちを見ている。今度は、ちよつと別の意味

で恥ずかしくなつてきた。まったく今日は晒し者だな。

将校はメガネを押さえた。

「艦娘は非常に特殊だ。だからこそ我々も一兵卒としてではなく対等な戦士として敬意を持つて接する必要があるだろう」

将校の、この言葉で会議室の空気が一変した。私も参謀たちも正直、艦娘たちの価値を認めて居なかつた。

だが彼の説明を聞いていると艦娘に対する見方が根底から変わつていくような感覚だつた。

窓から入る海風は、いつもの美保湾の清々しい潮の香りに戻っていた。

第4 1 話〈将校の想い〉(改)

「参謀たちも、よろしく頼む」

マイ「艦これ」「みほちゃん」

：4 1 話〈将校の想い〉(改)

既に、お昼に近くなった。青年将校は再びボードの方を向いて言った。

「今回の戦闘によつて艦娘単独の鎮守府では具体的に、どの程度の編成が必要なのか、だいたい把握出来たように思う」

それを聞いた私は悟った。

『軍令部でも艦娘の具体的な運用方法については未だ手探りの部分があるんだ』

指令室のボードには戦況の殴り書きメモや艦隊のリスト、それに比叡や赤城さんの顔写真がペタペタ貼つてある。

その資料を見ながら将校は腕を組む。

「比叡と赤城は美保への一時的な支援のつもりだったが……」

彼は少し考え込むような表情で赤城の写真を見詰めながら続けた。

「彼女らの異動も検討すべきだな」

そこまで聞いた舞鶴の顔色がサツと変わったことに私は気付いた。そういえば比叡と赤城さんは舞鶴から来ていたな。

将校は私のほうをチラツと見ながら言った。

「お前は、あの艦娘たちとは関わりがあるようだな」

思わず反応する私。

「はい……彼女たちとは何度か実戦を共にしました」

「なるほど……それは重要な要素だ」

彼は再びボードに視線を向けて言った。

中央の情報部ってのは実に細かい情報を掴んでいる……つまり今後も下手なことは出来ない。私は冷や汗が出る思いだった。

「あ……」

さつきから舞鶴が口をもごもごさせて何か言いたそうだった。比叡や赤城さんの異動案に反論する気だろうか？

確かに舞鶴所属の彼としては自分の鎮守府から主力級の艦娘が抜けるのは避けたいだろう。

しかし相手は軍令部の将校だ。結局……物言いは諦めたようだ。まあ舞鶴の性格から将校に直接意見をやるなんて無理だろう。

ご愁傷様。

何となく舞鶴の不穏な動きを察したのか将校は改めて振り返ると全体を見回して言った。

「正直に言えば軍令部でも艦娘についても未だに評価が分かれている。誤解も多い」

その言葉に軽く頷く祥高さんと大淀さん。

彼は続ける。

「だからこそ一日も早く艦娘運用の標準型を定めて各鎮守府にも伝えるつもりだ」

そして将校は改めて私の方を見た。

「美保にも、いろいろと協力して貰いたいのだ」

「ハッ」

私は反射的に立ち上がって敬礼をした。

彼は周りにも声をかけた。

「参謀たちも、よろしく頼む」

『ハッ』

彼らも揃って立ち上がると敬礼をした。

「……以上だ」

艦娘も含めて指令室にいた全員が改めて将校に敬礼をした。彼もまた総括するように敬礼をした。

長い時間が終わった。

改めて時計を見ると、もうお昼だった。将校と参謀たちは美保鎮守府の1階にある応接室で昼食をとることになった。

祥高さんと鳳翔さんが慌ただしく昼食の配膳準備をしている。祥高さんはずっと働き詰めだな。倒れやしないか？

「小さい鎮守府だと艦娘も役割が多くて大変ですね」

神戸も心配している。

だが私は思った。祥高さんって自分から忙しくしているような印象も受けるんだよね。

いつの間にか私の横に寛代が来ていたが祥高さんにつまみ出された。その光景を珍しそうに呉が見ている。

「まことに不謹慎な意見かも知れませんが。こういう老若男女が集う家族的な雰囲気も悪くありません」

齢を重ねているせいか彼は言い難そうなことを、はつきりと言う。

神戸も言う。

「この料理も男性とは違う細やかさがあります」

その褒め言葉に鳳翔さんが微笑んでいる。

先ほどよりは少し緩やかな表情になった青年将校が応えた。

「艦娘たちも見た目は普通の女性と変わらない。しかし、いざとなれば彼女たちが自ら最前線に立つ気概があることは我々は決して忘れてはいけない」

一瞬、参謀たちの箸が止まった。

穏やかではあるが凜とした声で将校は言った。

「むしろ部隊に艦娘がいることで男性軍人は、より一層自分を律さねばならないだろう」

意外に将校は艦娘を高く評価しているようだ。

「しかし同性なら気兼ねなく接するのですが女性相手は、やり難いですなあ」

呉が実感のこもった言い方をする。

「実はな……」

間において将校が言った。

「本省にも数人、艦娘の制服組が居る」

『え?』

これには参謀たちは改めて驚いた顔をした。

「だから今後は地方にも少しずつ艦娘の指揮官が現れるかもしれない」

将校は何食わぬ顔で食事を続けた。なるほど彼が艦娘を高く評価するわけだ。軍隊の男性といえどもウカウカ出来ない時代になっていくのだな。

私を始め参謀たちも互いに顔を見合わせながら改めて襟を正される思いになるのだった。

第4 2 話〈居残り参謀〉(改)

「鎮守府そのものが観光地のようで」

マイ「艦これ」「みほちゃん」

∴ 4 2 話〈居残り参謀〉(改)

昼食の後は、いったん解散となった。ところが将校以外の参謀たちは言う。
まずは呉。

「せっかく遠出してきたのだから、これで解散と言うのは惜しいなあ」
すると追い討ちをかける神戸。

「そうですね、貴重な艦娘だけの鎮守府ですから、もう少し視察出来れば……」
「はっ。」

一瞬たじろぐ私。

思わず硬そうな舞鶴を見ると……あれ？

「私も……」

彼にしては意外な返答だ。

私は否定的な返答が出ることを期待して将校に聞いた。

「参謀閣下の意見としては……如何でしょうか？」

私の問い掛けに彼は言う。

「そうだな……それも良いだろう」

まさか……意外にも、その場で許可が出てしまった。

私は心の中で叫んだ。

『やめてくれえ』

さらに『余計な気』を利かせた鳳翔さんが大淀さんに伝達して各鎮守府へ将校名で視察延長の旨が伝達された。軍令部の将校だから各鎮守府の司令より発令には権威がある。

後でその文書をチラツと見たのだが彼は本省の作戦参謀という立場だった。まあ地方の一人の司令官よりも遥かに格が上なのだな。

仕方が無い。私も腹をくくろう。

午後になると美保鎮守府は夏の日差しと美保湾の潮の香りに包まれていた。午前中の戦闘がウソのように大山が良く見える。

鎮守府南埠頭の岸壁で将校は停泊していた二式大艇に乗り込んだ。エンジンを始動

させた機は大勢の艦娘たちに見送られながら大山方向へ向かって離水した。やがて鎮守府上空で大きく旋回したあと大山の向こうへと飛び去っていった。

呉と神戸が言う。

「行きましたな」

「そうですね」

「……」

なぜ残ったのか不思議な舞鶴だ。

また私たちと同じように埠頭で手をかざして見送っていた青葉が言う。

「そのまま東京へ戻るんでしょうね」

「だろうな……」

私は応えた。

朝の戦闘中ずっと弓ヶ浜上空を旋回していた陸攻も三柳の陸軍基地で整備をしたあと無事、帰途についたようだ。ようやく美保鎮守府も落ち着きを取り戻した……はずだ。

そんな美保湾の清々しさとは裏腹に私は午後のことを考えると憂鬱だった。接待なんてガラじゃないし、この地域にはまともな観光地もないが。

その時誰かが足を引っ張った。振り返ると寛代だった。

「どうした？」

私が聞くと彼女は首を左右に振ってる。最初は何のことか分からなかったが不意に悟った。

「あ、そうか……ココは軍隊だよな」

そう、軍人に接待も観光も不要なんだ。私は何を考えていたのだろうか？

少し気持ちが軽くなった私は参謀たちに言った。

「では皆さん、いったん執務室へ上がりましょうか」

そして私は少し身をかがめると寛代に言った。

「お前のお陰で気が楽になったよ……そこで頼みだが祥高さんか鳳翔さんに言って執務室までお茶を持ってきてくれ」

彼女は少し微笑んで敬礼をすると小走りで行った。あの子も不思議な子だな。

「駆逐艦娘って言うのは、どこの鎮守府でも可愛らしいですな」

呉が言う。不思議とその言い方は爺さんが孫娘を語るように自然だった。

「そうですね、あの姿で海軍のどの艦船よりも強いから摩訶不思議ですね」

これは神戸。参謀という位置に立つても彼にとつて艦娘は超越した存在なのだろう。

「……」

舞鶴は無言。だが何かは感じているらしい。彼の顔に少し表情らしきものが浮かんでいる。

将校が戻って緊張の解けた参謀たちはリラックスした感じで2階へ向かう。

美保鎮守府の執務室は大山が良く見える。晴天の日に、初めてこの部屋に入った人は必ず感嘆の声を上げる。

「おお、大山(だいせん)ですか!」

「キレイですね!」

「……」

三者三様である。

「ええですなあやっぱり。ここは鎮守府そのものが観光地のように」

「そうですね、風光明媚な……山陰は手付かずの自然が多いですね」

呉と神戸は既にリラックスムードだ。

「呉にも、ぎょうさん艦娘は居るんやけど部隊そのものが大きいから、まあ普段は、うまく誤魔化されとるんやなあ」

そういう呉は将校の前と今では喋る口調が違うな。

少し若い神戸の参謀も言った。

「そういえば神戸の提督が美保の司令に、よろしくと申しておりました。あの……司令

と提督は兵学校で同期だと伺いましたが」

旧友の顔を想像しながら私は応えた。

「うむ。同級の頃から、なぜか気があってね。確かあいつ山口出身だったな」

神戸は笑顔になった。

「左様であります。実はうちの提督、ここ美保をとて羨ましがって居りました」

神戸鎮守府もまた普通の艦船と艦娘の混成部隊だ。それに比べたら美保は「ハーレム」なのだろう。

私は言った。

「神戸には既に艦娘部隊もある。べつに改めて君のように視察を送るほどではないと思うが……」

その問いに神戸は答えた。

「実は私、今年の参謀試験に合格したばかりでして……神戸は初の着任先なのです。艦娘の実戦指揮は、まだでして……」

「なるほど」

「はい、やはり知人が指揮をする鎮守府なら……ということだ」

その言葉に少し嬉しい気持ちになった。

すると自分のアゴを触りながら呉が問いかけてきた。

「ときに司令は以前、舞鶴に居ったとか？」

「ええ、まあ」

呉は今度は横を向いた。

「舞鶴の参謀殿とも、ご面識があるとか？」

振られた舞鶴は、それまで陰気に黙っていたが

「あ、はい」

……ボソボソと答えた。

そういうえば舞鶴も私が相手では居心地も悪いだろうに、なぜ今日は居残ったのか？

そのところは疑問が残った。

そのときコンコンと扉がノックされた。

「失礼いたします。午後のコーヒーを、お持ちいたしました」

控え目な口調で鳳翔さんが静かに入ってきた。時計は、もう14:00を回っていた。

第43話〈お母さんと天職〉(改)

『彼は彼なりに艦娘のことを考えているのだ』

マイ「艦これ」「みほちゃん」

：43話〈お母さんと天職〉(改)

鳳翔さんを見た参謀たちは皆、一様に初めて彼女を見たような顔をしている。でも確か昼食のときにも給仕する彼女の姿は見ていたはずだけど……まあ無理もないか。あの本省の青年将校の前では全員が緊張していた。

(いや半分以上はボーっとしていたようだけど)

だから艦娘(女性)の顔なんか落ち着いて見ていられなかっただろう。もう印象に残らないくらい。

(もっとも居眠りしていれば結局は一緒だけど)

午後のコーヒーを配り終えた鳳翔さんは参謀たちの視線に気づいたようだ。

「あの……何か?」

さすがに困った顔をして「一時停止(ポーズ)」状態になった。鳳翔さん、ちよつと表情がこわばっている。可哀想に。

「失礼ですが」

口火を切ったのは呉。

「ひよつとして……あんたも艦娘？」

「す、すみません」

鳳翔さんは、ますます困ったような顔をした。

「よく他の子たちからも『お母さん』なんて言われますけど……私は主に訓練を担当している軽空母の鳳翔と申します」

最後の方は聞き取れないくらい小声になった。

「や、これは失礼」

さすがに呉も、ちよつとバツが悪そうに頭を下げている。

「し、失礼します」

鳳翔さんは、少し顔を赤らめて逃げるように出て行った。

その場を取り繕うように冷汗(?)を拭きながら呉は言い訳をする。

「いや……そのお、ワシのところでも、日々こんな調子のやり取りが多くてねえ。艦娘の部署へ行くといろんな意味で緊張すんのや」

「そうでしたか……それじゃ私もきつとこの先が思いやられますね」

私の言葉に一同、苦笑いをした。

ちよつと考えて私は続けた。

「でも確かに他の鎮守府では通常の艦隊と、艦娘の混合部隊ですよね」

一同は頷く。

「そう考えると、ここ（美保）のように純粹に艦娘だけの方が気分を切り替える必要がないから、まだ楽かも知れませんか」

すると呉も言う。

「軍人なんてタダでさえ不器用な人間の集まりだから……戦況分析ならまだしも艦娘への対応の切り替えてのは、かなり大変だと思ふなあ」

今度は神戸も応える。

「そうですね……艦娘って普通の人間よりも、はるかに純粹ですから」

その時、舞鶴の参謀が珍しく口を開いた。

「一途に戦つて一途に散つていく……」

ボソボソとした口調ながら、彼以外の全員がその発言にハッとさせられた。彼も、れつきとした帝国海軍の作戦参謀だ。決して『ただいるだけ』の無能な参謀ではない筈だ。

その発言で私は改めて思った……『彼は彼なりに艦娘のことを考えているのだ』と。舞鶴の言葉を引き継ぐように私も言った。

「彼女たちは外見の如く精神構造も少女ですから、むしろ私たちは変に構えずとも表裏無く、ただ真つ直ぐ接すれば良い……そう、それだけで良いんじゃないかな？ つて思います」

一同は改めて頷く。意外にも、あの舞鶴までが同意していた。

……ふと『天職』という単語が思い浮かんできた。もちろんここが私にとって真実にそうだとはい、まだ私自身、確信は持てないが。

その後、お茶を入れ替えに執務室に祥高さんが顔を出した。

「司令、残った時間は如何（いかが）致しましょうか？」

彼女は、お茶を注ぎながらチラツと参謀たちを見回している。

「そうだな……」

私が腕を組んで考えていると呉が助け舟を出した。

「せっかいですから、ここ美保鎮守府内の簡単な案内をして頂くと嬉しいナ、と思えますわ」

すると神戸も相槌（あいづち）を打つ。

「それは私個人的にも是非お願いしたいところです」

「そうですね」

私はチラツと舞鶴を見た。彼は無表情に近いが反対でも無さそうだ。

改めて私は祥高さんに言った。

「では君でも大淀さんでも良いから後で案内を、お願いしても良いかな？」

彼女は少し考えて言う。

「内容は、どのように致しましょうか？」

「そうだな……ここは艦娘だけの鎮守府だから通常の海軍基地とは違う部分を主に説明をして貰ったら良いかな？」

「了解しました」

彼女は軽く敬礼をして退出した。

今日は神戸の新人参謀も居る。それに実は私もまだ、あまり美保鎮守府については詳しく見ていなかったから一石二鳥か。そんなことを考えていた。

午後の美保湾は既に穏やかな海色（みいろ）を取り戻していた。

第44話〈鎮守府の沿革〉(改)

「……どこかで聞いたことがあるな」

マイ「艦これ」「みほちゃん」

…44話〈鎮守府の沿革〉(改)

準備のために退出した祥高さんが出た直後に呉が言う。

「さっきの空母さんもそうですが今の彼女……いわゆる秘書艦ですか?」

「そうですね。秘書艦兼、副司令というところですよ。実は副司令という辞令はまだ出ていませんので」

すると神戸が割り込む。

「他所では艦娘ってあまり目立たないから分かり難かったのですが、ここの艦娘たちは皆、存在感があるというか、とつても自然ですね」

今度は今まで黙っていた舞鶴が口を開く。

「彼女は……何?」

「は？」

……一瞬、彼の質問の意図を計りかねた私だったが直ぐに悟った。ああ彼女の艦種のことか？

「彼女は重巡ですよ」

舞鶴のこの質問はどうかやら他の参謀たちも気になっていたようだ。

急に納得したような雰囲気執務室に漂い、呉や神戸が口を開く。

「ほお」

「なるほど」

「重巡……祥高型か」

私が意外だったのは舞鶴だ。彼は艦娘をよく注視しているらしい。

呉は言う。

「そういうえば彼女もまた存在感がありますな」

「大淀と雰囲気は似ていますが、さらに迫力があるとかか」

「これは神戸。」

「祥高……どこかで聞いたことがあるな」

そして最後の舞鶴の言葉に私も少しピクツと来た。彼も私と同じ印象か。

噂をすれば影、ちょうどその時、ドアをノックをして祥高さんが入ってきた。

「お待たせしました、では早速、鎮守府のご案内を致しましょう」

軽く敬礼をした後、彼女は続けた。

「まずは簡単に鎮守府の位置と担当範囲、所属艦の概要をボードにて説明します」

腕を組む呉。舞鶴はコーヒーをすすり、メモを取り出したのは神戸のみ。私も念のためメモを出した。

そんな私たちの挙動は気にも留めずに祥高さんはボードの前に移動する。

「ご存知かと思いますが当鎮守府は海軍の第三次鎮守府配置計画に基づき設置されました」

「うん、うん」

「数年前に海軍で、そんな計画がありましたね」

「……」

私は内心『そんな計画あったっけ?』と思っていた。まあ、そんな計画は無数に立ち上がる。オマケに途中で名前を変えたり二つの計画を合体させたり結局は『何でもあり』になる。上の決めることなんて、いつもそんなものだ。

祥高さんは続ける。

「私たちの守備範囲は日本海西方、特に舞鶴鎮守府の艦娘だけでは航統距離の関係でカバーしきれない鳥取県西部から島根県の沿岸部が中心です」

「うん、それも聞いたことがあるぞ」

「えつと……確かそうですね」

「……」

三者三様の反応。

「ここ山陰は私の「出身地」だからな。その計画の主旨の部分は何となく印象に残っていた。

彼女はボードに資料を提示しながら続ける。

「この鎮守府は山陰特有の入り組んだ地形が多いこと考慮しています。ですから戦艦や正規空母よりは運用面で軽巡や小回りの利く駆逐艦が重点的に編成されています」

「なるほど」

「それで大型艦よりも駆逐艦が多いんですね」

「ふむ」

反応が良い参謀たち。

私は拳手をして彼女に突っ込んでみた。

「質問良いかな？」

「どうぞ」

「美保には潜水艦が居ないよな……確か今は陸軍の「まるゆ」が仮停泊しているけど」

「はい」

「さっきの将校に直訴すべきだったけど……美保に潜水艦を、もう少し増やす計画は無かったのかなあ？」

「……」

彼女に聞くべき内容でもないし、困らせる意図も無いんだが。さすがに祥高さんは黙ってしまつた。

呉が言う。

「そういえば今朝の戦闘でも敵は水深の浅い中海（なかうみ）に出たな」

「ああ、そうでしたね」

「……」

舞鶴は黙っているが祥高さんも黙ってしまった。これはまずいかも。

私は少し慌てたように言った。

「いや君を困らせるつもりは無い……ただ美保の守りを考えたら今後は潜水艦も必須だろうと思つてね」

呉が言う。

「まあ司令殿も着任間もないですから。何事も『徐々に』でしょ？」

「はあ」

まさか呉に諭されるとは思わなかった。ちよつと恥ずかしくなった。

私は祥高さんに言った。

「いや済まない。この件は改めて君と相談した上で軍令部に直訴するなら、また私から手続きするよ」

すると彼女は応えた。

「いえ私なら大丈夫です。それに軍令部も将校も、きちんと美保の将来は考えて下さっていますから……装備補充についても心配なさらなくても大丈夫だと思います」

「え？ ……そうなの？」

ちよつと驚いた。

「はい」

確信を持って応える彼女。

ええ？ ええ？ 彼女のこの応対ぶり……美保の将来について妙に確信を持っている。

「……」

いかん、いかん。私は慌てて頭を振った。独りで驚いて時間を浪費してはいけない。

パンパンと頬を軽く叩いた私は改めて彼女に言った。

「すまない、続けてくれるかな？」

「はい……では続けます」

彼女は軽く微笑むと再びボードへ向き直った。相変わらず沈着冷静と言うか度胸があるというか……切り替えの早い彼女だった。

「当地は埋立地を開削したため、かなり規模の小さな鎮守府となっています」

ようやく舞鶴もメモを出して書き始めた。

「ここは元々、弓ヶ浜半島による遠浅の地形で水深が深く出来ない事情があります。従って一般の艦船は配備せず艦娘だけの鎮守府となりました」

「なるほど」

……と、神戸。気のせいかな、どことなく羨ましそうにしている。

彼女は少し資料を手繰った。

「美保には既に三柳陸軍と美保空軍という既存の防衛施設が存在していますから、ここは艦娘の基地だけでも十分、地域防衛が可能だとする政府の判断もあったようです」

「難し……」

ふと呟いた。次第に彼女が青年将校に見えてきた。

だが引いているのは私だけではなかった。呉や舞鶴はもう完全にアップアップしている。神戸も同様か？ そんな雰囲気を感じた祥高さんは急に慌てたように声の調子を変えた。

「すみません、難しい話は、このくらいにしましょう」

なぜか一同、安堵のため息。いや難しいというか……海軍の作戦参謀たちだろ？　この程度の理論に弱くて良いのか？　この体たらくじゃ理論面でも敵に負けるぞ。私は自分のことは棚に上げて苦笑するのだった。

第45話〈頭垂れる山城さん〉(改1. 2)

「()は本当に鎮守府か？」

マイ「艦これ」「みほちゃん」

：45話〈頭垂れる山城さん〉(改1. 2)

午後になると日差しが少々強くなっている。風も出てきているが、さほど気温は下がらない。

「美保鎮守府の概要は以上になります」

祥高さんの説明も終わった。何事につけても彼女は手際が良い。

しかし参謀たちは講義から解放された学生のように気持ちが悪んでいる。普段は難しい作戦を立案するような彼らだが結局は他人の話を聞くのは苦手なのだろう。

「では続きまして鎮守府内を実際に、ご案内致します。どうぞ」

資料をまとめた祥高さんが出口まで先導する。各参謀と私は立ち上がると執務室を後にした。

廊下を歩きながら祥高さんは言った。

「作戦司令室は省略して、まずは食堂から参りましょうか」

「そうだね」

美保鎮守府の特長の一つといえ、やはり食堂……かなあ？

鎮守府本館の階段を下りて廊下をまっすぐ行く。建物の東側に大きな窓のある広い部屋があった。

祥高さんが案内をする。

「こちらが美保鎮守府の隊員食堂です」

彼女を先頭に私たちは食堂に入る。数人の艦娘がキャツキヤ言いながら食事をしていたが私たちが入ると直ぐに立ち上がって参謀たちに敬礼をした。彼らもまた返礼をした。この辺りは堂に入っている。

「ん……やはりここは軍隊だな」

確認するように呉が言う。

だが改めて食堂内を見渡してみると彼の言葉が覆されるようだった。

まず室内には木製の長い食卓が軒並み並んでいる。

「木製……」

呟いたのは舞鶴。そうだろうな、普通の軍隊ならログハウス張りの調度品なんてあり

得ないだろう。

食卓に平行するように設置されている椅子もまた同じく細長い。これは個々に分かれた椅子よりは、こちらの方が艦娘が一齐に効率良く座って食事が可能になるということもある。一組のテーブルセットでかなりの艦娘が……特に駆逐艦娘なら座れそうだ。

また部屋の壁や窓際には洋風のテーブルも置かれていた。そして天井には大きな扇風機がゆつたりと回っている。

『はあ』

一瞬、呆気に取られていたような一同だったが直ぐに感嘆の声を上げた。

海辺だから風が気持ちよく通り抜ける。そもそも美保鎮守府の建物自体が比較的小さい。それが功を奏して海辺側の窓を開放すれば廊下まで一直線に風が通る構造だ。だから晴天の多い夏の山陰であってもここでは空調は、ほとんど必要無い。

食堂の外側を見れば白い手すりのあるウッドデッキが備えられていた。そこにも白い机と椅子が並んでいて、その気になれば海を見ながら食事をすることも可能だ。現に龍田さんがノンビリと紅茶を飲んでいる。

まずは呉が口を開いた。

「……は本当に鎮守府か？」

「まさにリゾートですね」

神戸が気の利いたことを言う。

「やはり艦娘だけの鎮守府だと、こういう砕けた雰囲気になるのだ」

舞鶴もそう言ったが、それは決して批判している口調ではなかった。

「もし今が戦時下でなければ美保の辺りも、そういう場所になるかも知れません」

私も妙な補足を入れてしまった。

祥高さんが説明する。

「……も、さほど広くありません。現在は70名近い艦娘がいますから利用する際は班ごとに時間をずらして食事を取るようになっています」

私は先日の夜戦の時間を思い出していた。あの夜戦バカ、元気になったかな？

「司令……」

突然、私の背後から小声で誰かが声をかけてきた。振り返ると、そこに居たのは山城さんだった。戦闘後にすぐに入渠したのか体はもう元に戻っていた。

「ああ、君か」

山城さん……最初に執務室で出会った時とは印象がガラリと違うな。

「あの……」

何か言い難そうだ。私の周りに参謀たちが居るからだろうか？ ちよつと間を空けて小さい声でモジモジしている。

「どうした?」

参謀たちの案内の時間もあるから、ちよつと急ぎ立てる私だった。大人(おとな)気ないか?

すると彼女は意を決したように頭を下げた。

「司令……その……有り難う御座いました」

いきなりの言葉で驚いた。さほど長くはない彼女の髪型だが、なぜか柳のように垂れ下がるんだな。

ちよつと食堂に斜めに差し込んだ日の光。その陰影が彼女の場合は鬼気迫る。

私は腰砕け気味に応えた。

「ああ無事で良かったよ」

山城さんは、ゆつくりと顔を上げる。私は今度はギョツとした。

目が潤んでいる!

その瞳は日光に乱反射してキラキラしているのか? ……ちよつとコレはヤバい気配が漂う。

「いったん屋外へ出しましょう」

直ぐに機転を利かせた祥高さんが、私たちをウッドデッキの方へ促してくれた。

やれやれ……助かった!

それでも気になった私が振り返ると数人の艦娘が肩を震わせている山城さんを囲んで、なだめている。……まさか泣いているのか？

『おい誤解するなよ！ 別に私が虐めて泣かせたんじやないからな！』

……と内心、叫んでいた私。参謀たちも無口になった。

もし私たちが、あのまま留まっていたら？ 感情的な山城さんだ。本当に何をしでかすか分からなかった。

でも彼女の意図した『お礼』って何のことだろうか？ 今朝の美保湾の戦いで私が思わず叫んだ『引き返せ』という撤退命令のことかな？

山城さんは一途な子だ。それに基本的な火力は備わっている彼女だから……今まで、ずっと特攻に近い作戦しか経験が無かったのだろうか？

そういうえば彼女は無線でも『私を顧みず……』とか叫んでいたな。

きつと今までの指揮官は山城さんに「引け」という命令は出さなかったのだろう。彼女自身も長らく自分は特攻専門だと考えていたのだろうか？ 可哀想に。

……あれ？ 私の後ろの舞鶴が複雑な顔をしている。その表情は少し人間っぽい感情が混じっていた。

今まで私は舞鶴の彼は気難しだけのロボットみたいな奴かと思っていた。

しかし今日の彼は今までの私を感じていたものとは違った印象を受ける。お互い少

しは成長したのだろうか？

私はふと、そんなことを感じていた。

「せっかくだすから、このまま外へ参りましょう」

祥高さんが先導して一同はそのまま埠頭へ向かった。

美保湾の海風と潮の香りが心地良い。ポチャポチャと埠頭に打ち寄せる波の音が断続的に聞こえてくる。参謀たちは海軍の男だから動く波を見ると一様に生き返ったような顔をした。

「海は良いですなあ」

呉が言った。

「向こうに高い山が見えるというのがまた、良いですね」

コレは神戸。確かに大山がよく見える。

舞鶴も改めて「ほお」と感心した様子だ。

「ときに」

急に先頭の呉が振り返る。

「先ほどの艦娘、誰です？」

「あ……」

ちよつと不意を突かれた私。

「彼女は戦艦『山城』です。この鎮守府の主軸の一人です」
祥高さんが助けに入った。

「あれが山城ですかあ」

呉は海を見ながら腕を組んで顎をしゃくっている。

「確か、うちにお姉さんが居たような気がするなあ。扶桑だっけ……」

彼は何を呟いてるのだろうか？

第46話〈夢の艦隊と赤城さん〉(改)

「まさに……夢の艦隊」

マイ「艦これ」「みほちゃん」

∴46話〈夢の艦隊と赤城さん〉(改)

一同は鎮守府内の広場に出た。そこを通過して少し内陸側に入ると、がっしりとした建物が見えてきた。

その建物に近づきながら祥高さんが説明をする。

「ここが艦娘の装備などの修理を行う『工廠(こうしょう)』です」

「ほう、これが」

「なるほど普通の鎮守府よりは遥かに小さいですね」

「……」

またしても三者三様。

「いま中に入れそうか？」

私が聞くと

「そうですね。本当に忙しいと夕張さん外で作業していますけど……まあ今日は大丈夫でしょう」

応える祥高さん。

「夕張さん？」

私の言葉に彼女は応えた。

「この修理全般を担当する艦娘です。ちよつと、のめり込む性格なので作業に熱中していると周りが見えなくなるみたいです」

そんなものなのか？

改めて建物の外観を見る。普通の倉庫程度の大きさだ。大きな室外機がブンブンと唸り声を上げ窓には幾つもの換気扇が忙しく回っていた。

「では」

そう言いながら祥高さんは入口の重い扉をガラガラとスライドさせた。

私たちが中に入ると窓を閉め切った中で、むつとしている。鉄が溶けるような独特の匂いが漂う。海軍工廠では、よく接するもので参謀たちも慣れた感じだ。バチバチと溶接をする音が室内に響き渡っている。向こう側に大きな火花が見えた。

祥高さんは振り返る。

「私たち艦娘の武器……艦装は体のサイズが基本なので大掛かりな設備は要りません」

周りの騒音に負けじと少し声を張り上げた祥高さん。それはこの参謀たちは誰もが知っていることだろうが一様に感嘆の表情を浮かべている。

「凄いですな」

「まさに……夢の艦隊」

「……」

そうだ、これが艦娘の特筆すべき点なのだ。

繰り返すが艦娘には大規模なドックや地上設備は不要だ。それでいて美保のように小さな鎮守府でも普通の鎮守府に匹敵する戦力が確保出来る。

まだ美保鎮守府は実験段階だ。しかしここでの運用に問題が無いと判断されれば今後、同じような鎮守府が全国各地に増設されるのだろう。

それは帝国海軍の艦隊運用だけではない。世界の国家防衛概念そのものを根底から覆す可能性を秘めている。まさに革命的な変革。あの本省の青年将校が熱を帯びるほど力を入れるのも分かる気がした。

『司令……その……有り難う御座いました』

いかん……突如として山城さんの台詞が頭を巡った。

そう、その巨大な戦力と同時に、さっきの山城さんのように感情のブレが大きい艦娘

がいるのもまた事実だ。艦娘の艦隊運営は一筋縄ではいかない。物事は、そう簡単にはいかないのだ。

私たちは建物の奥の火花の発生源まで近づく。するとそこには長身の少女が向こう向きに立っていた。艦娘だろう。簡易マスクをして溶接作業を見守っている。

彼女の向こう側に座って作業をしている青いリボンの頭が見えた。もう一人艦娘が居るな。あれが『夕張さん』か？

立っている少女は時々修理を担当している艦娘に指示を出したり声を掛けていた。

「あ……」

私は思わず声を出した。そうだ、あの長髪の後姿には見覚えがあった。その赤いスカート……。

「赤城さん、君か」

そう、彼女は舞鶴から馳せ参じていたんだ。すると少女は私の声に振り返った。

「司令？」

一瞬、驚いたような表情を見せた彼女。

私は言った。

「さっきの戦闘後、姿が見えないな……と思つたら、こんなところに居たんだ」

やや大きい瞳を開いた赤城さんは微笑みながら短く言った。

「はい……久しぶりの本格的な戦闘でしたから」

そう言いながらマスクを外した彼女。キリツとした表情になって私たちに向き直ると敬礼をした。

「舞鶴鎮守府所属の一航戦、赤城と申します！」

私を始め参謀たちも敬礼を返した。一航戦……正規空母の頂点とも言える彼女。やはりその所作はキビキビして気持ちが良い。恐らく私の背後に居る舞鶴も誇らしいだろう。

私たちは直ぐに敬礼を解いた。ところが……どういうわけか赤城さんが凍り付いている。

「どうした？」

……敬礼を解いても良いぞ、と私が言いかけた途端、彼女はボロボロと大粒の涙を流し始めた。

「お……」

焦った私は言葉が続かない。ちよ、ちよつと赤城さんストゥップ！

平静を装いながら私は心で叫んだ。いきなり涙なんて……また誤解されるじゃないか！

周りの参謀たちも、この場をどう取り繕って良いのやら少々困惑気味だ。舞鶴なんか

完全に呆れたような表情だぞ。

まったく今日は艦娘相手に時間の一時停止（ポーズ）が連続して起きる……はあ、苦手だ。もう堪忍して欲しい。私自身、不慣れなこと連続で、もう心臓が止まりそうだった。

第47話〈暴走と奇襲と〉(改1. 2)

「赤城さんが来られたので、えっと……」

マイ「艦これ」「みほちゃん」

：47話〈暴走と奇襲と〉(改1. 2)

でも幸い祥高さんのカットインが入るより先に赤城さんは直ぐに元に戻った。

「す、済みません！」

ハツとしたような彼女は直ぐに謝罪した。

ハンケチで涙を拭う赤城さん。

「美保司令とお会いするのは本当に久しぶりで……っい」

顔にかかった黒髪を片手で払うと頭を下げた彼女。

「皆さん大変、失礼致しました」

再び顔を上げたときには、もう笑顔になっていた。艦娘ながら赤城さんは大人だ。

そして彼女の場合、その長い黒髪が顔に、どんなに被つても山城さんみたいに鬼気迫

ることがない。爽やかなままで……なぜ？

私なりに考えると、こうだ。

1) 侍のように独りで敵に立ち向かう戦艦 Ⅱ 一途であり突撃力がものを言う。

例、山城さん。

2) 艦載機の気配りをしながら並列的に作戦指揮をして戦う空母 Ⅱ 切り替えが早

く細やか。

例、赤城さん。

……という違いなのだろうか？ 正直なところ、まったく分からないが。

ふと見ると

1) 扇子で扇ぎながらニヤニヤしている呉。

2) 口を開けて半分呆けている神戸。

3) 腕を組んで難しい顔の舞鶴。

もはや何とも言えない。

「どしたの？ なに？」と？」

作業中だった艦娘が溶接マスクを外して不思議そうな顔で見上げる。

「あ、司令、それに皆さん。ああ、こんな格好で失礼します！」

私たちに気付いた彼女は直ぐにバーナーを止めると溶接手袋を外して立ち上がった。

そして私たちの前で、きちんと姿勢を正すと軽く敬礼をした。

「申し遅れました。工場で作業をしている夕張と申します」

「そうか君が噂に聞く夕張さんか」

「はい！」

何となく独特な子だな。誰？ 後ろの方でメロンとか言っているのは！

「それは赤城さんの依頼か？」

私が質問すると彼女は作業台を振り返りつつ言った。

「ああ、これですか？ そうです」

それを受けて赤城さんが応える。

「はい。今回は撃墜された機体は無かったのですが久しぶりに急降下爆撃と海面ギリギリの飛行をした際に被弾した子が居たもので修理と合わせて爆装に改良を施していました」

腕を組んでいた夕張さんが、ここぞとばかりに口を開いた。

「えつとですね、これは私が以前から提案していたものですが、なかなか軽空母の皆さんでは急降下爆撃機を運用する子が少なくてですね。えつと私のアイデアを使う機会が無かったのですが今回、幸いなことに赤城さんが来られたので、えつと……」

そこまで一気にまくし立てた夕張さんに祥高さんが片手を上げてストップをかけた。

夕張さんはそこで説明を中断した。

祥高さんは微笑んで言った。

「詳細は後で聞きますから」

別に彼女は怒っては居ないのだが暗に『空気を読め』という無言の圧力を感じた。

「はい……」

少しだけ上目遣いで祥高さんを見上げるようにした夕張さん。隣の赤城さんも苦笑している。

「では皆さん外へ出ましようか」

祥高さんの案内で私たちは建物の反対側の出口から外へ出た。

溶接の熱気に帯びた薄暗い工廠から外に出ると海風が当たった。初夏のまだ高い日差しですら心地良かった。参謀たちも各々ホツとしたようだ。

1) 神戸は伸びをしている。

2) 呉は制服の前を少し開いて扇子で顔を扇いでいる。

3) 舞鶴もハンケチで汗を拭いている。

私もコリコリと首を回しながら歩き出していた。

でもふと何気なく振り向いてギョッ！ とした。赤城さんが工廠の外まで出てきていたのだ。その長い髪が美保湾の風になびいている。

見送り? ……まさか。

それだけでも珍しいのに……うわっ、止めて下さいって! ニコニコしながら小さく手を振るのは!

別に今生の別れとか特攻作戦に出撃するんじゃないんだからさ。

恥ずかしい! (お互いに)

工廠の窓からは夕張が珍しそうに見ている……おい! お前、作業は終わったのか? 野次馬め……冷や汗が出そうだ。

このとき私は思い出した。さっきの夕張さん以上に赤城さんは『空気を読まない』艦娘の筆頭だった……。ああ、苦笑。

ふと横を見ると案の定、ニヤニヤした呉が口を開いた。

「さっすが司令官殿! ……女性の指揮も、なかなか手馴れたもんやなあ」

「いや……」(違うんだって!)

すると神戸が追い討ちをかける。

「僭越(せんえつ)ながら司令が当地に着任された意味が分かる気がしました」

「お……」(おい、お前まで!)

しかし舞鶴は相変わらず硬い表情だ。……と思つたら一言。

「なるほど」(な、何がナルホド?)

思わず制帽を取って汗を拭く私。

でも表情を変えないのは案内する祥高さんも同じだった。彼女は赤城さんには目もくれずに淡々と進める。

「次は入渠（にゆうきよ）設備です。ドックと呼ばれることもあります」

冷静な祥高さんが示したその建物は南埠頭の先。海に面した場所に建つ煙突のある建物だった。

「えっと……入渠？」

私は照れ隠しのように言った。少しホツとした。

第48話〈こなきガール〉(改)

「司令いっ!!」

マイ「艦これ」「みほちゃん」

：48話〈こなきガール〉(改)

工場から広場に出る。午後の太陽は夕方近くなってもギラギラしていた。それでも屋外では美保湾からの海風が吹くから少しは過ごしやすい。

祥高さんを先頭に3人の参謀と私たち一行は美保湾を右手に見ながら煙突のある建物まで歩き始めた。時折り、すれ違う艦娘たちが軽く敬礼をする。参謀たちは、それに応える、という動作も板についてきた。

でも私は、さっきの余波が半分ボンヤリしていた。空のカモメを眺めつつ最後から付いて行く。

珍しく呉が舞鶴に声をかけた。

「あの赤城は以前、呉に居た記憶があるンやが、あんな性格だったかなあ?」

「……いや」

そう応えた舞鶴だが彼自身、ここの赤城さんには意外な印象を受けたようだ。

神戸が発言する。

「一航戦といえど艦娘でも空母機動部隊の花形ですよ。赤城さんって、もつと鋭い感じの子かと思いましたが」

呉が応える。

「同じ一航戦で加賀って子が居てね。あの子は性格も、ちいっとキツいらしい。赤城は……なんちゆうのかな？ まあワシの印象でもフワフワした感じやったが、どっちかつちゆうと大人しい子やないか？」

何となく三人の参謀の意識が私に向けられている気がした。あの彼女の反応を見ると私と赤城さんの関係が気になるのだろう。

仕方無しに私は口を開いた。

「赤城さんとは数年前に一緒に戦った経験がありますけど基本的に大人しい子ですよ。ただ……」

「ただ？」

誰だ？ 突っ込むのは。

私は大山をバックに飛ぶ空軍の迎撃機を見ながら続けた。

「艦娘は大人しい子でも意外とよく喋ったり。キツそうな子でも繊細だったり……そこは人間の少女たちと全然変わらないと思います」

『へえ』

声を合わせる呉と神戸。舞鶴は同意しているのか良く分からないが無反応だ。

呉が、おだてるように言う。

「やっぱ司令殿は艦娘の長に相応しいんやな」

「いえ……」

私は謙遜した。

そのとき迎撃機のエンジン音に紛れて何かが私の後ろから接近してくる気配がした。

それはまるで魚雷……ええ？ まさか地上で魚雷？

慌てて振り返る間もなくズン！ と私の背中に衝撃が走った。

「痛てっ！」

背後から高速で何かが突っ込んできた。その勢いで危うく前に倒れかけた私だったが、とっさに踏ん張った。

(この間0.3秒)

「司令いっ!!」

見ると小柄な艦娘が私の背中に張り付いていた。

「お、お前は……」

その先は黙った。艦娘に妖怪『こなき爺』なんて言っても通じないだろう。

しかし、この軽くて『きゃしゃ』な艦娘……このグリグリ頭は多分『アイツ』だ。

「比叡か？」

「光荣ですつ、司令い!! やっぱり覚えていて下さったんですね!」

『こなき娘』が言った。いちいちオーバーだな。

この事態に前を歩いていた参謀たちも驚いて振り返る。案の定、呉はニヤついている。先頭を歩いていた祥高さんは振り返ると呆れたように言った。

「比叡さん、整備はもう良いんですか？」

「はいっ、お姉様! もう、ばっちりです」

「バッチリ?」

背中越しに言うからモコモコとしか聞こえない。

「おい比叡、いつまで張り付く? ……暑苦しい」

聞こえないのか? 反応がない。

「比叡さん、離れてください」

祥高さんが言うとは比叡は『ううっ……』と言いながら、ようやく私の背中から離れた。ちよつと口が尖っている。この辺りのリアクションは以前と全然変わらない。

しかし比叡は私と目が合うと直ぐに直立不動の姿勢をとってピシッと敬礼した。

「司令！……挨拶が遅れました！ 比叡、ただいま美保鎮守府に着任です！」

一瞬、間。爽やかな海風が通り抜けた。

私は言った。

「あれ？ ……確か、お前は赤城さんと戦闘の支援任務という命令しか受けていないはずだが」

「ああん？」

怪訝そうな比叡。その、しかめっ面が姉さん譲りで凄みがある。だが何しろ比叡は基本が可愛い系だから、どう凄んでも無理があるな。

「えっと……」

私もどうしたものか立ったまま悩んでしまう。

艦娘つてのは上官の命令に対して素直に反応する子と、そうでない子が居るから参る。戦艦系……実は金剛姉妹は特に強情な子が多いから困る。

そんな比叡は、さつきから固まっている。しかも目がウルウルしているぞ。おいおいマジかよ？

「司令は……私なんか……」

何か上目遣いにブツブツと言っているし。涙を溜めつつ据わった目が怖い……ブ
ラック比叡か？

私の背後からは何となく呉や神戸の好奇心な視線を感じる。お前らもこの状況を楽し
んでいるだろう。

そんな私の気持ちを察したのか呉が言う。

「いや決してそんな……心配しておりませう」

「艦娘の扱い、対応、実に勉強になります」

「……」

見かねた祥高さんも近寄ってくる。

「比叡さん？」

すると向こうから大淀さんが走ってきた。

「司令え！」

あれ？ ……そういえば大淀さんが走るところを初めて見た気がする。妙に走り難
そうだが。

第49話〈発令キラキラ〉(改)

「……お前は今、出撃すれば無敵だな」

マイ「艦これ」「みほちゃん」

…49話〈発令キラキラ〉(改)

鎮守府本館の建物から大淀さんが走って来る。ところが、この陽気もあつてか彼女は次第にハアハアと息が切れて、とても辛そうだ。

呉が言う。

「彼女も艦娘でしょう?」

「えつと大淀さんでしたっけ?」

「これは神戸。」

「運動不足か?」

「……」

この発言に呉以外の参謀たちは苦笑する。

確かに艦娘にしてはバテるのが早い。司令部に長く張り付きすぎた弊害だろうか？
『いやいや、これはきつと比叡の脚が速過ぎたんだよ』

私は心中で勝手に弁解した。ちよつと扱い難いとは言え比叡は高速戦艦だからな……と感心する。

「司令！ 艦隊司令部から電文で……」

大淀さんは走りながら何かを伝えようと必死だ。

だが彼女は直ぐに『ウルウル』している比叡と私を視認して状況を悟つたらしい。

「あ……」

急に安堵した表情に変わった。

『「事（こと）」が済んだなら、もはや急ぐこともあるまい』

そんな雰囲気が変わった大淀さん

（この間、およそ0.2秒以下）。

「いほん」

と、軽く咳払いをした。そして照れ隠しをするような表情を浮かべて歩き始めた。

この変わり身の速さもまた彼女らしい。

改めて横を見ると比叡は脱力したまま地べたに座り込んでいる。よく見ると地面に『の』の字を書いている。おい止めてくれ。

「どこでそんなことを覚えたんだよ」

何気なく聞いたが彼女は呆けた表情でこつちを見上げるばかり。やれやれ。

さて参謀どもは……

1) ニヤ付き1名。

2) 呆け(唾然)顔1名。

3) 腕組み1名。

なお、この一連の状況に秘書艦も呆れ顔だ。もう堪忍してくれ。

さて私の側まで来て敬礼をした大淀さん。

「報告します司令」

「ああ」

私も敬礼を返す。

「連合艦隊司令部より移管命令です。本日15:00を以つて次の所属を舞鶴から美保へ移管するそうです」

そう言いつつ彼女は指令書を私に手渡す。そこには以下の項目があった。

一) 正規空母 赤城。

一) 練習戦艦 比叡。

「……以上です」

私は比叡に言った。

「おい、お前にも正式に美保への移管が発令されたぞ」

それを聞いた彼女は突然、表情がキラキラに変わった。

「きゃー」

比叡は頬に手を添えて、その場で弾かれるように飛び上がったかと思ったら、またこちらへ向かってきた！

「おっと」

残念ながら私も素早く身体を翻（ひるがえ）した。

（この間、2.5秒以下）

戦艦「比叡」による第二次攻撃は、あっさりと回避された。さすがの私も同じ攻撃を二度も食らわないよっ！

それは気にせず大淀さんは眼鏡を軽く持ち上げて続けた。

「申し訳ありません司令。指令室で暗号を解読し終えたら、ちょうどこの子が来て……つい転属のことを喋ったら急に部屋を飛び出してしまっただけ」

「それで責任を感じて慌てて追いかけてきたのか」

私は肩をすくめた。まあ責任感が強いところも彼女らしいな。

澄んだ瞳で見詰める彼女に私は言った。

「でも大淀さん」

「はい?」

「う……………」

「え?」

……………いや実は『運動不足?』とまで言いかけて止めた。

指令室の番人みたいな彼女でも痛い所を突かれたら何となく傷つくような気がしたから……………比叡でさえこの有様だからな。

その肝心の比叡は? ……という相変わらずキラキラしている。

「夕方の陽を反射して余計に眩しいな」

「はい?」

「ダメージもゼロか?……………お前は今、出撃すれば無敵だな」

「はいっ有り難うございます!」

(褒めてないって)

私はふと、もう一方の赤城さんを思い出した。彼女はきつと自分も美保に転属になることを直感で悟っていたのだ。

だから工廠前の『あの仕草』は『今生の別れ』でなく『また、お願いします』という意味だったのだろう。

「では皆さん、参りましょう」

祥高さんが声をかけた。

「行きますか」

「そうですね」

「……」

参謀たちは、まるで白日夢から解放されたように歩き出した。
初夏の埋立地の午後は、やたら蒸し暑かった。

第50話〈男子禁制〉(改)

「比叡はこれからも頑張ります」

マイ「艦これ」「みほちゃん」

∴50話〈男子禁制〉(改)

参謀たちが続いて最後尾から歩き出そうとした私の裾を誰かが掴む。

「おっと」

足を止めて振り返ると、やっぱり比叡だ。ホントにお前は、やることがストレートだな。

「何だ？」

「司令っ、比叡はこれからも頑張りますからっ！」

目をキラキラさせて言う。

「ああ、頑張れ」

「はい！」

そこで胸を張って立ち上がる彼女。さっきまでとは大違いだ。

「では比叡、失礼します！」

軽く敬礼するが早い。「よし！」……と声を出すと棧橋のほうへ駆け出して行った。気付くと祥高さんを始め参謀たちも立ち止まって私たちのやり取りを見ていた。

呉から口を開いた。

「やっぱり金剛型の脚は地上でも速いんですな」

続けて神戸。

「これから埠頭で訓練でもするのでしょうか？」

「……もう夕方なのには？」

珍しく舞鶴も呟いている。

ついでに私。

「あの娘もムラがあるけど『やる気』を出して頑張ってくれるのは良いことです」

まあウチには2隻目となる戦艦だからな。貴重な戦力だ。

大淀さんも比叡の後ろ姿を見つめながら深いため息をついていた。彼女と比叡は対照的だな。

「では私も戻ります」

彼女は私たちに軽く敬礼をすると本館の建物の方へ歩いて戻って行く。

その背中を見送りながら思う。大淀さんは独特の落ち着いた雰囲気がある艦娘だ。それだけに扱い易いのか、そうでないのか？ いま一つ分かり難い面もある。

「司令殿は、いろんな艦娘とお知り合いのようすな」

呉が聞いてくる。

「まあ、知り合いと言うか……いつの間にか艦娘を指揮する経験だけは長くなっていたようす」

正直、自覚は無かった。

「あの比叡も赤城さん同様、司令とかなり深い関係が？」

神戸が興味津々、聞いてくる。その言い方は誤解を招きそうだな。

鋭い目つきに変わった舞鶴を尻目に私は応える。

「深いというか、あの子たちは私の『引つ込み思案』な戦法で生き残ったところがありますから感謝しているようす……あくまで結果的なものですが」

「なるほど噂の戦法ですな」

呉と神戸は感心している。

その後ろから祥高さんが私たちに声をかけた。

「時間が少なくなりましたので、あと一箇所、入渠設備をご案内して最後にしましょうか」

やや早足になった祥高さんは煙突の建物のエントランスホールに皆を案内した。

「艦娘の入渠設備は本来、男性厳禁の施設です。でも今日は清掃の日に当たっているため特別に、お見せすることが出来ます」

気のせいかな祥高さんの説明に参謀たちは色めきたっているようだ。ソワソワしている。

「艦娘を指揮した方なら、ご存知かと思えます。戦闘でダメージを受けた艦娘の艦装は工廠で修理出来ます」

説明しながら祥高さんは赤文字の「男子禁制」プレートの入口をスツとくぐり抜けた……何だろう、この罪悪感。

説明が室内に響く。

「しかし艦娘の身体的なダメージは自身の自然治癒力に頼るしかありません。そのため入渠設備です」

ちよつとドキドキしてきた。

「入渠ですが『入浴』と表現する艦娘たちもいます」

後ろの呉が小声で言う。

「なんか普通の戦闘とは、また違った緊張感があるなあ」

この言葉には皆、賛同だろう。神戸は、ずっと黙っている。舞鶴も……あ、彼の口が

重いのは性格か。

全員ゾロゾロと脱衣所を通る。多分、生涯に一度あるかどうかの体験だろう。あの舞鶴も何となく浮き足立ってきた。

一同は、さらに前進。いよいよ「大風呂」だ！

「繰り返し見ますが目は浴場です。でもダメージ回復の重要な施設です」

改めて念を押さなくても分かっている。妙に静かになる参謀連中と私。

ついに大奥のごとき大浴場の前。でも中からは「きゃっ！ きゃー！」という黄色い歓声が響いてくる。

「あれ？」

思わず私。

……まさか掃除じゃなくて誰か入浴しているとか？

急に押し黙る参謀たちと私だった。

第51話へ水も滴る（改）

「何やっっているんですかつ」

マイ「艦これ」「みほちゃん」

：51話へ水も滴（したた）る（改）

お風呂：……もとい入渠設備の中からは「きゃあ！」という声に、なぜか怒鳴り声が混じっている。

「怒号？」

どういふ事態だ？

「（ちらです）」

祥高さんは、何のためらいも無く大きな扉に手をかけた。淡々としているのか？ 度胸があるのか。

参謀たちは私の左右に分かれて並んでいた。さすがに部外者が、いの一歩に浴場へ入室するのは躊躇（ためら）われるのだろう。

しかし彼女がガラガラと扉を開けた途端だ。予想外にたくさんの水が……いや、これは波濤という勢いの大量の水が押し寄せてきた。

その間、0.2秒も無かったと思う。祥高さんはサツと身をかわした。おおっ！ 重巡にして現役の兵士。さすがの回避能力だっ。実に素晴らしい。

私は感心したが彼女の真後ろに立っていた私は当然、避ける間もなくバシヤツという音と共に怒濤の水しぶきを浴びた。

さつき後方から狙った比叡の『艦娘魚雷』は避けたけど。正面からの不意打ちは避けられなかった……気付けば全身ずぶ濡れ。

いや、私を中心として半径1メートルくらいは水しぶきが飛び散った。一部の参謀たちも、若干の水を浴びたようだ。そして私の背後のエントランスホールにまで水しぶきが飛散した。

大浴場（入渠設備）の内外共に、その場に居た全員は一瞬、何が起こったのか理解出来なかった。だが直ぐに状況は把握できた。

実は第六駆逐隊を中心に、きちんと大浴場の掃除はしていたのだ。だが駆逐艦娘だから、ちよこまかと動き回って結局、掃除よりも水遊びになった。

普段は軽巡とか重巡の艦娘が目光らせているらしい。しかし今日は、たまたま誰も見ていなかった。そこで大浴場は無法地帯と化していたのだ。

祥高さんは何かを言いかけた。

「し……」

ところがチラッと私の方を見て彼女は固まった。そう……ずぶ濡れになった司令貴女（あなた）の真後ろに電探の無い私が居りました……いや、別に電探は関係ないか。

「ははは」

照れ隠し的に笑う私。

ばつが悪いのか祥高さん、浴場内の駆逐艦たちに怒りの矛先を向けた。

「何やっているんですかつ、あなた達は！」

彼女の怒号を初めて聞いた。

少なくとも駆逐隊の作業は、もはや掃除ではなかった。大浴場内にいたのは電、雷、暁、響、それに寛代だった。

状況がよく分からないがホースを持って突っ立っていたのが寛代。浴室内から聞こえてきた怒鳴り声の主は彼女らしいが……その表情はいつも通りポーっとしている。そのホースの先端からはジョボジョボと空しく水が流れ続けていた。

『いめんさか』

駆逐艦娘たちは口々に謝っている。まあ小さい子達が頭を下げる姿は可愛らしいから許してやろうか？ ……いやいや、ここは軍隊なんだから甘やかしてはダメなんだ。

祥高さんは、まだガミガミと怒り続けている。よほど腹に据えかねたのだろうか？
その前で小さくなっている艦娘たち。やっぱり可愛い。嗚呼……小さい艦娘には弱い私。

一方の私は……水も滴(したた)るいい男なら良いけど。さにあらず。やれやれ、これでまた私の制服が無くなってしまうのだろうか？

弓ヶ浜の水路での逃避行や、今回の件とか……どうも寛代が居ると私には水難が降りかかってくるようだな。

降って湧いたような災難には参謀たちも、ただ苦笑いするしかないようだった。

第52話〈桃色吉凶〉（改）

「……少しでも艦娘たちの姿うちゅうか」

マイ「艦これ」「みほちゃん」

：52話〈桃色吉凶〉（改）

あの大騒ぎの後、夕焼けで真っ赤に染まった西の空。それを反射した埠頭が実に綺麗だ。

そんな風景がよく見えるガラス張りの入渠設備エントランスロビー。大騒ぎの後片付けや私の作業着への着替えやらで艦娘たちがバタバタやっている。

申し訳なさそうに鳳翔さんが持つてきた新しい作業着も、なぜか桃色（ピンク）だった。前に着ていたのは、まだ洗濯しているらしい。

結局、サイズがなかったとのことで、大型艦娘用のピンクしかなかったようだ。

鳳翔さんは何度もスミマセンを連呼する。まあ艦娘だけの特殊な鎮守府だったからな。備品が偏るのは仕方ない。こっちも、いろいろ我慢しなきゃ。

とはいえ今は夕日が当たっているからピンクも良く分らない。これが昼の陽の下に出たら全身桃色だから……赤面どころではない。

祥高さんは駆逐艦娘たちを正座させてガミガミ説教……とても怖い。私も祥高さんには、お説教を喰らわれないように気をつけよう。

「あれ？」

いつの間にか青葉さんがやってきて写真撮って居る。さすが情報通だな。彼女はカメラを構えつつも桃色の私を何度もチラ見している。本当は正面から私を撮影したくてウズウズしているのだろう。でも、止めてくれよな……私も一応、恥ずかしいから。

そんな中で参謀たちはロビーの椅子に腰掛けて好きなことを言っている。

「まあ、呉も似たような騒ぎはしよっちゅう起きるんやけど」

「でも、こういう家庭的な雰囲気は個人的には好きですよ」

神戸は褒めているのか社交辞令なのか？ よく分からないことをいう。

「……」

舞鶴は相変わらず、澄まし顔だ。別の意味で心中が複雑化しているようにも見えるが。

たった一日とはいえ参謀連中は、この特殊な鎮守府に滞在して、かなり艦娘たちに毒されてないか？

だいたい軍隊なんて特異な環境だから。こんな艦娘部隊にいたら、なおさら変になるかも。ちよつと心配だ。

「ひとつ提案やけど」

呉が言う。

「今日は夕食を、隊員食堂で食べるつちゆうのはどやろ？」

「おお！」

神戸が素つとん狂な反応を示す。

「それは素晴らしい作戦です」

それはいったい、どんな「作戦」だよ。

だいたい、この全身桃色の私はどうなるんだ？

「……」

舞鶴は特に何も言わないが、別に反対もしない雰囲気だ。

「司令殿」

呉が、その大柄な体で急に畏まって言う。

「はい？」

思わず作業着姿で構えてしまう私。ピンクの作業着に軍服の参謀が相對して……妙な構図だな。

彼は言う。

「今朝、あの将校殿も述べられたように、いずれ艦娘たちは各鎮守府でも重要な位置を占めていくと考えるンですわ」

「……そうですね」

それは否定しない。

「ワシも最初は半信半疑でしたが今日、この鎮守府で過ごしてますとな……なんとなか、そんな気がしてきたンやな」

「そうですね？」

やっぱり毒されてきたか。

「ここに来たンも、せっかくの機会やし……少しでも艦娘たちの姿っちゆうか、戦場以外の普段の姿に接することも同じ海軍の軍人……特に参謀としては、今後も含めて必要かかって思いましたな」

堅物そんな呉から、そんな前向きな台詞を聞くとは思わなかった。

視線を感じた私はふと顔を上げた。そこには、何かを期待するようなキラキラした目の神戸……お前は比叡か？

呉は舞鶴を見て続ける。

「舞鶴さんには別に無理強いしません。今日、予定通り舞鶴へ戻られても構いませんし。」

ワシら勝手に言い出しちよるだけですから」

「あ、いや……」

相変わらず煮え切らない奴。

ふと気づくと祥高さんも説教を終わって、私たちのやり取りを聞いていたようだ。

「司令？　もし皆様が、希望でしたら直ぐにでも対応させます」

「え？」

……だから祥高さん、あなたマジで対応力あり過ぎ。

「そうだな」

心とは裏腹に私は、つい流れのままに伝えてしまった。

さらに私の口が勝手に回る。

「この際だから」

ピンクの作業着になった自分を見ながら私は言った。

「皆さん、制服は脱いでリラックスしては如何ですか？」

私は何を碎けたこと言ってるのか……自分で理解不能だった。

ピンクの作業着を着て半分自棄（ヤケ）になったか？　あるいは艦娘オーラに私も、

しつかり毒されたのか。

東の窓からは夕日に赤く染まった大山が美保湾を桃色に染めているのが見えた。そ

の桃色は吉凶どちらの前兆なのかな？
いやはや、もう、どうでも良かった。

第53話へパーティーの光陰〈改〉

「わが国の勝利と鎮守府の発展を願って乾杯！」

マイ「艦これ」「みほちゃん」

：53話へパーティーの光陰〈改〉

山陰でも夏の日は長い。日没時刻はとうに過ぎたが、まだ空は明るい。美保湾にも大山がシルエツトを、はつきりと映し出していた。

騒ぎのあつた入渠施設から移動して、ここは鎮守府1階の隊員食堂。開け放した窓からは心地いい海風が吹き抜ける。気が付くと結局は立食パーティーのような雰囲気になりつつあった。

一応、軍隊なので派手な飾り付けまではしないはずが……それでも主体的に質素なデコレーションは貼り付けられていた。

艦娘たちは少女だから、やっぱり好きなんだろうな、こういうの。ざっと見た感じ、哨戒や入渠以外のほとんどの艦娘が食堂に集まっているようだ。

ここぞとばかりに窓の外のウツドデッキにも艦娘たちが鈴なりだ。さすがに今日は私は挨拶しなくても良さそうだ。やれやれホツとした。

だいたいピンクの作業服では何を言われるかわからない。とはいえこのムードならピンクの格好でも違和感はなさそうだな。そういう意味ではラッキーだったかも知れない。

しかし制服を脱いでラフな私服になった呉や神戸それに舞鶴の姿は実に興味深いものがある。

1) 呉：人の良さそうなオツちゃん。

2) 神戸：意外に爽やかな好青年だ。

3) 舞鶴：ガリ勉？ やっぱ気難しそう。

この参謀たちの『変身』ぶりを見るだけでも価値がある。ついでに、あの青年将校も、この場に居たら面白かったのに。彼も大幅にイメチェンされるのだろうか？

「そろそろ時間ですので始めましょう」

祥高さんは全体の前で言った。

「堅苦しいことは抜きですが、乾杯は行いましょう。司令、音頭を」

……ああ、やっぱり呼ばれるのか。

チョッピリだけ心の中でうな垂れた私。大げさなことは言わないとしても原稿も準

備もなにもない。しかし……これも指揮官の宿命だな。

私は大淀さんからマイクを受け取ると小さな演台に立った。たくさんの視線が、いつせいに集まった。

「えつと……」

うわ、演台から見ると圧倒されるな。この鎮守府にも、こんなたくさん艦娘が居たんだ。確か総数で70名、全員が来ているわけではないとしても狭い食堂やデッキに鈴なりだ。

気のせいか、やはり「ピンク」とか「あれは武蔵とか戦艦クラスの服ね」という呟きが聞こえる。武蔵？ ……雲の上の艦娘だな。

軽く会釈をして私は直ぐに語る。

「えー、あくまでも視察任務の一環でありましたが各地からの鎮守府参謀の皆さんの希望もあつて今宵は艦娘の皆さんとの交流の場を兼ねた食事会を行います」

ちよつと早口で流した。意外にも「硬あーい」という声は、あの島風からも今回は出なかった。ピンク作業服の威力か？

「では皆さん、器をお取り下さい」

全員が一齐にガチャガチャと器を構える。

「わが国の勝利と鎮守府の発展を願つて乾杯！」

『かんぱーい』

その瞬間、私は食堂の後ろの方に、あの黒髪の艦娘を見つけた。えーっと、あれは、やっぱり見覚えが……

ところが、その艦娘を気にしていたのは舞鶴も同様だったらしい。近くの艦娘たちの器を合わせながら見ていると舞鶴が、その艦娘に近づいて行くのが確認できた。

でも、その艦娘は舞鶴が近づくと直ぐに察知して、そそくさと退出した。『しまった』という表情の舞鶴。

うーむ、気になるなあ……。

あの艦娘は一体？　そして舞鶴との関係は？

「……待てよ、舞鶴？」

私が居た所だよな。

第54話〈各人各様〉(改)

「司令っ！ 許せますか！」

マイ「艦これ」「みほちゃん」

：54話〈各人各様〉(改)

舞鶴がその黒髪の艦娘に近づくと彼女は避けるように食堂から出ていった。

一瞬、固まったような舞鶴も当然、直ぐに追いかけていく。

「……何だ、あれは？」

まるでカッパルのケンカだ。

でも食堂にいる、ほとんどの艦娘や参謀たちは全然、気付いていない。

「まあ、もともと存在感の薄い舞鶴だから」

仕方が無いな。

これは果たして美保鎮守府にとって幸いなのか不幸なのか？ よく分からない。

ただ、あの黒髪の艦娘は美保の所屬らしいから無下に放置も出来ないかな？

彼らの行動が気になる。祥高さんに相談しようか。

しかし今日はパーティだ。雰囲気は壊したくないし、乾杯直後に基地司令が中座するのも気が引ける。

ふと会場を見ると呉のおじさんはモミジ饅頭とか、お菓子の類を、お店が開けるくらい大量に持ってきている。一体何処にそんな大量の饅頭が隠されていたんだ？ 呉おじさんは補給艦か……謎だ。

艦娘たち……特に駆逐艦娘が一斉に、お菓子の群がっている。女子は甘いものには目が無い。聞けば呉には孫娘が居るらしい。一種の「おじいちゃん」的感覚かも知れない。一方の神戸は夕方早々に厨房に入って自分でカリとかパスタを調理したらしい。神戸って実は料理作るのが上手だったんだ。その土地柄かハイカラな人が多いのだろう。そして比叡が、すっごく恨めしそうな目をしている。その彼女がズンズンとこつちに来るぞ。おい……目つきが鋭いつて。

「司令っ！ 許せますか！」

すごい剣幕、たじろぐ私。

「……な、何が？」

比叡はビュッと神戸を指差して言った。

「あの若い参謀さんは、なんで料理が上手なんですかつ！」

「知るかつ！ そんなの」

だが比叡は、かなり膨れている。

「おい、こんなことに対抗意識を燃やしてどうすんだ？」

私の言うことは比叡は無視。

でも、あの神戸は育ちが良さそうだ。きつと彼が生まれた環境とか背景も、あるのだろう。

今度は、その神戸の料理に赤城さんが急接近している。ニコニコしながら、ああ、赤城さん大皿を全部取ったらダメだって……まさに破竹（駆逐）の勢い。

「あ、そうか」

祥高さんが前に言っていた『大喰らいの艦船』ってゼツタイ赤城さんのことだな。なんか私知っている以前よりも食べる量が増えてないかな？

彼女が日ごろから言っている「慢心は敵だ」って言う言葉が空しいぞ赤城さん！ 少しは遠慮つてもいいのじゃないのか？

振り向くと、相変わらず呉はやさしいジイジになつてゐるし。

鳳翔さんは美味そうなパスタのレシピを神戸から聞き出そうとして必死にメモって居る。

今日は各人各様、不思議な鎮守府だな。

しかし、さつき外に出た舞鶴が気になる。そろそろ会場も落ち着いてきたから私も索敵してみるか？

「ちよつと風に当たつてくる」

私は祥高さんに断りを入れてウッドデッキへと向かった。

デッキで飲食している艦娘たちの向こうに、ちよつど夜の海が見える。美保湾には、くつきりと月が出ていた。

「月光か」

索敵には、うつつつけの夜だ。

第55話〈隻眼と天使〉（改）

「天龍ちゃん、風邪引くわよお」

「いやあ、もう食えねえよ！」

マイ「艦これ」「みほちゃん」

：55話〈隻眼と天使〉（改）

私は風に当たるフリをして食堂のウッドデッキから外に出た。

空にはハッキリ月が出ている。今夜は珍しく風がない。私は、そのままデッキから中庭へ降りた。

美保鎮守府の中庭は、さほど広くはない。もともと美保湾の埋立地だからな。呉のよ
うな伝統的な鎮守府よりは遥かに小さい。

その狭い中庭で私はギョツとした。

「誰かが倒れている?」

……まさか事件?」

いや、よく見たら、あの隻眼の艦娘がグウグウ寝ていた。なあんだ一瞬、酔っ払いかと思っただぞ。

「気楽なものだな」

ここは軍隊だ。建前上、お酒があるはずがない。だが普通の食事だけでもう、お腹いっぱいになったのか？

「えーつと、天龍さんだっけ？」

念のために声を掛けてみた。当然、そのくらいで起きるはずがない。

そういえば以前、早朝に中庭で怒鳴っていたのも、この艦娘だったよな。荒ぶる娘、男勝りだな、この艦娘は。

「ああ、天龍ちゃん、こおんなどころにいたのオ？」

天使のような光る輪を頭に乘せた艦娘が向こうから、小走りに近寄って来た。

その「天使」は直ぐ私に気づくと会釈をしながら言った。

「あら司令え、スミマセン。……私『龍田』と申しませす」

ちよつと失礼しますと言いながら彼女は天龍の身体を軽く抱き起こすと、その体を軽く揺さぶった

「天龍ちゃん、風邪引くわよお」

揺さぶり続けるが、反応が無い。少し肩をすくめた龍田さんは言った。

「この人、何するのも、もお、ひたすら一生懸命なの。精一杯食べたなら、後はもう全力で寝てしまふんですね」

その後も龍田さんが何度か呼びかけると、やっと天龍は、

「いやあ、もう食えねえよ！」

とだけ応えた。

この天龍も普段「さん」付けで呼んだら利根のように「やめろお！」とか言つて嫌がりそうだな。

「しよすが無いわねえ」

そう、私も内心『しよすがないな』と、思つてしまった。

ま、寝ている隻眼は、この天使に任せて。さりげなく立ち去ろうとしたら

「司令」

いきなり、龍田さんに呼び止められた。

「はい？」

私は振り返つた。

「司令は、こちら出身ですよね？」

「ああ、そうだが」

「御存知かも知れませんが美保湾つて海水浴のメツカなんですよねええ」

「はあ……」

そういえば学生時代私は、たまに授業をサボって友人たちと美保湾で泳いでいたことを思い出した。

「ああ。ま、そうとも言えるねえ」

正直、水泳が出来るほどのメツカかどうかは知らない。ただ弓ヶ浜は遠浅だからソコソコ水遊びくらいは楽しめたはずだ。

夏の美保湾は大山がよく見えて海は青くて、町にも近いから便利で良いんだよな。

龍田さんは寝ている天龍の髪の毛を、なでながら続けた。

「あたしも天龍ちゃんも古いタイプの軽巡だから泳ぐのも得意なんですよ。あと水着も

……」

「え？」

思わず声が出た。

龍田さんは、少し妖艶な笑みを浮かべた。青白い月明かりと彼女の頭上に黄色く光る輪の微妙な陰影。

まずい、ちよつと鳥肌が……だが直ぐに彼女はニツコリと微笑む。

「今度、みんなで海水浴にも行きたいですね」

龍田さんは鼻から抜けるような声で、こちらを見上げた。

「……あ、ああ。考えておくよ」

私の言葉に彼女は、とてもゆつたりとした声で応える。

「どうぞ、よろしくおねがいます」

龍田さんの瞳は静かにキラキラしていた。山城さんや赤城さん、あるいは比叡とも違う龍田さんの瞳の輝き……妄想が爆発しそうだ。

「司令、呼び止めて申し訳ありませんでした」

彼女は、少し首を傾（かし）げて微笑んで言った。

この二人は何となく荒ぶる印象があっただけ……改めて今夜は、二人とも存在感があつて、かつ大人っぽい。（一人は夢の中へ轟沈しているが）それでいて期待するのは海水浴か？

青い月明かりにボウツと浮かび上がっている龍田さんと天龍……不思議な艦娘たち。何かキツネに詰まれたようだ。

「では行くよ」

「はい……私は暫く、ここに居ますから」

私は龍田さんに会釈をして再び、歩き出した。

中庭を過ぎて工廠の建屋を越えると、そこはもう海だ。ここが鎮守府の夜の埠頭だ。打ち寄せる波の音が心地良いのだが……それを打ち破るかのごとく男女が言い争うよ

うな刺々しい声が聞こえた。

尋常ではないな……と声のするほうへ近づく。

ん……やっぱりの声は舞鶴らしかった。なんだろう、この罪悪感。ちよつとドキドキする。

第56話〈轟沈と異動〉(改)

「普通さあ、艦娘ってここまではしないんだろうね」

マイ「艦これ」「みほちゃん」

：第56話〈轟沈と異動〉(改)

その艦娘の声が響いた。

「だから、なんで付いて来るのさ?」

「違う! 話を聞いてくれっ」

舞鶴にしては珍しく大声を出している。二人の声が埠頭にエコーする。

空には月が出ていた。遠くに大山のシルエットを掲げてダークブルーに浮かび上がった美保湾。

それを背景に鎮守府埠頭と岸壁が黒々としたコントラストをなしている。

見ると手前の埠頭に舞鶴らしき人影。

そして話している相手の艦娘が……

「あれ？　いないけど」

どこだ？

「もう、放っておいてよ！」

その艦娘の、ちよつと怒ったような、ぶつきらぼうなセリフが響いた。

「あ……」

私は呟いた。そのエコーのかかった声は海上から聞こえている。

「なあんだ、舞鶴が嫌で、ついに海の上まで逃げたのか」

嫌われたな、お前も。

「……」

知らない人が見たら驚くだろう。艦娘は艤装を付けなくても基本的に、そのまま海の上を歩ける。

正確に言うとは航行しているのだが……しかしパツと見ると、まるで忍者が水上歩行しているようにしか見えない。

「日向の航行姿なんかは、もう制服と合わせて忍者そのものなんだけどな」

思わず思い出した私は苦笑した。

「いや、そんな事はどうでも良い」

自分で何を考えているのだ？　呆れるな。

少し怒ったように艦娘は続ける。

「アタシのことなんかさあ、もお気にしてくれなくつても大丈夫だから。いい加減にしてくれないかな」

「……」

月明かりに少し黒髪が反射して青白く水面（みなも）に立つ艦娘……

思い出した！

「あの艦娘は以前、舞鶴にも居た北上じゃないか？」

実は彼女と私は舞鶴に着任後から接する機会が多い艦娘だった。

北上自身が竹を割ったような、あつさりした性格だった。艦娘でありながら右も左も分からない不器用な私にも遠慮せず、あれこれ教えてくれた。

だから彼女は、よくこう言っていた。

「普通さあ、艦娘つてここまではしないんだろうね」

「そうだね」

お互いに苦笑しながら、そんな会話をよく二人でしていた。

実際、そのくらい屈託がなくて面倒見が良かった北上だ。それ以外でも、いろいろなウマが合ったから気が付けば日向同様、彼女にも「さん」を付けずに呼び捨て出来る間柄

になつていた。

「……そういえば私が艦娘と出会った順番としては北上のほうが先か？」

だから単純に比較すれば彼女のほうが「旧友」になるのか。

ただ北上との関係も長くは続かなかつた。彼女は私が舞鶴沖の海戦で敗走した後に他の鎮守府に異動になつたらしい。

らしい……と言うのは私も、あの海戦後はしばらく現場から遠ざかつていたからだ。だから私も、その後の舞鶴の艦隊編成事情には疎い。気がつくといつの間にか北上は、ひっそりと舞鶴から消えていた。

軍隊の異動は、いつも突然だ。ましてや異動理由なんか機密事項に類するから当時下つ端の私を知る由もない。

彼女のシヨックを和らげるために上層部が事情を汲んで異動させたという噂もあつた。つまり私が沈めた軽巡……あの重雷装艦と北上がとても仲が良かったらしいのだ。その艦娘が沈没したことにシヨックを受けた北上は以後、精神的に不安定になつた……という噂もあつたくらいだ。

いや実際のところは分からない。だが改めて思い返すと私が美保に着任した姿を見た彼女が慌てて逃げ出したのも何となく分かる気もする。その親友を轟沈させたのが他でもない私なのだから。

だが改めてショックを受けたのは私の方だよな……彼女を忘れようとするあまり……本当に忘れていた。薄情者だ。

「もしそうだったら、ごめん北上」

私は直接詫びたくなつた。あいつには美保に来てからの私自身の行動も含めて申し訳ない。

そうやって私が過去を思い出している間にも夜の海の上では未だに妙な睨み合いが続いているようだ。

「いい加減、どっちか折れないかな？」

痴話ゲンカみたいなの二人に割つて入る気はないけど何だろう？ ……さつきから妙な胸騒ぎがするんだ。変な緊張感。

この状況は早く收拾しないとまずい事になりそうな気がする。あの美保湾から深海棲艦に見つめられたときのような刺すような感覚だ。

第57話〈北上の告白〉(改)

「今さら舞鶴に戻る気もないから」

マイ「艦これ」「みほちゃん」

：第57話〈北上の告白〉(改)

正直、私も声はかけ辛い。だがこの際、結果はどうでも良い。

この鎮守府の責任者として、このままでは、いろいろマズい予感がするわけだ。とにかく苦手だが二人の間に割って入ろう。意を決した私は声をかけた。

「二人とも、そのくらいにしてくれないか」

私の声が埠頭にエコーした。

こちらを見た北上は、その大きな瞳をさらに見開いた。

「あー！」

私の出現で明らかに動揺して少し引いているようだな。申し訳ない。

でも私は海の上に居る彼女に向かって叫んだ。

「私の勝手な思い込みかもしれないが……」

暗くてよく分からないけど構わず続ける。

「過去のわだかまりがあるなら素直に詫びよう。でも二人とも、この場は収拾して欲しい！」

脇の方に居る舞鶴も多分、苦虫を潰したような難しい顔をしていることだろう。

海の上では少し驚いたような表情を残したまま北上が答える。

「いや、別に……」

そうこの声。少し動揺しているが北上と会話をするのは何年ぶりだろうか。大きな瞳で水面（みなも）を見つめながら呼吸を整えて少し間を置いている彼女。

月明りを映している、あの眼差（まなざ）しは以前と変わらないな。

大きく息を吐いて前に垂れた長い三つ編みの髪を肩の後ろに払った北上は言った。

「司令、アタシさあ」

少しだけ表情が明るくなってる。

「もう、そんな前のことは気にして無いんだけど」

顔を上げて、こちらを見つめた彼女は意外な言葉を発した。

「え？」

一瞬で拍子抜けした。

「そ、そうなのか?」

さつき引いてたように感じたのは違うのか?

でも確かに海上の北上は明らかにさつきまでとは態度が変わってる。

「……ほら、舞鶴で大井つちが沈んだこと」

彼女は言葉を選ぶようにしてポツポツと語り始めた。

「アタシが気に病んでいるとかさ、みんな勝手に決め付けてんだよね。そんなんじゃない、違うんだナ」

北上は暗い海上で、ゆっくりと回転している。私もだいぶ月明かりに目が慣れてきた。海上に居る彼女の黒い髪と大きな瞳が何となく見分けられるようになってきた。

「そりゃアタシも最初は、ちよつと混乱してさ。申し訳ないけど司令を恨んでみたこともあった」

そう言いながらチラツとこちらを見詰めた彼女。そら来た、やつぱり。そこは私も胸が痛い。

「済まん」

呟くように私も言う。それが聞こえたのか北上は軽く頷いたようだ。

「でも……」

彼女は海の上で静止した。三つ編みにした長い髪の毛だけが勢いを残して少しだけ

回った。

「もう、良いんだ」

北上の黒い髪の毛が月明かりに鈍く反射している。

「艦娘である以上はさ」

彼女は再び微笑んで私の方を見た。

「そこは受け入れなきゃね」

ゆるやかな風に彼女の前髪がチラチラなびいて、さすがにドキツとした。

舞鶴がずっと何か言いたそうだけど結局は言い切れないらしい。何か彼の怨念みたいなオーラをチクチク感じるんだが。

それには構わず北上は腕を後ろに組んだまま海の上で水面（みなも）を蹴るような仕事をしている。

「だからさあ、司令にはもう何とも思っていないんだ」

彼女は今度は舞鶴の方を見た。

「あとゴメンネ。やっぱ今さら舞鶴に戻る気もないから」

「え？」

「なに？」

私と舞鶴は思わず同時に返事をしていた。

それは……どゆこと？ そんな話があつたの？

私は思わず、舞鶴のほうを見てしまった。

「それは……」

舞鶴は私と海の両方を見ながら、しどろもどろになつてゐる。

もし明るければ真つ赤になつた彼が拝めたことだろう。あいつは作戦参謀としてはソコソコ優秀な男だけど。艦娘の心までは、まだ操縦する腕はないらしい。……いや、それは私も同じか。

でも北上の大らかな性格は、ちつとも変わつていない。いや、むしろ彼女なりに、たくさんの哀しみを越えて来たからこそ今の成長した艦娘としての北上自身があるのだろう。そんな北上と、この地で再会できたことは素直に嬉しく思った。

今夜の君と出会えたことで私もまた一つの哀しみを越えられるかも知れない。

『ありがとう北上』

私は心の中で呟いた。

第58話〈心の拠り所〉(改)

「過去には戻らないんだ」

マイ「艦これ」「みほちゃん」

：第58話〈心の拠り所〉(改)

「うふふふふ」

北上は月明かりの中、海上を舞うようにして微笑んだ。彼女の黒髪と白い肌の対比が美しかった。

彼女が果たして私の気持ちを悟ったのかどうかは分からない。ただ、その滑らかに踊るような所作に私はハッとさせられた。

(えーつと……誰かに似ているな)

そうか、さつき中庭で出会った龍田さんか？

だが北上の場合は妖艶というよりは繊細な月下美人を想わせた。いつもの彼女からは想像も出来ない儂(はかな)さと神秘さを漂わせている。何だか不思議な感覚だな。

私は舞鶴で半年以上、彼女と接していたから、それなりに性格も分かっているつもりだった。

しかし北上は、どちらかという大雑把な艦娘というイメージしかなかった。

ところが、である。意外にもこんな繊細な一面があつたのか？ 艦娘は実に奥が深い。

気付くと北上に執着していたはずの舞鶴も口を半分開けて少し呆けたような顔をしている。海上で見せる彼女の繊細な一面には彼も意外だったようだな。

北上は後ろに回していた手をゆつくりと前に組み直して私のほうを向いた。

「今日さ、司令が初めて食堂に入ってきたときね……アタシさ何だか正直、合わす顔がなくってね」

そう言いながら彼女は手のひらを体の前に伸ばすような仕草をした。そして少し滑るように水面を漂っている。やはり滑らかに踊るような優雅な動作だった。

「司令は、ちゃんと大きくなって私の前に現れたのね。私は全然……」

北上は、そう言って組んだ両手を軽く離れた。ちよつと寂しそうに下を向いている。

「おいおい、別に私は何も変わってないぞ？」

私の言葉に彼女はチラッとこちらを見て言った。

「ううん司令は変わったよ。アタシには分かるんだ。それなのに私つてさ、何年も……」

何年も、いったい何やってたんだろうってね……嫌気がさしたんだ」

北上は何かを払い除けるように体の回りで手のひらをグルグルと廻す仕草をしている。ちよつと悔しそうな感じだ。

「アタシさ何だか急に恥ずかしくなつて……堪（たま）ンなくてさ、逃げ出したんだ」

彼女にしては珍しく顔の前で拝むように手を結んで少し、はにかんだように恥ずかしそうな表情を見せた。この感情を、ストレートに出した仕草は北上らしい。

「ごめんね司令」

言い方はいつもの彼女そのものだが、まさか謝罪されるとは意外だった。私は慌てた。

「なぜお前が謝るんだ？　北上……私だつて別に成長したから司令になつたわけでも何でもないぞ」

私が釈明するように言うと彼女はチラリと上目遣いでこちらを見た。それはまるで悪戯をした少女が怒られるのを避けるようにしているみたいで可愛い。

「ふふ、安心してよ司令……アタシもこう見えて反省してんだから」

彼女は一瞬、手のひらを組んだまま海上で何かを吹っ切るように少し早く回転させた。

同時にサラサラの前髪が、ふわりと舞った。

「アタシも……司令と一緒に前を向いて進むんだから」

いつもの自然な笑顔に戻った北上は、また海の上でスツと静止した。

そして溜めていたものを吐き出すように言った。

「もう過去には戻らないって……うん、そうだよ。戻らなくても良いんだから」

何か自分に言い聞かせるように決意をこめた彼女の大きな瞳が印象的だった。舞鶴は、ずっと無言だな。

北上は改めてその大きな瞳で私を見た。

「司令や参謀がサ、どうこうってんじゃないから……これはアタシが自分で出した結論」
彼女は少し穏やかなホツとしたような表情になっていた。

「そうか……」

北上の純粹な心の告白を聞いていたら私の過去の壁までが共に崩れ去っていくようだった。

それは彼女や他の艦娘たちだけじゃない。舞鶴に対しても必要以上に後ろめたく感じていた自分がなぜか小さく思えてきた。自分自身を棹に押し込めて一人で勝手にもがいていた感じだな。

私も応えた。

「ああ、お前の言う通りだな。過去に囚(とら)われても何も戻ってはこない。時が来た

ら区切りをつけて一歩でも前に進むことだ」

私の言葉に北上もフツと笑った。私に呼応するように彼女は言った。

「私の戻る場所はサ、今はここなんだ。うん、そう思う」

それは彼女自身が言い聞かせるように聞こえた。北上は改めて舞鶴の方を向くと諭すように言った。

「もうアタシ決めたから……これで良いよね？」

「……」

舞鶴は、やっぱり何かを言いたそうだけど黙っていた。ハッキリ言えば良いのにな。

もつとも相手が北上では説得するのは難しそうだけど。

私は改めて彼女を見た。北上はいま、この瞬間に何かを決意したんだ。だから前よりもスッキリした表情になった。そして胸を張って、こちらの埠頭に向かって水面を歩き始めた。

「そうだよ北上。お前が決めるのが良い」

私は軽く腕を組んで言った。

そうやって節目を作って人は前へ進んで行く。それは艦娘だって同じだろう。

それは北上だけじゃない。他の艦娘たちだって我々と同じような葛藤を抱え、感情を抱いている。

むしろ彼女たちは我々以上に深い苦しみや哀しみを味わっている。だから我々は、もつと艦娘に寄り添うべきだろう。

人と違つて記憶や思い出が霞(かす)んでいる艦娘にこそ新しい心の拠り所が必要なのだ。

私は悶々としている舞鶴を見た。

そもそも人は、なぜ自分勝手に他人を遠ざけるのだろうか？ 直接、話し合えば通じることが多いのに直ぐに壁を作ってしまうのだ。それは既成概念なのか？

だが私は鎮守府の指揮官の任を受けたのだ。作戦遂行だけが指揮官の使命ではない。普段から兵士たちの心身の管理もすべきだろう。

特に艦娘は特殊だ。今までの軍隊の常識が通じない。そこに私は何らかの道筋をつけるべきなのだ。私も、もつと心を開いて他の艦娘たちと一緒に語り合い共に苦しみ抜こう。これは一蓮托生の道なのだ。

その第一歩として……私はこちらに向かってくる北上を見ながら思った。彼女が埠頭に戻つて来たら心の底から「お帰り」と声を掛けて迎えるのだ。

今はそれしか出来ないが艦娘たちと共に美保鎮守府の勝利を少しずつ刻んでいこう。近くまで来た彼女に私は声をかけた。

「ありがとう北上。お前と共に私もまた少しは前進できそうだよ」

「やめてよ今さら」

恥ずかしそうにダメだしをする仕草をした北上だ。相変わらずストレートな物言いだが、そこはお前らしいな。

その時だった。

『ソウハ、イクカ』

妙な声が響き渡ったような気がした。

『え？』

私たちは、ほぼ同時に辺りを見回した。

突然埠頭一帯は妙な空気に包まれている。直ぐに嫌な予感がした。

すると暗い海面上を不気味な航跡が迫ってくるのがはつきりと見えた。

魚雷か？

「あぶない！」

私の叫びを聞いた北上は、とつさに振り返ると海の上で身をかわす仕草をした。北上をかすめた不気味な航跡は埠頭の岸壁に突き刺さった。

それを見る以前に私は反射的に舞鶴へと突進していた。タツクルるように彼と二人で埠頭の横の草むらへと身を躍らせた。次の瞬間には二人の体が宙を舞っていた。

第59話〈北上中破〉(改)

「すまん、恩に着るよ」

「礼は後だな」

マイ「艦これ」「みほちゃん」

∴第59話〈北上中破〉(改)

ドカンという大きな音と共に水しぶきが舞い上がり地面が激しく揺れた。至近距離での魚雷の爆発……一瞬、鼓膜が破れるかと思った。

さすがに弓ヶ浜の用水路よりはマシだけど大の男が二人で抱き合って草むらへダイブすれば十分に痛い。

「痛てて」

「うう……」

激しい爆風で吹き飛ばされた私たちの周りに大粒の海水と無数のコンクリート片が降り注ぐ。

「大丈夫か？」

「何とかね……」

この期に及んでも口数の少ない舞鶴だが……まだ私たちには意識があつた。何とか生き延びたようだ。

しばらくはジツとしていたが、やがてお互いに顔を上げると適当に身体を離して周りの様子を伺った。

草むらに伏した私たちの辺りにも鈍い音が断続的に響く。

魚雷の衝撃波で鎮守府の施設にも一部、影響が出たらしい。時間差で、あちこちの物が倒れたり、落下する音がしていた。艦娘の叫び声も聞こえる。皆、大丈夫だろうか？ただ幸いだったのは埠頭のコンクリートは頑丈らしく、あまり大きな塊は飛ばなかった。ある程度、小さい破片が飛び散っただけ済んだ。

舞鶴が冷静さを取り戻して言った。

「チツ、深海棲艦が使うタイプの魚雷だな」

「ああ、恐らくな」

しかし港湾内での雷撃とは、まるで特攻だ。

「無茶しやがる」

「……」

私はふと舞鶴を見ると彼と目が合った。つい冗談を言いたくなくなった。

「まるで兵学校時代の訓練の繰り返しだな」

「ははは」

私の言葉に乾燥した笑いだった。舞鶴が始めて笑った。

……そういえば学生の頃から私は退避訓練は苦手な科目だった。

ただ学校の訓練も、こういう現場では何十年経つても役に立つものだな。

しかし新しい制服が風呂で濡れて、次のピンク作業服まで、またビシヨビシヨか。いくら海軍とはいえ私は毎回水難の相だな、やれやれ……。

それでも気を取り直して周りの様子を確認した。

警戒中の艦娘たちが銃を抱えて慌てたように走ってくる。一部の艦娘は探照灯を

持つて夜の湾内へと展開しようとして検討し始めているようだ。一部の艦娘は探照灯を

持つて夜の湾内へと展開しようとして検討し始めているようだ。

チラッと海へ向かう大淀さんの姿が見えたが、さすがに躊躇している様子だな。

ただ、これなら直ぐに第二次攻撃はないか？ 私が立ち上がろうとしたら舞鶴が私の

腕をつかんで言った。

「すまんな、恩に着るよ」

「礼は後だな」

私は彼にそう応えようと二次攻撃に警戒して身を屈めながら海に叫んだ。

「北上い！」

返事は無い。私の声为空しくエコーするだけだ。

だが目が慣れてくると大きな裂け目の出来た埠頭の向こう側……白濁した海面上に北上が蹲（うづくま）つているのが見えた。

「北上？」

大丈夫だろうか？

海面はシユワシユワと泡の弾ける音を立てている。何しろ至近距離での魚雷の爆発だ。しかもコンクリートの埠頭で直接、炸裂しているから反射される衝撃波は想像以上に大きくなる。おまけに不意打ちだ。彼女は、かなりダメージを受けただろう。

爆破による霧や埃が薄くなつて来て北上の様子もハッキリ視認することが出来た。

「北上……」

あまりに彼女の悲惨な様子には私は思わず絶句した。その軍服はボロボロで腕が半分露出している。腕や顔もスズで黒くなり髪の毛も少々、焦げているようだ。可哀相に口元からは少し出血もしているようだ。

私は念を入れるように、もう少し上体を起こして声をかけた。

「おい、大丈夫か？」

彼女は片手で腕を押さえながら弱々しく顔を上げて返事をした。

「あ、司令……だ、大丈夫だからさ」

「いや……」

絶対に大丈夫じゃないだろう……彼女は口元の血をぬぐいながら健気(けなげ)に微笑む。無理するな、その表情が痛々しい。

突然、私たちの後方から軽い声で呼ぶ声があった。

「司令え！」

パタパタと軽い足音を響かせながら高速接近して来る比叡、相変わらず地上でも脚は速い。そこは褒めてやろう。

私と舞鶴の状況を見た彼女は驚いて目を丸くした。

「司令！ お怪我は？」

私は振り返って応えた。

「多少、打撲しているが大丈夫だ」

それから私は一気に、まくし立てた。

「比叡！ 直ぐに無線で全チャンネルに状況報告。敵の雷撃により埠頭が大破。現場の北上が中破。司令と舞鶴は打撲したが、かすり傷だ。必要以上に他の艦娘を埠頭に近づけさせるな！」

「はっ！」

私の指示に対して呆けた比叡……拍子抜けした。

ダメだ！ こいつの記憶容量じゃ覚えきれないのか？

「参ったな」

思わず頭を抱えた。

北上も早く救出したいが混乱して支援体制がバラバラだ。

そうしているうちに艦娘たちが徐々に集まって来た。

「おい、不用意に集まったら敵の思う壺だぞ！」

艦娘たちも聞く耳を持たないな……せめて祥高さんか大淀さんに艦娘たちが下手に動かないようパーティー会場で指示をしてきていたら……私は焦ったが既に手遅れか。

第60話〈深海棲艦〉(改)

「それが艦娘や深海棲艦の特長ですね」

マイ「艦これ」「みほちゃん」

：第60話〈深海棲艦〉(改)

埠頭への攻撃直後、ばらばらと比叡以外の艦娘たちも集まりつつあった。まずい状況だが、もはや仕方がない。

ダツシユで来た割に比叡は全然、息が切れてない。その分、頭が回らないのだろう。私は他の艦娘が海面を照らしているのを見て彼女に聞いた。

「探照灯はあるか？」

「お任せくださいっ！」

直ぐに、どこかからとも無く探照灯を取り出した比叡はホコリが舞い散る埠頭から港湾内を照らした。

光線は一瞬、海上でうずくまる北上を照らした後、右の方へゆっくりと照射範囲を移

動させていく。

「あつ！ あれは？」

「！」

その場にいた全員が、目を疑った。

鎮守府港湾部のかなり前の方に腕を組んだ、あの深海棲艦……美保湾で日向や利根と戦った奴が港湾内の海上に居たのだ。

「あわわ……」

いつの間にか側にいた電が私の袖口を掴んで叫んでいた。あまり引つ張るなよ！

「負けないんだから！」

口先だけは達者な暁もいる。

「……」

雷もいるが……やや放心状態だ。

「そいつの周り、敵だよ」

やはり落ち着いているのは響だが。彼女が言う通り照らされていない周りの暗闇には何隻もの敵が、ひしめき合って不気味な赤や青の光が点在している。

大淀さんが近寄ってきて駆逐艦娘たちに言う。

「あなたたち！ 全員、会場で待機ですよ！」

「海上で待機……」

響が聞き違えたフリをしている。なるほど、そういう抜け道があったか。

祥高さんたちは、きちんと待機命令は出してくれたようだ。ちよつと安心した。でも軒並み艦娘たちは命令無視して来たようだな。

駆逐艦娘を注意しつつも海上を見てハツとする大淀さん。何となく顔面蒼白だ。

「海中には潜水艦も居るようです！」

やはり艦娘としては地上で敵を迎え撃つのは不安なのだろうか？

「そつかあ、闇夜に紛れりゃ小つさい鎮守府の港湾内じゃ、あつさりと侵入出来るんなな」

いきなりの呉の発言に別の意味でギョツとした。おいおい呉オジサンちよつと、のん気に構えすぎだよ？

「それが艦娘や深海棲艦の特長ですね」

神戸まで涼しい顔をしている。さすが作戦参謀たちは肝が据わっているな。

(敵に特長というのめかなり気が引けるが)

「まったく当番の哨戒班は何をやっていたんだ？」

私は思わず言った。弱小鎮守府とはいえ敵の侵入を、こつとも安々と許したのは問題だ。

「奴らは侵入したただけではない。われわれに発見されることを想定していたのだ」
これは舞鶴だ。

「そうか……そうだな」

そう思うと、無下に艦娘を責められまい。敵が上手（うわて）なのだ。

彼は続けて言った。

「魚雷は一発のみで、その後、攻撃を敢えて中断して待ち構えて居たのだ」

「どこまでも、ふてぶてしいわね！」

これは暁か。

しかし、あの深海棲艦……その余裕ある態度には我々が、まるで弄（もてあそ）ばれたような嫌な気分になる。

その腕を組んだ深海棲艦は黙ったままジツとこちらを見ている。探照灯に照らされた白い肌が、よけいに美しく……もとい不気味に見えた。そうか、これが利根の言っていた『戦うほうがマシ』という睨みあいか。

第六駆逐隊のメンバーは縮み上がって固まっている。

しかし日向たちが戦っている姿を遠目に見たときには私も恐怖心しか感じなかった。ところがこうして至近距離で『彼女』の妙に透き通った目を見ていると……何だろがか不思議とあまり恐怖心を感じないのだ。

比叡よ！ 主軸戦艦のくせに敵を目の前にして変な声を出さなつて！
皆の士気が下がるじゃないか！

第61話〈睨み合い〉(改)

『ワカラナイ』

マイ「艦これ」「みほちゃん」

：第61話〈睨み合い〉(改)

しかし、わざわざ彼らから見たら『敵』である我々……すなわち美保鎮守府の本拠地
に乗り込んで来るとは大した度胸だ。

この特長ある深海棲艦の真の目的は、いったい何だ？

昼間の戦闘の実力からすれば、このまま攻撃して我々を駆逐しても良かったはずだ。

実際こちらの哨戒部隊は、まったく役に立たなかつた。

今宵この鎮守府では、のんきにパーティーだったから彼らにとつても絶好の攻撃チャ
ンスだったはずだ。

それなのに、なぜ最後まで攻撃しないのだ？

こちらの葛藤など知るよしもない深海棲艦は徐々に集まる艦娘たちを見て、変わらず

不敵な笑みを浮かべていた。

そもそも野次馬のように集まる美保の艦娘たちは、ほとんど艀装を付けていない（例外的に一部の艀装や砲塔を持っている子は居るが）。

仮に着けたとしても陸上からでは、その威力を十分に發揮できない。もしかしたらそれは相手も同じかも知れない。

ただ今の状況では明らかに我々が一方的に不利だ。現に深海棲艦たちは海の上において全員武装しているのだ。大淀さんが顔面蒼白になるのも分かる。

唯一、海上にいる北上だつて艀装なしの上に、さっきの魚雷破裂のダメージを受けてたまま、しゃがみこんでいる。とても攻撃などできないだろう。

仮に艀装した艦娘が、この港湾内にこれから展開するのは難しいだろう。敵に狙い撃ちされる可能性が高い。

現に大淀さんは一部の艦娘を湾内に展開しかけていたが結局、中止した。ここは既に鎮守府内だ。後から対応するには不利な上に危険だ。

それに、この狭い範囲内で撃ち合えば結果は明白だ。こちらは陸側からだから射程が取れないので飛び道具は使えない。

仮にある程度、相手にダメージを与えることが出来たとしても、こちらの施設への被害も同じように大きくなるだろう。現に一発目の魚雷だけで鎮守府の各所に影響が出た

くらいだ。

この状況下では、とても全力では戦えない……喉元に突きつけられた短剣の如き。

「おいおい、これって……」

一方的な「万事休す」ではないか？

白い肌の深海棲艦は、ずっと腕を組んで人形のように海上に浮いている。やがて夜的美保湾に少し風が出てきた。埠頭に寄せる波がチャプチャプ音を響かせている。双方それなりの人数なのだが皆、押し黙って睨み合っている。

もしかして連中は、この状況を作り上げた上で我々に、このまま降伏を迫ってくるのではないか？

仮にそうだとしても司令として彼らの本当の目的などは聞いておくべきだろう。

意を決して私は呼び掛けた。

「私が、この鎮守府の司令だ。お前たちの要求は何だ？」

夜の港湾内に私の声がエコーして妙に響き渡った。まるで何処かの野外劇場みたいだ。その場の全員が海上に注目する。

いつの間にか探照灯を持った比叡は地面にへたり込んでいるが、それでも灯(あかり)は持ち続けている。偉いぞ比叡、頑張れ。拡声器が無いのが惜しい。

他の艦娘も探照灯を持って後から追加している。睨み合いが続く中で湾内は、次第に

明るくなっていく。白い肌の深海棲艦は更に眩（まばゆ）く輝いていた。『彼女』は、しばし夜の風に、その長い髪をなびかせていた。それは本当に敵なのか？

（いかん、思わず見とれてしまう）

……そのくらい、神々しさすら孕（はら）み始めていた。

それは他の艦娘たちも同様らしい。多くの艦娘が呆けたような、何かにひきつけられるような表情を浮かべ始めている。

そして敵の手下共もまた、この場に偶然展開しつつある『彼女』の神々しいまでの雰囲気感動すら覚えているようだった。何だろうか？ この状況は……。

やがて相手は私の呼びかけに反応するように表情を動かした。

『ワカラナイ』

「はっ！」

初めて響く敵の肉声。妙に響く。それは湾内にエコーしているのか？ それとも私たちの脳内に直接、話しかけているのか？ いずれにせよ状況は不明だ。

しかし、相手が発した言葉の意味が理解出来ない。

『ナニモ、ワカラナイ』

『彼女』は再び言った。

「いや分からないのは、お互い様というか」

堪(たま)りかねた私は思わず返した。(私は何、敵に突っ込みいれてんだ?)

しかし何だろうか? この妙な……どこかで感じたような印象。

「そうか!」

私はハッと気付いた。これは、この数日間、美保で感じた艦娘たちの反応パターンとそっくりだ。

思わず鳥肌が……怖い方じゃなくて本当に武者震いがした。

(もしかして敵は新手の艦娘なのか?)

「いやいや違うぞ」

私は慌てて否定した。どう見ても相手は艦娘ではなく深海棲艦なのだ。

私が鳥肌の立っただろう両腕を押さえていると誰かが袖口をつかんだ。

「ん?」

「……」

寛代だ。この娘は、こういうときには、何故か近くに居るんだな? お前は。

「大丈夫だ、単なる武者震いだから」

それでも寛代は無言のまま私の袖口をさらに強くギュツとつかんだ。

つい私も空いた手のひらで寛代の手を握り返した。本当に不思議な子だよな……。

「さあ深海棲艦、どう出る?」

私は改めて海上を見て言った。

第62話〈海上の語り部〉(改)

「あれは……そうなのか？」

マイ「艦これ」「みほちゃん」

…第62話〈海上の語り部〉(改)

風が出てきて雲が切れた。

はつきりした月明かりの下、鎮守府の港湾内では、今もなお異様な睨み合いが続いていた。

時々長い髪をかき上げるようにしている深海棲艦。意外と人間らしい仕草を見せる

彼女は再び呟くように言った。

「ワカラナイナ」

「は……」

正直もつと強烈な言葉を期待していた。

……いや、これは訂正。

我々は、ネチネチと脅されるのかと待ち構えていたのだ。だから彼女の言葉には逆に拍子抜けした。

舞鶴は呟くように言った。

「これは敵の作戦なのか？」

「本音かも知れないが」

私も呼応する。呉や神戸も顔を見合わせていた。もしこれが本当に相手の作戦であれば、かなり高度なものでだろう。

混乱しているのは大淀さんも同様だ。月明かりだから分かり難いが、いつものキリツとした雰囲気が失せて半ばオロオロしていた。それは言うことを聞かない第六駆逐隊に翻弄されているという要因もあるだろう。

これが祥高さんなら落ち着いていたかも知れないが、きっと彼女は、まだ食堂で待機しているのだろう。さつきから姿が見えない。

「だ、だまされません！」

やっぱり比叡だ。お前は特攻隊長だな。

「私がつ……」

何か言いかけた彼女を私は制した。

「待て、北上が何か言っている！」

脹れる彼女に振り返りつつ私は小声で諭(さと)した。

夜の港湾内、月夜の海上で蹲(うづくま)っていた北上は顔を上げて深海棲艦に向かつて問いかけた。

「あんたさあ……大井つちなんだろう?」

『ええ!』

多くの艦娘たちが驚く。それは衝撃的な発言だ。

(何となく察していた者も居たようだが)

私もそんな思いと、疑いと半信半疑だった。

「北上?」(いったい何を言い出すんだ?)

……もちろん海の上の深海棲艦の外見は似ても似つかない。ただ彼女が言う通り、漂ってくる雰囲気は何処となく、あの大井かも知れないとも思えた。

それを確認するように舞鶴が聞いてくる。

「あれは……そうなのか?」

「確証はないが大井の夢は何度も見るんだ」

私は応えた。

すると寛代が呟く。

「北上と大井……仲が良い」

それを受けるようにして大淀さんが言う。

「確かに北上さんと大井さんの親密さは艦娘の間でも良く知られています」

すると海の上で腕を組んでいた深海棲艦は、少し身体を動かして、ゆつくりと北上を見下ろした。

「……」

だがその瞳に大きな変化は無かった。

「うーむ」

私は腕を組んだ。（やはり北上の思い過ごしじゃないか？）

しかし私たちの想いとは関係なく彼女は続けた。

「あんた、よく訓練生を相手に強がっていたけど……陰ではアタシにボヤいてたよね」

北上は少し腹を押さえている。大丈夫だろうか？　だが彼女は続ける。

「毎日、同じことの繰り返し返して、ここに居る意味がわからない……ってさ」

だが深海棲艦は相変わらず無表情だ。それでも北上をジッと見つめている。

北上は少し顔を上げて続けた。

「最後の海戦のときも何で私が旗艦なの？　わからない……って言ったよね」

「ええ？」

二人の間で、そんなやり取りがあったのか？　私はただ『分からない』というフレー

ズに引つ掛かった。

だが北上が言う通り、それは事実だ。私も彼女の語る内容を聞いていると自分が責められているようなチクチクした痛みを覚えた。

そんな私の想いを感じたのだろう。寛代が私の手を、ギュツと握ってきた。敏感だな、この娘は。

第63話〈最果ての追憶〉(改)

「最果ての地か」

マイ「艦これ」「みほちゃん」

：第63話〈最果ての追憶〉(改)

確かにあの当時、舞鶴で臨時に指揮を執ることになった私は北上が出撃する予定を急ぎよ変更したのだった。何となく思い出してきた。

その北上は今、お腹(なか)を押しえつつ語りを続けた。

「ホントは私が旗艦だったんだけどさ、装備の調子が悪かったんだよね。でき、アンタは私の代理出撃を最後まで渋ったよね」

北上と大井は当時ほぼ同じタイミングで重雷装艦に改装された。二人はもともと同型の軽巡だった。よく舞鶴の廊下でも仲が良さそうに二人が手を取り合って歩いていた。

大井の会話を思い出した。

「私たち同じ重雷装艦に改装されるなんて、なんて素敵なのかしら！改修時期まで同じだから、これからもずっと、ずーっと一緒だよね？北上さん！」

喜ぶ大井が印象的だった。今思うと、はしゃいでいたのは大井だけだったが。

「そうだねえ」

同意しているのか違うのか淡々と応える北上も、いつも通りだった。

とはいえ作戦を変更したのは私だ。同じ重雷装艦なら任務遂行にも問題ないだろうと。あまり深く考えずにチエンジしたのだ。

だがそれは艦娘に対しては対応が拙（まず）だったといえる

特に当時の大井は旗艦変更だけでなく私の出撃命令に対しても激しく抵抗したのだ。

そのときの私は疑問しかなかった。

だから今思えば、あの頃の私は考えが甘かった……実際、艦娘は一筋縄ではいかない。

この美保に来てから数日で更に、そのことは実感した。そもそも艦娘たちの個性や繊細さは並みの人間以上なのだ。

だから艦娘の同型艦といども、まったく個性が違う。スペックだけでは分からない部分が多い。

（それは第六駆逐隊が、いい例だろう）

その判断は結局、その後の展開も含めた私にとって後々までの重たい課題となったの

だ。

だから今は反省している。そう……

「思い出したぞ！」

叫んだ私に、舞鶴や他の参謀たちが驚いてこちらを見た。それに構わず私は制帽を取った。

「そうだよ」

あの海戦に大井を出撃させたことが、ずっと引つ掛かっていた。

だから今、言わなければ。

「大井、済まなかった！」

海の上では、なおも北上の告白が続いていたが私の呼びかけに北上は語るのを止めた。だが深海棲艦は黙ったままだ。

「……」

北上はチラツとこちらを見ると少し含みのある表情を浮かべた。

そうして

『司令、ちよつと待ってね』といった感じで彼女は自分の口の前に指を立てた。

……ああ、そうだな。今は『お前たちの時間』だったな。

「すまん」

この空間は北上と敵の『語らいの場』となりつつある。それは彼女の周りの敵駆逐艦たちもジツとしていることから伺えた。

不思議なことだが敵の手下どもは『命令がないから』動かない……というよりも敵の白い肌の『彼女』と一緒に北上の告白を聞いているように感じられる。

そもそも深海棲艦も北上の言葉に何か感じ始めているんじゃないか？

北上は深呼吸をするように間を取ってから続けた。

「(こんな)としてまで、また出てきちゃつてさ」

まだ深海棲艦は無表情で北上を見詰め続けている。

「ま、アンタらしいけどね」

北上は、かなり回復したのだろう。ゆつくりと立ち上がる。それから焦げた前髪を片手でさつと払い退けた。

そうして一瞬だけ私のほうをチラツと見た。それから意を決したように言った。

「ホントはアンタも司令を追ってきたんだろ？　ここまで……」

「え？」

驚く私。

「ええっ？」

これは比喩。さすがに目を丸くしている。

「なに？ ソレ！」

おい、青葉めつ、言いながら写真を撮るな！

大井の件については私も反省はしていた。しかし北上の意外な指摘に度肝を抜かれたのだ。

その『大井（仮）』が私を追ってきた？ いや、北上は今、何て言った？

『アンタも司令を追って』

……それって、つまり北上も私に何らかの想いを抱いているって言うことなのか？
焦り始めた私。

「あ……」

見ると比叡は既に変顔でこつちを見ている。

参謀たちとはともかく大淀さんまでが疑うような眼（まなこ）だぞ。

……いや、知らない知らない！ それはゼツタイに無いって！

まあ今更、確認のしようもないけど。

もしここが昼間の時間で明るかったら私は赤面している姿を晒した事だろう。暗くて良かった。

焦りながらも寛代と私は手を？ いだままだった。慌てて手を離すのも変だろうと思つて、そのまま握っていたけど……彼女は無表情だった。やはり、この子もマイペー

スで沈着冷静なのか。

こちらを見て何かを言いかけていた北上だったが、少し私の周囲が落ち着いた様子を見て再び敵に相對(あいたい)して続けた。

「ここはさ、辺境なんだよ。西の最果ての地さ」

北上はポツリと行って、ふっと寂しい顔をした。

「最果ての地か」

なぜか舞鶴が同意するように頷いている。

第64話〈決意と鎮魂歌〉（改）

「チガウ……」

マイ「艦これ」「みほちゃん」

：第64話〈決意と鎮魂歌（レクイエム）〉（改）

「でもさ」

そのとき北上の口調が急に変わった。

何かを察した比叡が気を利かせて探照灯を北上に向けた。（……比叡、良い仕事するな）

月夜を背景に探照灯に浮かび上がった北上。その姿は、ますます月下美人っぽい。

思いを込めたように彼女は言った。

「過去はサ……もう戻らないんだよ」

その黒い瞳が透き通るようだ。風が少し強くなってきた。彼女の長い髪が胸の前で左右に揺れている。

お腹は痛くないのだろう。いつの間にか腹を押しえるのは止めていた。

北上は揺れる髪の毛を片手でサツと肩の後ろへ払い退けた。そして、深海棲艦へ語るように言った。

「お互い、もう変わらなきや？　ね……」

『おおー』

埠頭で見ている艦娘たちから一斉にどよめきが起こった。

北上が深海棲艦（大井？）に啖呵（タンカ）切ったぞ。

「役者だなあ」

コレは青葉。

私も続けて深海棲艦（大井？）に話し掛けた。

「北上の言うとおりで。そして……君」

私は『彼女』を見詰めた。相手は無表情のままだが、視線はこちらを向いた。

改めて心を込めて言った。

「私は君に心から申し訳ないと思っている」

それを受けた北上もまた頭を少し斜めにして私を見て微笑んだ。彼女のその長い髪

が風に揺れた。

何だろうか？ そんな魅力的ともいえる彼女の姿を見ても不思議といつもの『ドキドキ感』が無い。

そのときの私と北上は、いわゆる一般的な『男女』としてではなく純粹に指揮官と部下……そうだな、同志としての連帯感を感じたのだ。つまりこのとき突然、彼女と心が通い合う感覚に包まれた。

それは寛代と接するときの雰囲気にも似ていた。思わず私は改めて手を握ったままの寛代を見た。すると彼女もこちらを見上げていた。

「……」

彼女は珍しく微笑んでいた。

「そうか、お前はずっと以前から私に心を開いてくれたんだな」

「うん」

彼女の普通の肉声を初めて聞いた気がした。

軍人であることに加えて私は性格的にも女性と心を通わせるなんて意外なのだが。まさか、初めて心を通わせる相手が艦娘とはな……不思議な縁だな。

私は再び正面を見据えた。

北上が一つの壁を越えたように私もまた、指揮官として重い足かせを、いつまでも引

きずつてはいられない。

北上と共に、これまでの過去の私とは、ひと区切りさせて貰おう。

提督とは個人のためではなく、国家や公のために。また皆のために考え行動しなければならぬ。

それが生き残った者(戦士)への、せめてもの償いなのだ。前進し、勝利を刻み続けることが去つて逝つた者たちへの最大の鎮魂(レクイエム)になるのだから。

埠頭の一同は、堂々と立ち上がった北上と私を固唾(かたづ)を呑んで見守っていた。しかし深海棲艦は相変わらず無表情のままだろうか？

「……いや、何か言うぞ」

呉オジさんが言う。すると神戸を始め全員が海上に注目した。

下を向いた深海棲艦は激しく頭(かぶり)を振っている。

「チガウ……」

否定した。やはり彼女は大井ではないのか？

「ワタシハ……」

その顔に初めて表情のようなものが浮かんでいた。

「チガウ……」

彼女は自分の両手を開いてジッと見詰めている。今までの無表情から一転して、とて

も険しい表情になっていた。

「ありや、深海棲艦の髪が……」

青葉が言うまでも無く急に彼女の髪の毛が逆立ってきた。その長い髪がまるでメドウーサか何かの生き物のように勝手に宙を舞い逆立っている感じだ。

「これってかなりマズい？」

神戸が言う。

確かに尋常ではない雰囲気になってきた。風は強くないのに、湾内には変な白波が激しく立ち始めている。

深海棲艦の周りの手下共も変な光を点滅し始め盛んに白い歯を見せている。そして地響きのような轟音が響く。

「じ、地震なのです……」

電が叫ぶ。

その言葉の如く地震のような振動が埠頭一帯を包んでいた。大地だけでなく、空気までもが激しく振動しているようだ。

「皆さん、撤退してください……」

大淀さんが命令を出したが……あれ？ 誰も動かない。

「いや動けないのさ……」

こんなときまで沈着冷静な響だな。

この周りの連中は皆、腰が抜けたか？　そもそも大淀さんも、まるで金縛りにあつたように動かない。

「おい、動けないのか？」

寛代に聞いても彼女は私の手を必死に掴んで離さない。だから私も結局、この場から動けない。

「これは……」

海の上を見た私はハツとした。髪の毛を逆立てた深海棲艦は……そう、まるであの『悪夢』そのものだった。

「北上い！」

私は海上に必死に叫ぶ。

「お前だけでも早く逃げろ！」

だが彼女は荒ぶる深海棲艦を見詰めたまま微動だにしない。

彼女の瞳は、すべてを受け入れたような……あの悪夢に出てくる軽巡とは正反対の澄んだ表情だった。

「北上……」

私は焦るばかりだった。

第65話〈絶対命令〉(改)

「みんな伏せろ！」

マイ「艦これ」「みほちゃん」

：第65話〈絶対命令〉(改)

深海棲艦がホントに大井かどうかは正直、私にも分からない。

しかし目の前の『彼女』の、心の何処かの地雷を踏んだことは確かなようだ。

「チガウ……」

髪の毛を逆立てて鬼女のような形相になっている深海棲艦。これは、かなり怖い。

港湾内の海面は嵐のように荒れ始めた。白波が立ち不思議なことに妙な霧までが充満し始めた。

「ひえええ」

もはや比叡は腰が抜けている。だが探照灯だけは手放さない。偉いぞ！

「あわわ」

「に、逃げるのよー！」

「そうねっ」

「うん、それが良い」

第六駆逐隊の子たちは急にスイッチが入ったように立ち上がると、さっさと逃げ出した……つて、

「おいっ！ お前らっ」

敵を駆逐しろよっ！

さすがに腰の重そうな参謀たちは残っていた。とはいえ深海棲艦が相手では人間には手も足も出ない。呆然と見ているだけだ。海の上は一触即発、こうなったら手がつけられない。

大井(？)らしき彼女の周りの敵たちも軒並み攻撃態勢に入ったらしい。怪しい光と音を発している。

「ああ……」

着任早々に他所の参謀たちと共に美保鎮守府最後の日を迎えるようとはな。私は覚悟を決めたように寛代の手を握った。

ところが彼女は意外に冷静だった。いや、私が握った彼女の手のひらには全く恐れというものが感じられない。むしろ凜(りん)とした波動を感じた。

「え？」

意外に思いハツとして我に返った私は改めて周りの状況を確認した。

正面の海の上には水しぶきを浴びながら、なおも海面に立っている北上が居た。彼女もまた、この状況を恐れていない。

「勇ましいな」

彼女なりに、あの深海棲艦が大井だという確信があるのだろう。

でもソレとコレは話が別だろう？ あれが大井だとしても、もはや正気を失っている。

だめもとで再び声を掛ける私。

「北上、早く逃げろ！」

（逃げ場は無いか？）

そのとき私の袖を誰かが引っぱる……寛代だ。

「なんだ？」

「全員、伏せさせて」

「は？」

慌てて聞き返して彼女を見る。寛代は、ただ正面を見据えて繰り返し返した。

「良いから、全員伏せて！」

淡々と、しかしハッキリ言った。

何だかわからないが、それを聞いた私は大声で叫んだ。

「みんな伏せろ！」

今までの金縛りが突然切れたように、その場に居た艦娘、参謀、さらに海の上の北上までが全員、直ぐに伏せ、しゃがんだ。声が届かないところにはリレー式に、あるいは艦娘の無線で直ぐに伝達された。

そうだ、こういう緊急時には助かる。軍隊、特に戦場では指揮官の命令はゼツタイなのだ。

次の瞬間ドシンという大きな衝撃波と激しい水柱が深海棲艦の至近距離で発生した。それは、ちょうど北上の反対側だ。

「グウウ」

妙な声を出した深海棲艦が怯（ひる）んだ。

「え？」

……北上の反対側だと？　つまり外洋側になる。どういうことだ？

「……！」

長い髪を柳のように振り乱した深海棲艦もまた慌てて反対側の海を振り返った。

呉オジサンも顔を上げて確認する。

「誰だ？」

「埠頭と反対側から……」

神戸が頭を押さえながらも状況分析を試みている。

「誰かが酸素魚雷を撃ち込んだらしい」

これは舞鶴、意外に冷静だ。

確かに航跡が無かった。しかし、いったい誰が？

怯む間もなく2発目、3発目と次々に魚雷が撃ち込まれ、何本もの水柱が立ち上がる。もはや湾内の敵は大混乱だ。そして爆薬と金属がこすれた独特の臭いで一杯になった。

港湾内は、まさに戦場だ……本来、鎮守府のお膝元では、あつてはならないことなのだ。

第66話〈アウトレンジ〉(改)

「得意のアウトレンジで撃ったからね」

マイ「艦これ」「みほちゃん」

…第66話〈アウトレンジ〉(改)

「え？」

私は頭を上げた。……北上の反対側だと？　つまり外洋側になる。どういうことだ？

「北上さんの反対側から？」

大淀さんが眼鏡を掛け直している。

夜の港湾内では深海棲艦が、その長い髪を振り乱している。

「グウウ」

何度も振り返って確認しようとしている。だが奴らの電探には映らないらしい。

……外海から、いったい誰が魚雷を発射しているのか？

呉オジサンも頭を上げた。

「我々にとつては、まさに形勢逆転だが」

「新手（あらて）ですか」

神戸もドサクサに紛れて艦娘を助け起こしている。

「痛いですっ」

……つて、おい！ 比叡っ！ ワザとらしいつて。

海上ではなおも魚雷攻撃でズドン、ズシンという地響きが響き渡る。

「もはや手持ちの、ありったけの魚雷をぶち込んでいるようだな」

舞鶴が呆れたように言う。お前は相変わらず分析力はあるな。

言われるまで気付かなかったが、確かに撃ち過ぎだ。

「いい加減、止めてもらわないと美保鎮守府が崩壊するぞ」

私も寛代から手を離して立ち上がった。

狭い港湾内の各所で次々と水柱や火柱が上がっている。こうなると深海棲艦も、逆に回避のしようがない。

「敵の駆逐艦は次々と直撃弾を受けて轟沈していますっ！」

大淀さんは立場上、ついつい状況報告をしてしまう。

「ああ……」

私も応える。やはり職務を全うしようとする艦娘は良いな。

その時だった。寛代が私の袖を引いて指差した。

「あつ……あれ」

突然、北上の間近で潜望鏡が上がった……と思っただら？ 水着を着た、赤い髪の毛の

潜水艦タイプの艦娘が浮上した。

「あれは確か……」

大淀さんが首をかしげる。

呉オジサンが応えた。

「おお、伊168か？」

「168？」

潜水艦娘か？

「イムヤ、やったね！」

彼女は海上でガッツポーズを出す。

「ひよつとして、わざわざ出向いて来たのか？」

私は言った。

すると北上の手前に顔を出した伊168。海の上から私に敬礼すると大声で叫んだ。

「提督、報告します！ 呉鎮守府から来た伊168だよ……じゃない、です！ 到着した

と思つたら睨みあつてゐるから……呉に報告したら『撃て』つてことだったから。得意のアウトレンジで魚雷発射だよ？」

「え？……呉の命令？」

私は呉オジサンを振り返つた。

「あ……、いやワシは食堂に居つたから知らん。代理の者や」

彼は慌てて頭を振つた。

すると舞鶴が分析を始める。

「伊168は、港湾の外……射程ぎりぎりの外洋から酸素魚雷を一気に発射。その爆破の混乱に乗じて港湾内へと進入。決して水深は決して深く無い美保鎮守府の港湾内で敵の船底ギリギリかい潜（くぐ）つて通過というところか」

今度は神戸。

「おまけに夜ですから、ちよつとミスすれば敵と接触か、爆破の水圧に巻き込まれる危険性は十分にあります。それをすべてクリアーして最後に埠頭の手前にいる北上のところまで一気に到達してきたようです」

「なんとも……器用なやつ」

私は呆れるやら、感心するやら。

伊168は続けた。

「あと、この港湾の入り口近くでバタバタしてた、ちっこい潜水艦と補助している軽巡がいたけど。忙しいから無視してきたからね」

「それって……まるゆか？ あんなのが今夜の哨戒班だったのか？」

私は大淀さんを振り返った。

「えつと……」

彼女は困惑している。

「軽巡も居たつて……そりゃ単なる仲間はずれじゃないか？」

私が言うのと大淀さんは弁解する。

「はあ……済みません。人員のチェックはしたはずですがパーティとか混乱があつて

……」

私は呆れた。

「いや、君を責めているわけじゃないけど……これ陸軍に知れたら文句言われそうだな」

私は混乱する湾内を見ながら言う。

「もし今夜、その軽巡の随走艦が居なかったら今ごろ暗い夜の海に轟沈だぞ！」

すると埠頭まで近寄った伊168が続けた。

「あとさあ、ちっこいのは当てにならないけど。もう一隻、入口に黒塗りで化けたのが居たけど……」

「なに？」

それは聞いてない。

すると、燃えさかる港湾内を縫うようにして、何かが高速でやってきた。新手の敵か？

だが寛代を振り返ると彼女は平然としている。つまり……友軍らしい。よく見ると全身黒く塗った軽巡か？ ……どンドン近づく。

「おい、何の真似だ？」

私は叫んだ。

第67話〈ガングロ突進〉(改)

「あれ……艦娘か？」

マイ「艦これ」「みほちゃん」

：第67話〈ガングロ突進〉(改)

夜の港湾内に怪しく侵入してきた黒い軽巡……艦娘であることは間違いない。私は、たまたまポケットに入っていた小さい双眼鏡で堤防付近を見た。

視界に入った黒い影……艦娘には思えないが、まるで深海棲艦のようにノツペリしている。

「何だ？ あれは」

呉オジサンも気づいた。

「艦娘ですか？」

神戸も困惑している。

要するに陸軍の戦車のように擬装しているのだが何かを被っているのだろうか？

「いや顔に何か塗って……ガンングロか？」

「あいつ撃つぞ」

無言で双眼鏡を覗いていた舞鶴が呟く。

「え？」

私は双眼鏡から目を離した。

湾内では先に伊168が放った魚雷で被弾した敵で溢れているのだが、彼らは『ガンングロ』に全く気づいてない。いや大井（？）的な『彼女』も何かの気配は感じているのだが発見出来ないようだ。

そのガンングロ軽巡は鎮守府港湾内に入るや否や、いきなり複数の魚雷を発射した。敵の駆逐艦周辺で立て続けにいくつもの水柱が立った。埠頭にも水しぶきが上がってくる。

「おい、あんなに至近距離で発射して大丈夫なのか？」

私は呆れたように呟いた。

その艦娘は他の攻撃に巻き込まれるのを防ぐためだろう。

「わあー！」

……と叫びながら、そのまま高速で突っ込んで来た。

「あれ……艦娘か？」

呉オジサンも少し驚いている。港湾内は更に大混乱になりつつある。

そのガングロ艦娘は、なおも止むことなく走りながら対潜爆雷をバラバラと投下している。海中が次々と盛り上がり水柱や火柱が水面に上がる。既に何隻かの潜水艦が撃沈したようだが……ガングロは止まらないで走り回っている。どこまでやる気だ？

手持ちの爆雷も尽きたガングロは、今度はロケット砲までぶっ放した。

「あーっ」

……と思う間もなく、近くの深海棲艦を数体弾き飛ばし、流れ弾が鎮守府の地上設備を一部、破壊した。

「あいつはバカ者か？」

いつもは冷静な舞鶴までが艦娘の挙動に呆れている。

「あの艦娘は何者？」

神戸も呆気にとられている。

「あれは何も考えてないようだ」

私は断言したように言った。彼女が埠頭に近づくと艦娘たちの探照灯を浴びた。

「あつ、顔が真っ黒なのです！」

電が叫ぶまでもなく顔を真っ黒に塗りたくっている。やっぱり何か勘違いしているような……基本的に美形が多い艦娘が完全に台無しだ。

「それで闇夜に紛れてるつもりか？」

私も呆れた。

埠頭にいるメンバーは皆、伏せたり低姿勢で警戒していたのだが最初の魚雷攻撃に続いて、このガンングロ軽巡の至近弾が次々と炸裂したから滝のように水しぶきがバツサバツサと容赦なく降りかかってくる。皆ずぶ濡れだ。

ここまで来るともう、ドーにでもなれ！……って感じだけど。

「夏の夜で良かったな」

寛代に向かって開き直る私。彼女も苦笑している。

「ガンングロ娘のお陰で敵も相当かく乱されたようだな」

ハンケチで額を拭いながら呉オジサンが言う。

「ムチャクチャだ」

これは舞鶴。眼鏡が濡れて見え難いらしくイライラしている。

そのガンングロ軽巡は水柱をかい潜（くぐ）り、なおも走り回っていたが、ようやくこちらに向かって突進して来た。

大淀さんが叫ぶ。

「あつ！ぶつかる！」

彼女が指差した先には伊168と北上が居た。

「まずい」

……と言った168は、さっさと急速潜行した。潜水艦娘だからな。あとは低姿勢をとっていた北上だけ。彼女も水しぶきを避けながら半分顔を覆っていたのだが、ふと顔を上げた。

「なっ!」

目を丸くして驚いている。そりやそうだ、もう真正面からガングロ艦娘が突進して来ているんだ。

「どいて、どいてえ!」

どけるか! ……と思いつつ見ていると避ける間もなく北上とガングロは正面衝突した。

「あ痛っ!」

北上の叫び声。

「あ……」

「火花が散った」

いつの間に舞い戻っていた電と雷…… って、お前ら何処へ逃げてた?

海上の北上は鼻を押さえながら、ものすごい形相で怒鳴った。

「もお、いい加減にしてよね!」

北上が本気で怒っているところは私も初めて見た。

「普段、怒らない人が怒ると怖いんだ」

おい、響か？

「い、いめんなさい」

謝りながら、ようやく爆走娘は止まったようだ。

「伊168と一緒に来たのか？」

私が呟くと暁が言う。

「 GANGUO の茶髪って誰かしら？」

私の隣に偉そうに腕を組んで立った暁が濡れた髪を気にしながら言う。

伊168が少し離れた海上に再び顔を出して言った。

「ふハツ……、あーあ派手にやったネ阿武隈、でも大丈夫？」

「うん」

額を擦りながら彼女は応えた。

それを見た私は言った。

「お前が阿武隈か？」

「はい」

彼女は真つ黒な顔（GANGUO）のまま敬礼をした。

「呉から参りました。よろしくお願いしますっ」

私は噴出しそうになるのを堪(こら)えながら敬礼を返した。

「ああ、ヨロシクな」

「敵の勢いは、かなり弱まったな」

舞鶴の言葉に私も改めて様子を見る。夜の港湾内では一連の奇襲攻撃で深海棲艦も半減しただろうか？

退避していた艦娘たちも探照灯を持つて集まると港湾内を一斉に照らした。同時に艦装を着けた赤城さんと日向が港湾内の安全なエリアから海に入った。そして探照灯のバックアップを頼りに次々と艦載機を飛ばしてピンポイントで港湾内の敵を掃討し始めた。

「……夜戦だ!」

弾かれたように目をキラキラさせた川内がやって来た。

「ねえ? 私も出て良いでしょっ!」

「ああ、さっさと行け!」

「了解っ!」

敬礼もソコソコに埠頭から海へ飛び込む川内。分かりやすい奴。

……それはともかく阿武隈が沈静化したと思つたら、今度は赤城さんや暴れる川内だ

からな。敵はあつという間に総崩れとなった。
「クウ」

深海棲艦は悔しそうに呻いている。

第68話〈プライド〉(改)

「あんた……そうなんだろう？」

マイ「艦これ」「みほちゃん」

…第68話〈プライド〉(改)

あの白い肌の深海棲艦は、かなりダメージを受けたのだろう。言葉にならない呻（うめ）き声を発している。

最初は、敵の高度な作戦かとも思われたが、いつの間にか形勢逆転した。こちらとしては、まるで狐に詰まれたような……それは相手も同じだろう。

だが今までの余裕のある戦いぶりから見てもプライドの高そうな敵だ。このまま、そんなり引き下がるのは悔しいだろう。現に敵の大將らしき『彼女』は何やらブツブツと呟きながらも戦意を喪失していない。

その姿を見た私はふと昼間の陸攻での特攻作戦を思い出した。人間でさえ、あの無茶な作戦を実行するくらいだ。まして深海棲艦ならば、全滅覚悟で突っ込んでくるのでは

ないか？

阿武隈たちの攻撃で敵は勢力のほとんどが失われたとはいえ、対するこちら側は、ほぼ丸腰なのだ。連中が本気を出せば一矢（いっし）報いるくらいは出来るだろう。

だが、このままでは朝を迎える。現に少しずつ東の空は白み始めていた。我々と数分間、睨み合った後に、海上の『彼女』は無念そうに目を閉じた。

「……」

中央に居た『彼女』は哀しげな低い唸り声と共に我々に背を向けた。

「敗走するのか？」

眩いた私が見ていると連中は、かろうじて残った他の深海棲艦を引き連れて鎮守府港湾部から外へ逃げ出し始めた。

「やれやれ……」

ようやく私も安堵した。

すぐ隣に呉オジサンが来て言う。

「連中、玉砕覚悟での特攻は、センようやな」

「そうですね」

「どうやら彼も私と同じことを考えていたようだ。」

すると舞鶴も近寄って言った。

「お前、あいつは舞鶴に居た『彼女』だと思うか？」

単刀直入な彼の言い方に私は少し驚いた。そうか、彼も同じことを考えていたのか？
頷きながら私は言った。

「確信はない。だが『彼女』の香りは感じるな」

舞鶴は頷いて言った。

「もしあれが『彼女』であれば、これくらいでは諦めない。恐らく何度も美保へ来るだろう」

「ああ。そう……だな」

出来れば止めて欲しいが確かに、そうなる可能性は高い。

その時、港湾内で赤城さんが矢筒から一本、引き抜いて夜空へ向けて矢を番(つが)えているのが見えた。彼女の長い髪の毛が夜風になびいている。

「赤城、追撃します！」

その叫びと同時に射出された矢は光と共に九九艦爆に変わった。5機編隊の艦爆は、そのまま急上昇を始める。

呉オジサンがいう。

「とどめの一撃か？」

白んできた夜空へ向けて急上昇した九九艦爆は上空で反転した。

「また急降下爆撃が拜めますね」

神戸が言う。

……だが残念ながら、その期待には応えられない。私は直ぐ寛代に声をかけた。

「寛代、赤城さんに最後の一撃は加えるなど指示してくれ」

「うん」

寛代は、私から手を離し耳を澄ますような格好をした。

直後、海上の赤城さんがハツとしたように構えを解く。そして、ゆっくり振り返った。ホツとしたような表情だ。そして直ぐに彼女が手を上げると急降下を開始していた艦爆の編隊は何もせず次々と深海棲艦たちの脇をすり抜けた。

「……」

これには連中も驚いたようだった。もちろん寛代の無線を聞いていない艦娘たちも同様にざわついている。

だがチラツとこちらを見た赤城さんは私と目が合うと、にっこり微笑んで頷いた。

「司令……」

「ああ、それで良い」

艦爆の編隊は敵の間を水しぶきを上げながらすり抜けると再び夜の空へ舞い上がった。

それを確認するように頷いた赤城さんは、再びこちらを見て何か呟いている。直ぐに寛代が反応する。

寛代は私の袖を引いて耳打ちする。

「赤城の艦爆から……敵にも怪我人が居るって」

「ああ……寛代、全チャンネルで呼びかけだ」

港湾内の深海棲艦たちの多くが負傷していた。だが彼らは艦爆の動きを見て、こちらが攻撃しないと悟ったようだ。負傷者を救援しつつ、ゆっくり撤退を始めた。

呉が聞いてくる。

「このまま大人しく帰るンやろうか？」

私は頷いた。

「はい実は、さっき無線で『降伏するなら手当てをする』と打診しました」

その言葉に神戸が感心する。

「おお！ 素晴らしいですね」

舞鶴が言う。

「反応は？」

「……いや、残念ながら、まったく無視だ」

私が肩をすくめて言うのと彼は腕を組んで海を見詰める。

「まあ、そうだろう。彼らにも誇りはある。敵の情けは受けないか」
そう言いつつも少し残念そうな彼だった。

「ホコリ？」

若い神戸が不思議そうな顔をする。

呉オジサンが苦笑して応える。

「ある程度な、敵さんと付き合っていると、そんなものを感じるようになるンヤ」
「へえ……」

私は改めて舞鶴を見ると彼はジツと敵の『彼女』を見詰めているようだった。

私は何も言わずに黙っていた。

夜の港湾内では深海棲艦たちの撤退が進み次々と外洋に出て行く。そして、あの大井らしき深海棲艦は最後に港湾を出た。

「あの人、とつても気になるのです」

私の脇に来た電がいう。

「そうだな」

電だけじゃない。ここに居るほとんどの艦娘や参謀たちが同じ気持ちなのだ。そして舞鶴が言ったように、あいつは再び戻って来るのだろう。

その時だった。薄っすらと明るさを帯びてきた東の空。そこにそびえる黒い大山を背景にして『彼女』がフツと、こちらを振り返った。

『……』

埠頭にいた全員が息を飲んだ。悔しそうに逆巻く髪。そして何故か彼女の澄んだ瞳が妙に印象的だった。

『……』

黙って彼女を見ていた北上も何かを感じているらしい。振り返った海上の『彼女』は明らかに北上と私を見ていた。

だが不思議と私は彼女を見ても今回は鳥肌が立たなかった。なぜだろうか？

『……』

やがて彼女は大山の方向へ向き直ると、そのまま外洋へと去って行った。

「あれは本当に敵なんですか？」

神戸が不思議そうに言う。

呉オジサンも頭をかきながら言う。

「艦娘と同じや……女性型つてのもあるンやけど、ワシらにとつちや闘い難い相手つちゆうこつちや」

「へえ」

若い彼は、まだ艦娘はおろか敵についてもほとんど知らない。だがそれは私だって同じだ。敵も艦娘も、まだ分からないことだらけなのだ。

「アンタ……そうなんだろう？」

北上が黒い大山を見ながら呟いている。

敵の彼女については最後まで正体は分からなかった。

もし彼女が大井だとしても今後は北上とも一戦、交えることもあるだろう。敵とは言え、戦い難い相手だ。

第69話〈美保の旭日〉(改)

「有り難う。みんな」

マイ「艦これ」「みほちゃん」

：第69話〈美保の旭日〉(改)

やがて『彼女』は暗い海に紛れて見えなくなつた。

「ハア」

私は、ようやく肩の荷が下りた心地だ。

「終わったな」

「終わりましたね」

「……」

参謀たちも互いに顔を見合わせて確認している。

埠頭にいた全員が結局あのガングロ阿武隈のお陰で、ずぶ濡れになつた。

大淀さんが第六駆逐隊に指示して埠頭にいた艦娘や参謀たちにバスタオルを配布し

ている。

電が私たちのところへバスタオルを持ってきた。

「タオルなのです」

それを受け取る参謀たち。

「タオルか、ホツとするな」

私は彼らと笑った。ようやく收拾がついた心地だな。

私服の呉と神戸もズブ濡れだったが二人とも晴れやかな表情だ。ついでに舞鶴もまた今までにない清々しい表情だ。良かった。

北上は、ぶつかってきいた阿武隈に小言を言いながらも日向に支えられて埠頭に上がってきた。祥高さんが大き目のバスタオルを持ってきて北上に羽織らせている。

それから祥高さんは直ぐに私のところへ来て敬礼をした。

「司令、申し訳ありません。一部の艦娘が言うことを聞かずに……」

私は手を上げて制した。

「良いよ。今後の反省材料ではあるが今回は大目に見よう」

「はっ」

彼女は軽く頭を下げた。

鎮守府本館へ向かっていた北上は私の正面に来ると立ち止まった。いくつもの探照

灯が私たちをライトアップしてくれる。

「おい比叡、眩しいって」

「はいっ」

(ハイじゃないよ……)

私は無意味に目をキラキラさせて、こちらを見上げる彼女を制した。もう夜明けだからライトは良いだろう？

それから私は北上を見て冗談混じりに言った。

「水も滴る……だな、お互いに」

「……」

彼女は無言だった。少し濡れた北上の髪がライトでキラキラと反射しているが、その姿が反って緊張感を漂わせる。

いや実際、彼女は少し緊張しているのか？ その様子に気付いた近くの艦娘たちも動きを止めて私たちに注目する。

北上は、その場で姿勢を正すと無言のまま私に向かって敬礼をした。

「提督……」

何か言いたそうな、ややぎこちない彼女だ。思わず私は聞いた。

「なんだ、泣いているのか？ 北上」

そのひと言がいけなかった。ジツと何かを堪えていたような彼女だったが心の栓が抜けたように敬礼をしたまま涙を流し始めた。

「お……」

何か言い掛けた私を制するように北上は言った。

「ねえ司令……アタシなんで泣くのかな？ 全然、悲しくないのに」

とめどなく流れる涙。崩れるように敬礼を解いて、しきりに涙を拭う彼女に私は改めて言った。

「哀しくなくてもナ、人は……いや艦娘だつて突然、涙が出ることもあるよ」

泣き笑いのような表情をする北上。

「そうなんだ。……だよね、やっぱ。へへっ」

照れ隠しのような、少し笑顔になった彼女を見て私もホツとした。

これを見ていた周りの艦娘たちが、一斉に私たちに向かつて敬礼をし始めた。

遅れて来た赤城さんと日向、さらに呉と神戸。あの舞鶴までも皆、同様に私に向かつて敬礼をした。それは共に戦った者たちの熱い想いか。

私も全員に向けて、ゆっくりと敬礼をした。

「ご苦労だった。そして改めて礼を言う。有り難う、みんな。よくやってくれた」

数名の艦娘は、北上同様泣き出している。それはこの場に居る皆の気持ちが一つにま

とまったような一種、莊嚴な瞬間だった。ああ、もし私が海軍の制服だったら、これももう最高だったけどね。(残念ながら桃色作業服のままです)

私が敬礼を解くと祥高さんが合図を言った。

「では各自、指示を出します。班長さんはこちらに集まってください」

その後、祥高さんと大淀さんで班ごとに指示を出した。まずは戦闘直後の湾内の整理。それから主に阿武隈が破壊した地上設備の片付けだ。指示に従って各自、黙々と配置へ就く。

空は徐々に明るくなりつつある。水色の諧調を背景に白い雲がいくつか浮かんでるのが見え始めた。それまでの重苦しい夜風から一転して爽やかな早朝の風が香り始める。

「朝か……」

「朝ですわね」

あの白い深海棲艦については、言葉は交わさなくても、その場に居た全員が、お互いに通じる世界があったように思う。ひとつの区切りは、ついたようだな。

「ホラそこ、気をつけて！」

港湾内に響く声。川内が先陣を切って湾内を走り回って駆逐艦娘たちに指示を出している。

「どこまで元気なんだ？ あいつは」

夜戦とは違うけど……まあ良いか。本人がやる気満々なら。腕を組んだ舞鶴が私の隣で湾内を見ながら言う。

「今の港湾内は戦場並みに危険な作業だから」

「それは同感だが」

遅れて阿武隈と浮上した伊168も上がってきた。祥高さんが促すと彼女は私に頭を下げた。

「司令、スミマセンでした」

申し訳なさそうな阿武隈だが戦闘で若干、顔の黒墨が落ちていて、どう見てもパンダにしか見えない。

「う……」

「……」

現に他の参謀たちは笑いを堪えて悶絶している。

私は彼女に言った。

「分かった。報告は後から聞くから……早く顔を洗え！」

「はあい」

軽く敬礼した後、彼女たちは祥高さんと司令部へ向かった。彼女らについては恐らく

軍令部から着任の指令書が着ているのだろう。あとで確認しなきゃ。

呉オジサンが言う。

「エエですなあ、この鎮守府にも少しずつ新しいメンバーが増えていくンやな」

「そうですね」

私が応えると神戸が聞いてきた。

「あの子も新顔ですか？」

「え？」

思わず振り向くと木曾に連れられて「まるゆ」も上がってきた。

大淀さんが二人を私に紹介する。

「司令、正式にご紹介申し上げます。こちらが陸軍の、まるゆです」
私は彼女の視線に合わせて身をかがめると、半分泣いて疲れた表情の、まるゆに声をかけた。

「ご苦労さんだったね」

「はい」

可哀相な彼女は蚊の鳴くような声で応えた。

上体を起こした私は大淀さんに言った。

「取り敢えず、まるゆについては、しばらく木曾に面倒を見てもらおう」

「了解しました……では木曾さん、お願いします」

大淀さんに指示された木曾は無言でサツと敬礼をした後、まるゆに声をかける。

「じゃ行こうか」

「はい」

何となく、この二人は良いコンビになりそうだなと思えた。

鳳翔さんが来た。

「あの……お時間は早いですが、朝食の準備は如何致しましょうか」

「そうだな……」

私は参謀たちを振り返った。

「せっかくだから皆さん、一緒に朝食にしましょうか？」

呉オジサンが苦笑しながら言う。

「まあ、贅沢は言えませんが、ひと風呂浴びたい気持ちですわ」

「あ、同感です」

神戸も苦笑する。

舞鶴が言う。

「確か、この近くに温泉があるだろうか？」

「あ、そうだな……」

私はチラツと時計を見た

「20分くらいで身支度を整えてから朝食にして……それから皆生(かいか)温泉へ。ここから車で直ぐの所に良い場所があるので朝食後に、ご案内しましょう。午前中は時間もありませんから」

参謀たちから『おおつ』という歓声が上がる。

私は再び鳳翔さんを見て言った。

「では悪いが、06:30から朝食にするから準備を頼む」

「かしこまりました」

彼女は一礼をして、本館へと戻っていく。

「では皆さん、後ほど」

私たちは、お互いに敬礼をして解散した。

歩きながら私も考えた。今日の午後には参謀たちを送り出してから私自身も、いろいろ整理だ。今回の戦闘に関する報告書も作らないと……。

「ん？」

いつの間にか走り寄って来た寛代が私の袖を引く。

無言で指差した彼女の視線の先には、大山の稜線から昇る朝日が見えた。それに合わせて鎮守府の建物も橙色に染まっていく。美保の朝は、とても心地よかった。白くなっ

た月も笑っているようだ。

「ああ、良い夜明けだな」

わざわざコレを見せるために？ ……不思議な子だな。

その時、私は何となく気付いて彼女に言った。

「お前も朝食、一緒に食べるか？」

無言で頷きながら寛代は笑っていた。

〈みほちゃん第一部：完結？ いやいや、まだ〉

第70話〈後の祭り〉(改)

「ここから始まったようなものだな」

マイ「艦これ」「みほちゃん」

：第70話〈後の祭り〉(改)

夜が明けた鎮守府。

私は執務室に入った。祥高さんは、今回の戦闘の後始末をしているらしく不在だった。だが机の上に軍令部からの命令書……例の阿武隈と伊168が美保鎮守府に着任する旨の通知書が置いてあった。

「潜水艦娘か、心強いな」

その時、ドアをノックする音。

「はい」

「失礼します」

鳳翔さんだった。

「あの、スミマセン司令……新しい作業服をお持ちしました」

「ああ、有り難う」

そういうえば私も埠頭での戦闘の後で濡れた作業服をバスタオルで拭いたりして朝の風に当たっているうちに、それなりに乾いたようだったが、まだ多少は湿っていた。

彼女は、やたら「済みません」を連呼して平身低頭で包みを出してくれた。

「助かるよ」

私が受け取ると何故か彼女は繰り返し頭を下げる。

「ん？」

その理由は直ぐに分かった。

開けてビツクリ

「紫（パープル）……か？」

「……」

だから鳳翔さんは蚊の鳴くような声で謝罪の言葉を繰り返したのだろう。真っ赤になっっている。

私は包みを開けて作業服を広げながら言った。

「別に君が謝ることじゃないよ。まあ先人たちのセンスを疑うけどな……」

そこでふと気付いた。

(ああ、これは艦娘のセンスか)

私の気持ちを察したように彼女は言った。

「かなり以前ですが美保に一週間ほど立ち寄った大型艦の艦娘が置き忘れたものです。実は、ご本人にお返ししようかと連絡をしたのですが……」

そこで鳳翔さんは少し詰まる。何故か言い難そうだ。

「断られたのか？」

「いえ……彼女曰く『また来るから預かってくれ』とのことで」

彼女は困惑した表情を浮かべた。

「なるほどね……」

確かに鳳翔さんみみたいな真面目な艦娘は対応に苦慮しそうな返事だな。

「ですから、ご本人に無断で司令にお出しするのも憚(はばか)られたのですが祥高さんが『今日、明日にその艦娘は来ないでしょうから』とのことで」

「ああ、私が借りることになるわけだな」

なるほど、イロイロ事情があるんだな。

何気なく縫い付けてある名前を見た私は、少し驚いた。

そこには『武蔵』とあった。

「大型艦って……まさか？」

「はい、武蔵さんです。数年に一度、あるかないかですが日本海側で大規模な戦闘や演習があるときに舞鶴に寄られることがあるようで、その時はたまたま開設直後の美保鎮守府にも来られたのです」

「なるほど分かった。良いよ今回はこれを借りよう」

「はい、では食堂でお待ちしております」

一礼をして退出した彼女。

私は控え室でピンクの作業服から紫の作業服に着替えた。もうどうにでもなれ、だ。食堂に下りると参謀たちは既に着席していた。

「おお、スマンです。先に頂いております」

呉オジサンが言い訳をする。

「いや、そのまま結構です」

私も彼らに合流して着席した。

案の定、神戸も舞鶴も少しギョツとしている。

私は言った。

「ああ、この作業服……サイズがなくて結局、戦艦娘のものを借りたんですよ」

舞鶴が言う。

「目がチカチカしそうだな」

「やっぱり……艦娘ですわねえ」

神戸が納得している。

私が参謀たちと朝食を食べていると大淀さんが来た。

「失礼します」

「どうした？」

彼女は報告書を見ながら言う。

「一時間程度で、港湾内の掃海は終わりました」

「そうか、ご苦労」

私は返事をした。

すると舞鶴が口を開く。

「思ったより早いな」

大淀さんは彼を向いて応えた。

「はい、掃海自体は、これで完了ではなくて今回は緊急出動に必要な最低限の航路を確保しただけです。二次被害を防ぐために一旦は撤収させました」

改めて私は思い出したように聞く。

「あれは……川内は大丈夫だったのか？」

その言葉に彼女は少し困惑したような微笑を浮かべた。

「ええ、実は『まだまだ』とか言つて物足りなさそうでしたが神通さんが止めていました」
「はは、やっぱり」

私は苦笑した。参謀たちも同様だった。

大淀さんは報告が終わると敬礼をした。

「では、皆生までの配車の準備を致します」

「頼む」

私も敬礼を返した。

「失礼するよ」

響が私の朝食を持ってきた。

「ありがとう」

「……」

軽く頷くようにして彼女は厨房の方へ戻つていく。今朝は響以外の第六駆逐隊の面々は休んでいるようだな。

「まあ、司令の紫。パワーには負けませんが」

そう言いながら呉オジサンは懐から何かを取り出す。

「実はさつき何人かの駆逐艦娘の子たちに手紙っちゅうか手書きのカードを貰ったんや」

彼は机の上に数枚のカードを出して見せてくれた。

「まあ孫娘みたいな感じやね」

すごく喜んでゐる。

「ジイジ感、一杯ですよ?」

神戸が、からかうように言うが呉オジサンは満更(まんざら)でもない様子だ。

いずれ彼は、この鎮守府宛てに『もみじ饅頭』とか大量に送ってくるかもしれない。

「そっういえば私も……」

神戸もまた懐から手紙を出す。

「鳳翔さんや赤城さんからは、何故か御礼状を貰いました」

顔を見合わせる一同。

「なぜって? 理由は明らかやないか?」

呉オジサンが反撃する。

「いや、実は手紙の内容以前に、こう言うことが初めてでして」

困惑したような彼。

するとその時、誰かが駆け寄ってきた。

「頼もうーっ」

「た?」

私たちが振り返る間もなく比叡がやってきた。

「これをつ！」

何か手紙らしきものを握り締めた彼女は、それを神戸の目の前に突き出した。

「はっ。」

目を白黒させている彼は押し付けられるようにして、その封書を受け取ると比叡は反転した。

「では」

軽く敬礼をして走り去る彼女。

「何だ？ それは」

舞鶴が聞くと神戸は言った。

「挑戦状？」

私たちは苦笑した。

その後、朝食を終えた私たちは身支度のため、20分の調整時間を設けた。

その間に私は執務室に入った。直ぐに内線が入り、着替えた後の阿武隈と伊168が顔を出した。祥高さんによると、彼女達は呉からの異動らしい。

阿武隈は北上にイジめられないか、かなり恐れていた。

私は言った。

「北上は、そんなに根に持つタイプじゃないから大丈夫だよ」

まあ、後で個別に北上にも話しておこう。

午前中は、参謀たちと共に皆生温泉で疲れを癒した。

お風呂に浸かりながら舞鶴とはいろいろ話が出来た。とつき難そうな彼だったが意外にも彼は気さくだった。まあ、お互いに敬遠しあっていただけか。きつと私に似たタイプなんだろう。

北上のことは、どうしても手放したくなかったようだが。異動については、もともと軍令部の命令だ。また北上自身が今後も美保に留まる決意だから。こればかりは、もうどうしようもない。

ただ舞鶴の心の棘(とげ)が少しでも解けたのは嬉しかった。お互い日本海の護りを固めようと誓い合った。彼が舞鶴の提督になるのもそう遠くないかも知れない。

そのことを彼に言うと、少し複雑な表情を見せた。

「いや、そう艦単には行かないと思う」

「そうなのか？」

私が訝(いぶか)しそうに言うと彼は声の調子を落としたりした。

「私に兄が居てね……軍部の医師なんだが、評判が悪い」

何か事情がありそうだ。何となく彼に悪い気がして、それ以上は突っ込まなかった。

だが後年、この舞鶴の兄が軍部、いやこの国を揺るがすほどの大きな問題を引き起こすことになるうとは、その時の私には全く想像も出来なかった。

伊168については、その呉、ジイジが、とても残念がついていたけど。美保は現在、潜水艦ゼロだから仕方がないよな。

皆生温泉から上がったその足で、お昼前には米子駅から相次いで参謀たちを送り出した。

米子駅前に立った私は感慨深かった。

「私の美保鎮守府は、ここから始まったようなものだな」

その後の美保鎮守府について簡単に記しておこう。

山城さんは、ずっと入渠している。違う所の故障じゃないのか？

ただブツブツ言っただけ鬼気迫るから下手に近寄れない。しばらく様子を見てから接しよう。

故障といえば利根は年中カタパルトがどうの言っている。単に運用方法の問題だろう。あの戦闘の後、最近では日向から射出の仕方とか運用について中庭や埠頭で指南を受けているようだ。利根も少しは日向みたいに大人しくなればいけど。

その脇……この前は食堂の横で天龍と龍田さんが水着で横たわっていて、さすがに度肝を抜かれた。この二人も放って置くと違う方向でやばいぞ。早いうちに海水浴に行

かせるか。

青葉がその二人を記事にしたから分かったけど。彼女もマメだよな。そういえば彼女は戦闘記録も律儀に集計しているようだ。データが記者の命だというのが信条らしい。今後は統計面での作戦補助とかお願ひも出来そうだな。

その青葉がよく取材しているのが吹雪だ。時々、他の鎮守府に呼ばれて姉妹艦と共に出張することが多い。あの一生懸命な感じが他の提督にも受けが良い。もはや美保の親善大使みたいになっている。執務室にも他の司令部からの、お礼状や記念写真が増えつつある。持ち上げられて多忙になっても、あの純朴な性格がまったく変わらないのは凄い。姉妹艦娘と美保のPRを兼ねて必死に頑張ってくれる。大淀さんが、そのうち吹雪の「交流館」でも開きましようかと言っていた。

一方の祥高さんは相変わらず静かに強い。そして感度は高い。よくもまあ、あんな芯の強い艦娘が出現したよなと思う。何となく他の艦娘とは違う感じは残るが、悪いことではない。彼女は日本の護りの為には不可欠な存在だ。

その横にいる寛代も相変わらずだな。ポーっと見えて、やはり通信関係での感度は高い。鎮守府では随一だ。最近笑顔が増えてホツとする。この娘も付かず離れずで責務を全うしてくれるだろう。

一長一短だが个性的かつ魅力的な艦娘たちだ。私も敵だけでなく艦娘たちにも負け

ぬよう知・徳・体とか鍛えなきや。

……お、そうだ。これから作戦会議だった。私も、まだまだ不十分だが滅私奉公で頑張ろう。

『提督がこれより艦隊の指揮を執ります』

……でち？

〈みほちゃん第一部：やつと完結〉

引き続き、第二部が始まります。